



加筆修正 2022 年 7 月 9 日更新

生き物の文明への黙示録

木俣美樹男 202 x

目次

はじめに	・・・ 4
黙示録エッセイを書くにあたって	
第 1 章 人生と人新世	・・・ 6
逢魔が時の黙示録	
教養は学歴の邪魔か？	
生き物の拒否権を蹂躪するな	
幸せは自由である	
文明への葬列車	
川底の小石	
帰去来の辞	
過去とつながる教育の変わらない今	
近頃見た映画、「レ・ミゼラブル」と“Christmas in the Trenches”	
ゆめのおわり	
個人の自己満足かこのくにの自業自得か	
第 2 章 歳想い (民族植物学ノオト巻頭言集)	・・・ 20
もう一つの阿修羅として	
植物についての伝統と学問への敬愛	
希望は小箱の中に残っているのか	
生物文化多様性と自給農耕の持続可能性を探りたい	
時間・空間の座標軸に位置づく確かなトランジション	
無芸大食への奈落	
ひとを評価する教養と専門性	
新しがりの病を治して、再び人が生きる道の復興 renaissance へ	
多様な生活文化の中の雑穀	
生活世界の平安保守	
解きたい謎ー西暦第 2 千年紀に生きる	
商品ではない任意無償性への敬意	
老衰したこの国にも再生の春を希求する	
素のままの美しい暮らしと持続可能な開発目標	
人新世の姿形寡聞	
第 3 章 生き物の文明への黙示録	・・・ 38
生物学について 50 年前に考えたことの再検討	
黍のように生きる	
原子力発電所崩壊；事故ですか？事件ですか？	
哀しい私たちの日本	
オリンピックとフクシマ	
保守と保身のなかみ	

生き方、暮らし方それぞれ
都市と田舎

第4章 先真文明の時代 . . . 68

先真文明における小規模家族農耕の展開
未来のための生業、伝統的知識・技能の再創作
ドイツ散訪
現代都市民の退行進化および食料と戦争

第5章 新文明への希望 . . . 97

日本村塾教育の再発見
素原の超個人主義

つなぎに . . .

はじめに

黙示録エッセイを書くにあたって

ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、
すなわち、自分の見たすべてのことを証しした。
この予言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、
中に記されたことを守る人たちとは幸いである。

時が迫っているからである。

(ヨハネの黙示録、序文と挨拶)

この書物の預言の言葉を、秘密にしておいてはいけない。

時が迫っているからである。

不正を行う者には、なお不正を行わせ、
汚れた者は、なお汚れるままにしておけ。

正しい者には、なお正しいことを行わせ、
聖なる者は、なお聖なる者とならせよ。

(ヨハネの黙示録、キリストの再臨)

私、黍稷農季人は、名古屋の東海教会の幼稚園で、マリア様のもとで1年を過ごした。10代のころには、将来の人生を神に祈ったこともある。しかし、キリスト教徒ではなく、聖書は教養としていくらか読んだことがあるだけである。最近、旅行しているヨーロッパ各国の首都の大聖堂、田舎の教会の聖堂を訪ねて、その荘厳さに圧倒され、人々の信仰の篤さに心を温められてきた。調査研究旅行の際に、インドやネパールではブッダガヤーをはじめ、ヒンドゥー寺院やラマ寺院、タイでは仏教寺院を数多く訪ねた。日本の寺院も数多く訪れてきたし、年ごとの正月には深大寺に初詣に行っている。しかし、仏教徒でもない。パキスタンや中央アジアの国々を旅行した時には、イスラムのモスクやミナレットを訪れた。教養としてコーランも少しは読んだが、イスラム教徒ではない。

インドの友人からあなたは何を信仰しているのかと聞かれた。初めのうちは、日本人だから仏教徒かと勝手に思い込んでくださったので、自己の信仰について深く考えもせず、そのまま否定もせずに、微笑んで答えを濁していた。しかしながら、とても親しくなると、曖昧なままにすることができなくなった。私の信仰は自然（カミガミ）であると思い至り、アニミストであると、答えることにした。インドの親しい友人は納得して、その後、太陽を信仰する人々の村への調査に付き添ってくれた。デカン高原の奥深い村で、アワを栽培していたムンダ族の人々は私を温かく迎え、同じ信仰をもつものとして受け入れてくれた。また、北海道でも、アイヌ族の友人は私をピリカアイヌと認めてくれた。

ジャン・クリストフは生死にかかわる人生の節目ごとに、神と対話する機会に恵まれた（ロマン・ローラン 1912、『ジャン・クリストフ』）。私はキリスト教徒ではなく、ましてや畏れ多くも、ヨハネのように神から選ばれ、聖書の黙示録を書ききすことを命じられた使徒ではない。私は自己を科学者として鍛えてもきたが、何はともあれ、一人の生き物としては、できる限りカミ殺しには加担したくない。もちろん、私は地祇のご許可もなく、自然のカミガミの負託も受けてはいない。しかし、近代以降の科学技術の発展に伴う過剰な自然開発という天神地祇、八百万のカミガミの「居ます場」を破壊する機械社会文明によ

る、カミ殺しの所業の事実について、見るに見かねて、自分勝手に見聞したことを書き記し、生き物の文明への希望を託すための黙示録とすることにしたい。 2012. 11. 11

第1章 人生と人新世

逢魔が時の黙示録

夕日が落ちて暮れなずむ逢魔が時は女性がみな美女に見えるのでございます。うれしいやら恐ろしいやらが緋い交ぜになる一瞬ですね。私にも思い出がございます。遠い美少年の頃、岐阜県の笠松観音でお祭りがあるということで、親戚の子どもたちと連れだって出かけた折のことです。

日も暮れ、祭囃子も佳境に入り始めたころでした。笠松観音の境内の人ごみの中で、妙齢の美しい女性が私に手招きしていたのです。子供心にもあまりの妖艶さに、ふと誘われるままに彼女の傍らに寄り添ったと思います。しかし、その後のことはいまとっては何も思い出せません。こうして思い出を書いているからには、神隠しにあってどこかに連れていかれたままになったのでもなさそうです。少なくとも、羽島市八神にある祖父の本家に帰りついたのでしょう。名古屋から名鉄に乗って、岐阜か笠松で大須行の単線に乗り換え、終着駅に近い八神に着きます。大須には近隣の信仰を集める、有名なおちょぼ稲荷がでございます。おちょぼ様にあぶらげ（油揚げ）をお供えし、霊験あらたかなお水を1升瓶にいただきます。これを杯で飲むと健康が授けられるのです。祖母は病弱であった私に時々、おちょぼ様のご霊水を飲ませてくれました。この祖母は父の先妻の長子である私を厳しくはありましたが、とてもかわいがってくれていました。私の母はごく若くして、妹のお産の時に他界したので、2歳で母を失った私を憐れんでくれていたのでしょう。

木曽川のほとりにある八神は私の心の中の大切な故郷です。しかし、八神に毎夏通ったのは、大学試験に落ちた一浪生の時まででした。心の中の神聖な故郷（真の自然）は想い出としておけばよかったのですが、父が他界した後、葬儀に参列していただいたお礼に本家を訪ねました。新幹線岐阜羽島に行き、笠松の旅館で1泊して単線に乗り換えて、八神に行ったのです。30年ぶりで訪れた木曽川は堰によって流れを失い、子どものころの面影をすでに失っていました。ポンポン蒸気（渡し船）に乗らずに、命がけで櫓をこいで愛知県側に渡った冒険の川ではなかったのです。長ずるに及んで、見るべきではないものを見てしまって、心の原風景がボロボロと崩れました。笠松の旅館の女将さんは同世代でしたが、現地にいながらにじわじわとこの喪失感を味わったそうでございます。

翌日、傷心の私は訪れたことがないおちょぼ様を拝観することにしました。大須からタクシーに乗って行きましたが、なんと広い境内、参道には参詣者が多く驚嘆しました。たくさんお供えされたあぶらげのおすそわけを求めて、カラスが叫び鳴いていました。おちょぼ様の振るわいを感じながら、木曽川の美しい自然を壊してさえも、人間が幸せを願う霊水への信仰心は続くのだと、想念が混乱してきました。この時、はっと気付いたのでございます、笠松観音で私を誘なってくださったのは、おちょぼ様のお使いの狐女ではなかったのかと。

2009.1.17 改訂

生き物の拒否権を蹂躪するな

生き物の拒否権を蹂躪するな。自然の進化過程を越えるような技術の使用は生き物と自然に対する著しい冒涇、侵害である。遺伝子研究には許容の明確な範囲がある。その範囲を越えて、やってはいけないことをするのは科学ではない。科学者は興味あることを好奇心で何でもする。これは許容され、むしろその本性を支えてもいる。しかし、生き物が拒否しているような閾値を超えて、遺伝子操作を喜々得々とするのは、許されない行為である。人類のためなどと虚偽の免罪符はあり得ない。名誉心を満たし、金を獲得するためにうそを言っているのであり、科学をする心からではない。できるからと言って、生き物や自然にとっての毒物を作ることに技術的に応用してはいけない。このようなことを、己の欲得でなすのは、生き物と自然に対するおぞましい犯罪である。生き物が進化の過程で属間雑種を作ることにはあったが、科を越えてまで遺伝子交換することはほとんどありえない。遺伝子操作は界まで越えてなされるのは自然の過程では拒否される事象であって、技術的に可能であっても、してはならないことだ。自然に対する信仰心を失った狂気であり、科学する心と言うことができない。自然の一員であり、高度な文化的進化をしてきた動物ヒトとして恥を知るべきだ。

技術が拡大してきた「便利」は暮らしを助けて、とてもありがたいものだ。しかし、これに浸り、溺れると、動物ヒトは取り換えの効く消耗品として機械の一部品になる。意思ある生き物として進化したヒトが、生命を生きることを拒否される。

奥多摩湖、深山橋のほとりで、目前を小菅の湯に向かって通り過ぎたバスの戻りを待って、1時間余りを寒さに震えながら佇んでいた。暗闇の高空を轟音響かせて旅客機が7機も飛び去って行った。時たま通り過ぎる自動車は、「乗せてあげようか」と止まる気配はない。もちろん、私だって言えないほど、人を信じられない情けない世情だ。30年ほど前、自然観察センターを訪問した際に、サンフランシスコの金門橋に向かう道で、スバルに乗せてくれた若いアメリカ人女性の素朴な親切が忘れられない。ここ日本でもすでに失われた親切な行為である。便利な機械に身をゆだねた人々は、生き物も、人々も、山里も見ることはない。

2015-1-23

教養は学歴の邪魔か？

しかし天津神国津神、神々にまつわる神話、あるいはおばあさん直々のアニミズムみたいなものは、少なくともぼくの芯をなしている。宗教としては次元の低いことだとしても、一種のそういった敬虔な気持ちは、実は生活上の知恵だったかもしれないけど、身につけているし、これはけっこう外国人との付き合いのうえでも通用する。今の日本人には、脅えとか恐れ、あるいは敬虔な気持ちは必要なんだと思うんです。本来、そういう気持ちを抱くのが人間としては当然なんですけどね。そしてこれが国際化だと思う。社会の雰囲気ですね、書物を大事にするという。これが幼心にも感じとられて。だからといって、今の時代に本なら神性を感じるということは無理ですけどね。ただ、そういうことをしっかり教えておけば、行儀がよくなるとか、相手に脅えを感じて話すようになる

とか、あるいは、自分を律することにもなる。もしも日本に文化というものがあるとするならば、そういうものを日本文化と呼びたい。

(野坂昭如 2000、『かくて日本人は餓死する』)

教養とは思いやりであると、筆者は理解している。思いやりがもてるのは周りに配慮できるからで、豊かな経験と知識がなければ温かい思いやりには至らないと思う。昨今では、自転車にいつ轢き殺されるかわからないというほどの恐怖心を抱いている。実際に自転車にぶつけられて亡くなった方もいる。歩道をびくびくして歩いていると、自転車が後ろからも、前からもたいそうなスピードですり抜けていく。バス停にバスが来て乗車しようすると、自転車が人とバスの間に突進して割り込む。幼稚園児と母親が門を入ろうとすると、自転車は彼らを押しのける。自転車も自動車に準じて、左側通行であるが、道路の右側を逆走する。バスの運転手は極度に緊張することになる。夜は灯火もつけていない自転車が少なからずあるので、歩行者にも自動車にもよく見えない。したがって、朝には道角にシルバー人材センターのシニアが、夜は交番の巡査が注意のために交差点に立つ。

筆者は被害者なのに、「ごめんなさい、勤務先の学生がご迷惑をかけて、すみません」と市民の被害者に謝らざるをえない。授業に遅刻しそうな学生たちが幼児やシニアを恐怖に陥れているのだ。講義棟の前には自転車が雑然と置かれる。これを丁寧に整理するのは、やはりシニアである。腕力がある学生の跡始末を、老齢の方々が大変な思いで整理しているのである。江戸しぐさという教養はここにはない。とても恥ずかしいことである。

このように、思いやり、教養は大学歴の邪魔なのである。教養は高学歴になっても身につくものではない。それでも、年長女性は比較的丁寧な方が多いので、すれ違う時に道を譲ると、会釈する。年長男性は横柄にチンと鳴らすので、この音はドキッとして神経に触る。犬でも嫌な音なのに、人様を動かすのに、チンはないだろう。自分の声で、お願いするのが筋ではないのか。ちなみに、著者が自転車で人様とすれ違う時にはスピードを落として、あるいは歩いて、「ごめんなさい、右を通ります」などと声掛けをする。チンは絶対にしたことがない。

若い歩行者も思いやりがない。狭い道でも力まかせに直進して、決して進路を譲り合おうとしない。これでは衝突するしかない。道路交通法では右側通行のはずだ。左側を歩けば、後方からくる自動車が見えない。右側を歩いている著者は自動車が来るのが見えるので、左側を歩く違反者のために、自らが自動車と接触する危険を冒して、さらに左によけるしかない。電車のホームで、人を押しのけての電車への飛び乗り、多くに人を危険にさらす。ドアに挟まれて、電車が発車できず、さらに学校や会社への遅刻者が増える。ホームでの冤罪でとても嫌な思いをしたことがある。誰かに突き飛ばされた幼児が筆者の足元にぶつかってきた。まるで筆者が突き飛ばしたかのように誤解した若い母親から、人でなしのように言われた。弁明もできずに、とても惨めな思いをした。

大学キャンパスにおけるごみ捨て問題にも、不法投棄さえ学生自治会が求めており、本当に情けない思いをしている。話し合いで物事を決めるのが民主主義というものだ。大学生になると、小・中学生や高校生のように、お掃除当番はない。したがって、毎日、大学生が散らかしたごみは、現場の教職員が片付けている。自律的に自分のしでかしたことを処理できない、その無責任さは社会人見習い者として、これから、教養ある大人になれるのか、ほんとうに大丈夫かと疑う。

数少ない常緑樹の林には繰り返し、家電製品などが投棄される。教職員ばかりでなく、学生たちとも環境保全実習の一環でゴミを片付けても、また片付けても、粗大ゴミは捨てられ続けている。演劇部の舞台装置の廃棄物の下に、アブラゼミの幼虫がまさに羽化しようとしていたことがあった。その板を偶然の機会に、取り除かなかったならば、地下生活6年の後に、羽化して空も飛べずに、死んだだろう。6年前に交わした常緑樹とセミへの「安全保障契約」は、学生が一方的に破棄したことになる。

つくづく思う、大学歴は教養ある若者を育てていないと。受験教育は過度の競争を強い、自分のことしか考えられない、思いやり、教養も想像力も衰微させた半人前の大人にしてしまっているのである。教養が邪魔をして何か粗暴なことができないのではなく、大学歴が邪魔して教養を身に着けさせず、思いやりのないことをさせているのであろう。もちろん例外はあり、教養ある学生や尊敬できる立派な大人がいないわけではない。

2013. 1. 12

幸せは自由である ―このくにの人々が不幸からぬける手法

過ぎたるは猶及ばざるが如し（孔子）
天才とは努力し得る才能である（J.W. ゲーテ）

このくにの人々の不幸を幸せに転ずる方法は、自然に従い、農耕など生業をもち、職業のほかに趣味を大切に、そのまま美しく暮らすことである。自由気ままにあるがままの思いを素直に認め、自由から逃げない。他者を不当に傷つけず、自らも傷つけない。一度しかない、短い人生を十分に楽しむ。

とらわれないで思い込み（主義）にとらわれ過ぎない。三毒：貪欲 憎悪 無知。名利に走らず、怨恨に振り回されないように、教養を深め高めるように学ぶ。ほどほどに実行しようと決めたことはゆっくり続け、努力を怠らずに、意思・約束は曲げない。過剰な奪い合い、受験競争はしない。

自給知足 人生は職業（産業）のほかに、生業を楽しみ、自ら充たされ、この世に恨みを残さない。自分たちの食べ物などはできるだけ自給する。不足分は地域から分けてもらう。トランスパーソナル個人主義 個人主義の拡張・展開、超越による思いやり、分かち合い。多くを学ぶことが教養の質だ。学び考えることから逃げない。家族・友人を大切にし、人脈を 広く求める。

社会参加 地域社会の市民サークル（CSO）に参加して、くにや世界のことを学び、考えて、地域を良くする活動をし、社会に意見を述べる。

付録：日常の醜い行為をあえて言うなら、

1. 電車やバスでの席の奪い合い。→ 体力がある人は着席しない。
2. 自動車、自転車や歩行者など道ですれ違う時に譲り合わない。→ 譲られたらあいさつをする。
3. 食べ物を粗末にし、ゴミとして捨てる。→ 必要以上に求めず、生き物に感謝すべきだ。
4. ほどこしに依存する。→ 自分のことは自分で賄う。

5. 社会的地位の高い人だけにへつらい、そうでない人には礼を失する。→ 誰に対しても礼を示すのが良い。

6. リクルート・スーツなど没個性的なファッション。→ 明るい衣服は場も世相も明るくする。

原則は「自由」だからこそ、自らの立ち居振る舞いを自律すれば、日々、周りの人々もくにも明るくなる。

2016.6

文明への葬列車

黒服の人びとが乗った車内は、静まりかえって、葬列のようだった。通勤時を過ぎていたにもかかわらず、詰め込まれたのは、特急列車が遅れたためだ。無言の密閉空間をただ耐えているのは少数で、大方は隙間で携帯に見入っている。駅に着くたびに、喪服の客は昇降のたびに無言で他者を押し飛ばしながら出入りする。立錐の人びとと、押しのけて我先に着座した人々とは、雲泥の差がある。苦痛の目の前で、ゲームに興じ、漫画を読む。傷病者、妊婦、高齢者への優先席でも、寝たふりを決め込み、譲る席はない。

「降ります。通してください。すみません。」などと声を出す人はほとんどいない。無言、力づくで押し出されると、瞬時、虚無的な怒りが沸く。いままでは何とか感情と体の防御や攻撃的な反応を抑えてきた。時には誰もが教養を保てはしない。

便利に蓋われた文明のいまわの際は不信の貨車に載せられて火葬場に運ばれていくようだ。もう人間の感情を封じ、ひたすら荷物になる。苦痛に耐えられなくなった人が、時に怪しい行為を溢し、粗暴な怒りを発する。やはりこの文明の行き着く葬列の先は火葬場であり、墓場なのだろうか。通勤ラッシュに都会に向かうと、文明の終焉を妄想してしまうのだ。人間の真文明は、焼かれる火炎のなかから、不死鳥のようによみがえるのだろうか。

2016.12.19

川底の小石

捨てようとしていた書類の束から、古い原稿（1985年1月15日）のコピー（30年前の自分）を見つけた。どこかに載せて頂いたのか記憶がないし、著作リストにもない。情意に流された、余りに悪文であったので、この原稿を書き直すことにした。著者の現代思想は端的に言えば保守底流である。保守は自己保身のことではなく、伝統に敬意を払い継承しようとの意志をもっているということである。人の間を取りもつが、世間を泳がず、頭から立身出世は求めない。時流に棹さして、流されても、またその先で、流れに抗う。船頭ではないから、流れに逆らわずに棹をさして、うまく舟を操ることをしない。さて、次に改訂原稿を記す。

時折頂く小冊子を読みながら、発行人の過去における教師への恨みと母親としての未来への希望を感じた。このために、私はこの小冊子に寄稿するという約束を果たせずにいた。なぜなら、私は自ら関わった「教師との過去」から、教師や教育が嫌いではなかった。もちろん、良い師に恵まれたからこそ、ひねくれ者でありながら、道を過たなかったのだが。しかし、余りに因果なことに、いわゆる教員養成系大学に教育職を得ることになった。私の心の鏡の裏側は水底の小石のように、自己の姿を最小限にして、流れのままに暮らしたいと考えていた。ところが、鏡の表側ではせめてもの慰めとして、現在の教育のあり方への批判的対案を出そうと、教育の枠内でますます厭教育的な心情を募らせながら、呻吟してきた。どれほどの大きな矛盾を抱えきれるか、この矛盾の大きさが人間の度量を示すのだと自らに言い聞かせつつ、新たな教育への対案を探ろうとしてきた。

10 数年前に、大学解体とかアカデミズム粉砕とか叫んでいた学生たちは皮肉な言い方をすれば無知なロマンチストだったのだ。当時の学生たちが頑張らなくても、大学は初めから、すでに解体すべき対象ではなかった。アカデミズムよりも卑俗が大学を支配していた。いつの時代でも組織より個人に信義を求めた方が、何事も確かである。自由という代物がまずは個人に属しているからであり、私が求めるささやかな自由は古臭いアカデミズムにあったからである。あの大学キャンパスを、後ろ手を組みながら、うつむき加減にぶつくさ何事かを唱えながら歩くああいいう人になってよいと考えたのである。

川底の小石は、時の流れの中で世に見捨てられた人々、草々との出会いに石心（赤心）の平安を得る。山に発した初めから、海に至る、始めから終わりの見える旅ではあるが、私小石には人知れない旅行記を書き綴る意思はあった。

この当時(1985)すでに、教育というものは人から施されるものではなく、自ら自分にするものと思っていた。したがって、学習という言葉の方が好きであった。教師というものは旅路で袖擦れ合う縁を、人の求めに応じて結ぶものである。教師はせめて若者の伸びる芽を摘まないように注意し、伸ばしてあげようなどと気負わないのが良いと思う。教職について10年余の当時は、気力も才能で、気力の充ちた人は一人でも歩ける。しかし、無気力の人を励まして、座り込んでしまい、前を向かせることはできないと、教育的行為に無力感を抱いていたようだ。多くの才能の芽がありながら、気力のない人をみると、気力も前成説的にもって生まれる一種の才能だと思わざるを得なくなってしまう。どのような辛い時代でも、世間を無力感が支配していても、少数の正直者は社会をより良くすることに強い情熱を示してきた。

世間のかましい教育論議に振り回され、学校教育現場の教師は精神的に取り繕い、澄まし、乱している。無力感の中でも、頑張っている少数者はいるものである。彼らは類を求め、孤立しないでいてほしい。個人として自己満足できる作品づくりが最も確かな意思で、この意思とは世の中の流れ行く先を見据えることである。大学闘争が敗北、自壊してから、社会運動に参加して世の流れを変えようなどとは考えなくしようとしていた。ましてや、人々に社会運動に参加しようとは言えなくなっていた。自分の作品にこだわる方が、説得力があるように思うようになっていた。ささやかな作品を身近な少数者が共感してくれば、それで十分に心強い。

顔の见えない得体が知れない、心が結びつかないものは頼むに足りないと思う。対話ができなければ、人間関係は結べない。無関係が支配する世間で、古くても良い伝統に寄り添って暮らしたい。一面で、華やかに見える世の中で、一握りの本質を探して、短い人生を過ごすということになる。現代教育への対案は、すべてを自己完結させることの自由で

ある。教化されず、評価に関わりなく、失敗をたくさんして、結果は自ら招き入れたい。そこで、私の講義ではモノづくりを中心に置いて、後から知識を補うという手法をとることにした。野に出て、実物を五感で感じ、見て考え、その後に先人の知識を再確認してから加える。誰もが最初の発見者になり、個人の発見からすべてが始まる。人は自ら見つけたいのだから、横から教えられたくはない。自分は自分だ。

その後 30 年を経て、教職を辞するのを前にして反省すれば、余計な説教をして、お互いに不快になったことも少なくはなかったので、旧学生諸君にはここに陳謝する。しかし、教育への対案に関する原則的な思考は深化、展開して、「ELF 環境学習過程」を提起できたことに、川底の小石は自己満足している。

2014. 2. 9 改稿

帰去来の辞 — いわゆる教育を去る

歸去來兮 田園將蕪胡不歸 陶淵明
朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり 孔子

この世で大学ほど美しいものはない
なぜならそこは無知を憎む人間が知識を得るために努力し
真実を見たものがそれを広めようと努力する場所だからだ
J. メイスフィールド

大学を退職するにあたって、「大学とは何か？」を再考している。学生・研究生・院生として、2 大学、1 研究所をへて、大学助手になり、その後 40 年を同じ大学で過ごした。大学に入学したのは 1968 年で、学園紛争の真ただ中であつた。デモやストの中でも、子どものころからの意思により、アジア・アフリカのこと、植物のことに興味の中心をおいて学んでいた。当時の某大学生たちの一部は「大学解体」を叫び、教室をバリケード封鎖、学びを阻害し、石の代わりに図書を投げる輩もいた。私は非暴力不服従が本旨で、当初はアジア・アフリカ連帯委員会に参加していたので、知らないうちに いわゆる代々木系全学連（民青）シンパということになっていた。しかし、後ろから扇動する活動家の現実を見るにつけ、反代々木系全学連（三派）も含めて、どの党派にも加わることはできなかった。結局、大学 3 年生のころまでに、個人として行動する全共闘ノンセクトあるいはベ平和連といったところに心情が落ち着いた。4 年生になる前に、同じ党派の中でも仲間割れを続ける学生政治運動に一層の嫌気がさし、植物研究の世界に向かうことにして、国立遺伝学研究所の阪本寧男の押しかけ弟子になった。土佐自由党に加わらず、東京に出て植物学者になろうとした先達牧野富太郎翁に習ったのである。

1970 年ころにはすでに四大公害が顕在化して、公害反対運動が盛んになっていた。理学部生であつたのに、公害に加担した科学に全面的な信頼を寄せられなくなっていたので、水俣病患者さん支援のための学生行動委員会に参加した。大学院農学研究科生で、トウモロコシの栽培やら、生物化学実験のとても厳しい時間の中で、患者さんや学生たちとともに興銀前のテントに出入りし、宇井純ら自主講座『公害原論』の学生たちと環境庁座り込み、街頭でのカンパ集めに加わった。

修士課程修了前に、教授から就職を薦められ、「日本の農業教育」を立て直すという、とても重いミッションを与えられて、大学助手になった。大企業や中央官庁には勤めないと決めていたし、植物研究を続けたかったので博士課程理学研究科に進学しようかとも考えてはいた。農学部が第 2 理学部的で、農業を学ぶ場ではないと違和感をもったからである。しかし、就職せねばならないという私的事情によって、教授のご厚意を甘受して、いくぶん批判的にみてきた大学の教官になり、20 代半ばにして早くも学生ではなくなった。こうして、学生たちに吊し上げられる側になって、若干の恐怖心を抱いて大学に住み着いたのであるが、このころにはもう学生運動は骨なしになっていた。そこで元気のない学生たちを励まして、一緒に学びと遊びの世界に誘うようにしようと、大学探検部を創設することにした。今、「大学とは何か？」を再考するにあたって、20 歳代のころに読もうと購入していた本を読みなおしている。特集「学問の可能性」が『状況』第 96 巻（1976）に掲載されていた。中でも特に関心を引いた論考は丸山（1976）の「学問と魔術—全共闘以後」であった。全共闘運動が敗退した後、当時の学生たちが批判した大学と学問をさらに問いただす活動の、わずかな可能性を公害と医療に関わる市民（住民）運動に見出すしかない。現在、さらに学問論が必要なら、その変革の方法を示さねばならない。しかし、大学には真の学者はいないとまで言い切り、学問に対するニヒリズムが強力に根付いてしまっているなかで、自滅的崩壊のさなかに学問の可能性を考えることはとても困難な作業だと、彼は述べている。ただ、数少ないが立派な学者はおり、彼らは全体としての学問を一個人としてどこまでやりきるか挑戦し、その自律した主体として学問の方法を確立すべく、苦闘していることに、真の学者への信頼をつないでいる。学部生のころに全共闘ノンセクトとして自己を位置付けた著者に対しても、丸山（1976）は大学に残った者の責任として学問論を明かすように、過去から来たって求めているのである。民主主義のもとで、生命を奪われない自由、学び考える自由、は現代市民社会における文化的進化の最も基本的な成果である。しかし、フロム（1941）は、次のように述べている。近代人は前個人的社会の絆からは自由になったが、個人の知的な、感情的な、感覚的な諸能力の表現という積極的な意味での自由を獲得していない。自由は独立と合理性を与えたが、個人を耐えがたい孤独に陥れた。この結果、個人は自由の重荷から逃れて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人間の独自性と個性とに基づいた積極的な自由の実現に進むのか、二者択一を迫られた。自発的な活動（愛と仕事）によって自我を実現し、自己を外界に関係づけるならば、孤立ではなく全体の部分となり、正当な地位を得る。活動的創造的個人を自覚し、人生の意味がただ一つ、生きる行為そのものであることを認める。ニヒリズムというものは日常のあちこちにあって、無関心や逃避や安易な意味づけの形で、私たちの心にするりと忍び込む（重田 2013）。自由からの逃走、学びからの逃走（佐藤 2000）はこのことを指しているのである。厳しい現実をよく見すえ、学び考え、人生でなしたい仕事を見つけ、楽しく暮らす、逞しい自由人になれるとよい。

個人主義は個人の固有価値を問い続けるが、自己と同様に他者を思いやる教養豊かな拡大個人としては、本来、トランスパーソナルである。『超克』（倉田百三 1924）を改めて読み直してみると、超克とは確かにトランスパーソナルを含んだ到達目標であった。彼は次のように述べている。精神生活とは現実を理想に一致せしめんとして、現実を超克していく生命の過程である。超克は否定ではなく、包摂し、止揚することである。人間、超人を超克して聖人になり、その後再び民衆に「没落」して、民衆の仲間になる。

さらに、関東大震災を経験した後、おそるべき出来事がある人生をいかに調和あるものと感じて、生きる喜びを感じることができるか、これが最も大きな問題である。個人意識に終始する限り、恐るべき事件をもつ世界を肯定して生きることはできない。個人意識以上の人類意識、宇宙意識（信仰）をしながら個人意識として把握すべきである。近代人は個人意識を重んじ、人類的宇宙的本能を発達させてこなかった。近代人は自然科学の限界や本質を粗雑に理解しているにすぎず、教養が足りない。この信仰に立って、しかる後に環境を改造し、不合理な経済組織を改革する文化史的必然がある。しかし、環境や経済を改造すれば解決が得られるのではなく、生きがいの問題は残されたままである。教育の対象は先生から伝達される集団（客体）であり、これに対して学習は自ら学ぶ個人（主体）である。学問とは、自分が生きる術を学び、自分に生きる道を問うことである。制度としての学校教育による学歴は教養と相関はあるであろうが、残念ながら、昨今の高い学歴は教養を保証していない。なぜ、身のまわりから世界までを学ばず、考えないのか。知ったことを語ることから逃げるのか。なぜ自由を奪い殺すのか、なぜ自由を捨てて自死するのか。孤独に耐えられない、孤独から連帯へと抜ける道が見えないのだろうか。受験教育の中で、お山の大将、おれ一人、あとからくるものつき落とせ。

これでよいのか。公正な切磋琢磨はよいが、ともに学び合うほうが楽しいし、良いのではないのか。私は育った町内の高校に入学したとたん、先生から某大学〔注：東京大学〕をめざせ、ラグビーなどより、受験に役立つ科学部に入れと言われ、さらに、初恋の娘の兄からもこの大学に入れないのは人生の落伍者だとまで言われ、恋路を邪魔された。この時から某大学には敵意を抱き、まったく受験しなかった。このような受験教育は世界中に蔓延して、人間に序列をつけ、差別している。さらに、学問にも差別をつけ、物理科学が至上で、芸術は主要ではなく、受験教育にはいらないとする。しかし、美しい人生に音楽や絵画などの芸術・芸能はなくてはならないものだ。個人は向学心、好奇心にしたがって、いろいろなことを、ただ一回の短い人生で学びたいのであって、受験教育など施されたくはない。受験教育は学びたい人々の集まりである「大学」の本旨ではないはずだ。たった1点の差で、若者の希望を断つような作業はあまりに苦かった。

大学や大学生は本来好きだった。大学に勤めて、ある程度、植物研究も続けられたし、家族も養えたし、ありがたくは思っている。しかし、この大学には高い建学の精神がなく、理念において論理的でないことが気に入らなかった。リベラルアーツ（学芸）をめざすと誇りをもって言ったはずなのに、法人化する際に教員養成に特化すると言い出した。第2次世界大戦に敗戦した後、教員養成も大学で行うとしたはずだ。しかし、大学組織の保身のために歴史に逆行して、再び師範学校に退行しようというのだ。個人としては異論を唱えて掉さしたが、教授会で学問論も大学論も議論することなく、教育の理想も本質も探究しない。教員養成といっても、大半の教授たちは教材、プログラムやカリキュラムを開発研究しているのではない。専門の研究をすることのみを望んでいる。

教育学部としての歴史の重みを誇りにするのなら、専門研究の上に教育研究を重ねることこそ、他学部とは異なる存在意義であり、理念的論理性ではないのか。日本の教育を改善する提案をすることが「基幹大学」としての役割であるはずなのに、早くも保身に走り、委縮した「改革」を提示しても、軽蔑されるだけだ。教育が大事な行為だとするのなら、教育研究に励み、政策立案者や行政担当者を含めて、広く世の中を納得させる努力をすべきだ。

人生の大半の 46 年間、大学に居住した。短い人生で、批判的精神をもって努力したが、実現したことも、実現しなかったこともあった。余生はもう一度、原初的な学びに回帰し、その場を創り直してみたい。山村で日本村塾、あったはずの「大学」カレッジを開きたい。先生、試験、授業料、卒業証書、などはない。塾生だけがいて、あるのは向学心と未来のくにへの想い、自然、むらの暮らし、図書、民具だけである。

2014. 2. 9

過去とつながる教育の変わらない今

初めにお断りしておく。以下のような人ばかりでなく、真摯に人生を過ごしている人は少なからずいる。このことを希望として、「教育」への自己批判を続ける。軍国主義に積極的に加担し、教え子を戦地へと送った旧世代の教員たちの多くは、敗戦後にも深く反省することがなかった。若者たちに人殺しの方法を教え、戦地に送りながら、敗戦後はすぐに口を拭い、教科書を黒塗りして、急場の形式民主主義を伝達し、教えた。思想を転換するにはつらい精神的葛藤があるはずなのに、なぜ、教員たちの多くは軽がるしく変節できたのだろうか。軍人、政治家や官僚の一部は公職追放にあった。日本でも、戦争責任をとった人たちは少なからずいたが、多くはドイツのように戦争責任を厳しく反省することもなく、長年にわたって責任を追求されることもなかった。いつの間にか歴史の事実を「水に流して」しまい、悲惨な敗戦はなかったことにしたのである。つらくとも、歴史の事実をしっかりと学んだうえで、将来の方向を決めることが当たり前であるのに、この国は歴史の事実をなぜかうやむやにして、消しさってしまう。

敗戦後の形式民主主義は多数決を原理として、少数意見は無視できることにしてきた。少数意見を尊重するのが自由なる個人を基礎とする民主主義であるはずであるが、多数決という保身法により責任を回避するのが、敗戦時の反省がなかった教員たちが教えた形式民主主義であったのであろう。今日ではこの形式民主主義すら崩れて、各選挙投票率は著しく低く、政治家から有権者までもが無責任になってしまっている。加えて、敗戦後の復興期を過ぎてからは安易に受験教育に加担し、子供たちを画一的な価値により序列化するように、「よい学校へ行って、よい会社に入り、幸せになった」とさと、偏差値競争を煽ってきた。反省すべき時に反省せず、ましてや今日に至るまで三省せず、昨今の教員の一般的性癖は、良く変わることなく、自ら好奇心をもって学びもせず、良く知ろうともしないのに教えたがりである。とりわけ小中学校の教員は、極論すれば、自ら本も買わず、読みもせず、社会や自然から学びもせず、お仕着せの教科書の古い内容を伝達しているだけである。伝達される情報は、日々の暮らしにも、人生を探ることに役立たずに、これを直感した多くの子どもたちは学校で学ぼうとしなくなった。いつまで 受験教育に寄りかかって、この国の人たちは保身の人生を過ごすのか。

国立大学教育学部に就職して 40 年、必要以上に義務に従い、責任をもって、自己と家族をないがしろにして、ほとんど年休を取らず、土曜・日曜も働き、それでも十分な成果は上げられなかった。他者のお褒めなど、もとより望んではないので、自己満足すれば、十分な人生ではある。しかし、このくにの若い世代のことを慮れば、忸怩たるものを拭い去れない。

国立大学教育学部は今また、国の与えるミッションとやらによって、大学から師範学校へと逆戻りしようとしている。国立大学法人になった故に、一層、経費（財布）を絞られながら、学生定員や附属学校教員数は減らせず、非常勤の多い職員数もこれ以上削減できず、大学教員数を大幅に減らすしかなくなった。また、新規教員採用には小中学校教員経験が求められるようになった。いわゆる教員養成系大学の教育学部だけが、教員就職率 60%あるいはそれ以上を求められてきた。経済部を出て商人になる率、農学部を出て農家になる率など決して求められないのに、何故、教育学部だけが国の統制を強く受けるのか、とても疑問である。本来、大学は純粹に学び合いの場であったので、学生は職業選択の自由があって、何になってもよい。もちろん、問題はそれなりに複雑ではあるが、簡単に言えば、師範学校に後戻りさせて、大学数を減らすということであろう。国立大学教育学部の学生数は、学生定員の調整に使われてきた。

昨今の学校現場で生じる後ろ向きの課題は、現場の教員を心身ともに追い込み、ますます、自己保身を固めさせている。教員がのびやかでなければ、ましてや、子供たちはのびやかでいられない。学校現場を追い込んでいのは、行・政治だけではなく、社会人や保護者でもある。このような流れに掉さして、本来、良い方向に学びの環境を変えていくのが若い教員の養成の場である、大学教育学部の役割のはずだ。しかし、昨今の学生の多くは本を買わない。本や他者から学びもせず、考えない者が学生であるとは言えない。教育学部の教員にも大きな矛盾、言い換えれば「嘘」がいつまでもまかり通っている。

たとえば、教育学部の多数を占める教科専門教員は教育研究をしない。教育学部の目的と伝統からして、講義をすることだけで教育をしているということにはならない。少なくとも、教授になる際には、専門性を基礎としながら、教材研究やプログラム開発の業績評価はすべきである。教育研究をしないのなら、教育学部にいる理由が成り立たず、教科の基礎学問に専心しているというのは「嘘」をいっているように聞こえる。教育学部は科学・芸術などを総合する役割をもった、人間を統合的に学ぶ場である。明確な目的があり、誇りも高く、他学部の植民地ではない。一方、専門教科教員はあまりに少数であり、教育研究に基づき、教育課程を体系化するために、教科専門教員を組織して、研究プロジェクトを推進できていない。このような構造的な課題と向き合って、自ら解決しないと、教育学部は歴史を後戻りして師範学校に後退するだろう。

大学の目的、建学の精神、これらのミッションは大学構成者が決めることである。しかし、国はミッションの再定義として、国立大学教育学部にそれを提示してきている。大学教員も、さほど疑問にも思わず、上意下達を受け入れるようだ。さる大昔、東京大学の総長はとても偉かった。しかし、今では国会議員になり、文部大臣にもなられた。このように政治権力に組み込まれたことは、東京大学の著しい権威の低下を示している。立法・司法・行政の権力、警察・軍事という武力、企業の金力、宗教の権威、これらに知性で対応するのが大学の権威である。大学が権威を失墜しては、現代社会が多くの犠牲の結果として獲得してきた、市民社会の文化的進化が退行するほかない。

2013. 8. 3

近頃見た映画、「レ・ミゼラブル」と“Christmas in the Trenches”

映画が終わっても、席を立つ人がほとんどいなかった。なぜ、このようなくらい映画が今どきの若者に人気なのか、満席であった。一番前の席で、ふんぞり返るようにして見た。

「レ・ミゼラブル（嗚呼、無情）」をまれにみる純愛物語と思い、その不思議さに魅かれたのだろうか。飢えた妹の子どものためにパンを盗んで、19年も牢に入った。ジベール警部の正義、裏返ったジャンバルジャンへの執着「愛」。不幸な人々が人生に翻弄されて、一人で生きることにはできないゆえに、稔らない「愛」にすがり、あの世の入り口で、やっと神の祝福を受ける。理想に生き、裏切られ、他方で、守銭に過ごし、陥穽に落ちる。ヴィクトル・ユーゴは、人生とはひたすら重荷を背負って坂を上ることだと言いたいのか、その者のみが神の祝福を受けると言いたいのか。

確かに、神仏、カミあるいは全自然、何か絶対的な物事・事象への信仰がなければ、人生における行動規範がないということだ。モーゼの十戒にも、仏教の五戒にも共通して、「殺すな、盗むな、嘘をつくな」などがある。人類が社会を構成するためには歴史的に当然の戒律として、求められた。しかし、「塹壕の中のクリスマス」では、神の名における戦争として、人を殺すことを教団は要求し、他方、戦争の敵とはいえ人殺しを望まない、あるいは人殺しができない神父は教団から出されて、自らロザリオを外すことになった。リバプールから来た兵士は歌った、「撃てと命令する者たちは死にもせず負傷もしない。そして銃の両側にいる僕らは同じ人間なのだ」。宗教教団と信仰は異なるのだと理解できた。

日々の暮らしの中で、十戒はいっこうに守られていない。ジャンバルジャンのように飢えに苦しむ子供のために、やむを得なくパンを盗むのさえも、ジベール警部は許さなかった。心ひろい神父はジャンバルジャンを受け入れ、ジャンバルジャンは人生への憎しみを克服していった。飢えのためでなく盗むのは、戒律や法律を持ち出すまでもなく、誇りのない、罪深い行為である。最近、江戸野菜講座の皆様が収穫を心待ちにしていたブロッコリーが畑から一挙に60個も盗まれた。一人自分が飢えて食べるための数ではない。小金井市民交流センターで、環境フォーラムがあり、エントランスホールにホーム・ガーデンの展示をした。ボードの下に、アンケート用紙を置いて、市民農園に関して広く市民の意見を頂けるようお願いした。ところが、返信用に80円切手を貼って70枚ほど置いたらすぐに盗難にあった。アンケートは1通返信されてきたのみであった。

何度、盗難にあっても、大学の植物園（彩色園）を閉ざさずにきた。これからも、市民の自由な散策を受け入れるために、門戸を閉ざさないでいたい。大学も市民から尊敬を受けなくなった。残念ながら、盗難は増えるばかり、ごみは投げ入れられるばかりである。しかし、どんなに悔しくても、学びの自由を閉じてはいけないのだと思う。

2013. 2. 24

ゆめのおわり

石膏像がうずくまり、こめかみに拳銃を当て、パンと発砲した。頭に被っていた白いバケツに穴が開き、少しの血だまりが、足元にできていた。私はとりたての野菜を仕分けて、子どもとその友人に持たせようと、袋詰めに焦っていた。彼らはすでに自宅を出て、矢川

駅に向かって歩いていた。追いつくために自転車のペダルをこいで、人気のない坂道をもどかしく登っていた。一人の完全武装の兵士が坂を歩いていた。鉄兜には網がかかっていた。彼を追い抜いて、横道に入った途端、パンという音に驚いて後ろを振り返った。白い石膏像が赤く濡れるのを見たが、電車の発車時間に遅れまいと駅への道を急いだ。早暁の夢から覚めたように思いに沈んだ。自己個人に最も関心をもって生きてきた。毎日、いつも自分がどうすると考えていた。きっと少年のころから、情緒的にはそうだった。いまでは個人主義的な自律こそが人生の目標だと論理で考えている。現代の人は孤独で、とても寂しいように見える。私が個人主義を唱道しながら、寂しくないのは、家族や友人たちがいるからだ。個人主義はむやみに仲間や名利を求めなくても、孤独ではなく、寂しくもない。自己個人に深くこだわるのが、家族や友人、地域社会や大きくは世界に思いを寄せることにつながっているのなら、利己主義に墮することも無い。今にして思えば、すでにこの世にいない祖父母や両親（義父母も含む）にも、多くの老師たちにも、どれほどとも限りなく育んでいただいたのだろうか。遅ればせながら、今にして次第にそのことが分かってきた。孤独に生きられるだろうか。競争、闘争ばかりの世界では、孤独の果てに疲れてしまう。たとえ、個人主義が意思して志を高く掲げたとしても、疲れた時はゆっくり休めばよいのだ。無条件な癒しがあってよく、それは信仰によるしかないのだろう。

とはいえ、大なる社殿、伽藍や聖堂など、拝殿の清楚なしつらえの奥の暗闇、祭壇の煌びやかな御仏、壇上の眩いキリスト像とステンドグラスなど、あるいは聖職者の厳かな權威や豪華な礼服など、こうした物事からの癒しではない。人々が歩いた石畳のくぼみ、手を触れて磨かれた聖像、無数の小さな献灯ろうそく、神聖な形を包んでいる人々の祈り、見えない「精霊」、あるいは自然に充溢する天神地祇の気、こうした聖なるものに寄り添い信仰することによって、たぶん孤独は癒されるのだろう

2016. 2. 9

個人の自己満足かこのくにの自業自得か

台風第 22 号の雨の中、藤野の北部、佐野川地区を A・B さんに案内された。C さんはどこかの学校の教頭を退職して藤野の北部、佐野川地区に住んでいる。草刈りボランティアをしている。むらの為にならない、役に立たないのは自己満足に過ぎず、そのような人は受け入れられないそうだ。土地の所有者がしない草刈りも、A さんがするようでは自己満足ではないのか、それでよいのではなか。自分の行為を卑下し、満足しないで、自尊感情を低下させ、他者の人目や価値に振り回される必要はまったく無い。カナダ人の D さんは日本に住んで 20 余年だそうだ。染色工房／民宿を営んでいる。外国人の旅行者が多く来る。古民家を改修した客室など見せていただいた。とても良いセンスで室内が設営されている。特別スイートからは茶畑の彼方に富士山が見えるそうだ。スタジオ藤野はイタリア帰りの E 夫妻が経営している。木工とアクセサリーの工房で、カフェも併設している。このような狭い山道に迷いこんだように、かなりの数の来客がある。さすがに、インテリアもシンプルながらセンスがよい。使用されていない民家を改修して、来客が増えたように、所有者から返却を求められたそうだ。放棄してあった家だったのに、実に勝手なものだ。

山中の道中案内をしてくださった C さんは、大地主の大きな家を順次車中で紹介、しかし、家には人気はなく、林野や耕地は放棄されていて、管理維持されていない。ところが、他者には土地は貸したくない。なぜなら、敗戦時、農地解放によって小作人に土地を取られたからだという。狭いところに住んでいる都市民からすれば、資産家なら自分で責任をもって、林野や耕地を管理維持すべきだと言いたい。相続放置や所有者不明地がたくさんあるようだ。こうした管理できなくなった土地は地域共有の入会地または新たな所有・利用者に譲渡とされるべきだ。農林業地の土地政策に問題がありながら、このくにの政府も人々も先送りしてきた。自業自得というほかはない。

吉原 (2017) によれば、このくにの、個人の土地所有権はきわめて強く、経済成長のさなかに地価高騰の時期には値下がりしない有利な資産と考えられてきた。農地以外は売買規制がなく、売り主と買い主が「金融商品」のように通常の経済行為として手軽に売買ができる。しかし、農地は農地法によって売買規制があり、所有権の移転に関しては地元農業委員会の承認が必要である。その一方で、経済の低迷、都市への集中、人口減少、農山村の過疎高齢化が進み、数世代を重ねる中で、農林業地に関しては不在村地主が 2 割以上、所有者不明地は私有地の 2 割以上に達している。分かり易く表現すれば、衝撃的にも、九州の面積を超えている。地方の土地相続人の多くは都市在住者となり、不在地主、さらには相続放棄する。土地は自治体も国も管理業務などの大変さから特段の理由がないかぎり、寄付を受け付けない。資産価値の低下した土地は相続放置されるが、土地の利用よりも所有権が優先しているので、面倒な手続き制度によって、共有および他所有者への移転は容易ではない。

このような土地に関する法制度の問題もあるが、もっと根源的なところに潜む重大問題がある。人々が都市に移動集中して、自然、農山村から遠ざかったことである。今や、自然は教科書的な概念として認識され、映像の世界になってしまい、現実の自然を知らない人びとが多くなった。このことを良いことに、野生獣は農山村から都市周辺へと、順化して侵略してきている。都市文明が足元の農山村の暮らしや文化を奪い、ゆっくりとした自壊へと進んでいるのだ。何十年も前に、注意喚起したが、聞く耳をもつ人はいなかった。今も、あまりいないようだ。自然豊かなこのくにの哀れな悲しみである。

文献：吉原祥子 2017、人口減少時代の土地問題、中央公論新社、東京。

2017. 11. 4

第2章 歳想い 民族植物学ノオト巻頭言集

もう一つの阿修羅として (第1号、2005)

門男は山梨県北都留郡ほかで、小正月の時に門戸のところに玄関先に向けて2体飾る(表紙)。門男の作り方は、まずヌルデを里山から伐ってきて、1メートル余の大きさの丸太にする。この丸太の端を削った半円形の白肌に墨で目鼻を描き、頭に竹の鬘をつけ、次に藤蔓で腰紐をしつらえアーボ(粟穂)、ヘーボ(稗穂)、鍬、鎌をこれに挿す。思うに、門男は山の神の使いで、農耕の智慧と畑作雑穀の収穫を秋に向けて予祝するために各戸を訪れる者であったのであろう。しかし、今からは阿修羅として農山村の各戸に門男が復活し、共同社会と畑作雑穀が維持されるように、ともに活動することを願う。

このところ研究人生に秋霜烈日を思うようになったのか、身体的な衰えよりも未だ混沌として整理できない心の葛藤に感じやすい。自然崇拜、アニミズムなど信仰のあり方にも関心が向き、阿修羅の存在にとっても興味をもつようになった。ひろさちや(2005)は『わたしの中の阿修羅』で傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に、「阿修羅よ、汝、諦めるべし」と確かに結論を下した。これにもかかわらず、興福寺の三面の阿修羅像に再び思いを致して、複雑な阿修羅のあり方を一つの結論にまとめきれず、もう一つの闘う阿修羅によって巻末を閉じざるを得なかった。まだ学生の頃であったか、読みふけたジョージ秋山(1970)の『アシュラ』はむしろ醜い子ども姿であったが、萩尾望都(1995)が『百億の昼と千億の夜』の中に描く阿修羅は美しい少女の姿である。新美南吉(1932)の『ごん狐』も阿修羅なのだ。宮沢賢治(1923)は心象スケッチ『春と修羅』中の1編「春と修羅」で、「はぎり燃えてゆききする おれはひとりの修羅なのだ」と詠っている。

こうしてみると、今、山の神の使いの門男になりたい私も一人の阿修羅なのだ。農山村の複雑多様な伝統智体系を学び、統合学の提案を求めて民族植物学に挑むことが、象徴的に言えば天道でも人道でもない、己や世間の醜を知り、美を求める阿修羅の道なのであろう。阿修羅の勝つことのない戦こそが誇り高く、忘れてはならないそれぞれの民族の、また私たちの歴史である。忘れてはならない多民族の自然文化誌に関する調査研究と生物文化多様性の現地保全を求め、民族植物学の発展を目指し、民族植物学研究室の成果をささやかな雑誌にまとめ、毎年1回発行することにしたい。

植物についての伝統と学問への敬愛 (第2号、2007)

イギリス南部の古い町カンタベリーで暮らし、ケント大学とキュー植物園で連携運営されている大学院民族植物学コースの講義や実習に、世界各地から来た院生たちと一緒に参加する機会を得た。また同時に、研究目的である雑穀と農耕の起源に関する人類学・考古学の文献収集、腊葉標本の観察、生物文化多様性保全のためのナショナルトラストなどの現場訪問を行なうことができた。多くの場所と人々を訪問し、そこで多くの植物と図書にめぐり会うことにより、イギリスにおける植物についての伝統と学問への深い敬愛を知り、強い共感を覚えたので、いくつかの見聞を紹介したい。

カンタベリー大聖堂には図書館などが併設されている。この図書館には多くの古文書が収蔵されている。これらの文書は聖堂と同じように、当時の政治によって置き場所をさまざまなど数奇な歴史を刻んできた。興味深いのは、修道士たちが植物による施療を学んでいたのであろうか、多くの植物学関連の図書があることである。かの高名な施療者で旅行家であった Gerard, J. (1597) の植物図鑑原本を見せていただくことができた。グーテンベルグが活版印刷を発明してから約 1 世紀後の印刷物で、1000 ページを越える大著である。この中に、なんとうれしいことに、キビやアワの図と解説が数ページにわたってあった。閲覧中に、周りの閲覧者たちは古い紙に書かれて、丸められ、紐で括られた手紙を、まさに紐解いて読んでいる。何をお調べかと聞くわけにはいかなかったが、学究的な雰囲気には深い敬意を覚えた。

王立キュー植物園の図書館、腊葉標本館、種子銀行、何もかもが植物で充たされていた。たとえ一時でも非常勤職員になり、ここで腊葉標本を見て、文献を探すことができたことは、植物学者として至福の時間であった。多くのボランティアが植物園の管理、友の会の運営、講義・実習の補助に参加していることは、とても素晴らしいことである。

ロンドン大学、ケンブリッジ大学の佇まい、自然誌博物館、大英博物館の威容も、それぞれに、大学あるいは研究者たちの高い誇りを感じた。ワトソンとクリックが DNA の 2 重らせんを議論したパブなど興味深かった。ギネスで酔っ払ったおかげで、このモデルができたのかと感じ入った。

ナショナルトラストで運営している x x 果樹品種保存園、同じくブリーンの保全林に市民がどれほどのことまでできるか、その高い可能性を垣間見た。カンタベリー大聖堂を取り囲む旧市街を一望できるケント大学キャンパスに暮らす、ブラックベリー、イラクサやバタフライブッシュ、ウサギ、キツネ、リス、ウミネコ、ブラックバードやロビンたち、一時暮らしたダーウィン・カレッジ裏のムギ／アマ畑とヒツジ牧場、そして民族植物学を志す人たちと、平穏な学びの時間を共有できてとてもうれしかった。

希望は小箱の中に残っているのか (第 3 号、2009)

植物と人々の博物館づくりもやっと軌道に乗り始めて、展示が充実してきました。初夏には一般公開することになりました。雑穀を中心とした山村の暮らしを常設展示することはもちろんですが、2008 年の調査成果としては「小菅の養蚕」、「小菅の名人」、および「身近なインドの生活文化」を課題とした特別展示をします。このための一般公開解説書を発行し、参観者に配布します。雑穀展報告書に続く 2 番目の冊子です。『E L F 環境学習過程』もモジュール教材を加えた改定版を発行しました。2009 年から 3 年計画で開講する三菱 U F J 環境財団寄附講義「多彩なアプローチによる環境学習」および自然文化誌研究会の環境学習中堅指導者研修会（のびと CONE+）で、基本テキストとして活用します。長らく地道に蓄積してきた成果がこのように目に見える形になるのはとてもうれしいことです。『民族植物学ノオト』もやっと第 3 号にたどり着きました。すぐには 良い雑誌にはなりませんが、何事も地道に継続することが学問の道ですから、倦まず、弛まず、前に進んでいきたいと思います。

さて、特別展示課題「身近なインドの生活文化」は 2008 年の東京学芸大学大学院環境教育コースで担当している 3 つの講義の共通課題として準備しました。このために都内の社寺仏閣に日本まで渡っておいでのヒンドゥの諸神を訪ねました。葛飾区柴又の帝釈天は、何本も見た映画「ふうてんの寅さん」シリーズで有名ですが、やっと訪ねる機会を得ました。新宿区神楽坂の七福神めぐりでは、大黒天、弁財天、毘沙門天の 3 柱の他に閻魔様にお会いできました。三鷹市深大寺のオビズル尊者には毎正月の初もうででお目にかかります。奈良の興福寺の阿修羅にお会いしたいと念じていましたら、近く東京の博物館にお越しくださるとのことで、駅ごとに大きなポスターが貼ってあります。

トランスパーソナル・エコロジーの立場に近い R. エイトキンが菩薩の心がこの世を救うと言っています。インド独立の父、マハトマ・ガンジーは人生の目的は自己実現であると言っています。この世の今を生きていて還暦を迎えてさえ、諦念と執念の間を揺れ動き、世間の役にも立てず、自己実現もままならずにいます。

このフィールド調査の過程で諸神像に向かい 信仰や信念を考えるに、菩薩になって慈愛することもできず、阿修羅になっても戦い続けることもできず、所詮、凡夫にすぎないことに臍を噛む思いがしました。30 年前に、多摩川源流を踏査した瓜生卓造は山村の現況を憂慮しつつ、希望を見出そうとしました。何時からでしょうか、日本文化の源郷の自然と文化が疎かにされるようになったのは、マイノリティの中には素晴らしい過去の伝統と未来への創造の芽がいつも変わらずに宿っていると思います。しかし、現日本人はマジョリティに加わることにのみ汲々として、自分に対してすら責任を取らずにその日暮しをしています。パンドラの小箱には希望しか残らなかったのですが、本当に残っているのでしょうか。残っているのなら希望はカミの御慈悲なののでしょうか。

生物文化多様性と自給農耕の持続可能性を探りたい (第 4 号、2011)

インド亜大陸に関する本を長期計画で書き続けている。この亜大陸で栽培されてきた雑穀の植物学を描くだけではなく、この亜大陸の多くの人々が生活の基盤として信仰しているヒンドゥー教とはなにかを理解しようとしないと、上滑りするのではないかと思った。ヒンドゥー教には明確な教祖がおいでにならず、多くの神々は多様に化身されるので、神々の手引書(長谷川 2000、森本 2003)を手元においても、失礼ながらなかなか化身された神や人身が合致しない。

短い調査旅行でインド亜大陸を隅々まで回れたわけではないので、むしろ近くまで行きながら、入域できなかったブータンやシッキムから始めて、ダージリンとネパールに文章の旅を進めつつある。ガウハティの空港で 1 時間も滞在できなかったアッサム地域から、その次にはアンダマン・ニコバル諸島について、まずは収集した文献によって旅をしたい。その他の地域は大方何らかの方法で実際に旅をしたので、いくぶん詳細な経験を語ることができるだろう。

民族植物学研究室では手分けして、インド亜大陸で栽培起源した雑穀類の基礎研究を進め、おおまかなデータは取れたので、インド亜大陸 起源雑穀の全体像を具体的に俯瞰する論文がいずれ書けることであろう。データを整理しながら、原稿作成中の論文も順次出せるので、インド亜大陸の雑穀研究に関して専門性を高めることができよう。

2012 年にはフランスで国際民族生物学会があるので、キビの栽培起源を発表し、2014 年にはブータンで同学会があるので、インド亜大陸起源の雑穀について総括的に発表したい。これまで行くことができなかったブータンを自分の目で見た後に、もう一度、インド亜大陸の雑穀文化に関する原稿を推敲して、この著作を完成することを目指したい。長い歴史のあるインド亜大陸の考古学的な発掘も進んできて、雑穀栽培の報告も相応に出てくるようになった。イギリスで収集した文献や考古学者たちの助言も役立つことであろう。昨 2010 年には名古屋で生物多様性条約第 10 回締約国会議があったので、生物文化多様性を支える在来品種種子の保存の重要性に関して、CBD 市民ネット・人々とたねの未来作業部会として、会議に対して提言書を作成し、会場で配布したので、この間の経緯について本文中で報告したい。一方、2008 ～ 2010 年の 3 年間に日本有機農業研究会の依頼（農林水産省助成事業）で、西日本の在来品種の種子保存について調査研究をした。京都、長崎、福岡、奄美および沖縄を調査旅行し、総計 30 戸余りの有機農家を訪問して多くのことを学ばせていただき、自給農耕が生物文化多様性の保全に重要な役割を果たしていることを明らかにすることができた。産業としての大規模農業と、生業としての自給農耕が共に大切であり、国や世界の食糧安全保障政策と共に家族における食料安全保障の政策を進めるべきだとの考えを深めることになった。

この提言は森とむらの会の活動総括の本で取り上げていただいた。とりわけ、暮らしの観点からホーム・ガーデンについて一層詳細な研究が必要であると考えた。欧米のクライン・ガルテン、ダーチャ、コミュニティ・ガーデンと日本の市民農園、さらには農山村の小規模自給農耕を比較研究して、在来品種種子の自家採種、生物文化多様性保全に関する意義を明確にしたい。

幸いなことに、自宅近くに市民農園を借りられ、家族でごくささやかな栽培を始めた。周りの市民農園家は素晴らしく完璧な園芸技術を示しており、確かな講習を受け、永年にわたって栽培をしてきたと推察される。今後は東日本の 3 次調査を企画して、都市市民農園と自給農耕の内容と栽培者の意識を比較調査してみたい。

時間・空間の座標軸に位置づく確かなトランジション

(第 5 号、2012)

自由や民主主義、個人主義は現代の市民社会が獲得してきた現代の社会思想である。自由は個人を基本とするが、それでも社会人としての責任が伴う。民主主義は衝突回避の良い方法で、話し合いによってとりあえずの妥協を探るために多数決をするが、少数意見を必ず尊重する。個人主義は利己主義ではなく、他の人もまた個人であるので、ここに個人主義としての思いやりがあるはずである。

人の世の歴史は繰り返すともいうが、それでも人は文化的に進化し、よりよい社会システムを広げていくのだと思う。しかしながら、他方では自由や民主主義、個人主義を圧する社会的衝突が繰り返されているという現実がある。私たちは歴史的な時間軸と現代的な空間面に生きており、短い人生において、この日常から逃れることができる人がいても、それはとても少ないだろう。欲望は人を良くも悪くもするので、欲望は知的な個人の意思で制御する必要がある。他から強要される規制でないことが、自由や民主主義、個人主義を活かすことである。

科学は、現場において実物を観察、調査、実験するなどによって事実を明らかにし、これにのみ基づいて考察し、真理を導くものであってほしい。たとえ、実験結果の解釈を誤ったとしても、元の事実には虚偽が入らないはずである。科学者は正直に虚偽のない意見を言うべきであり、また、分らないことは解らないと言ってよい。ところが、社会は事実に沿わないことを求め、正直な意見は規制され、黙殺され、不都合な事実は歪曲され、隠蔽されてしまうこともある。環境に関する課題解決には科学的事実を公表することにおいて公正さが求められる。

ピーク・オイルを過ぎたといつて、すぐに石油がなくなるわけではない。特に、精製された石油製品はとても便利だから、どれほど製品の価格が高くなっても、航空機燃料などの特定用途には欠かせないであろう。

1 世紀に満たない石油製品の利用は徐々に縮小していき、それより長いトランジションの時代が来るのであろう。地震、津波、台風、洪水などの自然災害とこの国では共存せねばならない。恐ろしい自然は一方で水や森、多様な生物という豊かな恵みをもたらしている美しい自然でもある。

福島原子力発電所の崩壊を侮ってはいけない。単なる事故ではなくて、広範な陸地も海洋も放射性物質で汚染している。放射線は生体に 損傷を与えるばかりか、生殖質に変異を起こさせるので、末代にまで影響を与える。たとえ低レベルとはいえ、東京とてすでに汚染されており、私たちは被爆から逃れて暮らすことができない。

国際民族生物学会が開催されたフランスのモンペリエは生物文化多様性を大切にする街であった。時期を同じくして生物多様性フェスティバルが開かれ、コムギやイネの多様性保全、トランジション・タウンの展示もあった。トランジションは不公正、不平等、不自由な社会的慣習を含む封建社会に戻るということではなく、地域社会固有の伝統的知識から学び、未来につながるように「素のままの美しい暮らし」を再発見、再創造することである。人類を存続させたいのなら、伝統的知識に敬意を払い、科学的知識ばかりを偏重しないで、双方の共存を受容することである。

無芸大食への奈落 (第 6 号、2013)

幕末のころ、京に上った薩摩藩の侍の出で立ちは質実剛健で、京（都会）風ではなかった。「いも侍」と揶揄された。田舎風の「いも」で何が悪いと誇り高く、居直れば良かった。しかし、薩摩藩の郷土は地元でも「いも侍」と呼ばれることがあり、屈折した劣等感をもっていたので、明治維新の後、「いも侍」はサツマイモをやめて、「こめ華族」になり、イネを食べることにした。欧米の圧倒的な科学技術による武力によって薩英戦争にあっさり敗退したので、反転して攘夷をやめ、鎖国を解き、欧米の科学技術を導入することにした。明治政府の中心となった人たちは欧米に大挙して留学し、「和魂洋才、富国強兵」を説く、国家主義の政治家や官僚になっていった。

江戸時代幕藩体制下の鎖国の中で、薩摩藩はさらに固い鎖国を「国内」に対して行い、他藩人の入域を極力拒んでいた。ところが一方で、薩摩藩は南西諸島、先島諸島を支配下に置き、琉球を属国として支配し、密貿易をしていた。藩内の支配と経営は郷土制度により堅固であった。家臣を城下に集めずに、外城を各地につくり、防衛・支配体制を日常の

事としていた。薩摩隼人は示現流の剣術を学び、暮らしぶりは質実剛健を旨としていた。宗教に対しては不寛容で、キリスト教ばかりでなく、仏教（特に一向宗）も厳しく取り締まり、水戸藩の影響を受けて廃仏毀釈を早くから強行し、神道を強要していた。

シラス台地で稲作は困難なので、早くからサツマイモを取り入れて、食料の確保を図っていた。鹿児島の美味しいイモ焼酎、多くのサツマイモの品種はそのおかげで生み出されたのである。亜熱帯に近い鹿児島や沖縄が根菜農耕文化に基礎をおくのは必然の生態的適応である。サツマイモがイネより優位にあって当たり前である。京や江戸のコメ消費経済に染まる必要はなかった。

「いも侍」が「こめ華族」になったという劣等感の裏返し、この思い付きを確かめるために、鹿児島に行き、神風特攻隊の出撃基地であった知覧の武家屋敷を見に行った。古い屋敷は少なかったが、出城を守る城塞のような石垣の麓街区、庭にも石積みがあり、戦闘を想定した街並み景観であった。

和魂洋才といいながら、国家主義の政策に沿うようになったようだ。柳田国男らのように和魂を求めた人々もいたが、結局は和魂の抜け落ちた洋才としての科学技術を洋魂抜きで無思慮に振興（信仰）することにした。さらに国家主義は幾多の戦争へと人々を駆り立て、終には太平洋戦争に至り、日本の「大和魂」では「神風」も吹かず、神風特攻隊の若者を死に至らしめたが、歴史上初めて外国に、本土進攻を許す大敗を喫した。原子爆弾という卑劣な大量殺傷兵器始め、膨大な物量と人員を第2次世界大戦に投入したアメリカ軍に侵略を許し、日本の指導者たちは決定的に民族としての誇りを失った。

アメリカ軍に負けたのは戦時配給制度で中山間地にまで普及させたごはん（イネ）食が原因であり、欧米人が常食としているパン（コムギ）食が健康に良いと、「ムギ官僚」はアメリカからの食料援助に依存した。アメリカからすれば、国際貿易の利益を見込んで、過剰生産したコムギで日本人を餌付けして、食料輸入国に墮落させて、いずれ国際的な食糧戦略に組み入れようとの魂胆であったのであろう。

この戦略は功を奏して、日本人は第一次産業を捨て、自給農耕・生業すら失い、拝金の極致、無芸大食への奈落を選び取ったのである。食料安全保障の政策を思考停止した「無食政治家」のもとで、日出る国の日没を見ることになった。再び、この国の人々はご来迎を拝むことができるのであろうか。

無芸大食への奈落（続き）～アマチュア国日本の黄昏

巻頭言が長くては具合がよくないので、ここ に続きを書く。いずれこのことは詳細に検証し、上梓したいと思っている。『帰去来の辞』で陶淵明は言っている。もちろん、主語は陶淵明であるが、現代の私や私たちに置き換えることもできる。さらに敷衍すると、すべての人類のことでもあるように思える。現代文明を自然に添わせるように、継承する文明のトランジションをゆっくりと始めた方が良いと思う。以下に、帰去来の辞の現代語訳の一部を記す。

さあ故郷へ帰ろう。故郷の田園は今や荒れ果てようとしている。どうして帰らずにいられよう。今までは生活のために心を押し殺してきたが、もうくよくよしていられない。今までが間違いだったのだ。これから正しい道に戻ればいい。（中略）さあ故郷へ帰ろう。俗世間と交わるのは、もうようそう。世間と私は最初から相容れないものだったのだ。いまさらまた任官して、どうしようというのか。（中略）農夫がやってきて私に告げる。そろそろ春ですね、西の畑では仕事が始まりますと。

（中略）万物が時を得て栄えるなか、私は自分の生命が少しずつ、終わりに近づいているのを感じ

るのだ。(中略) まあ仕方の無いことだ。人間は永久には生きられない。命には限りがある。どうして心を成行きに任せないのか。(中略) 富や名誉は私の願いではない。かといって仙人の世界、などというものもアテにならない。天気の良い日は一人ぶらぶらし、傍らに杖を立てておいて、畑いじりをする。(中略) 自然の変化に身をゆだね、死をも、こころよく受け入れる。こんなふうに天命を受け入れてしまえば、もはや何のためらいも無いだろう。

(<http://kanshi.roudokus.com/kikyorai.html>)

アマチュアの国日本の黄昏が、今、なぜ不可避なのか？もちろん、気づき、努力すれば、今からでも没落は避けることはできる。しかし、誰かが気づいていても、多くの人々は三猿のように、見ないふりをして、聞かないし、ましてや言わないので、やはり残念ながら、このままでは日出る国の日没は近いのであろう。

さて、議論を深めるために、まずはアマチュアとは何かから問わねばなるまい。近代オリンピックの創立者クーベルタンはアマチュア主義を尊び、「オリンピックの出場者は、スポーツによる金銭的な報酬を受けるべきではない」と考えた。換言すれば、プロフェッショナルとアマチュアの区別は次のようなことではないのだろうか。会社で経理事務をしている人が、趣味でチョウチョの研究を自費でしているなら、彼は経理のプロフェッショナルであり、チョウチョ研究のアマチュアである。趣味が高じて、博士号まで取得し、会社を退職して博物館の学芸員になれば、研究で給料も研究費も受け取るので、プロフェッショナルになったことになる。このように、アマチュアがプロフェッショナルを凌駕することは素晴らしいし、さらに、この延長でプロフェッショナルになるのは願わしいことでもある。

しかし、アマチュアが専門的な研鑽を積まないで、いつまでも専門的職業に留まることには問題がある。どうして、引退したスポーツ選手やタレントが、専門的な政治的技能を要する国会議員に当選するのだろうか。テレビに出て有名になり、知名度で多くの票を獲得できるからである。知名度で個人得票も比例区得票も有利に獲得でき、テレビ番組が国会議員をつくるということになる。彼らには国民の代表として立法府（国会）における政策立案能力を期待されているのではない。政策立案は官僚任せで、立法府の役割である議員立法はまれにしかないからである。

日本の民主主義ではいまだに三権分立は実をともなっていないようだ。三権力に関わる方々は十二分に義務を果たさず、責任を取らずに、自己保身を保守主義と称して偽装している。火山噴火、地震・津波などの自然災害、水俣病などの公害、原子力発電所の崩壊のような人為災害に対しても、この国では地位ある誰もが自己保身ゆえに、現場でも、事後においても危機管理ができず、責任をとらないという構造になっている。

率直に言えば、権力ある地位にいる方々は義務として社会的責任をとらねばならないし、他方、庶民といえども家族や地域社会に対しては市民としての責任を果たさねばならない。この国では明治維新以来、次第に、常民は生業をなくして食料安全保障に対する思考を停止し、無芸大食、悪しきアマチュア政治家により拝金主義の極致へと導かれ、中央国家が地方故郷（くに）を衰退に追い込んできた。本来なら、フランス革命の「自由、平等、博愛（友愛）」の精神によって、市民社会の成立へと進んだはずである。

国家 vs くに、為政者 vs 庶民の対立の中で、いつの時代でも、優れた庶民はいるが、混乱の中で斃れ、正史には載らない。正史などに載せる必要はないが、庶民・常民・市民

で、社会正義を貫いて、人類の文化的進化を進めた人々を忘れずに、彼らと自らの歴史、および故郷（くに）の歴史を語り継がねばならない。

日本の場合は、保守主義といっても実際は権力者の自己保身である。自己保身と保守主義は異なる。保守底流の立場からすれば、市民社会の個人主義、民主主義、自由主義はフランス革命などによって獲得された社会制度を保障する考え方として、持続せねばならない。オーウェルの描いて見せた「1984 年」の全体主義の世界は願ひ下げだ。現実のこの年には、著者らは第 1 回野外教育セミナーを開始していた。環境教育という手法で、インドのマハトマ・ガンディーに学んで、非暴力・不服従主義の世直しを求めようとしたのである。

水戸学（水戸光圀）、国学（平田篤胤）の系譜が、廃仏毀釈から国家神道へと導き、水戸藩と薩摩藩は尊王攘夷へと進み、桜田門外の変から戊辰戦争をへて、薩摩藩・長州藩閥と岩倉卿ら公家は明治維新政府を確立していったと、気づかされる。明治維新の歴史的功罪を再検証するところから、日本の、この国家と故郷の未来が再創造される契機が生まれると考えるようになった。

「いも侍」が「こめ華族」になったという思い付きを確かめるために、薩摩藩（鹿児島県）に行った。神風特攻隊の出撃基地であった知覧の武家屋敷を見に行き、また、この地の地域出版物を読んで、なぜ、雑穀畑作文化が水田稲作文化に消されてきたのかという、長年の疑問が解けてきた。

日本民俗学の祖といわれる柳田国男も最初は日本の山民に強い関心を持って、『遠野物語』や『山の人生』などを書いていたが、官僚であったためか、山村の畑から農村の田んぼに研究の中心を移して、国家主義の政策に沿うようになったようだ。八百万のカミガミはじめ、山の神や誰もが、いもや雑穀を食べた縄文文化を軽視し、栽培しても、自ら食べられずに、有力者に取り上げられたイネ（米）の弥生文化の系譜を偏って重視するように、柳田は関心を変化させていった。

今日でも、天皇家は日本の伝統を後世に継承して、アワとイネとを新嘗祭に供儀されているというのに、明治維新によってこの国は畑作の縄文文化の系譜を損ねてきた。天皇家は縄文のアワ、弥生のイネを共に新嘗祭に供しており、伝統をつないでいる一族である。論理的には、天皇制は「自由・平等・博愛」の精神に添わず、民主主義には合致しない。しかし、天皇家が象徴としてこのくにの伝統を継承されておられることには、熱い共感を覚え、プロフェッショナルに対する尊敬の念を禁じ得ない。

何故ならば、この国は「無食政治家」によって、金融経済のグローバリズムに導かれて、終に TPP（環太平洋経済連携協定）に参加し、食料生産・農業を諦めて、稲作さえも捨て去ろうとしている。これには将来を見ない、自己保身的な政治家や官僚だけではなく、深く勘ぐってみれば、無知は無恥であり、農業をすてた金融機関農協も、農産物は安ければよいという都市の消費者も共謀しているようだ。

この流れは雑穀・いも畑作を否定的にとらえた明治維新の政策の系譜から第 2 次世界大戦時の配給制度などの政策に発している。国家主義は幾多の戦争へと向かい、終には太平洋戦争に至り、日本の「大和魂」には「神風」も吹かずに、歴史上初めて外国に膨大な物量と人員を第 2 次世界大戦に投入したアメリカ軍に、本土進攻を許す大敗を喫した。このため、決定的に「稲作民族」としての誇りさえを失い、ごはん食（イネ）がパン食（コムギ）に置き換わり、米（イネ）の消費量が減り、減反政策がとられた。敗戦後に、「ムギ官僚」

があらわれ、配給コムギはアメリカの余剰生産物で、食糧を国際貿易の商品にする嚆矢になった。

帰去来の辞に強い共感をもつ。陶淵明を自らに重ねて、自分の信念を貫くことに誇りをもつ。あと一年で義務に縛られた職業人生活は終わる。人生の振り返りをする季節になったようだ。ところで、改めて考えている。大学とは何だったのか？

この世で大学ほど美しいものはない。なぜならそこは無知を憎む人間が知識を得るために努力し、真実を見たものがそれを広めようと努力する場所だからだ。

(J. メイスフィールド)

ひとを評価する教養と専門性 (第7号、20014)

ひとの「評価」ということはとても嫌いである。受験教育による一面的評価が若者の人生を歪めてきたと考えているからである。受験教育批判は他日に譲るが、しかし、ひとの行動が複雑に絡み合っている現代の社会生活において、ひとを評価することなしに、私たちは日々を暮らすことができない。良い人ばかりではないこの世の中であれば、どのようにひとを評価するかということが重要になる。

教養の程度によって世間の評価が行われる。専門性の程度によって、専門家の評価が行われていると世間には信じられてきた。しかし、教養の狭い専門性は評価の一面性から適切な評価をしない。教養とは統合する知性であり、専門とは分析する知性である。大学のカリキュラムでいえば、教養科目と専門科目である。

しかし、今日、日本の大学では教養部を廃止して久しく、すぐに役立つとして専門を重視して、学生たちの教養を大事に育てようとしていない。すなわち、若者の半数が大学に通うようになって、学歴は上がったが、大学生（および大学教職員）の教養は必ずしも高くはならず、むしろ学歴と教養の相関係数は低くなったのではないか。昨今、このように考えられる大学をめぐる事象は枚挙にいとまがない。

ホットな話題でいえば、STAP細胞の論文は専門性が狭く、専門的には容易に評価できない。しかし、教養で理解しようとすれば、8名が合意して書いた共同研究論文であるので、論文内容については全員が理解し、責任を分かち合っているはずである。それなのに、なぜ一人が良し悪しの評価を一身に集めているのか。そもそも、科学の独創性は個人に属するはずだからである。しかし、今日の自然科学論文では当たり前のことのように、8名もの多くが論文に名を連ねており、個人研究と共同研究の関わりあい疑問がある。

ここに現代科学の手法と評価の問題がある。たとえば、大学教員は主に論文の数で評価されている。8名で書かれていれば、内容に関わらず、個人に配点すれば各1点、合計8点である。一人で書けば、配点は3点である。このような数値換算の評価には納得がいかない。

論文内容の専門性は狭く、一般的には専門家ですら容易に適切な評価はできない。たとえば、メンデルの遺伝の法則は当時評価されずに、30年間眠らされた。マクリントックの論文も評価されず、彼女は受理してくれない国際誌に投稿することを止めてしまったが、のちに高い評価を得た。ハーランも、専門誌でなかなか受理されなかったが、あきらめずに研究をつづけたという。

国際誌に投稿する努力は研究者としてすべきではある。しかし、その時に評価されない場合は、発表の場として本誌のような同人誌に意味が出てくる。本誌を始めたのは民族植物学の発表の場がないこと、他誌に海外から投稿された論文が課題内容ゆえに掲載を逃しそうになったこと、民族植物学に関する卒業・修士論文が公表されないまま眠ること、これらを見かねてささやかな冊子を始めたのである。

希望と欲望、実像と虚像、事実と幻想、現実と仮想、相対する概念の前者を、私たちは求めるべきであって、後者に誘惑されるのはほどほどにしたい。夢だけ追うのではなく、夢現に惑わされるのではなく、やはり夢を現にするには地道で限らない努力がいる。学問とか研究とかはそうした行為で、新発見は単に始まりにすぎず、これで終わるわけではない。

新しがりの病を治して、再び人が生きる道の復興 renaissance へ (第8号、2015)

まったく新しい大発見はまれにしかないもので、多くは先人の刻苦奮闘の業績の上に、若干の新発見を付加し、地道に積み上げるといえることだと思います。膨大な歴史に裏付けられた伝統文化に挑みながら、これに新しいものを付け加えていくことは、それでも容易な作業ではありません。ヨーロッパの再創作・再創造の方法論には安心できる長年の蓄積があると思います。したがって、ヨーロッパの伝統文化と常に新鮮を求める現代文明の良いところは、参考にして受容すればよいのです。

しかし、日本では明治維新頃から、固有の伝統文化を軽視し、その良いところを捨ててまで、実利的な技術文明を人（猿）真似して、重宝がってきたのは、真に恥ずかしいと思います。伝統文化を卑下して、外来文化を翻案し、舶来品をもてはやすのは近代日本人の伝染性「新しがりの病」です。単に模倣するだけでは創造性は低く、伝統文化への付加、新たな蓄積も少ないのです。

今時の日本では、伝統技能にたけた職人は言わずもがな、また、最初に挑戦し、苦労して基礎を築いた人も正当に評価せず、敬意を払わず、業績を引用もせず黙殺してしまいます。小賢しく二番手でうまく盗用まがいの模倣をした人を世間は誉めそやします。マスメディアには「露出」せずに、「幽谷深山 華自から紅なり」（三浦梅園）で、地道に研究も市民活動もするのがよいのです。流行・世論から「セレブ」・国会議員まで、テレビが作っているのですよね。マスメディアや何とかフォンなどに依らないで、大切な事実や想いは口伝し合いませんか。多数に伝わらなくても、確実に伝わる方がよいのです。便利は楽チンですが、時には不便を深く、楽しく愛おしむことです。

もう、明治維新の哀れな呪縛、「〇〇洋才、脱亜入欧」を解きませんか。この呪縛に囚われなかった信念の人々がいたからこそ、継承すべき伝統文化が辛うじて保たれています。また、欧米からの模倣だといわれていた物事も、今では独自性、創造性を高めており、何から見劣りするような水準にとどまってはいません。日本の伝統文化と世界の多様な暮らしの文化に学べば、現世の閉塞を開く方策も見えてくるでしょう。穏やかに、誇りをもって、ゆったりと過ごせばよいのです。

もっと心身を自律的に開放して、素のままの美しい暮らしをすれば、ゴッホが憧れた花のように自由な人生がこのくににも戻ってきます。家族のために自給農耕をし、自分で作った食べ物を美味しく調理すれば、家族が食べることを喜びとし、自分も心充たされます。

自給自足ではなく、できるだけ自給「知足」すればよいのです。これこそが、人の生きる道の再生、復興、今度は、日本で再び（re-）ルネッサンスを起こしませんか。

多様な生活文化の中の雑穀 （第 9 号、2016）

このくにはユーラシア大陸の極東に位置し、海洋に囲まれながら、多数の巨大都市や工業地帯を構築した今日でさえ、ありがたいことに領域の約 64%が山林に被われている。島ぐにであると同時に山ぐにであるという特異な自然環境に立地している。台風や地震などの自然災害は多いが、このことを忘れずに、禍福転じて暮らせば、平常時にはとても穏やかで豊かな自然環境にある。

大陸から直接東漸して、あるいは花綵列島を伝って間接的に南下あるいは北上して、次々と多様な民族がそれぞれの生活文化をもってやってきて、定住した。島々の先は太平洋だから、この先には行けなかった。豊かな自然は行く必要も感じさせなかったのだろう。約 1 万年前に農耕文化が獲得された後には、栽培植物を含む農耕文化複合も伴って移住してきた。

この見方からすれば、このくには、ヤマト族だけではなく、アイヌ、オロッコ、ギリヤーク、朝鮮族などの混合民族によって構成され、山住の縄文文化の系譜をうけた畑作農耕から、平住（低地）の弥生文化の系譜による水田稲作農耕へと歴史的に進展してきたと考えられる。農耕が始まる以前の無土器文化であれ、その後の農耕文化であれ、このくには生活文化は途切れることのない時を経ながら重層的に蓄積されてきたはずだ。

ところが、第二次世界大戦後、何故か、柳田国男による日本の単一民族論、平住（低地）の弥生文化の系譜のみを重視する水田稲作農耕が優勢になった。これが今日の日本の農業や農耕のあり方を著しく歪め、父祖以来の食糧自給の努力を捨て去り、食糧輸入に依存する体制に導いた思想の一つであると考ええる。江戸時代の米石高制に加えて、明治維新の殖産興業、戦時中の米配給制度、アメリカに敗戦した後の小麦・脱脂粉乳などの食糧援助が、この国の人々をして、独立心を喪失した「米悲願単一民族」に仕立て上げた。柳田の思想の一部、微瑕が拡大解釈されて、この政策に与したのだろう。

人間も生き物であるから、食料の安全・安心 確保は第一の欲求である。ところが、この国の政策は食糧安全保障を放棄したのである。水田稲作のみに集中した結果の米の過剰生産を減反の強制によって対応した。生産を放棄することに対して補助金を出したのである。稲の多収よりも安全・安定生産、畑作の麦・雑穀の生産も維持すべきであった。世界的な人口激増や環境 変動のもとで、不安定な食糧生産と需要の拡大によって、海外からの食糧輸入に全面的な依存はできない。この国が農業生産を軽視し、食料安全保障を怠っているので、多様な食料の安全・安心は家族で、地域社会で確保せねばならない。

私の第 2 の人生は、ユーラシア大陸各地および日本各地への旅に多くの年月を費やした。インド（バンガロール、農科大学）とイギリス（カンタベリー、ケント大学）の地方都市にはサバティカルで、タイ（バンコック、ラジャバト・ プラナコン大学）には大学院の集中講義などで、しばらく暮らす機会を得た。このため、とりわけインド農村の暮らし、西欧の農村景観から大きな心象を受けた。第 3 の人生では、旅で観た こと、考えたこと、旅の後の調査研究の成果をアーカイヴすることにした。

ユーラシアの旅行でたくさんの 農家から分譲を受けた栽培植物の種子・標本を用いた実験研究の成果をまとめた。研究の一部は東京学芸大学民族植物学研究室のインド雑穀研究チームの成果である。彼らの卒業論文や修士論文の成果は各自のものであり、いずれ彼らが公表することを願いながら、ここでは概要を未発表として記録しておく（第9号は）。

生活世界の平安保守 （第10号、2017）

人々それぞれに人生の幸せを求める生活世界がある。個人を超えて、家族、村や街の地域社会、都市、民族、国民国家、国際社会、地球にまで、生活世界の広がりはその人の現実的な暮らしの範囲から、心の中に築かれる世界観にまで拡大する。個人の人生観もこの世界観に依拠し、自ら見たことのない伝聞や学習による原子、ミクロの生物、熱帯降雨林、生態系、地球ガイアを超えて、さらに太陽系、遙か彼方の宇宙にまで広がり膨潤する。最近では、インターネットによって一瞬にして時空を越えてしまい、現実世界と仮想世界がないまぜになって、その境界が薄れてしまい、判別がつかないほどに一体化してしまったようだ。

社会を構成する個人の生活史にこだわるのなら、自らの生活世界をどの範囲と知って、それを保守点検して人生を送るのか、これが最大課題だ。生活世界を保守するためには、これを侵害する物・者からの自衛は必要だ。行政や軍事組織の一員ではなくとも、個人として正面から真摯に議論し、市民組織としても、くにを平安保守する自律的な活動を心がける必要がある。

生活基盤の環境保全こそが最重要である。科学の還元論的リアリティ、またバーチャル・リアリティを批判的に部分否定しながら、一方で、環境学の全体論的直観、また想像力ファンタジーを部分肯定することだ。ヒロシマ・ナガサキ、ビキニ（原子爆弾・水素爆弾）から、スリーマイル、チェルノブイリ、フクシマ（原子力発電）に至る科学技術の結果事実から学び、直観し、想像力を働かせれば、今から変わる準備トランジションにはいらなければ、悲惨を平安にするために必要なゆったりした時間が逃げてしまいそうだ。自然災害と人為災害に応じながら、平安保守するためには、自然に還る野外活動を一時でも心がけ、自然と寄り添う暮らしを学び 続けるべきだ。

大都市に暮らしていれば、生活基盤の自然を忘れて、金銭を巡って世界が動いていると誤解してしまう。人間が自然から遠ざかり、里から街に後退し、都市に引き籠ると、自然の野生は空白になった場所に戻ってくる。里に野生動物が下りてきて作物を食害、人を襲うようになった。電気柵がないと畑は維持できない。町にも野生獣は行くようになった。ハクビシンは街中の塀の上を歩き、光ケーブルを伝って悠然と移動する。極端には福島原子力発電所公害で、居住困難な無人の街には、数年のうちに野生獣が跋扈している。その子孫は放射性物質で汚染されていた。すでに遺伝的変異を示す昆虫などもある。植物や微生物も同じだろう。

辺境はいつでもフロンティアである。パーマカルチャーの提唱者の一人であるホルムグレンの言う「辺境」、周縁には生活の純粋な本質と美のかけらが今でもたくさん散りばめられている。山村という辺境に暮らす山民の素のままの美しい暮らしから、都市民が学び、思い出すべき経験の蓄積は多くある。これは過去の思い出ではなく、未来に必要な伝統的

生活知識や技能である。「神は細部に宿る」から派生した Beautiful is in small（「美は細部に宿る」、建築家ミース・ファンデルローエ）は、Small is beautiful（シューマッハ 1973）に相通じると思う。

自然文化誌研究会はいつも辺境にてパイオニアワークを続けることを忘れたくはない。

解きたい謎—西暦第 2 千年紀に生きる（第 11 号、2018）

千年を見て、今を生きたいと意思する。唐津の菜畑遺跡（縄文晩期末）、福岡の板付遺跡（弥生早期）の立地景観を見学してきた。ともに、縄文時代から弥生時代が重層していて、このくに最古の水田遺構を有している。先史時代の人々は海に近く、丘と川のある、とても良い場所に暮らしていたものだ。

私は齢 100 年に満たない人間にすぎず、植物研究官 ET や廃棄物処理機地球型 WALL-E のように千年紀を見て生きることはできない。しかし、縄文農耕の数千年紀を受け継ぐひと時の駅伝走者にはなれる。だが、現世の人々は先人の生活文化に関心がない（第 1 謎）。イネ米だけでなく、すべての作物を正月・小正月の儀礼を尊重して、行事食や健康食として、人々に寄り添ったその長い歴史を受け継ぐのがよい。生物文化多様性を消滅させてはならない。自給農耕は続けるべき生業であり、家族のためにする有機農法は手間がかかり、安全ではあるが沢山はとれない。多品目多品種、在来品種の選抜は飢饉の危険を避ける方法だ。親しい知人には分かち合い、お裾分けはうれしい。

秩父多摩甲斐国立公園周辺の農山村で、40 年以上、環境学習・環境保全を目的とした地域振興に関わってきた。農家の人々には歓迎され、とても親しくお付き合いいただいていた。しかし、役場行政や農業関係の団体からほとんど関心を向けられたことはなかった。彼らは、村人でない、関係者でない者の余計なお世話、迷惑と敬遠するのだろうか。名利を求めている変人は猜疑の目で見られるのだろうか。自然文化誌研究会が 10 年ほどして環境活動を定着させると、四度も決まって追放の憂き目にあってきた（第 2 謎）。

地域創成と大風呂敷が舞っているが、小利口な若者は村に誇りを持てずに都会に出ていき、村に残るのはどうしても先祖伝来の土地を大切にしている老人だけになるのだろう。もう高齢で畑作業がつらく、妻女に言われなければ、働けない。息子は野良仕事をしないで、週末は遊びに行ってしまうと民宿主人は言う。頑丈な電気柵に囲まれた畑さえも耕作放棄されている。

秩父多摩甲斐の地域では、かつて明治前期には薩長閥明治政府への反骨精神もあって、自由民権運動が勢いをもっており、五日市憲法草案も地域住民が独自に検討していた。名利にとらわれない高い自尊心をもった地域の豪農や豪商が地域住民の窮状を見かねて、自由民権運動をしたが、自由党や困民党なども明治維新政府の苛酷な弾圧で、指導者は獄中でひどい目にあわされ、一家は没落・離散した。

しかし、それ以後、地域住民は彼らを助けず、敬意を表さず、忘却の穴に放り込んだ。この構造がその後 100 年以上たってもあまり変わらないのは、明治維新政府の功罪の「罪」によるのだろうか（第 3 謎）。

このくにの人々は孤独に耐えられず、孤立を恐れて思考停止、付和雷同するが、実際には他者を信頼できずに孤立を深めているのだろう。ここから脱却しなければ、地域社会の再生はない。人々は自然や歴史から学び、暖かい情理に添うべきだ。

商品ではない任意無償性への敬意 (第12号、2019)

イリイチは最晩年の対談で次のように言っています。

西欧社会の道具化の増大する鞏固化と手に手を取り合って、人が伝統的に無償と呼んでいたものに対する心遣いの欠落が進行しました。現代の一つの相は無償性の喪失であるというのがわたしの強い確信であり、…啓蒙主義と共に、哲学者は概して善の追求としての倫理やモラルについて語ることを止め、その代わりに徐々に価値評価できるものについて語るようになっているからです。…美であり善である生は、まず何よりも無償の生であるという可能性、…。わたしにはこの世界で、自分が愛する人々と共に生きること以上に素晴らしい状況があるとは思えません。

このくににおいても、任意な無償活動は継続困難であるというのは、多くの任意団体やNPO団体が長続きせずに、資金や支持の孤立無援によって衰退することからも明らかです。このくにでは公共の市民活動には任意の支援や寄付が集まらないので、世俗にはビジネスにならないと活動は続かないといえます。何物も商品化されねばならず、コスト・パフォーマンスが求められます。ふるさと納税にみられるように、魅力ある物品の返礼という見返りのないことには支援も出資もしないのです。神社・仏閣にご利益のあるお賽銭は投げ入れても、目先の即時的見返りが無い美しい自然や歴史的文化物、芸術作品に、無償の私費寄付はありません。

要するに公共の仕事は行政依存で、自主的な公共活動はこのくにの市民には受け入れられないようです。ビジネスでなければ私的趣味であって、公共の活動ではないと認識されるのです。市民活動も社会的共通資本の保全も行政依存では所詮、行政の補完やその下請けにすぎないのです。企業財団の助成は目的誘導的で自由度が少なく、あてにし過ぎるには問題があります。貧者の一燈であっても、社会的活動のために私費を出し合う必要があります。

有給職業に勤しむのはもちろんですが、せつかくの人生ですから、日々の暮らしを支える無給生業をもっと楽しみたいです。日常の営みに関して、誤解を恐れずにあえて率直に言えば、田舎人は都市生活に対して卑屈で、自由・平等・友愛および民主主義という近代精神についてよほど無頓着、すなわち無知です。都会人は田舎に対して高慢で、自然への畏敬を忘れて、田舎人に感謝せずにあまりに無恥です。田舎人は自然に寄り添い、自律して生業を楽しむことができ、伝統知を継承することを誇りに思っています。都会人は自然に近づくようにして、田舎人の暮らしぶりから学び、生業を少しでも取り戻して、楽しみを増やしてほしいです。さらに、都会人は田舎人の生活から得ている恩恵に感謝して、行政支援、生活保障を認知・合意してほしいものです。

沢山の希望が叶えられるように、微力を捧げます。

最初に明確に述べておきますが、日本の自然は今でも美しいし、地域社会にも純良の人々がたくさんいます。私の暮らしにも不満はありません。すべては本質的に自分事ですから、他人に抛らずに自ら満足すればそれでよいとも考えています。誰が何を言おうと言うまいと、生きている限りは自分の生業仕事を続けます。私は若い中学生のころから大学院生の頃まで環境保全活動を任意にしていました。大学に職を得た職業人としても環境保全に関わる仕事を 40 年しました。しかし、当時も現在でも、根底的な環境や文明問題については大人にも子供にもさほどの関心を持ってもらえていないようです。この国ではいつも始めの一步で止まってしまい、第二歩には進みません。新しがりの流行に翻弄されて、不易を蓄積することも疎かにしています。

ところで、この国の人々の老衰の進行と幼稚退行、憎悪の露出と行儀の悪さ、どうしてこれほどまでに弱々しくなり、憎しみを募らせ、自己制御できない人が多くなったのでしょうか、これら無知や恥知らずは残念で悔しくてなりません。日本ではとりわけ、若い人々が社会的行動を起こすと、世間を知らないとか無知呼ばわりし、年寄りが社会的に意見を述べると古臭い時代遅れだと言われ、何にしても冷笑か無関心をもって報いられます。有名なグレタさんも日本人にはこっぴどく冷笑されました。

ちなみに、祖父は徴兵されシベリアに出兵しました。父は戦争末期に徴兵されて海軍に行きました。私は、若い頃、父になぜあなた方は戦争に反対しなかったのかと詰問したようです。今、自分が父や祖父となって、子や孫たちから、なぜあなたは環境問題の解決に努力しなかったのかとは言われたくありません。

それでも驚いたことに、何年も一緒に共同研究したほぼ同年配と思われる女性にご挨拶したら、あなた誰ですかと真顔で言われました。言う方も、言われる方も、年は取りたくないもので、そんなにすぐに忘れ去られ、あるいは記憶が衰えているのなら（3 分後に思い出したと後に聞きました）、もう環境活動の責任者にはならない方がよいと、人の振り見て我が身を改めて自戒しました。

インド憲法を起草したアンベードカルに触発されて、日本国憲法について考え、生業の自然権や食料主権を中心に、環境原理の加筆修正の意見を書いてみました。文明の再生と環境原理の重要性は、憲法レベルの課題であると自覚して、本来ならば主権者の国民が議論を深めなくてはなりません。私は、人間が近代社会になって獲得した普遍的精神である自由・平等・友愛を行動規範として、M. K. ガンディーの非暴力・不服従の方法で、思索した見解を記述しておきます。いまだに戦争の絶えない世界に人間の文化的進化の粋を広めたいです。科学は事実に基づいて考えます。事実隠蔽や虚偽捏造からはより良い課題解決の方向は見出せません。

イタリアの小さな村の物語を見て、自由と平等は個人の自律で、その個人こそが友愛に溢れ、楽しい地域共同体社会が維持されるのでしょうか。このくにに欠けているのは、個人の自律です。自律するためには経済的自立が必要でしょう。山間地居住者への直接保障だけではなく、自然離れした都会人に自然や生業技能、伝統的知識体系を教えることで収入が得られれば良いと思います。都会人は過剰消費の誘惑に抗って、生活を自律せねばなりません。素のままの美しい暮らしは自律する生活文化の根底原理です。

素のままの美しい暮らし Sobibo を長年希求してきた。国際連合が提唱する持続可能な開発目標 SDG's には敬意を持つとしても、それをただただ遥拝する気はない。世界の若者が、大人を許さないとか、地球温暖化に対処せよとか主張するのは当たり前ではあるが、それでは、あなた方も過剰な欲望を自律制御するのかと問いたい。自由や民主主義に信頼し、生活様式の画一定型化を強要しないとするのなら、本質的にはラジカルな環境学習に基づき、個々人が過剰な欲望を自律制御することだと考えているからである。日本に限らず、これまでの世間は掛け声ばかりで、良くて第一歩に留まり、なかなか第二歩へと移行変化を進めないのが世の常だ。きれいな SDG's バッジも免罪符のように見えてしまう。人新世における文明の病弊の根本要因は自律できないほどに膨れ上がった過剰な欲望である。科学技術の発達で、何もかもがいずれ解決できるということは、恐らく間違いだろう。過剰な便利への欲望は限りないからである。自由、任意に個々人が質量の異なる欲望に、強制によるのではなく、第七感（良心）を育み、自給知足することを学び、自律的に制御しないことには、根本的な解決はない。

同様に、大方の人々が実は薄々分かっている、口を閉ざして思考を停止しているのはパンデミックの根本要因のことである。パンデミックという用語は一般的には感染症が世界的に流行することを意味するが、何らかの事象が世界的に流行する意としても用いられる。後者の用法の視点を逆転させて、病原菌以外に敷衍すれば、人間の人口爆発や穀物や家畜の膨大な単一栽培・飼育も他生物にとってはパンデミックとなる。さらに鶏が鳥インフルエンザ、豚がコレラ、イネがいもち病になるのも、穀物にサバクタビバッタが襲うのも、パンデミックであろう。すなわち、人間の欲望による文明の過剰な拡大によって、諸々のパンデミックは生じているのである。

人間への COVID-19 のパンデミックだけに注目が集まって、見過ごしているようだが、他の種のパンデミックも進んでいるのだ。現在に生まれた人々の命の尊厳を護るのは最重要であるから、人間が COVID-19 に感染したからと言って、何百万の家畜や野菜の様に人間を殺処分して地面に埋めるようなことは決してありえない。それならば、将来に向けていかに人口を減少させるかが課題になる。激増し続ける人口が、自由と民主主義のもとに強要や強制なく、ゆっくり適正規模になるには、環境学習によって心の構造と機能を統合するように情理を承知、自給知足し、過剰な欲望を亢進から穏やかにすることであろう。たとえば、物欲を多様な趣味の充足へと、精神性豊かに心の構造と機能を転換することだ。自然文化誌研究会が調査、研究、学習実践してきた成果である ELF 環境学習過程を中心にとりまとめた環境学習原論は人新世を生き物の文明へと移行するにはとても有効な人生哲学である。

学校で教えてくれなかったと弁解するのではなく、学校教育に依存しないように、自分で任意に学習することだ。学校では教えない現実が沢山あるのだ。学校履歴などに依存するのではなく、自らの学習履歴こそ、自由、平等や友愛を保障するものだ。素のままの美しい暮らし sobibo に移行する幸せがそこから始まる。

ホモ・サピエンスは本来獰猛で強欲な動物なのだろうか。この特性を穏やかにして社会生活を安寧に営めるようになるには、個人が心の構造と機能とを発達させねばならない。種集団内に毒をもった個体から善意の個体まで、とても著しい多様性がある。この多様な変異性は生物学的進化に関わる天性の遺伝的なもの gene に、文化的進化に関わる社会性の文化的なもの meme が加わっているのです、著しく複雑である。

現代都市民は、自然、生業、生活から離れて、知能を衰微させ、教養を喪失しているのです。知能は体験的に発達するもので、多量の情報を暗記することではなく、学校教育履歴では発達は見込めず、個人学習履歴をこそ蓄積することだ。いわゆる学歴が高くても、直接体験で学ばない人は知能が未発達と言うことになる。自然から遠ざかるにつれて五感の磨かれずに弱まり、博物的知能は発育せず、生業をしなくなれば、技術的知能も発育せず、生活の中身が薄くなれば、社会的知能もやはり発育しない。さらに、過剰に便利な機器に依存すれば、技術的知能も社会的知能も衰えるばかりだ。その上、言語知能を外付け情報機器に過剰依存して、仮想化を強めれば、現実言語（知能）も弱くなり、一般知能も委縮して、第 6 感（直感、直観、言い換えれば想像、ファンタジー）も機能せずに、ついに教養は未熟なままで、第 7 感（良心）は発育しないままになる。すなわち、人間は平時には弱い自己家畜へと退化進化しているが、戦時は窮鼠猫を噛むように、追い詰められると反転して牙をむきだし、獰猛な動物に化ける。

動物の生活は他の生物の命を奪う捕食によって賄われる。人間とて同じことで、本来は自分の食べ物は自分で捕食する、他種の命をいただくことが基本原則で、生業は原則に従う営みだ。しかし、単なる消費者になった現代都市民には忘れ去られたが、この鉄則はなくなったわけではない。平時には物価の値上がりで大騒ぎする程度であるが、災害時や戦時には飢饉が起こり、食料生産の不足、買い占め、隠匿、などにより、飢餓が拡大して、莫大な死者が出る。これは現在も起こっていることで、いつどこで生まれるかによって程度の差はあるが、個人の人生で一度は経験しうることだ。

したがって、食料は家族のためにいくらかの常時備蓄が必要である。家庭菜園も、たとえベランダでのプランタ程度でも、少しでも自給知足で、素のままの美しい暮らしを勧めたい。自治体や国レベルでの食料の備蓄、さらには農業生産の維持促進、食料の安全保障を自治体や国の責務として憲法で保障することが必要だ。戦争は食料生産との関わりで起こる。日本が満州を侵略したのは、狭隘な農地しか有しないのに、農村人口が過剰となった事にもよる。満州に農民はいたのに、彼等の土地を奪うように、満蒙開拓団を送り込んだ。ソビエト連邦がウクライナでしたホロドモールもイスラエルがパレスティナで行っていることも、その事例だ。この人新世においても、また百年前と同じようなことが繰り返し、ウクライナで起きている。

火の七日間（風の谷のナウシカ）が来ないように、抗い、願い、祈り、個人として為すべきことをしておきたい。素のままの美しい暮らしで、誰もが幸せになって良いのだ。コロナウィルスのパンデミックで、世界中が大変な時期に侵略戦争を企て、さらに数えきれないほど多くの人々の幸せを壊す独裁者の権力欲には際限がないのだろうか。ジョージ・オーウェル『一九八四年』に描かれているように、「戦争は平和なり、自由は隷従なり、無知は力なり」であってはならない。第三次世界大戦をもって脅迫して、火の七日間の先の千年紀、ナウシカの世界に陥らせるのは、人類最悪の罪業だ。私は非暴力不服従が信条だ

が、侵略戦争に対しては家族を守るために抵抗する。ナウシカを守った老兵のように抗う。平時でもこの人生は不条理に抗ってきたのだから、たとえ戦時においても同じだ。

青い鳥はいつもここにいる。私たちはとても難しい課題であっても避けないで、深く学び考える必要がある。『ヨハネの黙示録』に記されているとおり、「時が迫っているから」である。いつまでも始めの一步で留まっていたら、世の中は悪く変わるばかりだ。武谷三男の三段階論のように、現象論段階に安住せず、科学的事実を検討して実体論段階、さらに環境課題を解決に導くために本質論段階に、自らの世界観を高め、家族との日常生活の定常化を進めたい。心の構造と機能を系統発生的に個別に発達させて、知能の統合を再生したい。政治、行政、研究、教育も C 級ばかりでは、ファンタジェンは虚無の奈落に向かう。

(第 16 号、2023 準備中)

第3章 生き物の文明への黙示録

生物学について 50 年前に考えたことの再検討

生物学専攻学部生（1970～1971）の時に書いた拙稿を保存していたので、読み返してみても反省してみることにした。この頃は、大学闘争と反公害運動がもっとも盛んな頃であったので、私も渦中に飛び込んだ。しかし、本エッセイを書いている頃には、暴力的に分裂していく学生運動に幻滅して、むしろ反公害運動に関心を持つようになっていた。科学者の卵だったので、科学のあり方に疑問をもち始めていた。次第に農業研究に意義を見いだして、この後すぐに、国立遺伝学研究所の阪本寧男師に弟子入りして、研修生になり卒業研究の指導を受けることになった。

当時の学生の主要な思想書はマルクス・エンゲルスであった。少しも読み熟せないのに、言葉を援用して分かったようなことを言っている。弁証法的唯物論など、何を意味しているのか、今にして考えてもまったくわからない。理解もできないことばを使用しており、若気の至りとはいえ、とてもお恥ずかしいことだ。

しかし、当時の著者の受け売りの文面ではあるが、直観的な部分は 50 年ほど経て読み返しても、根底的な発想は多くの経験をした現在の到達点に通じている部分もあるので、面はゆい気もする。このエッセイ 2 編については別稿で引用して論考する。

{注 広辞苑より引用 1) 弁証法的唯物論；1984 年にマルクスが提唱し、エンゲルス、ついでレーニンらが発展させた理論。従来の唯物論が機械的であったのに対して弁証法的、ヘーゲルの弁証法が観念論的であったのに対して唯物論的であることを特質とする。根本原理としての物質的存在の優位とそれの弁証法的運動、人間的実践を媒介とするこの運動の模写としての認識を説く。2) 体制；政治支配の形式、特に、既存の支配勢力。3) スターリン主義；スターリンの思想と実践の総体。また、その具体化として 1929～53 年にソ連で形成された独裁体制を指す。初めトロツキー派が用いた。4) 大衆；民衆、特に、労働者・農民などの一般勤労階級。}

文献

Taylor, G. R. 1968、渡辺格・大川節夫訳 1969、人間に未来はあるか—爆発寸前の生物学、みすず書房{The Biological Time-bomb, Thames and Hudson, London}。

人間の未来—一次の世代の環境について— I. 生物科「なかよし」増刊号、1970. Nov. 23 ガリ版刷、ワラ半紙 B5 版

目次 (1) 序 (2) 農業と人口 (3) 環境—生態系— (4) 生物学的に見た“公害“

{注：静岡大学理学部、下記以外は藤村達人著省略。原文のまま文字入力、誤字は修正}

(2) 農業と人口 木俣美樹男 pp. 2-5.

(一) はじめに

生命が何より生命たり得るには、物質代謝と自己増殖を行うことにあるのだろう。このわれわれ 人類も生命をもつものである以上、これらを根本的な特徴としているのに変わりはない。実際、人類の歴史は農耕の歴史として大部分を語らざるを得ないし、現代においてすら、農業は明確に人間 社会を決めるもっとも大きな要素としてある。確かに産業革命が工業文明なるものは飛躍的に農業 生産を高めたが、それにもまして人口を急激に増大さ

せた。一部の国では余剰農産物が多大にのぼっているが、多くの国々では飢えに死ぬ人が非常に多い。しかも近い将来の人口増加にともなう飢えの襲来さえもが話題にのぼってきている。産業革命は農業問題を解決し得なかったばかりか、新しくよりいっそう複雑な形で農業と他の諸問題を人類の存在に対する追いつめられた問題として、ひきおこしてきた。つまり、生命の特徴としての物質代謝と自己増殖の問題が人類という他の生命 にはない一面をもった動物に、地球上の自然生態系の中で提起されてきたのである。

（二）人口の増加

○現況と未来の予測： 地球の人口は 70 年 7 月で 26 億 3200 万人を越えたといわれている（国連の統計）。しかも、日々 34 万人の出産があり 14 万人が死亡しているとみて、20 万人ずつ増加していることになる。従って年間では 7300 万人（増加率 2%）増加することになり、これが幾何級数的に増加するから、このままの増加率でゆけば、2000 年には 60 億人を越えることは明らかであり、120 年後には 10 倍にもなると予想される。

○増加の原因： 増加を引き起こした主因は前でふれたように、産業革命とそれ以後の技術社会文明の発展である。これが機械・動力により農業生産力の増加をひきおこし、医学の進歩から情報伝達手段に至るまでの技術的な文明を成立させた。しかし、一方後進国においては、先進国が（人為的に）出産率を低下させたのに対し、むしろ出産率を維持またはたかめてきた。

○地球の容量： 耕地を地球全陸地の 25%（現在 11%）にし、人間の一日に必要な栄養を最低限与えたとして計算すると、地球には 360 億人を養えるということである（吉良、大阪市大）。そうだとすれば単純に考えて 120 年後まではかろうじて良いということになる。しかし、少し考えを進めればわかるように、地球の容量の条件となる未知数はもっと多い。耕地化が 25%まで進むとは容易に考えがたいし（後述する問題もあるから）、何よりも今の人間社会の体制は平等を好まないし、より多くの物質をためる方向にある。どちらにしても、人間が文明を発展維持するには他に多くの物質が必要であろう。従って、容量は、150～200 億人ともいわれる（松永、遺伝研）。これは 80 年ほど後に到る数である。

○過剰人口の問題： 地球の限界は目に見えてきているこうした中で今、過剰人口に対して出せる対策は産児制限と農業の発展でしかない。だが、このことは以下に述べるような生物学的な問題においてばかりではなく、それ以前に政治的な問題としての衝突が起こらざるを得ないと考えられる。余剰農産物の先進国における処理法は（後進国に対する援助物資）、後進国の農業をひどく荒廃させている。先進国の人々は今以上に食物においても「ゼイタク」を望むし、後進国は増加しつつある人口を養いきれずに餓死者を出す。嗜好作物が主食物に優先する単作農業の先進国によるおしつけの歴史的伝統は耐えきれない。後進国の人々の飢えの上に、先進国の「満腹」があっているのだろうか。食料の危機がおとずれても先進国はますます後進国から奪い取ることをやめないだろうが、これ以上飢え死にするのを黙って耐えることはできない。結局のところ、政治的な問題も、生物学的な、自然の生態系の中での問題として考えられるし、ここから離れ得ないであろう。

（三）農業による打開の諸問題

○耕地化の限界： 上に述べたように耕地化の可能な土地は、地球陸地の 25%と考えられる。高山、砂漠、寒冷地ありという制約等々を考えれば限界は明らかだし、いくら科学技術が進もうと、この地球が有限であるからには限りがあることはわかりきっている。たとえ耕

地化する土地がもう少しあり、かつ耕地化していけたとしても、人間が作る人工生態系と自然生態系は矛盾をひきおこす。たとえば、森林がつくる酸素 O_2 の問題があげられよう。人間にとっても不可欠な O_2 は、主に海中プランクトンと北極圏に近いところの針葉樹林や熱帯の密林で生産される。従って針葉樹や密林を破壊し耕地を作っていったとしたら O_2 の生産は減少するだろう。

○農作物自体の生態的矛盾：農作物というのは一般に人間の意に沿って作りあげられた奇型の植物であり、これは人間の管理する人工生態系の内においてのみ生育するにすぎず、自然生態系にもどせば滅びるほかはない。しかも、農作物の栽培は、大きな人工生態系をつくりだしている。これは、「自然生態系を人工生態系でおきかえ単純化していくものである（小原 女子栄養大）。」単純化は人間の都合によっておこなわれるのであるが、たとえば、このために農薬が用いられている。農薬による害、すなわち自然生態系の破壊についてはカーソンの「生と死の妙薬 Silent Spring」で鋭く警告されているし、このパンフレットにおいては、他の人が特別にレポートするからそれを参照してほしい。一言だけつけ加えれば、「生物農薬」としての天敵が化学農薬に対置され有望視されているのだが（一部ではすでに 実用化されている）、化学農薬の二の舞をしないように、昆虫、鳥等々の基礎的な生態研究のもとに、広い視野から慎重におこなっていく必要があると思われる。

（四）人類にせまる暗雲

哺乳類霊長目ヒト科としての人間は超優占動物であるので、人類と称している。今や優占種であるこの人類にも、はっきりと生物としての存在にかかわる問題が提起されてきている。それは、たとえば、人間社会との密接な関連によりくる問題としても次のようなものがある。

○産児制限：上記で少しふれたように、人口問題の一時的な解決法として産児制限があげられている。このことは果たして有効であろうか。人口問題の一時的な解決は別としても、このことを行つてゆくと、人類は全体的に老化してゆく。老人がふえる一方となる。また、集団遺伝学的に考えた場合、出産が少なく、世代交代がおそいとしたら有効な遺伝はおこなわれず、生物としての人間は退化せざるをえないだろう。

○公害：このことについては、くわしくは他のレポートを参照してもらいたい、2、3 について触れておこう。工業の発展は多くの害をもたらしているが、これは農業とも大きな関連がある。農薬の害とともに工場排水は食物中から人間の体へと入り多くの影響をおよぼす。また、スモッグは太陽の光をさえぎり、作物の成長を阻害したりもする。海へ農薬や工場排水が流れれば海中プランクトンを殺し、 O_2 の生産や太陽エネルギーの固定も減少させる。魚類等々の減少はもちろんのことである。また CO_2 の増加は温室効果により地球の温度を高くする。

一方、核実験、核の使用、毒ガス、化学農薬等々による放射性物質や化合物は、カエル、サカナばかりでなく人間に対してさえも作用し、突然変異を起こさせないともいえないし、実際に奇形児は多く生まれつつある。

○その他：下で少し問題にするが、生物としての人間に、現在においては生物学的な諸問題・矛盾が全般的に起ってきている。

（五）まとめ

以上述べてきたように、「農業と人口」の問題に限っても、非常に多くの問題が目前にある。人類が老化したからといって、老人に死んでほしいとは言えないし、また食料がない

からといって他人を見殺しにはできない。政治的に言っても後進国を犠牲にしての先進国の「満腹」は世界的な対立 矛盾を激化させる原因になっている。こうしたことに関してばかりでなく、テイラーが発した警告、すなわち生物学革命の暗雲はすぐ そこまでおしよせている。今までの規範を大きくゆさぶり、あるいは打ちこわし、もっと悪くすれば、人間の存在そのものをも否定し、滅ぼしさえするのだろう。

この現実の哲学的な問題の前に我々人間は、自然とどのように対峙していったらいいのか、安閑と人類の英知を信じていていいのだろうか。あるいは人類の絶滅も自然理なのか。人工生態系としての人間社会と、自然生態系との激しい衝突は、自然科学を止揚して一つの哲学の中に、統合させざるを得なくするだろう。生物学における「生命とは、人間とは何か」の問いは哲学における根本命題として統合される。この統合において、生物学者は重要な任務を果たさなければならない。事実を事実として記載するのみでなく、事実のもつ重みを自ら考え、また、それを大衆的に明らかにせねばならない。

「農業と人口」問題から大きく飛躍してしまったが、しかし、この問題そのものは、こうした飛躍を内包し、かつ飛躍を要求しているのでこうなってしまったのである。

山口晶（木俣美樹男）、生物科学と思想性生物科学研究会誌 Vol. I : 1-4、1971-11-2. ガリ版刷、ワラ半紙 B5 版 {注：静岡大学理学部、原文のまま文字入力、誤字は修正}

I. 科学階層論

①層的 natural 観と科学の階層

層構造としての自然観を渡辺格氏は述べているが、筆者はこれを弁証法的唯物論的な自然観として自己のものにしたいと思う。この層構造は図 A のごとくであるが、各層には大きなギャップが存在していて、上層は下層を基礎としてもつが、下層の法則のみによって上層をすべて直線的に説明することはできない。こうした層的 natural 観より科学を考えると図 B のごとくやはり、階層としてとらえることができる。図 A の物質界を支配するのは、物理化学的な法則であり、これは物理学、化学として研究される。遺伝現象の層は遺伝学として研究され、物質界とのギャップは分子生物学として研究されている。さらに細胞のあつまりとしての内部的な体制は一般的に生物学として研究され、内部的体制と遺伝現象とのギャップは発生学などとして研究される。最後に、外部的な体制は高次の体制としての脳の働きとしてあり、つまり、人文社会科学のレベルの研究としてなされ、内部的な体制とのギャップは心理学などとして研究される。

前述したように下層の科学は、上層の科学の基礎とはなるが、下層の科学で、上層の科学を直線的に説明することはできない。たとえば、量子力学からニュートン力学を直線的に説明できないように、遺伝現象から高次の体制としての脳の働きを直線的に説明することはできない。それは、この層構造を貫いて展開する弁証法的唯物論的な自然観からしか説明しきれない。つまり、坂田昌一 氏の素粒子観により自然は無限の階層よりなるととらえ、生命現象を図 A のように層構造として把握する層的 natural 観より科学の層構造が考えられる。一応、これを科学階層論としよう。

②生物科学の位置とその役割

生物科学の科学階層中の位置は図 B のように、物理化学との境界の分子生物学から人文社会科学 との境界の心理学の一部にまでおよぶ重要な位置としてある。この位置を占める生物科学の役割は 多大なものであるが、今までその重要さはさほど認識されていなかった。

それは、今までの科学の どの階層も個別に研究されてきて、各階層はそれぞれに研究の対象をもち、素の階層の法則を見いだしているが、全階層をつらぬく原理が意識されていなかったからである。つまり、巨大科学の中の個別科学として細分化を強いられ、偏狭な専門にのみとじこもり、巨大科学のまさに巨大さの前に自ら失い、経験主義・実証主義に陥り、末葉ばかりをみて木が見られず、ましてや森を見ることはできない。こうした科学が人間から離れ、科学は人間とは別のものという主張をなし、戦争や公害の元凶となる。生物科学も全く同様の状況にあるといえる。しかも、重要な位置を占める生物科学の役割はテイラーの指摘のように緊急に明確にされ、またその役割を変革のうちに担わなくてはならない。それは、生物科学の上層の人文社会科学として研究されている人間社会に「生物学革命」が飛躍的な、今までにない複雑な変革かまたは、人間の滅亡を要求し始めているからである。

II. 科学と思想

①科学至上主義と思想的背景

「芸術のための芸術か」という問いは、かつての文学の方面で重要な論議になったことがある。今、この芸術を科学とおきかえ、「科学のための科学」について考えたいと思う。いわゆる純粋科学者は、科学は人間の知的欲求に基づいており、その欲求のみによって科学が他のものと切り離された状態で成立し得て、科学それのみで、「科学のための科学」こそ至上の価値があると言う。従って、ここからでてくる考えは、自分たちは人間精神の最高の発現である科学をすることに身を置いているのであり、その科学を技術としてどのように使うかは自分たちの関知しないことであるということになる。つまり、彼らは人間性の発現としての他のすべてのものを切りすて、知的欲求のみを美化するのである。さらに、科学はすべてのものから遊離した存在であり、何ものからも自由であり、公正中立であり、唯一の信ずるに足る真実であると宗教的な神への信仰に近いものをもつのである。そして、人間性の一発現としての科学が人間性を失うのである。

しかしながら、科学の起源を考えるならば、科学は人間性の主な発現の「生産活動の実践の過程 において、技術的・経験的な思考の伝統として発達してきた」のであり、この次元で自然に対する人間の文明（解放）としての科学の起源を築いたのである。さらに中世のキリスト教支配の暗黒時代から、人間性の解放を叫び、闘いのうちに築かれたのが近代科学であった。ところが上述のような現代科学は、近代の資本主義の発展の中で築かれてきて、ルネッサンスの人間復興の精神は、資本の論理によって再び暗黒の中に埋葬され、近代から現代への科学の歴史は、戦争の歴史とともにあり、戦争によって科学が発展するんだと、戦争を科学のために都合のよいものという人々とまででるようになった。そうした歴史の延長上に現代の科学があり、ナチのアウシュビッツからベトナム戦争のソンミまで、さらに身近においても、公害や人体実験など資本の論理に組み込まれた科学としてあるのである。

こうしたことを深めて考えれば、科学がその時代を支配する思想と無縁ではないということがわかるであろうし、科学者たちがその支配思想から離れて存在していることはありえない。エンゲルスが「自然科学者たちはいかに自己の欲するままに振舞おうとしても、彼らは哲学によって支配されているものである」といっているのは、まさにこのことである。原子爆弾を研究することの思想性は、明らかに資本主義の論理・思想の下にあることを認めながらも、科学者が悪いのではなく、原子爆弾をつくった技術者やそれを使った人

間が悪いというのはまったくの欺瞞ではないか。いかに純粋科学を云々したって、その研究は現代を支配している思想から自由ではありえない。資本主義を打破して築かれたはずのソ連の社会主義（スターリン主義）においても、上の歴史の直線的な延長に科学を置いている以上、科学技術万能の信仰をもっている以上、同じことである。事実、ソ連も公害はあるのである。

②現代科学のゆきつくところ：

上述のように現代科学の思想的背景にあるのは科学技術という万能の神に対する信仰であり、これは資本主義発展の中で形成されたものである。しかも、この資本主義の論理に対置されたソ連社会主義も、残念ながら現代科学の矛盾を揚棄しきれず、機械的な唯物弁証法の敗北（ルイセンコ事件）を総括し、次段階への展開を求めることなく、結果として機械論に敗北したのである。つまり、当初求めたところの人間性解放のために科学を捨て、資本の論理の下に築かれた科学を新しい科学に変革しえなかった。このような現代科学の状況をみるならば、テイラーが「人間に未来はあるか（正・続）」で言っているように、人間から出た科学が、今や巨大な怪物として現れてきている。彼はその恐怖の「生物学革命」がひきおこすだろう、あらゆる事件に対して、人間が滅亡するとの予感に対して唯一ヒューマニズムという言葉にしか自分の立場を置けなかった。確かにヒューマニズムは貴重なものであるが、これがいかに弱いものであるかは、今さら言うまでもない。私的に人を殺したくなくとも戦争は行われるし、科学は人を殺すのに大いに活躍している。科学に対する信仰と科学至上主義の幻想が存在する以上、科学は人間性を増々抑圧してゆきつくところは人間がすべてを知り、すべてをなせるようになった時に、人間は滅びるという、自らつくった科学が自らを殺すところである。科学者のいくらか良心的な人々には、このことの虚無感がしのびよっている。もっとも、多くの人々はなお科学に絶対の神を見ることができるようであるが、…。以上のような科学の状況に対し、その信仰の幻想と虚無（自閉）に対し、大衆は不信をいだきはじめている。科学者先生にはまかせておけないという、現代科学への健全な不信が、広く公害反対運動の大衆の中に起こってきている。

III. 科学の変革

①人間解放の科学を！

現代科学は誤った部分をもっているので、それを改良すれば正常になるだろうとか、科学の本来あるべき姿ではないのではないかという議論をしても不毛というしかない。坂田昌一氏が言うように「肝要なものは解釈することではなく、変革することである。」つまり、現代科学の解釈論争をやるのではなく、明確に変革の立場を築く必要があるということである。一般には、この変革の立場にある科学は反科学とよばれるかもしれない。しかし、単に反科学とよばれ、自ら反科学と規定することは望ましいことではない。なぜならば、ここで求めている新しい科学は、現代科学の内部矛盾から出発しているのであり、現代科学以外のものを母胎とはできないからである。たとえば、反体制ということにおいても、反体制は体制の矛盾として起こることであり、体制の外に反体制を設置することはできない。体制外に反体制を設置することはできない。体制外に反体制を考えることは観念的で、決して弁証法的なとらえ方ではない。だからこそ挫折せざるを得なくなるのである。羽仁五郎氏が言うように、新しい科学はアウシュビッツの総括より出発すべきである。総括することなくアウシュビッツを継続する現在科学は、大衆からのろいと不信、さらに否定と

しかみられず、打ちこわされるものとなるだろう。このような不信をインテリ(マスコミ)は感情的な反科学とよぶが、実はこの中にこそ、まさに健全な新しい科学への希求があると思われる。大衆を苦しめる科学、人間性の正当の発現を抑える科学に対して、人間性を解放する科学、人間の復興を求める思想・哲学に裏づけられた新しい科学を求めているのである。

②科学の大衆化と教育、科学研究、生産の結合

中国での大学闘争は非常にラジカルに展開され、今では大学は労農兵にも門戸を開き、新しい大学制度の下に教育・科学研究・生産の結合の試みがなされている。この試みは中国では実質をともなつて主役が労働者におかれつつあることを示しているし、健全な労働者の思想・哲学の下に新しい科学が築かれようとしていることを示している。科学はいわゆる科学者・インテリにのみ独占されるものであってはならず、科学を研究するものは、労働者大衆でなくてはならない。労働者大衆こそ新しい科学を支える力であり、また担い手である。宇井純氏が日本の反公害運動の中に見ようとしたほのかな希望の光は、ここに至って輝くだろう。

科学者たちはこのことに反論する。自分たちの犯した人間性抑圧の罪をたなにあげてである。「大衆は無知だから、大衆の手に科学を渡したら、今よりもひどい状態になり、どうしようもなくなる」と。しかしどうだろう。そのような大衆不信は特権階級に従順なインテリの優等生的な考え方ではないか。大衆は無知無能ではないし、大衆の手によってこそ新しい科学が発展するのだ。現在の状況を見れば明らかではないか。滝沢行雄氏が言うように、実証主義・経験主義的な科学は、逆に公害対策を「直接実験されない」という一言で「権威」をもって、最も強力に阻害しているのではないか。権威ある科学者諸氏の企業側の主張は次々に大衆によってつきくずされていっているのではないか。

さらにつけ加えて反論しよう。現体制においては自己の能力を発現できない人がいる。「能力がない」とか「やればできる」といった優等生的な発想からはでてこない、現体制ではどうにもできない問題がある。適切な条件があれば、すべての人々は各自のもてる各種の能力を発現しうるのであり、今のインテリ諸氏は現体制において役に立つと認められるか、または経済的に恵まれるという特権をもっていたため、いくらかの「能力というもの」を発現する機会を与えられたにすぎない。

従って、インテリ諸氏に「能力」があるので、(いくらかの)特権が得られるというのは高慢ではないか。インテリ諸氏は、単に体制を保持するために、いくらかの機会を与えられているにすぎないのだ。

これからの新しい科学は、大衆の手によって大衆の求めに応じて研究と教育と生産を行わねばならない。「科学のための科学」でなく、大衆の求めに応じて発展する科学、すなわち、人間性を解放する人間の科学でなくてはならないし、ここにしか健全な科学と人間の未来はないのだ。渡辺格氏も言っているように、「今後の自然科学は人間の生命を意識した生物学を先頭とし、物理化学がこれを推進するという形をとるべきである。」しかもこれを保証するのは大衆の健全な思想・哲学の下に、大衆の手によって創られる新しい科学のみである。

(お詫び) 生物科学については、いくらか焦点がぼけたと思われるかもしれないが、お許し願いたい。生物科学については以後のレポートを読んでください

黍のように生きる ―簡単には食えないヤツ

何もかもが商品で、画一的な流行品を大量に作って、ひたすら過剰な消費を煽られて、まだ使える物もゴミとしてその多くを捨て去る現代の都市社会をカリユグの終わり、言い換えれば先真文明の時代と仮設してみた。個々の人間も、集団としての人びとすらも、今は商品のように扱われている。素晴らしい出来栄の作品も、一時の流行が過ぎればあっさり捨てられていく。学者人生を生きてきたが、蓄積してきた学問も商品、賞味期限は短く、学生たちに消費されてすぐに捨てられる。誰も読まないホームページを作っているが、ウェブ検索をしてみると、ライフスタイルとか生き方という題のインタビューやエッセイについては、最近、少数の方に読まれた形跡がある。ますます不安定な時代の深みに向かっているようで、皆さん心配になり、改めて生き方や暮らしぶりを考えるようになった方々がおいでになるのだろうか。私のお勧めは、大量生産大量消費大量廃棄に抗うには、自分は自分だと個人主義を深化させることだ。簡単には「食えないヤツ」になることだ。ただし、自分や家族が「食えるもの」は自分で作らなくてはならない。

そこで、「食える／食えないヤツ」を食用の栽培植物にたとえてみよう。もちろん例外は少しあるが、とりあえず横に置いておくことにする。植物は人間に食べられるためにだけ存在してきたのではないので、棘もあれば毒もある。それを人間が植物との「長期信用契約」で、主に食べるために栽培化した一群の植物を栽培植物（食物）という。もちろん、栽培植物には衣類や住居、薬用などのための工芸作物や建材、多様な素材もあるが、ここでは分かり易さのために食物に限定して話を進める。

果物のリンゴやイチジクはいくらでも生でそのまま食べられる。野菜は少しなら生でも食べられるし、加熱すればたくさん美味しく食べられる。芋は大方過熱しないと食べられない。豆はほとんど生では食べられず、潤かしてから加熱するか、時には毒抜きもいる。穀物は加工・調整してから、加熱して食べられるようになる。要するに、穀物は簡単には「食えないヤツ」なのだ。

さて、生の食用植物を食べやすさの順に示してみたが、貯蔵性や移動性からみると、その順は逆になる。まず、貯蔵性から見ると、果物や野菜は腐りやすい、芋は、半年くらいはなんとか貯蔵（休眠）できるだろうが、さらに豆や穀物は乾燥すれば長期貯蔵ができる。したがって、移動性からみると、果物、野菜、芋は水分が多く、腐りやすいし重い。一方、豆と穀物はかなり乾燥でき、軽くなり、よほど長期にわたって蓄積できるし、移動も楽である。

すべての栽培植物が人間にとって大切であるが、貯蔵性・移動性のよい穀物が栽培化されるに及んで、人間の群れは家族から、それを超える大きな集団を形成して、権力や権威をもつ文明を発生させた。宮殿を造る人々にも侵略する軍隊にも、穀物は食料として重宝なのだ。ちなみに、黍（キビ）はジンギスカンの軍隊の兵糧であった。現在は、生きる糧として栽培することだけではなく、さらに生産性を増した穀物コムギ、イネ、トウモロコシが人間と家畜らの食糧の半分を占め、世界を支配する戦略的金儲けの商品になっている。ここに大量生産大量消費大量廃棄の文明は非循環的に依拠をしている。

これらに対して、黍はユーラシア大陸の東西、ドイツと中国で 8000 年以上前の新石器時代遺跡から出土している。美しい流麗な草姿をしている穀物だ。歴史も古いし、必ずしも貧しい人々の食料ではなかった。誰もが等しく生きるために食べ、文明を進めた点は、いわゆる三大穀物に引けを取ることはないのだ。世界的な商品ではないが、今でも各地で家

族が健康に生きるための食料として引き継がれている。原沢文庫の中に、中国最古の農書『汜勝之書』（紀元前一世紀）を見つけた。この中には、アワ、キビ、ヒエの栽培法が解説してある。

黍などの雑穀を栽培することは初めての人でもほどほどにでき、収穫も期待できる。しかし、脱穀、風選、粃摺り、精白などの加工工程で、家庭用の道具も技術もあまりないので、すぐに行き詰まる。簡単な方法は、粃殻付きのまま焼くのだ。そうすると加熱もでき、少しポップもする。篩でふるえば、もうこれで食べられる。今でも、モンゴルではミルクティに入れてこれを食べている。さらに、何とか加工できても、つぎの難関はどのように調理するかだ。黍の調理法も稲に劣らずたくさんあるが、こうした伝統的な郷土食が継承されていないので、持て余してしまう。稲と混炊するか、煮てからサラダに加えるかでは、あまり能がない。伝統的知識体系における生物文化多様性の重要性を緊急課題として認知し、対応せねばならない。

さあ本題、こうした滅びに至る現代文明に、どのように抗い、先真文明の時代へと向かうかだ。黍のように生きることだと朝の寝ぼけ頭で思いついた。簡単には「食えない ヤツ」になればよいのだ。歳を重ねると、多くの経験を積むので知っていることや自分の見解があり、つい口を出しおしゃべりが過ぎて、もしかしたら、まるで威圧するかのように若者の出鼻を挫いているのではないのか。若者の意見をただ聞くべきだろう。老年者は話さないで、書き残すのが良い。話は聞かざるを得ないが、文は読まなくても済む。読みたい人だけが読めばよい。本を読まない人が多いようだが、それも当人の選択で、私にできることは日本村塾ゼミで古典的な本の読書会をすることだ。携帯電話に対する PC メールのようなものだ。音がしないので、でなくてもよい。好きな時に読めばよいし、迷惑メールとしてごみ箱に入れてもよい。

だが、少なからぬ若者の無知と無恥には我慢ならない時もある。嫌われるのは構わないが、彼らの発言を阻害するようではこれこそ老害だ。そうはいっても、その場において、聞くような良い内容がなければ、職業的義務感がないかぎり、黙って座っていることは非常に苦痛である。名利にこだわらないと決めていても、忘れられた存在、出番のなさが漠然と誇りを傷つけもする。こうした感情は美しくないもので、売らない作家・百姓という仕事はとても良いと考えた。人それぞれに生き方がある。私の第 3 の人生はこれで暮らすことにし、大方の社会的付き合いを無くすことにした。心の平安が持てるし、それよりも個人史の記憶が薄れないうちに、経験を記述しておくことは、自由な研究のために多額の公共の研究費や家族の生活費を使ったことへの必要な責任であろう。また、ほかごとに関わるよりも、資料を整理して、公開できるような作業をすることが後代の人びとのために役立つのだろう。そういう生き方を選んだと言っておこう。

2017. 3. 3

原子力発電所崩壊；事故ですか？事件ですか？

東京電力の福島第一原子力発電所は 2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震によりメルトダウンを起こしました。私は日本環境教育学会の広報紙『環境教育ニュースレター』（2012. 7. 15）に、次のように書きました。「東北地方太平洋沖地震に伴う東京電力福島第

一原子力発電所の崩壊は今までになかった人為災害、遺伝的変異を引き起こす放射性物質による公害に進展している。水俣病の深刻化と同じような経過をたどらないようにしてほしいが、権限に伴う責任がある行政府、直接の管理責任のある特定企業、関係科学者の沈黙や事実非公開や虚偽などを知るにつけ、私たちは公害の現代史から学んできたとは思えない。」それから6年たちましたが、残念な予測は当たっていると思います。

緊急電話を110にすると、「事故ですか？事件ですか？」と聞かれるようです。「福島原発事故」と世上言われていることは事実の理解とその表現の誤りで、福島第一原子力発電所の崩壊は「事故」ではなく明らかに「事件」なのだと私は考えています。ベラルーシの高校生との交流会『今、原発事故後の社会に生きる——チェルノブイリと福島と私たち』（2017.3.25）に参加して、彼らの学習活動の経験を聴講しました。ベラルーシはチェルノブイリ原発事故（1986）による放射性物質の直接汚染がひどかった国でした。30年を経た被災地区にあるストレリチェヴォ中等学校のクラブ活動「エーデルワイス」では、生徒たちが身の回りや食材の放射線量の測定を続け、また、「失われた村」を記憶する環境保全活動を行っています。比較的低い放射線量であっても、汚染された地域で内部被ばくによる健康被害を避けるように、暮らす方法を学んでいるとの報告がありました。戦争（ドイツ軍の侵攻）と放射性物質汚染（チェルノブイリ原発事故）から、祖父母たち村人が大好きな村を守って、住み続けてくれたことへの感謝と、尊敬の想いを語っていました。将来、彼らは映画監督になってドキュメンタリーを制作したい、医者になって地域医療に関わりたいたいと話しました。チェルノブイリ原発事故に関する歴史的情報は次のように記されています。

ベラルーシの領土には原子力発電所は一基もない。一九八六年四月二六日午前一時二三分五八秒、爆発が起こり、チェルノブイリ原発第四号炉の原子炉と建屋が崩壊した。チェルノブイリの事故は科学技術がもたらした二〇世紀最大の惨事となった。…事故の結果、大気中に五〇〇〇万キュリーの放射性核種が放出されたが、その七〇パーセントはベラルーシに降ってきた。長期にわたる低線量放射線の影響の結果、わが国では、がん疾患、知的障害、神経・精神障害、遺伝的突然変異を持つ患者の数が毎年増加しつつある（『チェルノブイリ』集、ベラルーシ百科事典社、1996）。

他方、フクシマ（ヒロシマに應對する表現）後、6年を経て、日本の大学生・院生も体験を率直に語りました。福島出身の学生は心中の葛藤について話しました。父は会社経営のために福島に残り、母と子どもたちは東京に避難しました。家族が別れて暮らすことに父は反対、母は子供の安全を思い、東京に避難することを望みました。家族で真情を露わに話すことはとても困難で、今、それを越える話し合いがやっとできるようになったそうです。福島出身でない学生はどのように被災した人々と関わればよいのか、同情以上の何ができるのか、思い悩んでいるようです。若い人たちが、正直に思いを語り合える機会は貴重だと思いました。

私は民族植物学ノオト第10号（2017）に、公害「原発崩壊事件」について、次のように書いています。アレクシエーヴィッチ（1997）は市民の個人史をインタビューして文章化しています。彼女は自分自身に対しても同じようにインタビューし、他者が語ったかのような客観的描写に徹しています。彼女の本は涙なしに読めませんでした。他者が心の中に深くしまい込んだ思いを聞き取ることは容易なことではありません。当然、誰しも辛いことは話したくないのに、反面では信頼できる人に聞いてほしい気持ちもあるのでしょう。しかし、話し手の信頼を得ることは簡単なことではありません。あまりに惨すぎる体験を

した人から、率直なインタビューをすることができた彼女は素晴らしい人だと思います。聞き手も話し手も、時の権力者から強い圧力を受けただろうし、それでも市民の体験した事実を記録することは、「物凄く」大事なことです。権力者が創作し、書き直された戦争の歴史は事実ではなく、虚偽が多いのです。市民個人それぞれに人生はあり、そこに歴史の原点があるのだと考えます。福島原子力発電所の崩壊後の経過措置はチェルノブイリの事後措置の過程と酷似しています。発電所近隣の住民に事実が早く十分に知らされずに（隠され）、即応した措置がなかったために、被爆した人々が多いと考えられます。最優先は当事者による現場での対処、即応した支援体制が必要であったのに、当時の対処経過を時系列で再構成した資料を見ると、会社や政府の混乱が現場対応を遅らせ、被害を広げたようです。これとて、水俣病での対応措置と酷似していて、事実隠しから被害が拡大した公害の歴史から学んでいないといえます。福島原子力発電所の崩壊はチェルノブイリの事例に勝るとも劣らない、「過酷事故」レベル 7 だったことが追認されました。一時は、首都圏住民を含めて 5000 万人の避難まで想定された福島原子力発電所の過酷事故にも懲りずに、また、現在も、事故処理が進まずに、多くのことが隠されていると疑われ、後追いで公表されているだけでも多量の放射性物質を海にも流しています。事実を隠すことが風評被害と現実被害を拡大しています。長期的には福島原子力発電所の廃棄処理を、期日を決めて行わねばならないと考えます。福島の事後措置はチェルノブイリから学び、まず被災者の救援で、移住を含めて全面的に速やかに生活や健康被害の補償をすべきです。チェルノブイリでの居住禁止区域や移住必要地区と比較して同放射能汚染地区に、福島の場合は、居住し、また中央政府が近い時期に帰還させようとさえしています。中央政府と東京電力の責任において、少しでも早く被災地域住民への移住を含めた補償を最優先すべきだと考えます。

しかし、チェルノブイリによって世界が変わったとまで、アレクシエーヴィッチが言ったと同レベルのフクシマ（事件）があったにもかかわらず、一旦停止した全国の原子力発電所は中央政府の政策で再稼働に向かって進み始めています。被害者を救済もせず、東京もそれなりに汚染され、今後も汚染の恐れがあるのに、それも忘れてしまおうと、東京オリンピックに資金（税金を含め）や建築資材や、色々なものが流されています。オリンピックで一部の方々に「夢」を与えても、現実には福島から拡散した放射性物質による環境汚染は現在進行形で少しも解決に向かいません。中央政府も東京都も、ぜひともオリンピック開催を速やかに返上して、フクシマ原子力発電所への対処、地震被災地への復旧・復興支援に全力をかたむけるべきだと考えます。強度に汚染された地区には帰らないで他所に移住すべきです。政府と東京電力は第一に全面的な責任を取って、この地区の人々の移住補償をすべきです。何とか低度汚染地域である東京などでは、ベラルーシの高校生たちのように、内部被爆を避ける暮らしぶりを学び、実行すべきです。私は、家族の食材はできるだけ自給農耕し、汚染地域の食材は用いないようにしています。「風評被害だ、非情だ」と言われても、問題は未だに解決に向かっていない以上、ベラルーシの高校生たちのように家族や地域社会の安全を確保することが大事です。情緒に流されず、現実をよく見て、各自が判断すべきです。東京も低度ではあれ汚染されているのです。どこまでが我慢できる程度なのかは、過去に事例が少ないので、分かりません。フクシマを「差別」とするのは問題のすり替えで、あってはならないことで、本質は現実を隠さないで、強度汚染地区の人々の生活に関しては無条件全面保障をすることです。

これからの数十年、文明の有様は激変するでしょう。しかし、私はもう人生を重ねているので、それを見届けることはできません。第三の人生では、自分の名利のために何かをすることはないので、次世代のために何ができるのかと考えました。若い人々の話は経験が少ないので、皮相で一面的な内容が多いようです。しかし、このところ、私が経験の「豊富さから多面的」、「偉そう」に語ると、彼らを委縮させ、発言を遮ってしまうようで、恥ずかしながら、私は言葉をついに失いました。自ら消しさった自らの言葉はとても強いストレスを跳ね返してよこし、私は心苦しくなりました。そこで別の表現方法を考えました。言葉は直接発して、若い人びとの発言を遮りますが、文章は読みたい人だけが読むので、その場で強要することはしません。ほとんど誰も読むことのないホームページに、ベラルーシの高校生たちのように経験を記録し、思索を深めて文章化することにします。

参考文献

アレクシエーヴィッチ, S. 1985 (三浦みどり訳 2005)、ボタン穴から見た戦争——白ロシアの子供たちの証言、群像社、東京。

アレクシエーヴィッチ, S. 1997 (松本妙子訳 2011)、チェルノブイリの祈り——未来の物語、岩波書店、東京。

2017. 4. 1

哀しい私たちの日本

自然を信仰し、山村の暮らしを信頼し、篤農を敬愛して、これらに私は人生を導いていただけてきた。山村を愛しく想い、雑穀農耕を中心とする生物文化多様性保全をしながら、環境学習・環境保全による山村振興活動を、関東山地南部、秩父多摩甲斐国立公園周辺の東京都奥多摩町、五日市町、埼玉県大滝村、山梨県小菅村に順次その活動拠点を置き、40年以上にわたって継続してきた。私たちの活動には何千人にも及ぶ子供たち、村人、市民、学生、教職員などが参加してくださった。総額では数億円の公私の資金（国の事業や民間助成事業、個人寄付などを含む）と関係者・ボランティアによる何十年にもわたる労力が協働・提供された。大いに山村の文化継承と経済振興に貢献したはずだ。

ところが、それにもかかわらず、私たちの活動が順調に定着すると、なぜか、ほんの一部の自己保身的な山村有力者から追放の憂き目にあってきた。山村を愛しく想って地道に活動してきたことだから、山村の何事をも悪しくは言いたくない。しかし、曖昧模糊とした追放の後退動因を明らかにしない限り、地域振興や「地方創生」などは本質的にはなしえない。教え導いてくださった篤農の皆さんも私も、残り少なくなった人生の時間でこの課題解決をしておかないと、大きな変曲点にある日本の基層文化が喪失してしまう。為政者らは地域を愛しく想う人々やその伝統的基層文化の営みを見捨てておきながら、あまりに無恥にも内容のない「愛国」の言葉だけを声高に言っていることは実に空しい。情理が絶えようとしている、このくにの未来は悲しい。まるでシーシュポスの神話のように、今また4度目の追放にあおうとしている【注1】。

私に徒勞に見える岩上げの苦行を強いるのはギリシャの神々ではなく、名利に憑りつかれた人間たちである点は実に現代的であり、シーシュポスの神話とは違う。大欲望に憑依

され、カミ殺しを続ける人間たちが岩を山頂で蹴落とす。岩は山村で、その中には伝統的知識・技能（生物文化多様性）が詰まっている。繰り返しても労するだけにみえる過程が虚しさを超克した時に、自然への信仰を感得し、理知への信頼を認知するのだろう。虚無と便利に抗うのが私の「自味」（地味、滋味）な人生なのだ。私が多くの物者に支えられて生きていること、私も微力ながら少しは物者を支え、愛おしまれ、愛おしんでいること、やっと人生が少しずつ見えてきた気がしている。

私たちのように山村を愛しく想う都市民は山村の心無い有力者には気に入られない。短期間だけ、下働きする「地域おこし協力隊員」は歓迎だが、長期にわたって山村で協働をする都市民は迷惑なのである。村役人様は都市民の税金（地方交付税交付金）をあてにしているので、その上、都市民に私費で山村の為に働かれては居心地が悪いのだろう。彼らは出自の山村を愛しくは想わず、都市に出られなかったことに怨嗟を感じているのだろうか。山村を引け目に思い、都市に従属したいのだろうか。だから、山村を敬愛する「心」を追放したいのだろうか。なかなか、本当の動因にはたどり着けない。どこの山村でも直耕してきた多くの篤農とは心を通わせるまで昵懇になり、ご婦人方からも料理を教えていただいたり、農産物やおやつをくださったりと親切にされてきた。しかし、村役人様や大地主様から私たちと篤農たちの協働した環境学習・環境保全による山村振興活動の前進動因による成果はおおかた黙殺されてきた。ムラ社会やタテ社会、イエ制度の封建遺制などと論考されてきたが（中根 1967）、実体験を思い起こしてみると、はっきり言えば、第一の追放動因は山村の屈折した小権力志向の男たちの、まさに低レベルの嫉妬だ。彼らは村内では特段に裕福であるのだから、無欲で名利を求めない者たちへの反感と怖れから、ムラ社会での地位を脅かされると曲解するのだろう。彼らは自然や山村を愛しいとは心底では思っていないのではないのか。このために実にいじましい男の嫉妬であって、彼らに特有の隠微で醜いものだ。なかなか表面に浮かんでこないから、まことに「質」が悪い性癖である。もちろん、私たちは山月記の人喰い虎になった李徴のように尊大な態度（中島 1942）で嫉妬されているなどと、社会的成功者の彼らに対して言っているのではない{注2}。この心の悪弊を超克しなければ、未来に向けて山村は再生しない。山村を衰退に任せれば、結果的に都市も健康さを失い衰微する。ムラ社会の封建遺制はもちろん日本の都市においても、何ら山村と異なることなく共通に根強く残存している。また、この悪弊は政官界の為政者の方々の世間（ムラ）でも無縁ではない。

地方創生大臣何某が、「学芸員はがん。一掃しないと」とまで公言した。後に撤回して謝罪したそうだが、社会的地位の高い人がいったん無教養な発言や行為をしたら、悪事千里を走ってしまい、取り返しはつかない。目先の金儲けにしか、「観光」、旅の面白さや意義を見ることができないようでは、あまりに無恥で、無教養で、稚拙なことだ。ギャンブルが観光の目玉だという政策はお恥ずかしい。大人の「知的な観光」は、学芸員たちの学術的な成果に基づく博物館、苦悩の独創に鍛えられた芸術家たちとそれを鑑賞する人々による美術館、大自然を探検して植物学者たちが収集した植物園などに向かうものだ。また、自然と暮らす山村民の生活文化も共感を呼ぶ。これから観光はより「知的な物事」へと深まっていくだろう。たとえば、イギリス人は大人の趣味をもって暮らしているので、図書館、博物館、美術館、植物園などは専門学芸員が調査研究を深め、高い学識を蓄えていないと、知性の高い来館者には対応できない。

しばらく、イギリスのカンタベリーで暮らし、また大陸ヨーロッパ諸国を旅してまわった。保守的というのは保身的とは大いに異なり、伝統を保全しながら、新たな創作として

再生する町や人々の暮らしを垣間見ることができた。ヨーロッパの文学、芸術、思想からスポーツ、探検、園芸などまで、王侯貴族に限らず、市民の「遊び」は幅広い。市民のボランティア活動や税金とは別に、任意の寄付がその「遊び」や地域社会を支えている。

森友学園・瑞穂の国〇〇小学院は子供たちに教育勅語を暗誦させる予定であったのだろう。その系列の幼稚園で行ってきたように、幼児に皇民教育を刷り込むのだろう。防衛大臣何某夫妻はこのことに協力したかったのだろう。さらに、この名誉校長を引き受けた総理大臣何某夫人は天皇家を政治権力に利用してきた山縣有朋らの長州軍閥の「思想」の系譜復活を企図して、森友学園に共鳴し、利用しようと思ったのだろう。大方の学校は国会で議決までして廃棄した教育勅語を復活しようとはしないので（昭和23年6月19日衆議院および参議院決議）、彼らの権力思想が望むごくまれな事例を大いに宣伝したかったのだろう。しかし、土地取得に関して疑惑が露見してしまい、身から出た錆とはいえ、現政府は民間の弱小森友学園を破産に追い込んで、不正疑惑を闇に葬ろうとしているのだろうか。政治家に陳情した元理事長も望外から以外に変わった展開に、したたかに対応しているかに見受けられる。事実は隠蔽されたままなので、市民は憶測するしかない。

さらに、失策の上塗り、本音の露呈があろうことに復興大臣何某によって重ねて行われた。原子力発電は「国策」であり、その犠牲となった人々を全面的に支援補償すべき立場、権力保持の当事者であるのに、政府は責任を取らないから、放射能をさけて避難している人に「自主避難は自己責任」と言った。また、災害が東京でなく、「まだ東北で、あっちの方だから良かった」とまで言った。ともにすぐに撤回して、謝罪したようだ。しかし、責任感も信念もない方が選挙で選ばれた国会議員「選良」であるというのは、なんと悲しいこの国、日本ではないのか。虚偽で隠蔽する政治手法「勝てば官軍」は、とりわけ明治維新前夜から薩長・公家の策士によって用いられてきた。下命により策謀悪事により世間を騒がせておきながら、上司が彼らを懲罰して見捨てたいいくつかの哀しい事例があった。最近、こうした歴史事実を明確に論証する著作が世に出始めた。明治維新以来の昭和維新、平成「維新」の系譜を、三度、現代史の変曲点にある今、その功罪をしっかりと批判的に再考証せねばならない。

どうして為政者はこのくにを愛まずに、亡国に向かわせているのだろうか。志ある政治家が少なく、選挙民も目先の利害に票を投じるのだから、同罪ということだろう。虚偽・隠蔽に、多大な犠牲を払い、二度と騙されたなどと言い逃れはすまい。市民は自ら学び、考え、自由から逃走しないことだ。この世は厳しく酷い現状もあるが、優しく楽しくし、幸せになる方法は自由に学び、考えることによって見つかる。今まで述べてきたように「かなしい」は「哀しい」「悲しい」「愛しい」などと表記される。不明瞭だが、日本語の繊細なニュアンスが含まれているのだ。このくにが好きな原日本人の私はどの語意においてもかなしい存在だ。

桑原武夫の寄贈蔵書一万冊が廃棄された。置く場所がない、ほとんど誰も読まない、からだという。私は本を読み、考え、書く仕事をしてきた。会ったこともない先人、会うこともできない偉人が多くの経験を書き残しており、彼らの著作からは多くのことを学ぶことができ、またそれらは時空を超えて私たちを導き、励ましてくれている。私は本を捨てることができない。先般、農山漁村文化協会附属の農業図書館も資金不足で土地を売却することになり、廃館になった。10万冊の農業図書があった。日本人はどうしてこれほどまでに、本を読まなくなったのか、哀しくて仕方がない。日本の公教育が強固になるにつれて、このくにの市民は皮肉にも知的劣化を起こしているのだろう。私たちの「森とむらの図書

室」(小菅、藤野分室)にも、国内外で収集した山村調査原票のほか、環境学習や生物文化多様性関係の図書が五千冊ほど所蔵しており、山村振興を願う人々に活用していただきたい。しかし、これまでは蓄積してきた資料を利用する人々は残念ながら少なかった。

現代の日本人に打ち捨てられた過去が、私には失ってはならない未来に想えるのだ。過剰に便利を追い求める現代文明は自然災害、人為災害によりほころび、生き物の文明に移行する秋が必ず来るだろう。預言者でなくとも、論理的に考え、感性的に観れば、このことは自明なことだ。エコミュージアム日本村、日本村塾を勧めてきた。でも、私は国粹主義、日本民族主義、国家主義、いわゆる右翼、そのどれでもない。私は民族の伝統文化には敬意をもっているが、あえて言えば、自然主義、地域主義であり、保守底流であっても、保身に汲々とはしなかった。どの民族でも伝統文化は再創作し再生しながら、継承することが大事だと思う。調査研究で世界各地を巡って、日本に限らず他地域の民族や伝統文化には敬意を払ってきた。

海洋に浮かぶ花綵列島に連なる日本は本来開放的であった。大陸から度重なって、多様な民族集団が移住し、また、ここからも大洋の彼方へと移住していった。山地が多く地理的隔離が容易であったので、人口の少ない先史時代や古代には移住者集団は客人として受け入れられて、各地で安住の地を得てきた。しかし、中世の封建制を経て、ついに近世の幕藩体制が確立し、鎖国によっておおよその島々は250年余り閉鎖された。これによりシマ国根性は逆転的内向きに変質し、ムラ社会も排他的に変容した。村外からの移住者への差別は潜在する。

検地により封建・幕藩体制が確立、刀狩によって武器は武士専有になった。必然的に、農民・常民の抵抗は「非暴力・不服従」となる。アメリカのような銃社会ではない。田舎の一揆や都市の打毀しといっても、武士に専有された武器を振り回すようなことはできなかっただろう。圧政に耐え、苛酷な税や飢饉などでやむなく上訴し、おおよそ非暴力・不服従の抵抗であっても、見せしめのために首謀者ら極刑に処せられた。この精神風土が根深く今に続き、お上に異論を唱えることは自粛し、盲従する。なかなか民主主義や個人主義、あるいは自由・平等・友愛の精神は普遍的にならない。脱亜入欧して物欲を昂じただけで、もう一方の教養は高めなかったのだ。ご婦人方からは山村の為にありがとう、これからもよろしくと言われることが多い。有力男性からは、たと言われても、外交辞令で、本心からではない。老農からは「頭が良い人」は住めないし、追い出されるから、移住するなど言われた。村のお役人様は、観光客として浅く付き合い、「お金を落としに」来村するのは良いが、「頭が良い人」が深く山村を知り、居つくのは迷惑なのだ。しかし、私たちは相当額のお金を支払ったのだから、金目当てだけが前進動因でない。「頭が良い」訳ではないのだが、やはり心因性の後退動因が潜んでいるということか。排外的な対応により、土地を持たず、生業を持たず、地場産業に安定した職を得られず、移住者は定着できないで、都市に舞い戻るのだろうか。限られた土地であるからには、大勢を受け入れることはできないので、排他的になることは地域社会の維持に不必要なことではなかった。しかし、現在はその対応によって、山村自体を失う状況にある。都市では出生率が低い。農村から子供たちが都市に出てきて、都市人口は増加し続けた時代は終わったのだろう。山村は過疎高齢化により、もう多くの子供たちを都市に送りだせない。都市民の定住を寛大に受け入れ、緩やかな地域社会の変容により、持続と復元を図るのが良い。何が地域、郷土の仕打ちか。イエ、ムラ社会である故郷の実態を、その極限の現代史に探ってみよう。一ノ瀬(2010)はとて丹念に「銃後の故郷」の実態を検証している〔注3〕。一ノ瀬によれば、〈郷土〉は

人々にとって親しいものであったが、同時に徴用された兵士らを拘束し、死へと追いやるという面も持っていた。戦死者たちの問いに生者が正面から向かい合うことは、「何不自由のない生活」と良心を脅かすから危険であり、戦死者への態度は「感謝」にとどめておくのが適切で、「なぜ」という問いなどは禁句にするのがいちばん賢いのだろうと述べている。結局、一ノ瀬は民俗学の研究には、あえて不遜ないい方をすれば、「政治」の臭いがしないと述べているが、日本民俗学者ではない私は政治を覆い隠し、責任逃れをしたのが、柳田民俗学ではなかったかと勘ぐっている。これに関する事実を明らかにして、根拠事実に基づき批判的に再検討しなければ、日本民俗学は非情理に、また日本人を不幸な戦争へと導くだろう。

イエ、ムラ、シマといった封建遺制によって、自然や山村を大事にしたい私たちの活動が、なぜ、4度もムラから追い出されてきたのか。情けないことに山村は誇りを失っているからだろう。それでも、誇りある思想信条として、私は自分の問題として、山村の誇りを受け継ぎ、伝えたいと考えている。「絆と思いやり」こそが教養であり、これらを失ったから、このくにははしたなくなっているのだ。言葉の心（含意）を歪曲して使う為政者や「学者」が多いので、市民が惑わされる。市民は騙されないように、自分で考え、このためには生きるための学びから逃げてはいけない。

学問の手法は数多あるが、現代においても学問の目的・本質は自ら学び、考えて、教養（思い遣り）を鍛錬し、「自由・平等・友愛」を尊重する、素のままの美しい暮らしを楽しむことにある。立身出世や、もとより名利を求めることではない。現代文明は過剰な便利を追い求めて、「最先端」「最新」機械文明に依存する。人間の仕事は減り、いずれ人間そのものの存在意味も否定され、虚無に蔽われるのだろう。あなたは自分で動かすことのない自動車に乗りたいのか。福祉機器ロボットにあやされたいのか。無人戦闘機に殺されたいのか。AI（人工知能）から勉強を教わりたいのか。私はほどほどの便利さ加減が良い。人生だって同じだ、自分の意思で、志や信条で暮らしていきたい。次世代に残すものとして、生き物の文明を再生する準備作業をしておきたい。どうか前進動因を励まして、大切に育て、継承してほしい。山村農耕、家族農耕を継承する若い方々に、私は情理や技術を伝えたいと思う。

〔注1： カミュ（1942）『シーシュポスの神話』、清水徹訳（1969）、新潮社神々がシーシュポスに課した刑罰は、休みなく岩をころがして、ある山の頂まで運び上げるというものであったが、ひとたび山頂にまで達すると、岩はそれ自体の重さでいつも転がり落ちてしまうのであった。無益で希望のない労働ほど怖ろしい懲罰はないと神々が考えたのは、たしかにいくらかはもったもなことであった。その情熱によって、また同じくその苦しみによって、かれは不条理な英雄なのである。神々に対するかれの侮蔑、死への憎悪、生への情熱が、全身全霊を打ちこんで、しかもなにもものも成就されないという、この言語に絶した責苦をかれに招いたのである。この神話が悲劇的であるのは、主人公が意識に目覚めているからだ。しかし、かれが悲劇的であるのは、かれが意識的になる稀な瞬間だけだ。ところが、無力でしかも反抗するシーシュポスは、自分の悲惨な在り方をすみずみまで知っている。まさにこの悲惨な在り方を、かれは下山のあいだじゅう考えているのだ。かれを苦しめたにちがいない明徹な視力が、同時に、かれの勝利を完璧なものたらしめる。侮蔑によって乗り越えられぬ運命はないのである。「私は、すべてよし、と判断する」とオイディプスは言うが、これは〔不条理な精神にとっては〕まさに畏敬すべき言葉だ。この言葉は、人間の残酷で有限な宇宙に響き渡る。この言葉は、不満足感と無益な苦しみへの志向をとまってこの世界に入りこんでいた神を、そこから追放する。この言葉は、運命を人間のなすべきことがらへ、人間たちのあいだで解決されるべきことがらへと変える。シーシュポスの沈

黙の悦びのいっさいがここにある。かれの運命はかれの手に属しているのだ。かれの岩はかれの持ち物なのだ。ぼくはシーシュポスを山の麓にのこそう！ひとはいつも、繰返し繰返し、自分の重荷を見いだす。しかしシーシュポスは、神々を否定し、岩を持ち上げるより高次の忠実さをひとにおしえる。かれもまた、すべてよし、と判断しているのだ。このとき以後もはや支配者をもたぬこの宇宙は、かれには不毛だともくだらぬとも思えない。この石の上の結晶のひとつひとつが、夜にみたされたこの山の鉱物質の輝きのひとつひとつが、それだけで、ひとつの世界をかたちづくる。頂上を目がける闘争ただそれだけで、人間の心をみたすのに充分たりるのだ。いま た、シーシュポスは幸福なのだと思わねばならぬ。}

{注2： 中島敦（1942）『山月記』、中央公論社 名聞利養（略して名利）。}

{注3： 一ノ瀬俊也（2010）『故郷はなぜ兵士を殺したか』、角川書店 日本の＜郷土＞である。個人の感情と国家の論理の間で、郷土がどのようなかたちで兵士たちの死を意味付け、あるいは意味づけなかったことが近現代日本の人びとの戦争観と いうべきものをいかに規定してきたのかを問いたいと考えている。＜郷土＞は人々にとって親しいものであったけれど、同時に彼らを拘束し、死へと追いやるという面も持っていた。民俗学の研究には、あえて不遜な言い方をすれば、「政治」の臭いがしないのである。さらにいえば、そこには、時に「生きている兵士」の視点が欠落しているように 思われる。つまり地域社会—＜郷土＞における戦争受容の問題を考えるのであれば、生きた兵士の苦難と死んだ兵士の犠牲とはどのような相互関連性をもちながら正当化されていったのか、統一的視野のもとに分析されねばならないと考える。彼らは対外戦争が終わるたびに人びとの脳裡から忘れ去られ、のちにある政治的思惑のもとに蘇ってきただけにすぎない。確かに彼・彼女たちにとって＜郷土＞の慰問などの援護は、あるべき兵士・銃後の遺家族として生きることを強いる「監視」であったが、一方で自己の犠牲や苦難の承認、意味付けという意味合いもあり、ゆえに希求されたのであろう。まさに「天皇陛下万歳」と叫んでから事切れるという死の様式美を＜郷土＞を挙げて賛美し、記憶するという図式である。その中で遺族は感情を押し隠してけなげに振る舞う→戦争への怨嗟・反感は表面化しない、という一連のサイクルが完成したかのようである。確かに死んだ弟は「国の礎」となったかもしれないし、先の戦争は「侵略戦争」ではなかったのかもしれない。しかし、侵略戦争ではなかったというのなら、いったい何のため の戦争であり、戦死だったのだろうか。彼女が弟に代わって突きつきたいいくつかの「なぜ」について、＜郷土＞も国も戦後五〇年間を通じて答えてこなかったし、おそらくこれからも答えることのないまま、時間だけが流れてゆく。戦死者たちの問いに生者が正面から向かい合うことは、自分の「何不自由のない生活」と良心を脅かすから危険である。そうであるならば、戦後五〇年間という節目の年における戦死者への態度は「感謝」ととどめておくのが適切なのであって、「なぜ」という問いなどは禁句にするのがいちばん賢いだろう。そもそも日本社会は明治から現代にいたるまで、生者同士の「政治」から離れ、戦死者の立場になって「慰霊」なり「追悼」なりの論理を構想してきたことなど、実は一回もなかったのではないか、ということになろう。}

2017. 5. 18 加筆修正

オリンピックとフクシマ ～教養のない為政者と日本人の虚無奈落

今日七夕、オリンピックの中止を求めて、思想・良心の自由（憲法第 19 条）に依拠し、私の思想・良心に基づき、正直な意見をここに明言しておかねばならない。オリンピックは、福島復興のために集中すべきであって、開催すべきではなかった。その上、COVID-19 への対応で今すぐにでも止めるべきだ。多くの国民・市民を危険にさらすべきではない。

日本人の自粛行為は思想・良心の麻痺だ。強要された自粛ではなくて、個人は自ら考えて、自律して、行為に責任をもたねばならない。このパンデミックの非常事態の中で、オリンピックを強行する政治家、官僚、企業人、アスリート、賛成した国民も、結果に対して明確に自ら責任を取るべきだ。

{注：自粛は自ら進んで慎むこと。自立（対義語、従属）は自分の力でやっていくこと。自律（対義語、他律）は自分で決めたルールに従うこと。}

黍稷農季人は 2017 年 4 月 1 日に、オリンピックについて次のように書いている。原子力発電所崩壊；事故ですか？事件ですか？」チェルノブイリによって世界が変わったとまで、アレクシエーヴィッチが言ったと同レベルのフクシマ（事件）があったにもかかわらず、一旦停止した全国の原子力発電所は中央政府の政策で再稼働に向かって進み始めています。被害者を救済もせず、東京もそれなりに汚染され、今後も汚染の恐れがあるのに、それも忘れてしまおうと、東京オリンピックに資金（税金を含め）や建築資材や、色々なものが流されています。オリンピックで一部の方々に「夢」を与えても、現実には福島から拡散した放射性物質による環境汚染は現在進行形で少しも解決に向かいません。中央政府も東京都も、ぜひともオリンピック開催を速やかに返上して、フクシマ原子力発電所への対処、地震被災地への復旧・復興支援に全力をかたむけるべきだと考えます。強度に汚染された地区には帰らないで他所に移住すべきです。政府と東京電力は第一に全面的な責任を取って、この地区の人々の移住補償をすべきです。何とか低度汚染地域である東京などでは、ベラルーシの高校生たちのように、内部被爆を避ける暮らしぶりを学び、実行すべきです。私は、家族の食材はできるだけ自給農耕し、汚染地域の食材は用いないようにしています。「風評被害だ、非情だ」と言われても、問題は未だに解決に向かっていない以上、ベラルーシの高校生たちのように家族や地域社会の安全を確保することが大事です。情緒に流されず、現実をよく見て、各自が判断すべきです。東京も低度ではあれ汚染されているのです。どこまでが我慢できる程度なのかは、過去に事例が少ないので、分かりません。フクシマを「差別」というのは問題のすり替えで、あってはならないことで、本質は現実を隠さないで、強度汚染地区の人々の生活に関しては無条件 全面保障をすることです。

たまたま、映画化された東野圭吾著『天空の蜂』をテレビで見た（2021.6.10）。いつもながら半分眠りながらの視聴なのでまことにあいまいな記憶で脈絡が定かでない。自動操縦のヘリコプターがハイジャックされ、原子力発電所の上空でホバリングしており、そこにいたずら半分で乗ってしまった子供を自衛隊の遭難救助隊が助けると言ったストーリーだったようだ。

改めて、文庫本を読んでみることにした。映画は小説の前半を中心に描いていて、簡略化されていたようだ。なぜこのような事件を犯人らが起こすに至ったのかについては後半に書かれていた。原子力発電所について詳細に調べて描き込んでいる。だが、この小説の主題は日本の社会における「不気味な仮面で覆い隠して沈黙する群衆」に対して投げられた一石ということと受け止めた。

昨今の権力者たちの虚偽、隠蔽、脅しなどの悪行、重犯罪には憤怒しかない。いとも同列である沈黙する群衆の犯罪。彼らは沈黙によって権力犯罪に手を貸しているのに、被害者面するこの国の群衆。その絶望的悍ましさ。この国の大半の人々には勇気がない。少し脅されると黙り込んでしまう。だから、人々は互いに信頼関係を築けずに孤立し、心を閉ざして引き籠もる。本当に優しい人たちは憤怒を他者に向けて暴力化しないので、自らに

向けて暴力を行使して自殺する。哀しいことに、優しすぎる人には自殺が最終的恨みを晴らす手段になってしまう。しかし、毒人間にとっては他人の自殺や病死など何の損害にもならない。多くの人々は皆、賢明にも仮面をかぶって、毒人間と関りを少なくして、やり過ごし、糾弾することはしない。

○ 福島原子力発電所、国と東京電力の責任

1) 地震、津波対策の巨大防波堤は日々の暮らしと海を遮断する。人力が自然に挑むのではなく、自然に応じて計画対策すべきだ。

2) 原子力発電所は計画的にいずれ止めるべきだ。

3) 被害者の移住を少しでも早く、費用などは保障し、賠償すべきだ。

4) 汚染を拡散しない。放射性廃棄物は福島原子力発電所周辺にとどめる。

○ 教養のない政治家、官僚、専門家などが名利に囚われる責任

1) 虚偽、隠蔽を平然とする良心が弱い毒人間が少なからずいる。

2) 日本人の多数、特に若者たちが権力や権威ある人への信頼を失う。これは虚無に導く、不幸な重大犯罪だ。

3) さらに孤立を恐れ、脅しに弱くなった心無い日本人は自粛し、思考停止する。勇気を出して、深く学ぶために、事実を見る、聞く、読む、知る、考える、学ぶ、書く、話す、そして行動すべきだ。

4) 恥ずかしい老人は確かに多いが、世代を分断したい評論に惑わされず、良い人同士は年齢に関わらず、手をつなごう。

5) 事実の積み重ねから真実を理解し、どう責任を取らせるのか？ 各自がどうとるのか？

6) 深く学び、考えることから未来に希望が見いだせる。

○ 現場の仕事人

1) 職種や肩書によらず、現場の仕事に誠実な人は誇りをもって大概 3K（危険、きつい、汚い）だ。生活基盤に近い職業・産業を世間は 3K、カッコ悪いとして貶めた。楽して金が儲かる業種をもてそやした。こうして、若者たちの職業への先入観をゆがめさせ、就業を猶予させた。

2) 学校教育履歴ではなく、個人学習履歴や職業経験履歴こそが正当に評価されるべきである。日本人はいい加減に学校教育履歴への狂信から目覚めて、堅実に、自由に職業選択をすべきだ。

3) 大学は職業を忌避する若者の仮住まいだ。若年失業率が低いのは、若者の半数が大学にいるからだ。彼らが誇りをもって職業経験履歴に向かえば、海外からの技能実習生は適正数になるだろう。

* 養老孟司の師中井準之助は長らく大学で暮らした人だが、「教養とは、人の心がわかる心だ」と仰っていた。養老は先を続けて言う。他人の心は理解できない（バカの壁）が、共感是可以する。相手の立場に立って考えることはできる。教養は単なる知識ではなく、自分の身につくものだ（養老、東京人 2018）。

現実には薄汚いかもしれないし、ほとんど絶望的な状況、奈落に向かっているかもしれない。そういつている評論家も多いが、子孫の笑顔のために、何としてでも、私たちは希望を見つけねばならない。手をつないで、一緒に行動しましょう。この一文に不備があれば、今後も修正します

2021. 7. 7

保守と保身のなかみ

保守とは、正常な状態などを維持すること、旧来の風習・伝統を重んじ、それを保存しようとする事。また、保身とは、身の安全や地位・名誉などを保つこと（広辞苑）。これらの語意通りに解すれば、伝統を継承する保守や自由や平等、生命を守る保身は大事なことで、必ずしも悪いことではない。ただし、ともに私利私欲のため過剰に保守し、保身することが問題なのだ。何が正常な状態か、何が旧来の風習・伝統の内容なのか、どの範囲で身の安全や地位・名誉などを保つのか。これらが問われることになる。

政党政治では保守 vs 革新、右派 vs 左派などと対立的に構図が描かれる。しかし、今どきは保守党のほうが、「革命・革新・改革」などと連呼していて、むしろ左派政党はこれらの言葉を避けているようだ。政策の中身をしっかりと分析しないと、保守 vs 革新の位置づけが明確にならない。保守が私利私欲による過剰な保身という内容ならば、敬意をもてない。演説は美辞麗句で飾られるが、それは何も実行されないもので、言葉は意味を失う。偉い人たちの日本語の言霊は立ち去って久しい。

社会的地位の高い国会議員や官僚、会社重役などの人々が虚偽や隠蔽によって保身を謀ることは、このくにの子供たちにとっても悪い影響を与える。高い地位の人々が嘘つきでも社会的に許されるのなら、子供や庶民にとってアンパンマンの公正や正義は無くなってしまう。

黍稷農季人は三つの謎を解きたいと言っている。第1謎は、何故、現世の人々は先人の生活文化、庶民の歴史に関心がなく、先祖への敬意を失ったのか。第2謎は、何故に自然文化誌研究会の環境学習活動は有耶無耶のうちに地域社会の有力者から四度も追放されてきたのか。第3謎は、何故、地域住民は地域のために自由民権活動をした人々、また郷土を守るために戦死した人々を沈黙して助けず、敬意を表さず、忘却の穴に放り込んだのか（2018、民族植物学ノオト第11号）。

文福洞先斗はこの謎を解こうとして、次のように応じている。第一の謎の解、過剰な都市の便利に幻惑わされて、自然離れし、生業を忌避して、人間であることを自己疎外しているのだ。第二の謎の解、行政の仕事範囲を超えた成果が出て、村の変容に踏み込み始めたのが為政者に解釈されると、彼らの領分を侵犯し、面子を潰したとして、その後は弾き飛ばされるのだろう。自然を忘れた無知な都市民が恥知らずに山村を軽視し、恩知らずに犠牲を強いてきたため、山民の誇りが痛く傷つき、脆弱になったからに違いない。第三の謎の解、明治維新の功罪のなかに隠蔽された「重罪」である。自由民権の徹底した弾圧（治安維持法）が恐怖を刷り込み、地域社会は沈黙したのだろう。また、足尾銅山鉍毒事件などは常民・市民を守るべき為政者に虚偽・隠蔽によって抑え込まれてきた（2017、ナマステ第130号）。

私たち以外にも事例はいくつもある。たとえば、A村の自然学校Bの代表者が率直に語っていた。20年ほど、村内で活動してきたが、まったく無視され続けた。やっと、最近になって、古具を捨てる際に、使うかと聞いてもらえるようになったそうだ。C市のDさんは有機農業を始めて、親の借金も返済し、産業として成り立ち、海外からも視察に来、また招待もされるようになったが、彼の成功から学ぶ人は出ないで、やはり無視されてきた。私がE村で、空き家を借りて、百姓をしたいと言ったら、Fさんに「あなたのような頭の悪い人間は来るな。Gさんのようにすぐに村から出されてしまうぞ。」と諭された。

私はもとより勉強もできずに、泣き虫だったので、頭が良いなどうぬぼれてはいない。Bさんは長年の知人で、正直者だから、他意や悪意は微塵もない。Gさんは郷土資料館の非常勤職員だったと思う。熱心に生活文化の普及をしておいでだったので、何度か環境学習活動でお世話になった。とても誠実な人だった。

3つの謎を解く鍵があると思ったので、Fさんに率直に伺った。Fさんは町村合併に反対で、Gさんはそれに賛同していた。E村長は土建業者で、合併に賛成であった。郷土の伝統文化にも関心はない。そこで、よそ者のGさんを疎ましく思って、追放したようだ。500人ほどの人口にまで減り、限界自治体崩壊の危機にあるのに、村の為を真摯に思い、活動する人々を迫害するなんておかしいと思う。H町、I町、J村、E村で、いろいろな排除経験を受けてきた。志ある都市民・山民は仲良くしているのに、為政者は何故仲良くできないのだろうか。Fさんの意見では、地域おこし協力隊員は山の暮らしの生活文化も技能も知らない。役場職員は村外通勤者が多く、単に職業を求めてきただけで、その地域の持続継承や振興への志が低い。これらの人々は古老から学ぼうとしない。学校で教えられることが知識と思い、自ら学ぶことをせずに、古老の知恵は時代遅れで、聞くに足りずと思っているのだろうか。

追放・排除の理由を考えてみた。

1. 都市からくる若者の活動への猜疑的排除
2. 不特定の都市民の頻繁な来訪忌避
3. 都市民への不要な劣等感、屈折した嫉妬心
4. 地域内の土地所有や権力争い
5. 思想信条の対立、政治党派や私欲利権争い
6. 個人の人柄への感情的好悪 など。

これらの負の課題を解き、山村に豊かな暮らしを創るにはどうしたらよいのだろう。保守と保身のバランスをとって、寛大な心で、自律した友愛を育ててほしい。このくにの人々は孤独に耐えられず、孤立を恐れて思考停止、付和雷同するが、実際には他者を信頼できずに孤立を深めているのだろう。ここから脱却しなければ、地域社会の再生はない。人々は自然や歴史から学び、暖かい情理に添うべきだ。山民は厳しい自然に挑戦し、共存・共生して、誇り高く暮らしてきた。その生活や生業は三浦梅園が言う深山幽谷に美しく咲く紅の花である。どうか、山民は自然に挑戦する心、冒険心、勇気や誇りを、都市民に学ばせてほしい。弱くなったこのくにの人々の心の形を、V. ゴッホの言うような、大らかに咲く花のように楽しく、幸せに導いてほしい。

2017. 12. 11

生き方、暮らし方それぞれ

自由な心と感じる心があれば 人生は豊か
(葉祥明 2009『三行の智慧—生き方について』)

花を支える枝 枝を支える幹 幹を支える根 根はみえねんだなあ
(相田みつを)

五月晴れの休日、父母の日のプレゼントにより家族で「三大ヴァイオリニスト・コンサート」に行った。東京フォーラムのAホールは5000人の聴衆で満員であった。ぼくはヴァイオリンの音色、楽曲演奏に大いに期待していた。ところが、開演されるや、アメリカン・アイドルをものぐ演出で、まぶしい光、うるさい音、私的なトーク、ヴァイオリンの音色など楽しめはしない。目も耳も開けておられず、ついに頭も心も痛くなったので、10分も置かずして、ホールから逃げ出した。せっかくのプレゼントなのに、申し訳ないと思ったが、我慢していたら、気が狂って叫びそうで、さらに、3日間は寝込むだろうと思った。コンサートが終わるまで、家族を待つ間、美味しいビールを飲んで気を静め、骨董市、版画展、美術館などを巡った。過剰な演出などまっぴらだ。大多数の聴衆であるご婦人方はトークショーを楽しみにしているのだろうが、ぼくはヴァイオリンだけが聞きたかった。

ぼくは自然に近い場所に暮らし、生きていたい。植物の色香、畑の土の匂い、むらの農道、バザールの喧騒、美味しい手料理、人びとの笑顔が好きだ。ビール造りの知人の家を訪ねた。彼はピーボ（キビの発泡酒）を醸してくださった方だ。畑のさらに奥、山間の谷津を詰めていくと、欧風の美しい家があった。周囲はイングリッシュ・ガーデンでたくさんの花々とハーブが植えられていた。広い居間で、彼の醸したビールと、妻女の手作りの昼食をいただいた。素材はすべて、有機無農薬の自家製野菜だ。居間の大窓は額縁のように掛かり、対岸の森を背景に、バタフライガーデンを中心に花々が展開しており、すばらしく濃い景観を抽出している。私の好きなもののほとんどがここにあった。ご夫妻の自給知足ぶりに共感し、おもてなしに心もくつろいだ。

自然物は適応進化を一時も止めはしない。この先真文明の時代の中で、移行の順応を続けてきた。現代の消費文明の中にも、自然物は適応して、新たなニッチを求めている。山から、シカ、サル、クマ、イノシシ、野生動物たちが人里に降りて作物を奪い、街に出没して人を襲う。彼らばかりではない。巨大都市と大陸間交通の文明に順応して、カ、ゴキブリから、病原菌まで世界中の都市にも移動して定着している。自然は公正だ。自然現象に備えなければ人間は守れないし、野生と戦わなければ共存も共生もない。人間の場合は意志ある選択が文化的進化によって、ある程度できる。野生獣のようにひたすら自然選択されるばかりではない。

今、ぼくは大人になったので、青少年のころのように、人の生き方を全否定も全肯定もしない。人が生き方を磨くには課題を見つけて、さらに良くなるためには、部分肯定と部分否定がいる。足るを知る解脱は最終的な目標だが、部分の不足を埋めるか塗るのは、それを課題として見つけて、さらに地道に改善努力を続けることだ。人の間を遊泳して名利をつなぐようなことは、ぼくはもう久しくしてない。名利を得れば、意見を聞いてもらえる。贅沢な暮らしができる。でも失うものやいらないものも増える。自由や時間を失う。世間に迎合するようになる。自分がなくなる。無名で好きなことをしたらよく、世間の評価、毀誉褒貶を気に留めないのが良い。ボランティアは自ら得た労賃を寄付して公共の仕事をする。行政は税金で職業として給金をもらい、公共の仕事をする。

企業は客に品物やサービスを提供して、あるいは公共の仕事をして、見返りの金を受け取る。客は金を支払って、サービスを受ける。他人の知足は思い測れないが、それぞれに、こうした人や仕事は必要だ。世界市民は、自由、平等、友愛を求める自律した個人である。この個人は伝統的には家族、民族の属性をもち、近代的には地域市民、国民の属性をもつ。ただし、現在は移民、難民、無国籍など、困難な状態にある人々も多数いる。それ

でも、意思して世界市民であろうとする人はいるだろう。世界市民は個人がそうであろうと意思するものであって、各地で増加しているが、まだまだ相対的には少数かも知れない。仕事は生きるための営みだ。名声や金銭を得るための職業ではない。名利がなければ行き難い社会ではあるが、無くても生きられるし、無い方が人間として自由・平等・友愛に生きられる。とはいえ、この世では相応の金銭や名利がないと、自由・平等・友愛も得られないこともある。どの程度で知足するかが個人の教養の程度だ。不審・不信の世のなかでは教養は低下する。

希少を尊ぶことはよし悪しである。現場に生きている、希少の当事者からすれば、なにゆえ希少に追い込まれたのか、それでも生きていることの意味が大きいことを語るべきである。希少を良く言うノスタルジーは現場の当事者のものではない。そうでないからこそ、同情するかのように悲壮にも美麗にも描けるのだ。

各地の人々の幸せや不幸にも、心情を寄せる人でありたい。静かに、安心して、自然に沿って、幸せな人生を過ごす別の暮らし方はある。それでも一方で、現代的暮らしには解決すべき不幸は無数にある。台風、洪水、竜巻、津波、地震。事故、事件。紛争、戦争、差別、貧困、飢餓。公害、汚染、汚職、失業。民族、宗教。権力や権威の支配手段としての、宗教の強制が信仰を阻害する。アニミストは自然に沿った信仰だ。黒魔術には合意はしないが、祈りの儀式には賛意をもっても良いのではないのか。自然との関わりを失い、生命ある糧を頂く感謝を忘れ、尊大になることは、生き物としての人でなしだ。謙虚に他種の生命を育てていただく自給知足こそ、再生・復元の拠り所だ。黙っていれば、善事は掠め取られ、悪事は暴かれない。人の事績を掠め取り、自己の名利を得るため、陰徳は消し去られ、虚偽がまかり通る。忘却の穴（オーウェル 1948）に放り込まれていく怒り、悲哀に悩まされ始めた。名声を求めているが、個人人生をかけてなしたことが、ささやかなこととはいえ、身近な人々にとっても、忘却の穴にするりと投入されている。知足すべきだが、敬意を示されないことに、不条理な悲哀を感じる。だから、地位を得た人々は権力や権威にしがみついているのだろう。でも、生涯、地位や名声に無縁の市民であったなら、そんな悲哀は感じないのだろうか。最初から諦めたのか、悟っているのだろうか。悟りを得て、ドロップアウトしたのだろうか。忘却の穴というのは、現代文明の基本的システムに組み込まれている。まず個人に、地域社会に、学協会や政治団体のような組織にも、行政・司法機構にも、結果的には大小の歴史にも。あまりに複雑な社会なので、単純な忘却かもしれないが、記憶からあふれ出る。心理的負担を減らすために忘れ去りたい。意図的に忘れることにして、無かったことにする。

集団内で黙殺する。いじめの本性は意識的無意識的に機能している。身近に機能すると、神経的につらい。厭世的になり、引き籠りたくなる。個人のうちにもこの穴はある。事績を記録しておかないと、忘れたいことも忘れたくないことも、忘れてはいけないことも、何もかもこの穴が吸い込んでいく。これで楽になることもあるが、自尊心が損なわれることもある。事実がすべての基礎だ。オーウェルが『一九八四年』を書いていた 1948 年には世界人権宣言が採択された。K. M. ガンジーが凶弾に倒れた。公的歴史が消し去ろうとも、黙殺しようとも、個人史、地方史の中に、残しておきたい。残しておけば再発見されるかも知れず、後世への最大遺物として、未来世代の思索に役立つかもしれない。歴大の著作のうち、そうした優れた書籍が、現代人に価値観形成の基盤を与える。古典は大事だ。アナログの本を無くしてはいけない。デジタルは改竄される、すぐに消し去れる。

人間には様々な、細々とした欲望が心の深層に蠢いている。それは善悪以前の、剥き出しの欲望である。これらの欲望の実行を制御するのは人間として順化してきた社会的行動、基盤の文化である。これは心の構造のどの部分か。剥き出しの欲望の発現は、抑制、促進ともに制御する心の構造を構成する微細部品、たとえば螺子や発条、あるいは振り子や磁針、これらの緩みと緊張、歪みや捻じれによる衝動に基づく、非文化的、非社会的な異常行為である。この発現は、心の構造の発達、すなわち文化的進化によって制御されるものだが、退行期にある現代文明が欲望を刺激し、即自・即時的な発現を促進する。即自・即時的に面白い、欲しいを制御できずに、行為し、自他を傷害する。

ほとんどの人が、小さなスマホの仮想世界の中で過ごしている。少し前まではテレビの中がほとんどであったが、スマホが架空・仮想、嘘世界の伝道物のアイドルになってきたようだ。便利な仮想現実のゲームは暗い欲望を代償するが、境界を見失った心は制御できずに行為する。オリンピックでの、才能あるアスリートの躍動する姿は素晴らしい。しかし、スポーツは万人が自ら楽しむもので、特別な才能の持ち主を観戦するだけのものではない。莫大な税金を特別なことに偏重して使用するのは良くない。文化的生活が市民に満たされることが優先されるべきだ。素晴らしいものを見て楽しむことと、自ら行って楽しむことは同等に、あるいはむしろ後者がより大切だ。自ら行わないで、見るだけで、同一化して仮想現実に入る便利は人間を生物的にも文化的にも退化させる。他の近・現代人の意見も聞いてみよう。赤堀（2012、2015）は次のように語っている。

これでは八雲が懸念した西洋かぶれの青年達の政治と変わらない。新自由主義で社会がおかしくなっているところに、さらに国家主義の亡霊が復活してくることを心配しないといけなくなってきたのか。しかし、一方において国民が変わりつつあるのも明らかだ。例えば問題解決のためのNPOやボランティア活動も増えてきている。なぜ、一介の元ビジネスマンが、こんな大仰な題で発言できるのか。それは今の政治家、経済学者が経済の現場を見ていないからである。専門家も必ずしもあてにならない。社会全体を見渡さないからだ。現場から社会全体を見渡すにはビジネスマンのほう方が適している。研究者でない彼の論拠は不十分だが、全体を見ての論考は傾聴すべきだろう。

小泉八雲 {注：パトリック・ラフカディオ・ハーン、ギリシア生まれのイギリス人、日本に帰化}、夏目漱石、田中正造らを引用して、直観的な論考をしている。

八雲は西洋文明の本質を知性と捉え、それからもたらされる負の側面としては利己主義の伸長を最も問題視するとしている。西洋の優れているのは、ただただ知的な点にある。それに較べて日本はその点はまだこれからにしても、徳においてははるかに優れている。日本にはまず第一に、無私無欲、自己犠牲精神がまだ生きている。この精神を支えるものとして、神道、儒教の教えを挙げる。明治維新において、天皇のもとに国民を結集させたことは、明治政府の懸命な策であったと評価する。近代国家で政教一致の政体をとる国家は世界で他にない。おなじ「自然」を見るにしても、われわれ西洋人は、東洋人が見るような具合に「自然」を見ていない。われわれは、東洋人ほど、リアリスティックには見ていないし、また、そう「自然」をくわしく知ってもいない。われわれは「自然」を擬人化して眺めるからである。西洋人の、美的感受性の資源ともいうべきものは、そもそもの太初からして、人間美の認識にあったのだろう。一様に融通性に富み、しかも物にすぐに感動しやすいこの国民は、大いなる目的を目指して、挙国一致で邁進してきたのである。日本の国民性のうちに、利己的な個人主義が比較的少ないことは、この国の救いであり、それがまた、国民をして優勢国に対して自国の独立をよく保つことを得せしめたのである。

西欧の教育の目的は、個人の能力と個人の性格の養成、つまり力に富んだ独立人を産み出すことにある。ところで日本の教育は、外見は西洋流でありながら、だいたいにおいて、従来も、またこんにちも、つねにまったく反対の方式に基づいて行われている。その目的は、個人を独立行為のために訓練するのではなく、個人を共同的行動のために、つまり、厳格な社会の機構のなかに、個人が正しい位置を占めるのに適するように訓練してきたのである。

しかし、日本の若い世代の諸君は、今のところ過去の日本を軽蔑している風があるけれども、かならずいつの日には自国の過去を、ちょうどわれわれ西欧人が古代ギリシアの文明を回顧するように、回顧する時がくるであろう。簡素な楽しみを楽しむ能力を忘れたこと、人生の純粋な喜びに対する感性を失ったこと、それを反映している今は滅びたすばらしい芸術を忘れたこと、この忘却をいつかは哀惜する日がくるであろう。

次に、赤堀は夏目漱石を取り上げて、{漱石は}近代の個人主義の伸展は、一方において利己主義や我執を生む。しかし西欧の思想ではこれらを克服できないことを見抜き、この問題の解決を生涯の課題にすることを決意した、と記している。漱石は悟りを得ることを願っている。そして既存の宗教とくに頼らず、自分の考え、自分の力で達成することを考えている。一九一四年（大正三年）に学習院大学で行った「私の個人主義」という講演も有名である。漱石はここで二種類の自己本位を述べていると思われる。一つは自分に疑問や迷いがあったら徹底的に詰めてみよ、自分でやって見なければ何も分からない、勇気を出して進んでみよということを述べている。もう一つは、自分の取り組むべき生涯テーマが決まったがそれは、西洋文明の受容とその同化を自分の頭で考えるということまで進むのであろう。第三に、シャカの縁起の説、四諦の説および八正道を引用して、論考している。この結果、赤堀は、投げかけられた問題が現在でも解決されたとは言えない。ただ近代文明の限界が明らかになってきたと言えるだろう。近代文明は人間が自然を支配できるという人間中心主義、進歩の思想、科学技術万能主義、経済効率至上主義に基づいている。そしてこの考え方を支えているのが、近代理性主義という思想である。日本では昔から国民は統治する対象にすぎなかった。それによって国民の側にも権力になびく大勢順応主義や、責任を回避する事なかれ主義がはびこった。個人の生き方としては立身出世主義が植え付けられたのではないだろうか、と論議を進めている。さらに、D. マハリッジと田中正造を引用している。

{マハリッジは}そして現在自分達が頼れるのは自分達自身とコミュニティだけだ、これを再生しなければならないと言う。暮らし方も昔のように質素にしよう。借金に依存した消費体質を改めようと言う。空き地の都市園芸が盛んになっており、自家野菜による自給自足ブームが起きている。そして、それは単に生活の助けというだけでなく、大地とのつながりと、そこから生じる心の安らかさを生んでくれる。そしてまた仲間が見つかることから自分はコミュニティの一部だということを自覚させてくれる。このような自発的なコミュニティ作りに、私達の未来が託されていると言う。{赤堀}アメリカ社会のひどい現状を見ると、とてもそんなこと{注：資本主義の勝利}を言えたものではないだろう。貧富の極端な格差をもたらし、労働条件の最悪化を招き、公的なものまで全てを金儲けの対象にしてしまった。トリクルダウンによってだんだん下の相に富が移転していくなどという理論はまったくのウソかごまかしであることが明らかになった。またサブプライムローンによるリーマンショックによっても理論の破綻が明らかになった。第二次世界大戦を引き起こした恐慌を避けるために考えられたケインズ流の修正資本主義を否定してしまったのだから、そう言うことが起こるのは当然のことである。一番しっかりしていたのが北欧福祉国家と言えるの

ではないか。その競争力がどこから生まれるかというと、自主性や想像力の尊重、構成や平等への信頼、そしてそれらを育む教育の重視ということであるという。

{注：田中正造文集}

被害民七百名余は被害地から徒歩で大挙出京し、政府各省、議会、新聞社などに鉱毒の惨状と鉱業停止を訴えた。これが第一回の「押出し」で、以後大挙請願の「押出し」は一九〇〇年二月までに四回行われた。これが効いたのか、明治三十年に内閣は足尾銅山鉱毒事件調査委員会を設置し、古川市兵衛に鉱毒予防工事を命じた。このころから正造は政府に失望していく。藩閥政府は自己と国家を混同している。一国の基礎は国民一般の上に確立しなければならないと言っている。

しかしこの請願行動{第四回押出し}は途中、利根川北岸の川俣にて、憲兵・警察により大弾圧を受けてつぶされた。相当数の負傷者、逮捕者が出た。正造はすぐに議会において、「亡国に至るを知らざればこれ即ち亡国の儀につき質問書」を提出し、抗議の趣旨演説を行った。政府、議会、政党に失望した正造は翌明治三十四年十月に衆院議員を辞職する。正造の最後の拠り所は天皇だった。後の軍国主義の時代に田中正造は義人として祭り上げられ軍国主義の宣伝に利用された。しかしその主張は全く違ったものであったことが以上の記述で明らかだろう。農は土なり、土は不動産なり。また土より生ずるものを食す。即ち土を食ふ。町村自治の外、日本を守るものなし。

文献

赤堀芳和 2012、『我を超えること—近代理性主義の克服』、講談社ビジネスパートナーズ。
赤堀芳和 2015、『共生の「くに」を目指して—働く者が報われる社会に』、講談社エディトリアル。

2016. 8. 21～2017. 5. 14～5. 25

都市と田舎 ～ 生活文化の再創造による継承

はじめに

文字化、映像化では描ききれない技能と物心が日々の暮らしの中にある。これらは生活の事細かな現場で、繰り返し経験し、身体で覚えることどもであり、総体として伝統的知識体系、あるいは伝統的知恵と呼ぶものである。研究者たちも、ましてや市井の人々は文字情報で、最近ではデジタル情報で残せば、必要に応じて再現できているかのようだ。確かに大まかにはできるだろうが、微妙な細部に至ると、かなり難しく、実際には再現できないことが多いのではなかろうか。つまり、現場で、繰り返しの直接体験で身につけないと、習得できず、継承できない技能と物心があると思うのだ。

過疎高齢化に重ねて、人口減少、地域社会の崩壊への危機意識が世上で姦しいが、大方は現代文明の根底にまで下りた課題探究、原理的な思索に至らず、場当たりの皮相の解決策を、焼け石に水のごとく、打っているにすぎない。しかし、他方で、少ないとはいえ、優れた先人たちが現場で実践し、蓄積してきた成果は見向きもされない。過疎高齢化の問題は地域経済の崩壊だけではなく、根源的には高齢者から学ぶべき現場での経験の蓄積、伝統的知識体系の再創造と継承が途切れそうな、歴史的な危機的タイミングにあることだ。日本で暮らしてきたという基層文化が統合性を失い、歴史的に崩れる変曲点にあることだ。各地域における日々の暮らし文化の根にある伝統的知識のありようから思えば、オリンピ

ックや原子力発電所にまつわる補助金行政に依存しない、堅実な経世済民の方策があるはずだ。率直に言えば、今からでもオリンピックなど断り、競技場よりも福島原子力発電所の廃炉処理と高放射線量地域からの住民移転を急ぐことに、予算を重点的に使用するべきだ。オリンピックをしたい国はいくらでもあるから、優先順位からして、サッカーのように賄賂を私物化するよりも罪は軽く、正直に事情を説明して謝罪すれば済む。生命に致命的な環境汚染を防ぐために、放射性物質を太平洋に流し続けてはいけない。重ねて、放射性物質汚染地に住民を帰還させるなど、行政府も東京電力も責任逃れは言わないで、震災被災地の住民が暮らしを立て直せるように、地域社会を支援することが最優先だ。海外からの不確実な侵略の危機を煽るよりも、国内にある現実の危機に目を塞がないで、しっかりと見据えて、対策対応すべきである。聡明な政治家は明治維新政府以来の「勝てば官軍」という偽善の政策手法を断ち切って、誠実に市民社会の問題解決のための政策立案し、実行すべきだ。市民は他人事とせず、税金以外の任意の寄附や労力、市民社会の社会的共通資本を豊かにすることに、自分事として、自らの意思によりできること、したいことで地域社会に参加すべきだ。信頼を確認し合うことこそ、地域社会の強い回復力だ。

都市と田舎の比較

田舎 country (nation, land) と都会 city の比較を R. ウィリアムス (1973) がしていたので、彼の著作の文脈から田舎と都会を対比してみた。田舎と都会の現実的様態は歴史的にも多様で、現代的にも中間的な状況 gradation が一般的で、一面的な見方は不合理である。イギリスの歴史的経験は日本にとっても大いに参考になる。

イギリスにおける小自作農とは農村民主主義の現場に生きていた独立心の旺盛な、優れた人格の持ち主である。共有地は貧民の相続財産である。

{注：エンクロージャー囲い込みがコモンズを奪った。}

小規模自給農耕とは、自前の農産物、あるだけで満足感、自分の労働を自分で支配できる。賃金経済の圧倒的支配下に長期間置かれた結果、このような特殊な領域は決定的な重要性をもってきている。こうした社会的意味でも、食料安全保障の意味でも、家族小規模自給農耕は重要な意味をもつ。小規模農耕は伝統的な知恵と技能がないと良好な生産をすることができない。農業機械を使用しなくても、農具レベルで、身体的無理をせずに、楽しく、家族のために必要な少量生産をするのである。安全で、美味しい素材を作れるのだ。これで、潜在自給率はかなり高まるはずだ。市民農園は都市緑地公園などとともに社会的共通資本（コモンズ）として、地域行政府が借り上げるか購入して拡充すべきである。このことに関する小論は別に記した（木俣 2014、2015a、2015b）。

生活文化の再創造による継承

『遠野物語』を出版したころ (1910) の柳田 (1968) の中核概念は「山人」で、山人とはアイヌをはじめとする先住民族であり、日本人の混合民族説の立場に立っていた。ところが、山村に強い関心をもっていた柳田は稲作を携えた単一民族説の立場へと変化した。日本人が稲作・単一民族であるとの説には雑穀研究の立場からは承知できないので、私はその理由を長らく知りたと思っていた。稲作の呪縛は、明治維新、さらに言うなら太平洋戦争の頃に、強められたのだと考えるようになった。この呪縛が、日本の食糧自給を低下させている生物文化多様性に関わる主原因と見ているからである。

小熊（1995）は、私のこの疑問や課題意識をかなり明快に解いて見せてくれた。柳田は、「山民はコメが好物で、コメほしさに平地民と交流して同化されていった」と言っているが、山村には麦・雑穀があり、「米の力」で服従を強いられたとは、私には納得できない。小熊によれば、柳田の思想は次のように概観される。気になった記述を掲げておく。

日本は異民族のかわりに日本民族の仲間を奴隷化したのだ。生産を担いつつ奪われる 常民は、輸入文化に享楽する都市の利口者たちに虐使される、現代の奴隷である。北へ北へと此国を開いてきた民族が、今以て稲を作らずには片時も安心して居られぬこと、稲が故郷の亜熱帯の植物であって、神の粢も祭の日の米の飯も、是が第一の資料である。山国では兵役に出て始めて米と云ふものを口にした人が幾何もあります。稲作が健在 なかぎり、列島共通の民俗を掲げられる。そのためには、稲を伴わない日本人があつてはならず、稲作が輸入文化であつてはならなかった。日本民族は稲をたずさえて南島から渡来し土着した民族でなければならず、列島に先住民族がいてはならなかった。稲作単一民俗の島国という図式は、その後の日本の自画像形成に決定的な影響をのこす。そして排外と平和の二重性は、戦後の単一民族神話の基本的性格となってゆくのである。

私は植物学者として、柳田のように稲を特別視する気はない。常民はそれぞれの環境の中で、得られる食材を大切に調理してきたのであり、麦、雑穀、芋、その他の栽培植物も、同じく重要な生き物であるとの認識で、これらの起源と伝播を調査研究してきた。征服者の食糧が優位にあるのは認めても、常民は居住する歴史も加えた自然環境の中で、自らの伝統的栽培植物、在来品種を大切にしていくなさるべきだ。山村は稲を作れなかったのではなく、本来作らなかったのだ。稲の石高制になってから、さらには第2次大戦中の配給制度によって、環境的に困難であっても、山間地で無理に稲作を始めたのだ。後者の場合は戦後しばらくして、植林地などされてしまった。意図されてか、歴史的順序が間違つて認識されているのである。

中部山岳地周辺やその以北は堅果類など自然の食材が多く、縄文時代の狩猟採集、さらには焼畑農耕が豊かに行われてきた。芳賀ら（1991）は、飛騨が大和王権の米文化圏に抵抗し続けた雑穀文化圏と認識しながら、それでも、調査研究では「米への願望がすべてとってよいくらいであった。それほど山国飛騨は米を求めて他国と交流している」と記述しているように、柳田の稲作文化論に強く影響されて、地域の歴史環境への見方に公正さを欠いていると思われる。他方で、「飛騨牛供給地であり、温泉群と登山、スキーなどのレジャーランドを形成している。それは日本人が自然を愛し自然破壊を回避し、精霊のやどる山国の自然信仰と自然を守りつづけ、過疎を避け、国土の各地を人すむ里として再生復活創成をくりかえしていただくための一事例として。豊かな調和ある発展をめざすのは、いつの世でもその土地にすむ人々の志である。できる限り土地に生きたいのが故郷をもつ人々の志でもある」、とも述べてもいる。地域社会に強い情愛を抱くのなら、伝統的な暮らしを活かす風土産業を盛り立てたい。山間地で地場産業を経営していくためには、自然に添った小規模多様な産業を興すか、都市近郊地では自給的な生業を継承しながら、都市で働く方法もとれる。私は長年調査研究をしてる中で、都市住民が山村民から伝統的知恵、生活技能を学ぶ活動を「環境学習」観光産業として振興することを提唱してきた。トランジションした新たな文明のありようを望見するに、次世代を受験勉強に追い立てるより、人生を豊かに自分の手で組み立てられる知恵や技能習得の方が大切だ。

山村の人口維持機能の研究で、三井田（1979）は、天然資源を活用しているいくつかの村はそれほど過疎化していないことを明らかにしている。しかし、この事例では、山菜

採集、ダム建設、スキー場経営であり、また、交通の発達と観光客の入込であり、率直に言えば、皮相な可能性を示しているに過ぎない。その後の、一層大きな高齢化の課題には対応していない。

『風土産業』は三澤（1936）が、第二次世界大戦の前夜、2.26 事件の起こった年に、長野県の青年講習会で講演した要旨を整理したもので、彼の門人河角が三澤の逝去（1937）後に、敗戦からの日本の再起を期し、師の著作を若者のために復刻（1947）したものである。地震学者であった河角は序で次のように書いている（注：現代漢字に書き換えた）。

我が国は今未曾有の艱難に際会している。由来我が国ほど天災の多かった国も稀であるが、我等の祖先は立派にこれに堪え通した。我々もこの禍を転じて福となす力は祖先から受け継いでいる筈である。我々は明治初年の我等の父母よりも遙かに良い境遇にある。然も過去の誤れる主義政策の桎梏は今や取去られたのである。勇気を取戻し、道義に立返ろう。本書は正に一昔前、日華事変も始まらぬ世界不況時代に 人口過剰に悩み、疲弊の極みにあった地方振興のために叫ばれた南米移住も満州移民にも反対した一先覚者の終生の体験と思索を経緯とする研究論策である。

三澤は本文の 中で次のように述べている。

由来、時・処・人は三位一体である。風土はそこの大地と大気との接触から招来された純自然物である。従って無価格ではあるが、しかし極めて価値の高いものである。あらゆる産業、あらゆる生活は不知不識、この風土と深い交渉を持っている。否、有識的に持つべきである。その最も根本的着眼は、新作物・新品種の発見或いは育成が即ちそれである。その地方、その郷土の開拓・振興は、その地方、その郷土の人以外に望んでもそれは無理である。「自分のことは自分で」。従って、真の適地適作主義の実現、所謂風土産業の招来には、より以上各地方人士の覚醒が肝要である。特に各地青年諸君の覚醒と奮起とを深く期待するものである。要するに今後の産業は、もっと頭を働かせた、もっとそこの風土に即した、更に言い換えればより大自然に即した、即ちその大自然を基調としたものでなければ、真に堅実な産業として安心しているわけにはいかない。我等の郷土も亦、そのかわりを全世界に持つ。されば郷土に対する真の理解は、その先行きとして全世界に対する深い教養を要求する。

三澤の論説は戦争前夜のあの時代に、非常に強い自己抑制を利かせながらも、遠い世界と未来を凝視していると感服した。敗戦後にも、この志を受けた河角の曇りなき、三澤の思索への真正な理解に高い敬意を表したい。学問の系譜、その向上とさらなる蓄積はこのことのほかにない。この国の不可解は、地域の優れた先人から学ぼうとしないことだ。さて、田舎と都市との間の障壁を取り除き、人々の幸せな暮らしを回復していくために、トランジションの試行を進めたい。この実行にはまさに伝統的な知識や技術を体験的に学ばねばならない、これらを伝える人々はすでに高齢を迎えている。今のタイミングにおいて、生活文化の再創造と継承の機会はないと思い決める。エコミュージアム／日本村塾ではひたすら先人から体験的に学び、ともに思索していきたい。誰がどう言おうと、黙殺しよう、「自分のことは自分で」きめて、行動するのである。

引用文献

芳賀登編、山の民の民俗と文化―飛騨を中心にみた山国の変貌、雄山閣出版、東京、pp. 527.
木俣美樹男 2015a、生きるという任意・自律的な営為を動かす心情の省察、民族植物学ノオト第 8 号、印刷中。

木俣美樹男 2015b、ドイツ散訪、<http://www.milletimplic.net/essey/germvist.pdf>

三井田圭右 1979、山村の人口維持機能—その地理学的研究、大明堂、東京、pp. 211.
三澤勝衛 1952、河角廣編 1986、風土産業、古今書院、東京、pp. 257.
小熊英二 1995、単一民族神話の起源—＜日本人＞の自画像の系譜、新曜社、東京、pp. 450.
柳田国男 1968、定本柳田国男集第四巻、筑摩書房、東京、pp. 508.
ウィリアムス、R. 1973、田舎と都会、山本和平・増田秀男・小川雅魚訳 1985、晶文社、東京、pp. 425

2015-7-19

第4章 先真文明の時代

先真文明における小規模家族農耕の展開

1. はじめに

自らの食べ物を自ら獲得することは生き物としての根本原則である。ところが現在は人間の多くは都市に居住するようになり、消費者としての生活様式に画一化して、多くの人々はこの原則による生業を忘れ去ってしまった。近・現代におけるこの経緯については無芸大食への奈落としてすでに考察した（木俣 2013）。現在、忘れ去られようとしている自らの食を得る原則を未来への価値として再考するために、ホーム・ガーデン研究会によって自給農耕と生物文化多様性保全についての調査研究を行った（木俣ら 2014）。

この研究会では、東日本大震災後の東北地方の農山漁村のほか、中部から関東地方の山村、および内戦下にあるパレスティナのホーム・ガーデンや小規模家族農耕における生物文化多様性保全と食料安全保障に関して論考を深めた。家族や地域レベルにおける食料安全保障に関して、さらなる解決策を求め、考察する過程で、先真文明を考えることに関連して、インド憲法を起草したアンベードカルへの敬意から日本国憲法にも関心をもつようになった。世上姦しい第9条改訂に限らず、市民として自分で日本国憲法の中で関心ある条項について思索してみた（木俣 2016）。その後、NPO 法人環境文明 21 の憲法部会が環境原則を憲法に追加する提案を進めていたので、部会に参加させてもらい、伝統的知識や生業技能、生物文化多様性保全と食料安全保障を憲法レベルの課題として検討する必要があると考えるに至った（木俣 2018、2019a）。この検討過程で、江戸時代の徴税、明治期の土地制度・税制、さらに敗戦時の農地改革に、今日の課題の原因が胚胎しているのではないかと考えたので、まず、近・現代史 を振り返ってみることにする。

1) 日本の近代の税制：土方（2004）によれば、江戸時代から明治期に移行する頃の税制は次の通りであった。概要を要約して引用する。

江戸時代の土農工商の階級において、主な納税義務者は農民で、他の人々はほとんど徴税されなかった。年貢は村民全体の共同責任であり、年貢の米納は厳重な検査の上、浅草蔵前の幕府米蔵に運んだ。金納は米・麦等の畑生産物を地廻り米穀問屋に売って貨幣に換え、馬喰町御用屋敷に納めた。四公六民または五公五民の年貢を納めれば、百姓が生活のために米や雑穀を売ることができた。知行取を除いた蔵前取の武家は自家飯米 以外を、札差を通じて換金し、衣食住の生活費にした。この地廻米が米屋（舂ツキ米屋）を通じて江戸庶民に販売された。江戸時代を通じて日本の人口は約 3,000 万人でほぼ安定していた。全国のイネ生産は約 3,000 万石であった。江戸の人口は約 100 万人で、18 世紀初期から世界一の大都市であった。富農に土地が集中することを避けるために、1643 年に田畑永代売買禁止令が出された。明治 6 年に太政官布告により地租改正法が布告され、江戸時代の田租が米納、畑租は金納、年貢割付状による村の連帯責任納付制度は全廃されて、田畑の地租はすべて金納となり、地券を所有する者が納税義務者となった。この結果、各村の田畑、屋敷地、山林等の一筆ごとに地番が付けられ、所有者、地価が確定した。当初の税率は地価の 3% で、実質的には江戸時代の年貢と同程度の負担であった。

このように、江戸時代から明治期に移行する時期における農林地と税制度が、第 2 次世界大戦に敗北したことによって、大きく変化することになった。温存されてきた地主制が

解体され、土地を直接耕作する小作人が農地を所有することになり、連合国軍総司令部 GHQ による民主主義的な改革で最も成功した政策とまで言われた。

2) 昭和 21 の農地解放

岸（1996）によれば、農地解放の経緯を要約すれば次の通りであった。この農地改革の結果が 70 年ほど経て、どのような結果を招いたのかを検証するためには、歴史を遡って、江戸時代封建制から明治期の地租改正を経て、敗戦による農地解放に至る経緯を振り返ってみる必要がある。

敗戦後すぐに、地主制解体・自作農の大量創設という農地改革が行われた。1945 年、幣原内閣の農林大臣であった松村健三は、農地は実際に耕作するものが持つべきだという自作農主義者であったので、食糧問題の解決には農民に安心を与えることが大切であり、それには自作農を広くつくっていくことだと述べていた。戦前の大地主は最大約 1,800 ヘクタールも所有していた事例（岡山、山形）がある。地主は農地を小作人に貸して、小作料を農産物で受け取っていた。小作料は五割前後であり、小作人はみじめな状態であったので、小作争議も頻発した。大日本国憲法下の国会議員は地主側の立場に立つ人が多かったので、地主と小作人の関係は封建的ではなく農村の淳風美俗だとして、農地改革には否定的であった。連合国軍総司令部 GHQ の改革案は 1946 年に出され、在村地主の小作地保有面積は都道府県平均 1 町歩、北海道 4 町歩を限度として、不在地主の小作地保有は認めない、自作農の農地保有面積は都道府県平均 3 町歩、北海道 12 町歩を限度とする、などであった。1950 年に自作農創設のために用意された解放農地は 193 万町歩（全農地の約 37%）で、地主制は崩壊し、日本の農村は小規模な自作農の集まりとなった。例外は林野と牧場で、林野は解放の対象にならず、牧場は 22 の例外を除いて、40 町歩が保有限度とされた。農地改革の結果、高率の農作物による小作料から解放されたので、農家経済は改善され、生産意欲も高まった。しかし、零細農家を大量生産したことは、その後の農業生産性を高めることに阻害要因にもなったとも考えられる。当時、復員軍人や海外植民地からの引揚者、食糧不足の都市から移住してきた人々で農村は潜在失業者で膨れ上がっていたが、解放農地により雇用を作れたので、敗戦後の食糧不足に対応して、増産に寄与することになった。シャープ勧告（1949）に基づく税制改正で農地にも固定資産税がかかるようになり、農地も資産価値を持つようになった。農地法（1952）は自作農主義に立ち、農地の売買、貸借を厳しく制限した。この結果、農家の多くは農業経営者というよりも小土地所有者としての性格を強め、今日に至るまで、兼業化、高齢化して事実上、耕作をやめても、規模拡大を望む農家に売ったり、貸したりしない。

この岸による概説はとても正鵠を射ていると考えられる。敗戦後の国の政策が第一次産業軽視にあるのなら、その反省の上で、次に私たちはこの現状を改善し、家族、地域レベルで食料安全保障を得るために、市民が新たな積極的評価をもって小規模家族農耕を社会政策として検討し、実践することを望みたい。

2. 生業の再考

食料を自ら得る原則に加えて、また、人間の暮らしの原点に立ち返って、生きるための仕事、楽しみや幸せの豊かな意味について考えてみたい。まず、その基盤をなす生業とはなにかを、本来の意味と現代的意味の両方から再検討することから始める。1) 生業について通俗的には生業という用語は、生活のためのしごと、なりわい、すぎわい、としている（広辞苑）。また、生業という漢語が日本に伝わり、同じ意味を持つなりわい、すぎわい、という大和言葉に当てられた（chiebukuro.yahoo.co.jp）。今日、生業は職業と同じ意味（漢語的表現）に用いられることが多いようだが、本来は、職業以前の、暮らしのために

必要な仕事であったと考えられる。春田（2008）は「自然のもつ多様な機能から労働・生活に役立つ価値を引き出す行為」と定義している。しかし、中島（2008）が調べた古辞書にみる生業（ナリハヒ）は、古代・中世から近世の初めころまでは農事に関するものに等しかったが、次第に、産業・職業の意味あいが濃く変化してきている（国立歴史民俗博物館編 2008）。このために、たとえば英語表記だと生業は occupation、calling、職業は前 2 語に加えて vocation, profession, trade、産業は industry ということになる。

私は英語では subsistence が近い内容を持つ語だと考えてきたが、春田（2008）の定義はこの語感におおよそ合致している。実際に、subsistence は、① 必要最低限の生活；生計，暮し；生活手段. ② 存在，生存；実在. ③ 扶養，飼養. ④ 《哲学》自体的存在，時間を超越した存在、の語意をもつ（ランダムハウス英日辞典）。さらに、最小限度で自ら維持、自助する活動と事実、あるいはこれを行うこと。敷衍して、売買のためのどのような余剰もなく、自らの利用と消費だけのために満たされる水準で生産することを意味するか関連すること、と解説がある（オックスフォード英語辞典を和訳）。

こうした見解を勘案すると、あながち私の subsistence に対する語感は悪くはなさそうだ。また、マードック（Murdock 1959）は、subsistence economy 生活経済の用語内容の分類をして、狩猟・採集、漁撈、素朴な primitive 農耕・牧畜および素朴な園芸を 4 あげている。また、Keesing and Strathern(1998)は、現代の採集・狩猟民は、豊かな環境にあった旧石器時代の人々とは必ずしも同じではなく、楽しみや寛ぎの時間をもっていると言っているが、現代の生業は自然に関わる自由な楽しみを含んでいるということである。ミズン（1966）は、現代の狩猟採集民の心の構造はすぐれて統合されるまでに進化していると述べている。この様に subsistence を捉えるならば、過剰な便利と虚無に苛まれている現代社会に、素のままの美しい暮らしを週末だけでも取り戻せば、私たちの人生はかなり楽しく、幸せになると考えるので、生物文化多様性や生業技能は再評価して、再創造しながら継承するべきである。希望する人々は、耕作放棄・相続放棄された農林地を借りて家族自給農耕し、自然の中で山菜採集などを、節度をもって自由にすれば、自律知足し、物心ともに充たされて自立するだろう。それらの農林地は私的財産としないで、社会的共通資本 the Commons と見なしてほしい。

たとえば、エコ・スタディ・ツーリズムともいうべき、山村での環境学習を核にした観光業は社会的共通資本としての山林農耕地を保全しながら、生物文化多様性や生業技能などの伝統知を保全、継承し、都市民にも伝えることで成り立つことができる。都市民も環境保全技能を学び、全体自然を畏敬し、暮らしのためにお裾分けにあやかり、保全に努める。さらに、生活技能を学び、週末だけでも自然と近接して、地域社会に暮らす。そうすれば、都市の過剰な便利さゆえの虚無や生き物性の衰微、心に与えるこうした環境ストレスはかなり軽減される。現代社会の蓄積してきた諸問題も、相応に解決に向かうだろう。

2) 産業の歴史的構造

一般に、産業は次のように階層化分類されてきた。第一次産業は農業、林業、水産業など、狩猟、採集。第二次産業は製造業、建設業など、工業生産、加工業。電気・ガス・水道業。第三次産業は情報通信業、金融業、運輸業、小売業、サービス業など、非物質的な生産業、配分業。第一次産業から第三次産業までの発展は歴史性を持っており、どの時代にも営まれていたとはいえ、時代が新しくなるにつれて、特に産業革命以降、次第に第一次産業中心から、第二次産業、第三次産業を重視する方向に進展してきた。この経緯から、

日本では近代を迎えて、殖産興業を唱えて、第一次産業を軽視し、第二次産業を重点化し、さらに現在では第三次産業に邁進しているように見受けられる。国策で食料生産を海外依存し、企業は工場を海外移転し、さらに庶民も加えて情報通信、金融や物流に過剰な便利を求めている。

しかしながら、産業基盤を支えているのは、日々ほとんど意識しないのだが、実に大自然である。また、人工的要素が多い都市に暮らしていても、動物である人間は自然的要素なしでは心身に環境ストレスが強くなり、暮らしが息苦しくなる。自然的な農山村における生業活動を楽しみたい。つまり、自然とのかかわりが強い生業や農耕、農林水産業が生活の基層にあるということを思い出し、自ら食料を得るという原則を忘れないことである。何もかも機械や人工知能にお任せではなく、これらが発達して余暇が多く取れるのなら、週末であれ、月に1度であれ、野外活動や生業など何らかの形で、生き物であることを楽しむ必要がある。多様な文化を歴史的に創造してきたのだから、多くの文化複合の要素を楽しみ、豊かで幸せに導く文明を歴史的な多層構造として認識して（木俣 2019b）、移行期として先真文明を再創造・構築し、将来に備えるべきであろう。現代は生業に関わる権利を求めるとともに、生業だけで暮らせる人々はまれであるので、同時に従事する職業、産業の在り方について、その位置づけを再考する必要がある。

{注：技能は技芸を行ううでまえ、技量。技術は①物事を巧みに行うわざ、技巧、技芸。②科学を実地に応用して自然の事物を改変・加工し、人間生活に役立てるわざと説明されている（広辞苑）。}

3. 気候変動の時代への対応

Seidl (2011) は温暖化時代への適応として、重要なことを述べているので、部分的に訳して次に記す。彼は、パーマカルチャーはオーストラリアの Mollison と Holmgren によって造り出された手法概念で、永続する人間の文化と永続する農業を重ね合わせ、関連して互いに補完し合う。日本の中山間地における棚田は未来に向けて私たちを永らえさせるだろうと評価している。地球の温暖化時代の人間の暮らしを維持しようと努めて、植物学者たちは人間があてにする 300 の作物の生きた先祖種の研究に復帰するだろうと言っている。この際に、私たちが行ってきた栽培植物の起源と伝播の研究成果が役立つことを望みたい。

21 世紀の技術が温暖化時代にどのように農業が適応するかにおいて重要な役割を演じる一方で、伝統的な農耕実践技術はさらに存続するかもしれない。確かな昔ながらの技術は、土地の耕起、溝堀、小規模の水調整、作物が植えられる時期を変え、農耕作業を多様化することなどを含む農場の復元力を改善できる。私たちは人間があてにする 300 種を広げる必要があると同時に、これらが消滅する前に、遺伝素材を保存する希望をもって、将来地球が経験するだろう条件をすでに経験している場所から種子を集める必要がある。種子の多様性を保存することは温暖化時代においての実用主義である。共同体支援農業（CSA）モデルはヨーロッパや日本で 1960 年代に成長してきた。たとえ気象が破壊的で、他の損害をもたらす事象が起こっても、CSA s は農家に、生産物の利用よりも先に正直な収入を提供する。CSA モデルを用いる農家は、すでに市場ができているので、季節の間中に食物の栽培に専念できる。消費者は農家とともに危険と見返りを分かち合う。

また、共同体は、良質な食べ物、生態学的な調整役、および栽培者の財務的な成功を保障するために共同体が機能するように支援し、農場の収穫を分かち合う。川の流域のように、食物圏域は地理学によって制御され、この食物圏域を守ることはもう一つの地域食糧圏域の適応にとっても基本

的なことである。人々が地域の食料をあてにするとときに、彼らが暮らしているところで、彼らが食べるものにつながるができるので、この方法で場所と世話役の気持ちも育てることができる。

この考え方はバイオリージョンにおいて家族や地域レベルの食料安全保障をどのようにするのかについて示している。私たちがすでに何十年も実践してきたように、市民が自分たちで、地域において協働して、在来品種の種子の収集・保存、分かち合い、小規模でも市民農園などで家族農耕、あるいは市民が地域農家の野良仕事を手伝って、農耕地や緑地を保全しながら、食べ物を分かち合うのである。このことが家族や地域社会において素のままの美しい暮らしの基盤を作る。

4. 近代の農業から学び直す

ハワード（1940）は、1910年代から1930年代のインドやイギリスの農業の実態から、近代の農業の在り方を反省している。これはすでに80年ほど前の記述であるが、ヨーロッパの有機農業に関する考え方は興味深く、参考になるので、少し長いが要約して次に記す。

私〔ハワード〕は、オランダやイギリスで実践されている生態的農業に対して、いくらか興味をもっていた。しかし、ルドルフ・シュタイナー（R. Steiner）の教え子が、自然の法則を本当に解明し、彼らの理論の価値を実証する事例を提示してきたとは考えられない。農業において病気を引き起こすおもな原因のひとつは不適正な土壌の管理である。しかし、私の知っているかぎりでは、研究者自身が実験材料である食べ物を自ら栽培するようなことはしなかった。こうした研究者の怠慢が、直接的な諸結果の不足と、人間の栄養に関する研究が真に進歩しなかったことの原因である。国家経済をもっとも強力に支えるのは、活力があって豊かな農村であることがわかる。ゆえに、農業と経済発展との調和が図られなければならない。これに失敗すれば、必然的に両者の破滅をもたらす。アジアの農業に、本質的に安定的な小農形態を見ることができる。現在、インドや中国で行われている小さな農場での農業は、何世紀も前から存在していた。アジアで実践されている農業は経験に裏付けられており、森林や草原、海洋のようにほぼ恒久的なものである。たとえば、中国の小さな圃場は、いまだに安定的な生産を維持し、4000年の農業生産を経ても地力を失っていない。

このアジアの農業の重要な特徴とは何であろうか。①農地の所有規模は零細である。②食用と飼料用作物の栽培が圧倒的である。③混作が一般原則である。④家畜と農作物のバランスが常に保たれている。⑤マメ科作物が一般化している。⑥一般的に、先端が鉄の木製の犁で浅耕される。⑦米はいかなるときでも、可能なかぎり栽培される。⑧十分な労働力の供給がある。

こうした小農形態の農業では、土地に対する人口圧力が貧困を生む。インドをはじめとした多くの地域では、狭い土地を所有しているために、集約的農法を必要とする農地で粗放な農業が行われている。この不利な条件にもかかわらず、地力が数世紀にもわたって維持されてきたのは驚くべきことである。これは自然の原則に則った生産を行い、化学肥料を用いなかったからである。作物は、農薬を使用することなく、害虫や病気を克服できるのである。欧米の農業の貢献を概観すれば、少なくとも三つの需要を満たそうとしているように見える。①家畜を含めた農村住民の地域的な需要、②発展する都市の需要（地力の観点からすれば、都市住民は非生産的である）、③工場での生産のため、常に原料の供給を必要とする機械の需要、の三点である。

〔欧米の農業〕その特徴とは、以下のとおりである。①農地の所有規模が大きくなる傾向にある。②単作が一般である。③急速に、機械が畜力に取って代わっている。④化学肥料が広く施用されている。（戦争中に国家を守った爆薬工場が、化学肥料の製造という強固な権利を得たのである。）⑤

病気が増加している。⑥食料の貯蔵方法も進歩している。⑦科学は生産を促進するように要請されてきた。(だが、農学の考え方に基づいて急速に発達した商業的農業はことごとく失敗している。自ら肥培する機能を奪われた大地は、人間に反抗している。)

北部インドに住む諸民族の健康と体格について詳しく調べたところ、もっとも健康で、体格のよい民族は、頑強で機敏で精力的なフンザ族であった。彼らはギルギット管区地域にある高山の谷間の一つに住んでいる。そこは、古代からの肥沃な土壌のもとで、灌漑階段畑のシステムが何千年も維持されてきたところであった。フンザ族の食べ物とその他のインド北部の民族の食べ物には、ほとんど違いがなかったが、栽培方法に大きな違いがあった。まず、フンザ族の灌漑階段畑の面積は小さい。次に、階段畑という構造によって土壌の通気性が十分にある。そして、灌漑水が近隣の氷河によって生成される細かな沈泥を毎年運んでくる。さらに、人間や動植物のあらゆる廃棄物を最初とともに堆肥化してから土壌に還元するという、非常に念入りなやり方が行われている。土地に限りがあるため、その管理の仕方に生命がかかっているのである。高品質の食べ物の生産につながる、あらゆる要素を包含した完全な農業が成立するのは当然である。フンザ族が享受しているすばらしい健康と体格は、彼らの古代からの農法によるところが大きいと思われる。

研究機関の本来の重大な欠陥が、非常に早い段階で現れる。研究所は科学を基礎に組織されており、誰もが認識している農業という部門を基礎にしているのではない。そのため、手段（科学）と目的（農業）はすぐに接点を失うことになる。この研究所内にいる研究者は専門化された領域に閉じこもり、研究はやがて細分化されていく。直接的な実践経験から得られた着実な影響が、通例というよりむしろ例外とされてしまうのである。定量的な結果を強調することが、科学的研究のもう一つの欠点である。それは農業研究にも深く影響を与える。たとえば、化学や物理学では、精密な記録がすべてである。これらの分野では、数値的に記録できる正確な決定が適している。

しかし、作物の栽培と家畜の飼育は生物学に属しており、そこですべてのものが生きており、化学と物理学とは正反対の領域である。多くのこと、なかでも土壌肥沃度、耕耘、土壌管理、生産物の品質、家畜の健康や衛生、一般的な管理、雇用主と雇用人の労働関係、全体としての農場の団結心 *esprit de corps* のような土地にかかわる重要なことは、重さや長さで計量できるはずはない。それらの存在そのものがすべてであり、その存在の無視が失敗を招いている。

経済学は、無駄なデータを集める以上に大きな迷惑を農業に与えた。農業はあたかも工場であるかのように見られることになったのである。農業は営利企業と見なされ、利潤を上げることがひたすら強調された。しかし、農業の目的は工場とはまったく異なっている。農業は人類が繁栄し、生き残るために、食料を供給しなければならないのである。食料が新鮮で、土壌が肥沃であるのならば、最高の結果が得られる。食べ物の質は生産量よりも重要である。農業は、それゆえに、飲み水、新鮮な空気、風雨からの保護とともに、人や身分を問わず、もっとも重要な問題である。国全体の国民の能力のまさに基盤となるものを、なぜ、おろそかにするのか？国民の食料は当然のこととして、第一に扱わなければならない。農業研究は、農業者をよりよい食料の生産者にするためではなく、より熟練した盗人にするために悪用したのであった。農業者は、後世の犠牲によっていかに暴利をむさぼるか、つまり土壌肥沃度や家畜という形で持っている資本を損益勘定へ振り替える方法を教えられたのであった。ついに土地は疲れ果て、ほんものの農業は滅びるのである。土壌、動植物、私たち自身の何もかもが、私たちの責任のもとで病んでいるのではない。自然を怒らせてはならない。自然は一時的に従うように見えても、その復讐は恐るべきものだ。自然は理にかなった恩恵を与えてくれるが、無限の欲に仕えることは決してない。農業はそうしたものと無縁でなければならない。近代産業界がこの点を認識しているかどうかを、農家は問うべきであろう。

以上のように、非常に鋭い指摘が前世紀半ばのヨーロッパで行われていたが、その後、しばらくは戦中・戦後の食糧政策が影響し、緑の革命などのような食糧増産が主要な政策であった。しかし、欧米における食糧供給が安定してくると、特にヨーロッパでは有機農業に関心が集まり、今日では有機農産物はオーガニック、BIOなどと称して、総体的に少ないとはいえ、マーケットに一定の割合を供給するようになった。ヨーロッパでは農業に対する政策がすでに変わってきているようだ。この10余年に、毎年2〜3回海外旅行に出かけ、車窓から農耕地を観察し、マーケットを訪ねてきたが、耕作放棄地はほとんど見られず、麦類やブドウ、野菜畑が連綿と続いていた。マーケットには有機野菜や穀類の販売コーナーが見られた。フランスで最も美しい村、イギリスで一番美しい村といった、素晴らしい小規模観光地もヨーロッパ各地に点在していた。確かに美しい暮らしぶりの農村景観であった。世界の農業に対する政策は緑の革命による大規模農業を促進する方向に加えて、もう一度、在来栽培品種や伝統的農耕技術、伝統食を大切にする趨勢へも方向転換がはかられているように見える。ちなみに、緑の革命の農業技術は多収性の改良品種を用いて、水、エネルギー、化学肥料、農薬などを大量に使用してきた。しかし、さらに農業を軽視して、海外からの食料輸入に依存する日本に住んでいる人々は明らかな変化に気が付かないのだろうが、国連食糧農業機関FAOは食糧増産政策から、世界農業遺産や家族農業の方向に新たな政策転換を図っているようだ。おそらく、国連の中の国家間の力関係が、第2次世界大戦の戦勝5国（恒久常任理事国、イギリス、フランス、ロシア、アメリカ合衆国、中国）や先進国（G7 カナダ、ドイツ、イタリア、日本を加える）から圧倒的多数の途上国へといくぶん移動、変化しているのではなかろうか。農業を重要な産業としながらも、食料不足に困窮するアフリカ、アジア、中南米の途上国の数が国連の政策決定に力を持ち始めたのだろう。

次に、検討する国際家族農業年（2014）から国連家族農業の10年（2019〜2028）へ展開する過程で、「小農の権利に関する国連宣言」（2018.11）も採択された。この宣言の採択経緯をみると、食料生産・貿易に関わる国家間の力関係の浮動が読み取れる。提案した10国は南アフリカ、モンゴル、ボリビア、キューバ、エクアドル、エルサルバドル、ニカラグア、パラグアイ、ベネズエラ、ポルトガル、賛成した国（合計119）は中国、インド、タイ、チリ、サハラ以南の諸国、中南米諸国など、棄権した国（49）は日本、北アフリカ、中東諸国など食糧輸入国が多く、反対した国（7）はアメリカ、オーストラリア、EU加盟国など食糧輸出国が多かった。

私は、雑穀の起源と伝播の調査研究で、日本およびユーラシア各地で数百の農家を面接聴取してきた経験から、小規模家族農耕の大切さに気付き、熱意をもってホーム・ガーデンの推進を提唱してきたので、小農の権利宣言の趣旨には賛同する。

5. 家族農業

環境学習セミナーで小規模家族農業を話題にしたかったが、私は齢を重ね、若い人々に期待して、社会から退場することにした。このため、今ではセミナー開催などを求めることはしていない。しかし、私の関心は募ったままであったので、たまたまインターネット検索で見つけた「国連世界食糧保障委員会専門家ハイレベル・パネル2014」を読んだ。スワミナサン・関根（2013）は報告書序文で、次のように述べている。ちなみに、インドのスワミナサンやバンダナ・シヴァの著作は何冊もインド調査の際に購入して読んできた。次に報告書の要約をしておく。

日本農業の大きな特徴は小規模農業とアジア的稲作生産システムであるが、他の OECD 諸国と同様に、日本農業は第二次世界大戦後に劇的な構造変化を経験してきた。日本は一人当たり GDP が高いことから、食料不足や栄養失調とは直接関係がない、と思う人もいるかもしれない。しかし、低い食料自給率（2012 年はカロリーベースで 39%）と農業部門の高い高齢化率（2010 年には農業従事者のうちで 65 歳以上の占める割合は 60%以上）において、日本が置かれている状況は突出しているという点を指摘しておかねばならない。こうした課題に取り組むために、日本の政策決定者たちは、農地の集約化と規模拡大に向けた構造改革をより徹底し、企業の農業生産への参入を促進するための規制緩和を行うといった形で、農業政策を方向付けてきた。一方で、日本は、小規模農業部門の経験を諸外国に提供できる。農業生産者と消費者との直接的なつながりの日本モデルは「提携」と呼ばれており、世界の数多くの地域で類似の運動が広がるきっかけとなった。小規模農業とは、家族（単一または複数の世帯）によって営まれており、家族労働力のみ、または家族労働力をおもに用いて、所得（現物または現金）の割合は変化するものの、大部分をその労働から稼ぎ出している農業のことである。小規模農業は、多くの国の食料保障の基礎であり、すべての国の社会・経済・環境面で重要な要素を構成している。都市化ならびに市場の統合化、グローバル化につれ、小規模農業部門は大転換を迫られており、国家にとって極めて重要な関心事 になっている。小規模経営は、世界の食料保障と栄養供給に貢献し、小規模経営の存在する地方では、それ以外にも関連する役割を果たしている。食料保障、食料主権、経済 成長、雇用創出、貧困削減、周縁化された社会グループの解放、空間的・社会経済的不平等の是正に大きく貢献し、さらに、政治的・制度的環境の中で、生物多様性や自然資源の持続的管理、文化的遺産の保護にも貢献することができる。

（世界的に見ても、）「経営耕地面積 1ha 未満の農家数は全体の 73%であり、2ha 未満 の農家数は 85%であった。2ha 未満の農家の大半はアジアにみられ、アフリカでは 80% の農家が 2ha 未満であった。発展途上国における小規模経営の数は、合計で約 5 億世帯に上った。世界農業センサスによると、中国には約 2 億世帯の小規模経営があり、世界の農地の 10%を占めるに過ぎないが、食料生産では世界の 20%を生産している。これは 大規模農業に比べて小規模農業が高い生産力を実現できることを示している。先進国でも小規模経営は変化してきたが、消滅はしていない。大規模経営偏重政策によって、小規模経営は政策的には無視されてきたが、国全体の状況に応じて、しばしば農業を農村部の農外経済活動と結びつけることによって、今でも経営体数では重要な地位を占めている。農業・農村開発のガバナンスは、小規模農業が開発において担う多面的な役割を支えるような形で計画しなければならない。一般に、伝統的な農業関係の省庁は、こうした役割を果たす力量には欠けている。ここでいう共有財産・資源には、共有の放牧地資源、生物多様性、水、森林および 漁場が含まれる。生産者と消費者をつなぐ新しい市場の創出も重要である。さらに学校給食や社会的な栄養改善プログラムのための食料調達を小規模経営から行うことも必要である。気候変動に直面している今日、農業研究と普及は農業にかかわる生物多様性の保護を支援しなければならない。これには、農業生態学的アプローチや生産と環境保 護に関する原則が役立つだろう。小規模経営は、農場で用いる適切な種子や機械、および食品加工やその他の高付加価値化を必要としている（小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン編 2019）。

さらに、「国際家族農業年と人びとの食料主権—国連食糧農業機関（FAO）のパラダイム転換を学ぶ」（オルター・トレード・ジャパン（ATJ）政策室 2014）のセミナー報告によれば、次のことが論議されていた。

途上国：農業、農村への投資が減少していき、たとえローン、融資を受けられた農家でも負債を抱えて結局はローンを返せないが為に、担保としていた土地を手放して離農するケースが相次いで

いる。こうして離農した農家は都市に仕事を求めて入って行ってスラムを形成し、さらに貧困化を加速してゆくという問題がある。また、国際的な価格協定が廃止されて以来、農産物の国際価格の乱高下によって農家が疲弊してしまう、あるいは離農せざるを得ないような状況になってしまう。その一方で、大規模農業による地下水の大量利用による地下水の枯渇とか、地下水位の低下による塩類集積、石油資源の枯渇、あるいは農薬化学肥料の大量利用による汚染などといった問題が認識されるようになってきた。日本の農業政策では、1950 年代 GATT に加盟し、高度成長期、特に 60 年代に入ってから、農産物を含めた貿易の自由化を推進してきた。80 年代を通じて GATT ウルグアイラウンド交渉が続けられて、その一つの合意点として、85 年にプラザ合意があり、95 年から WTO 体制に移行していき、この過程でどんどんグローバル化が進行し、市場の自由化が進んできた。その中で特に日本が顕著で、製造業の輸出を促すために、外交のため農業を切り捨てていくという動きが出てきた。2013、ドーハラウンド、自由貿易協定 FTA、経済連携協定 EPA、TTP。それによって農業の再生産活動が国内で相当困難な状況に陥っている。再生産できず、新しい世代が農業になかなか入ってこない、高齢化や限界集落の問題、それに伴う耕作放棄地の増加や、鳥獣害の問題が出てきた。

「小農の権利宣言」は前文と全 28 条で構成されており、かなり長文である。原文を和訳した船田（2019）はブログの中で、家族農業、小規模農業、あるいは farming、peasants などの用語法に関して、丁寧に提示しており、定義を大切にしていることに敬意をもつ。

この中で、私たちが長らく研究し、論考してきた次の事項も条文として掲げられている。

「第 5 条自然資源に対する権利と発展の権利、第 15 条食への権利と食の主権、第 17 条土地ならびにその他の自然資源に対する権利、第 19 条種子への権利、第 20 条生物多様性に対する権利、第 26 条文化的権利と伝統的知識に対する権利」、などである。

このような事項が小農の権利として宣言されたことは、人間の文明を基層で支えてきた農耕文化複合を再創造・継承して、危機的状況にある現代社会を良い方向へと移行しようとする多くの人々の強い意思だと受け取りたい。同様の問題意識はスーザン・ジョージ（1977）やバンダナ・シヴァ（1993）らによって、早くから提示され、解決への努力がなされてきた。しかし、とりわけ日本では関心が低く、成果も上がってきていない。日本の中山間地農山村の厳しい現実も多く報告されている。日本に長く居住してきた何人かのヨーロッパ人も、日本の田舎のよい所が失われてゆくことに警鐘を鳴らしている（たとえば、A. フルフォード 2019）。環境条件により大規模化することのない山間地での小規模農耕は家族によることが多く、このことは日本に限らず、ヨーロッパでもアジア、アフリカ、中南米でも同じである。共通する課題は多く、また共感する意思も存在する（Hurni et al 2019）。小規模農業や家族農業は、船田（2019）も注意して用語を選び、定義して、議論が混乱しないようにしているように、正確には family farming には産業としての小規模経営農業の他に、生業としての農耕という意味合いを含んでいる。ところが、日本では小規模農業や家族農業に好意を持たない研究者が多いので、混乱を意図して起こすような論理展開を示す人もいる。

たとえば、山下（2018）は「21 世紀に蘇る柳田國男の農政学」と題して講演を行っている。柳田は高級官僚で、優れた農業政策立案者であったとはいえ、彼は途中から稲作単一民族説を唱え、稲作を敗戦後農政の中心に据えたので、結果として、イネの過剰生産、減反政策、また、食料の海外依存の方向に至らしめた。敗戦後の農地解放で日本は小規模農家が大半となって固定的になっていた。この重大な失政を反省しないで、経営面積の大規

模化を求めても困難であり、他方で、小規模経営を有効にする政策の多面性も必要であった。しかし、大家柳田の影響はいまだに強大である。柳田と同じく優秀な農政官僚であった山下の稲作に関する論理展開、農地を集積して規模拡大を図り、農業だけで生活できる農家を作るべきだとの政策は、土地の権利関係が柔軟で、平地であれば大規模化もできるのである程度の筋は通る。しかし、日本は中山間地が多く、同時に都市化した近郊地域も多いので、北海道と新規干拓地など以外では大規模化ができにくい実状にある。実際、中山間地の現場を見れば、耕作放棄地、相続者不明土地などがあまりに多い。都市でも、ほとんど耕作していないような農地は散見される。

私は、農協が金融業、不動産業を主業として、肝心の農業を副業と見なしているような実態を、山下が批判している点には共感するところもある。たとえば、私は、農山村で環境学習の実践活動と理論研究を進め、地域振興に協力し、林業関係団体からは連携と活動助成を受けた。しかし、農業関係からは協力を得ることはほとんどなかった。林業が教科書の記述から消滅することに危機意識をもった林業関係者は子供たちへの森林環境教育を推進した。他方、農業関係団体は経済と農業技術の普及にのみ関心をもち、初等中等教育で農業理解のための学習に関して何ら関心がなかった。子供たちが農林業の大事さを学ばなければ、彼らが成長して継承していく市民社会においても農林業理解が深まらない。農協や農家、農学者たちも不動産と金融、経済政策などにしか関心がなく、多くの農家は子供たちに農業は大変だからといって家業を継ぐことを勧めなかった。自ら農業者としての誇りを失い、一方で土地を持ってない都市民からはねたまれ、その裏返しとして軽蔑されてもきた。次世代や市民に農林水産業の大事さを普及啓発する学習・教育活動を蔑ろにしてきた。要するに、産業政策として農林業とその一般教育・学習を軽視してきたとも解釈できる。農業関係者も稲作さえすれば、補助金ももらえるし、このことに安住してきたのだろう。農協の指示に従い、先行きを考えず、即自的、刹那的な農業経営をしてきたのだろう。しかしながら、山下が聴講者の、種子法廃止と国連小農の権利宣言に関する質問に答えて、次のように述べた点（要約）には賛同できない。

種子法については何が問題なのかよくわからない。国や都道府県の試験研究機関に米の品種改良を任せていたから、減反政策に影響する単収の高い品種は開発されなかった。民間の力をもっと上げていったらいいと思う。小家族農業というのは人口が増えて食料生産が需要に追いつかないのではないかという主張からきているのではないかと思う。私は国内外のこのような主張に別の意図が巧妙に隠されているのではないかと感じる。価格が上がらないのに小規模農家育成というのであれば、それは農業保護を増やすことによってしか実現できない。食糧危機を唱える主張には、そのようないがする。

何千年にもわたって、栽培植物を探索し、その地域環境に適合する在来品種を選抜して、継承してきたのは農民であった。さらに近代になってから、それらの在来品種を素材に、科学的農業技術に基づく交雑育種などを行って、各地に適合する品種改良を行ってきたのは主に国の他、都道府県の農事試験場であった。野菜や花卉に関しては民間の種苗会社の貢献も少なくなかった。したがって、主要農作物種子法を廃止（2019）するなど、誤った政策変更である。海外の独占的巨額アグリビジネスに種子の改良、生産、販売を依存してはならない。農民は特許料付きの高額種子を、化学肥料や農薬とセットで毎年購入することになる。本来の素材の開発者としての権利、自家採種の自由を無きものにすることは実に不条理である。人間の農耕文化の歴史を黙殺して、現場を見もしない農政学者と官僚が政

策を歪めて、農家の幸せを奪っているのだ。ただし、農家のために政策立案してきた篤実な研究者や官僚が少なからずいて、私は何もかもを否定的に捉えているのではない。政策は画一的ではなく、多面的にきめ細かく検討が必要である。

学問は自己・個人の解脱のためにある。この学問が他者のために役立つのは、実に望外の幸せというべきである。科学技術に学問の裏打ちがなければ、人々や社会を損なうことが著しい。単に金儲けを目的にし、その実用手段にすぎないのなら、科学技術の過剰な便利は望むことではない。実際にも、日本では小規模農業や家族農業に関心や好意を持たない研究者が大多数であろう。中山間地の農業不適地にも、歴史的に、今も人々は暮らしており、これらの地域では兼業で小規模自給農耕が行われてきた。稲作一辺倒の農業政策が無視ないし軽視してきた結果が、耕作放棄地や相続者不明土地を激増させ、限界集落へと向かわせてきたのではないのか。そこで、国連家族農業の10年は、近現代の農業政策を三省するのに、良い機会として、日本の家族・地域レベルの食料安全保障を支援し、国レベルの食料安全保障政策も考え直す機会になるように望みたい。中山間地域の家族農業で、主要な穀物であったのは麦・雑穀であった。敗戦後に、稲作一辺倒と小麦輸入政策に単線化して、麦・雑穀の生産は20年を経ずして、ほぼ消滅し、各地の山間地で遺存的に栽培されるにすぎなくなった。1970年代から、雑穀研究に参加したものとして、日本では雑穀の研究があまりに少ないことを実感してきた。

次には、過疎高齢化に向かう農村地帯ではない、人工が集中する都市における農業の試みの重要性についても、農家と市民が連携するファーマーズ・マーケットの視点から小規模農耕の意味を検討する。

6. 現代の都市農業

都市農業についてはこれまでに調査し、報告してきたので（木俣ら 2014）、都市農家と連携するファーマーズ・マーケットについて焦点を当てたい。私は、海外旅行の際に、マーケットやスーパー・マーケットのほか、定期的開催されるファーマーズ・マーケットやフリー・マーケットなども見学してきた。次に、佐藤亮子（2006）の報告を少し詳しく要約する。

ファーマーズ・マーケットは直訳すれば農家市場で、複数軒の農家が自分の農場で作った農産物を持って集まり、消費者に直接販売する場所のことである。必須条件は生産者が自分で売ること、地域の様々な小規模事業者が参加しているのが特徴である。

ファーマーズ・マーケットの前史を振り返ってみると、アメリカで始まったのは17世紀で、ヨーロッパからやってきた移民たちが、自分が作った農産物を荷馬車に積んでまちに行き、広場や道路上で販売したのが始まりである。祖国の伝統にしたがい、北ヨーロッパからの移民たちは屋内のマーケットを、ヨーロッパ南部スペインの移民は屋外のマーケットを開いた。そこに行政や富裕層が建物を寄付するようになり、ファーマーズ・マーケットは市庁舎やコミュニティセンターなどの役割も果たすパブリック・マーケットに発展していく。パブリック・マーケットは住民のための主たる食料品供給場所として位置づけられ、政府の手で保護されると同時にコントロールされる、市営（公営）市場と化していった。しかし、20世紀に入り住民の食料調達場であり地域交流の中心であったパブリック・マーケットは衰退し始める。チェーンストア化されたスーパー・マーケットと、それに農産物を提供する大規模なアグリビジネスが、食品流通の形態と農業のありようを大きく変えていったのだ。（ところが再び）変化が訪れたのは60年代後半だった。農産物の質の著しい低下に対する消費者の抵抗運動が起こる。長距離輸送に耐える形やサイズになるよう工業的につく

られた農産物への消費者の不満が爆発したのだ。その一方で、アグリビジネスによって市場から締め出された小規模農家は存亡の危機に瀕していた。都市と農村、双方の住民の危機感と不満によって、起源をたどれば古代ギリシャまでも遡る原始的な農産物売買のスタイル、ファーマーズ・マーケットが、広いアメリカのなかでポツリポツリと復活し始めた。70年代半ばになると支援策を打ち出す州も現れ、15 ファーマーズ・マーケット再生の動きは全国に広がった。エコノミクス・インスティテュートのミッションは、ニューオリンズとその近郊地域における食品・農業分野の個人・家族・小規模事業の、エコロジカルで堅実な経済発展を生み出し、促進すること。このミッションをはたすために行っているのが、ファーマーズ・マーケットである。たとえば、ニューオリンズに近いセントバーナードは都市化が進行し、200軒以上あった農家はつぎつぎ農地を手放していった。いつまでも農業にしがみついている（と、ジョニーやシルビアをさげすむ人さえいる）。しかし、人間はお金がすべてではない。好きなことがやれて、心穏やかに暮らせることが大事、いろんな人と会って話ができるファーマーズ・マーケットが大好き、これからも農業を続ける覚悟だ（と、彼らは言っている）。アメリカの食卓で野菜といえば、サラダまたは肉のつけ合わせが主流だ。その材料は、富裕層であれば生鮮野菜やオーガニックものを選ぶようになり、逆に所得が低い層になるにつれて廉価な輸入ものや冷凍食品、缶詰に変わり、さらに低所得になれば、野菜そのものが食事から消える。金持ちほど野菜や豆腐などヘルシーなものを食べ、ジムに通ってスリムなからだと健康を保ち、貧乏な人ほどカロリーだけが高く栄養のかたよった食べ物で肥満になり、足腰や内臓に病気を抱えている。農務省が把握している全米のファーマーズ・マーケット数は、2004年12月現在3700あまり。消費者が新鮮な農産物を農家からじかに購入することに関する興味の高まりと、ファーマーズ・マーケットが増え続ける中小規模農家のニーズに合致しているという、都市と農村、消費者と農家、双方の側からのメリットをあげている。サンタ・フェ・ファーマーズ・マーケット・インスティテュート：店に並んでいる商品はトマトやキュウリ、葉ものなど一般的な野菜や果物はもちろん、サボテン、バッファローの肉や毛皮、先住民たちから受け継いだ色とりどりのトウモロコシ・マメ・雑穀類、火のように赤いトウガラシ、すべてが天然・農産素材でできた豪華な人形やリースなどの手工芸品、である。何らかの副業を持つ兼業農家であり小規模。彼らの農業はファーマーズ・マーケットがないと経営が成り立たないのだ。プエブロ・インディアン居住地に近い土地柄で、たとえば、アナサジ豆のように、先住民の人たちが守ってきためずらしい品種や伝統種が残っている。サンタ・フェ・ファーマーズ・マーケットでは、現代の工業的農業は機械での作業や輸送に向くわずかな品種だけになっているが、近くで穫れたものを食べることは、環境変化に強い遺伝子を時代につなぐことになり、ひいては天変地異が起こった時の保障になると、原種やその土地に伝わる品種を守ることを重要視しているのだ。ファーマーズ・マーケットに出店している農家は都市周辺の農家が多い。緑の空間、野生生物の棲み家、汚染されていない水と新鮮で栄養のある食物を提供してくれる農地の大切さを、都市住民に日々の食生活を通じて気づかせ、ライフスタイルを見直すきっかけをファーマーズ・マーケットは提供している。都市の中心市街地が空洞化する一方¹⁶で、都市近郊への開発圧力は強まるばかり。そんななかでファーマーズ・マーケットは都市と農村、両方が抱える深刻な問題を、日常生活の延長で解決する助けになっている。

こうして、佐藤は次のように結んでいる。

日本でも世界でも、まず女性たちが気づき始めている。どこでも同じものを大量に作り、世界中を相手に大きくもうけるよりも、地域の素材や伝統、文化を活かし、少量でも本物の味や品質を理解してくれる近くの消費者に思いを伝えながら売るほうが、ずっと自分の人生を充実させるのだということ。大きな声で自然を守る重要性について演説するよりも、土にやさしい農法で作った一個

のトマトを手渡すほうが、相手を説得する力を持っていること。実感からしか、人の生き方は変わらないのだということに。

ファーマーズ・マーケットに出荷している小規模農家の想いを私は共有する。そのために、雑穀街道を FAO 世界農業遺産にして、栽培植物の在来品種を保存しながら、小規模農業を山間地で継承し、上述したように人生を楽しいものにしたい。しかし、なかなかこの考えは普及せず、素のままの美しい暮らしというライフスタイルには実効性をもって移行していかない。

7. おわりに

長文の「小農の権利宣言」をよく読むと、「第 3 条不平等および差別の禁止、第 6 条 生命、自由、安全に対する権利、第 8 条思想、言論、表現の自由、第 9 条結社の自由、第 10 条参加の権利、第 3 条 働く権利」なども、明文化されているのである。これらは人間が努力によって獲得してきた権利であり、歴史を受け止めて条文が蓄積され得ていることがわかる。フランス第 5 共和国憲法が、フランス革命の 1789 年人権宣言の原理を遵奉すると前文に記しており、歴史の蓄積を踏まえ、条文は明確に記されている。

日本国憲法の前文は、敗戦という現実に対して戦争放棄と国民主権を主眼とし、大日本国憲法を引き継いではおらず、新たな原理に拠っている。この点で、フランス憲法とは前文の根拠原理がまったく異なっている。また、日本国憲法は敗戦処理の中で急遽、起草されたので、条文が簡略で、内容の明文化が弱く、条文解釈に幅が出来てしまう。

日本の田舎や農業が衰微する一方なのに、世界の趨勢が小規模農業を大事にするという方向に転換することに強い共感をもった。そこで、家族や地域レベルでの食料安全保障、生物文化多様性や生業の伝統的知識を無くしてはならないという強い考えを持ち、これは国の基盤をなす重要課題であるから、市民の自覚と生活様式を移行する実効性を担保するために、憲法に条項を加え、明文化する必要があるとの考えに至った。

市民革命がなかったから民主主義が根付かないという論を弁解がましく言う人たちがいる。しかし、近現代史を少し振り返ってみれば、大塩平八郎の乱、三閉伊一揆〔注：江戸時代の一揆は幕末にかけて増加〕、秩父困民党、自由民権運動〔注：明治初期は地租改正反対一揆や土族反乱も多かった〕、足尾銅山鉍毒事件、敗戦後の、日米安保 条約反対運動、水俣病公害告発、大学紛争など、近現代には農民、庶民（常民）あるいは市民の側からの抵抗、切羽詰まった数多くの異議申し立てが無数にあった。平和に生きる庶民が重税や飢饉対策に我慢できずに抵抗し、そのたびに、むごたらしく鎮圧され、首謀者は見せしめに極刑にされた。それを、庶民（常民）は知らないことにするように忘れた。庶民は王侯・貴族、権力者にあこがれ、権力者をめぐる歴史を賛美してきた。大多数の庶民の日々の楽しい暮らしはもとより、あえて抵抗した苦い歴史すらも、自ら消してきた。庶民の抵抗の歴史は権力者に消され、後ろから石を投げたような庶民自らも消してきた。これがこの日本の人々が民主主義を十全に受容しない、できない理由だ。いわゆる市民革命の萌芽は沢山あったが、権力者の圧政と庶民自らの黙殺・忘却によって、なかったことにしてしまった。革命などむごたらしいことはないにこしたことはない。江戸近郊では百姓一揆はほとんどなかったという。明治期になって頻発したのは、他所から封じられた治政者が過剰な税の取り立てをして私腹を肥やした時に、起こったようだ（土方 2004）。

フランス革命の自由、平等、友愛への精神的希求、共和制は社会の精神と制度的進歩だ。しかし、このフランス革命さえも多くの惨たらしい犠牲をもたらした。人間はあまりにも

虐げられたときに、残念ながら暴発し、歯止めが効かなくなったのだろう。動物以下の野蛮な行為をしないように、神々の渴きを昂進してはならない。この場合の神々は庶民の姿で現れる荒神なのだろうか（矢野 1989、フランス 1912）。矢野の言葉で気になった語句を次に少し記しておく。

民主主義というのは、人間が性善であることに対する限りない信頼と人間が性悪でありうる可能性に対する限りない見極めとの間に立って、人間そのものにたいして深いとおしみを抱き続ける立場である。本来の神々は、たしかに聖性ともいうべき崇高な徳性をもっている。その聖性を巷の人間が受け継ぐことができるのが、革命思想の特徴である。しかし、なんらかの聖性の転移によって神の徳性が人民に宿ることはありえない。人々は言葉を畏れ、言葉の扱いについてはたいそう慎重であった。現代の日本人が自分の語った言葉にたいしていかに無責任であるか。私は責任感がつよい寡黙な日本人に合うと、ほっとする。正義というものは、誠実に生きる一人の人間のインテグリティに宿るのである。いまどきの神々は、俗性と反知性主義とを栄養とする、いわばほんとうの神性にとぼしい俗人集団である。複数の不特定多数の集団の正義よりは、自分一人の信念で生きようとする個の論理の正当性を信じたい。

現政府が〇〇革命や△△改革を唱道しているので、それこそむしろ俗にいう左翼と思いがうばかりだ。共産党さえも、もう革命と言う言語は弄していない。言葉遣いが本来の意味から逆転しており、復古を求める権力者が〇〇革命を言い募る、虚偽の言葉の回転が疎ましい。虚偽や隠蔽は、言霊を畏れない所業である。発言が軽々しい虚飾であるのに、お零れを求めて賛辞をおくる迎合者、あえて騙された振りをする庶民、これもバカの壁や利口の垣根が習性なのだ。和をもって貴しとなすことはとても良いことだが、言霊が抜け落ちては虚偽に反転する。付和雷同、集団のいじめ行為、村八分、自由からの逃走、学びからの逃走、無関心、考えることを忌避する、それらが今、先真文明に向けて移行するための阻害主因である、超えるべき悪習だ。ここを三省し、動物としての人間の食の倫理・原則を大切にする文化を再創造しなければ、この国の人々は不幸に傾き、さらに没落・衰退する。

このような近未来は願い下げしたいので、週末は自然に帰って、里山で生業仕事をし、家族の食べ物を作る。野良仕事は人生を楽しくし、豊かな意味も見つけることができる。緑の指をもったチトのように家族や地域社会を大切にし、幸せにする。ヨーロッパの小さな村々で暮らしに幸せを感じている人々のように、日本の村々でも楽しい暮らしを実感したい。

文献

オルター・トレード・ジャパン（ATJ）政策室 2014、セミナー「国際家族農業年と人びとの食料主権―国連食糧農業機関（FAO）のパラダイム転換を学ぶ」報告、東京。

船田クラークセンさやか 2019. 1. 16、国連総会採択の「小農権利宣言」と日本の農村開発 援助・「小農支援」の乖離を読み解く、afriqclass.exblog.jp。

フランス, A. 1912、大塚幸男訳 1977、神々は渴く、岩波書店、東京。

ハワード, A. 2003、保田茂監訳、農業聖典、日本有機農業研究会（コモンズ）。

Hurni, H., D. Motden, S. Wymann von Dach, and A.B. Zimmermann 2019, <https://bioone.org/journals/Mountain-Research-and-Development>.

土方晋 2004、江戸時代の江戸の税制と明治六年地租改正法公布、税務経理教会、東京。

ジョージ, S. 1977、小南祐一郎・谷口真理子訳、なぜ世界の半分が飢えるのか—食糧 危機の構造、朝日新聞社、東京。

Keesing, R.M. and A.J. Strathern 1998, Cultural Anthropology - A Contemporary Perspective, Third Edition, Harcourt Brace College Publishers, Fort Worth, USA.

木俣美樹男 2013、巻頭言—無芸大食への奈落、無芸大食への奈落（続き）～アマチュア 国日本の黄昏、民族植物学ノオト第 6 号：1、24-26。

木俣美樹男 2017、自分で日本国憲法を考える、民族植物学ノオト第 10 号：62-107。

木俣美樹男 2018、自分で日本国憲法を考える、第 2 報憲法に書き加える環境原則、民族 植物学ノオト第 11 号：51-55。

木俣美樹男 2019、自分で日本国憲法を考える、第 3 報民族植物学の視点から憲法に環境 原則を加える提案のゆくえ、民族植物学ノオト第 12 号：37-57。

木俣美樹男ら 2014、特集ホームガーデン：自給農耕と生物文化多様性（7 編の論文）、環境 教育学研究第 23 号：19-130。岸康彦（1996）食と農の戦後史、日本経済新聞社、東京。

国連世界食糧保障委員会専門家ハイレベル・パネル 2014、家族農業研究会／（株）農林 中金総合研究所共訳、家族農業が世界の未来を拓く、～人口・食料・資源・環境、食料 保障のための小規模農業への投資～、農文協、東京。

国立歴史民俗博物館編 2008、生業論の登場と歴史学（春田直紀）、古辞書にみる生業（中 島丈晴）、生業から見る日本史、吉川弘文館、東京。

ミズン, S. 1966、松浦俊輔・牧野美佐緒訳 1998、心の先史時代、青土社、東京。

Murdock, G.P. 1959, AFRICA- Its Peoples and Their Culture History, New York: McGraw-Hill Book Co., Inc., USA.

佐藤亮子 2006、地域の味がまちをつくる～米国ファーマーズ・マーケットの挑戦、岩波 書店。

Seidl, A. 2011, Finding Higher Ground: Adaptation in the Age of Warming, Beacon Press, Boston, USA.

Shiva, V. 1993, Monocultures of The Mind - Biodiversity, Biotechnology and the Third World, Third World Network, Penang, Malaysia.

小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン編 2019、国連家族農業の 10 年と小農の権利 宣言、農文協、東京。

矢野暢、衆愚の時代—神々は渴くの政治学、新潮社、東京。

未来のための生業、伝統的知識・技能の再創作

1. はじめに

世界的に著しくグローバル化や商業主義化が広がり、多くの資源が消費され、世界中に 画一的な商品が流布している。現代文明の大量生産、消費、廃棄は科学的知識の乱用によ る技術によって支えられている。言い換えれば、国際巨大企業が生産技術を要求し、現代 科学はこれに従い、科学者個人の自由な発想による知的な仕事であった基礎科学はその哲 学思想も衰微させて、片隅に追いやられている。

この国の大都市は全国から、世界中から、物資も人々も集めている。農山漁村、中山間 地は過疎・高齢化に苦しみ続け、いよいよ多くの村落が消滅する寸前にまで貧窮している。

都市に暮らしている人々は、山村の人々も都市に來ればよい。その方が辺鄙なところに暮らすより効率よく暮らせると思っているのであろう。都市民は、山村民が自然と闘い続け、その長い歴史的な結果として、自然と共存し、共生関係を築いてきたことを現場で学ぶことなく、知ろうともしない。したがって、他人事のように、無関心でいる。山村の過疎・高齢化は、継承すべき生活文化を伝える人々が減り続け、継承困難な危機的情況に立ち至っている。これは山村の問題であるばかりではなく、実は都市問題であることに、都市民はほとんど気づいてはいない。

このくには自然に恵まれすぎているので、災害は忘れたところにやってくる。台風・洪水、地震・津波、あるいは渇水だけではない。昨今の局地的な豪雨や豪雪を事例に考えてみよう。たとえば、山梨県小菅村は30年来の大雪で閉じ込められたとニュースで報道された。村人は伝統的知識に従って食料を備蓄しているから、本当は何も困らない。実は、道路網が分断されて、孤立して困るのは巨大都市東京なのである。各地からの物資が集まらなければ、コンビニエンス・ストアもスーパー・マーケットもその商品棚は空になり、大人口を満たす食料も燃料もすぐに底をつく。緊急時でも自ら家族を養えるように食料を備蓄し、常日頃から伝統的知識を学び、自給農耕し、危機に備える必要がある。古老からの言い伝えをないがしろにして、忘れては、100年に一度の自然災害や飢饉に対応できない。

日本の学校教育は、地域の自然や歴史、生活文化に関わりなく、全国一律に科学的知識の伝達を行い、地域固有の伝統的知識を体系的に再創作していない。このくには、3000 kmにわたり亜熱帯から冷温帯にまで広がり、数多くの島嶼、山岳がありながら、四方を海に囲まれてもいる。これほど複雑な自然環境は地域固有の事物や事象を地域ごとにもっているにもかかわらず、大都市を基準にした画一的な教材では実物や史実に依拠した学びはできない。

パーマカルチャーの提唱者の一人であるホルムグレン (Holmgren 2002) は類似の見解を次のように述べており、共感する点が多いので、引用しておく。

地球環境の危機は人間の文明すべて、とりわけ都市を脅かしている。都市が環境危機へ対応しないかぎり、事態は改善されないだろう。そして、その解決のためのヒントや事例、知恵は、都市ではなく農村に見つかるだろう。農村という辺境では、人間が文化と自然の接点、現代と過去の接点で暮らしているからだ。辺境からの革新的な再生というと、大学に到達する。ピタゴラスが世界初の大学を設立してから2500年以上がたった現在、大学という機関は知的教養に対する影響力をまったく失った。大学がそうした影響力を劇的に失う一方で、物理的・知的辺境にいる人たちの進歩的な考えや行動への貢献を可能とした背景には、いくつかの要因がある。①大学教育が一般化し、学部教育が低下し、教育の質が落ち、教員の報酬も低下した。②科学還元主義という知的袋小路を克服できず、物事を包括的に捉える文化が育たず、学際的な研究が報われない。③知識商売が企業の論理に乗っ取られ、学者の財政的・政治的自立がなくなった。④新しいコミュニケーション技術やメディアの発達によって、辺境にいる者も中央にいる者と同じように、情報やアイデアにアクセスできるようになった。自ら体験した大学教育と比較して、コースの知的水準の高さや知的刺激の大きさについてのコメントを寄せてくることが多い。文化や知の再生の場が辺境にこれほど求められたことは、歴史上いまだかつてない。W. ベリーは、現代の企業的農業とそれに付随した農村の生活やコミュニティの崩壊に対する批判のなかで、現代の農業は無知で尊大な通説によってコントロールされており、と述べている。企業や役所などの組織を動かす人の知識や技能は、長期的展望にもとづく公教育制度が育んだ。しかし、知性と先見性は脇に追いやられ、目先の損得に一喜一憂するその場かぎりの狡猾さに取って代わられた。科学の知識は社会が分かち合う共有財産だったが、

知的所有権の主張の前に、売り買いされ、略奪され、管理されるようになった。現代人は、先住民の文化や土地に自然に根付いた長期的なものの考え方を再生させつつ、それを凌駕していかなければならない。地球の生命史の多面的な性質を観察し、さまざまなパターンを読み取り、感じる方法を学ぶことで、直面する変化を利用し、創造的に対応する能力が身につく。

2. 伝統的知識・技能の価値

伝統というものはまるで生き物である。伝統という文化的進化の創造物は、遺伝子に刻まれる生物的進化として伝わるものではない。伝統的知識であれ、伝統的技術であれ、子どもが引き継ぐには、大人をただ真似ればよいのではない。真似をするだけでも容易なことではなく、これらを十分に習得するには自らその都度時間をかけて、繰り返し再創作しなければならない。ここでいう伝統的知識 Traditional knowledge とは、地域に住む人々の実用的な経験に基づいて蓄積されてきた知識で、地域固有性と状況統合性が高いものである。地域の暮らしに関わる生態、分類、農耕、認知、物質文化、芸術など、とても広い範囲に及んでいる。

伝統的知識は、科学的知識に対置されるものである。意外なことに、むしろ欧米の研究者たちが、慢心した科学万能主義の反省から、自然と共存してきた先住民や小規模農耕民の伝統的知識を評価し、これらから学ぶ必要性を強く主張しているのである。科学的知識と対等に対置して、伝統的知識の新たな解釈および再評価を求めているのである（コットン 1996、ジョンソン 1992）。民族科学と一般に呼ばれている新たな学問分野である。たとえば、植物学に基礎を置く場合は、植物と人々に関わる全てを研究対象とする民族植物学と呼ぶ。生活道具、食料、医薬品、自然環境 保全、生物多様性、遺物、信仰、芸術など、植物に関わるあらゆる事物や事象を研究対象とする。主に、キュー植物園、ユネスコや WWF が中心になって各国の植物園、大学などと共同して、民族植物学の調査研究を進めてきた。

3. 未来のための生業のすすめ

日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年 以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には、現代的な 課題となった「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに保全されていることが明らかになってきている。

自然だけではなく、身近な土地からさえも切り離されて世代を重ねた都市部の住民にとっては、この知恵や技能を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考え直す機会は極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村民と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。この実践研究プロジェクトでは、3 年次計画で実際の伝統知学習プログラム展開をしつつ、この新たな交流実践の姿を描き出す試みをしてきた。農山村と都市からの参加者ともに、生活における伝統知や技能の大切さとその継承による健全なライフスタイル、すなわち素のままの美しい暮らし (sobibo) へと変容するために学ぶための良い実践を蓄積してきた。これらの文化的財産をもとに、これからの私たちの生活や人生の先行きを明るく直観できるような統合概念とともに発見し合いたい。都市住民の多くは高慢な偏見で山村を想い、また、山村住民の多くは屈折した感情で都市を思っているようだ。しかし、今日では、比率はまだ少ないながらも相当数の人々が、自然と向き合ってきた山村の

豊かさ、自然を忘れて久しい都市の貧しさを、少し穿って直観するようになってきたと思う。これからも、多くの人間は科学技術・機械社会文明を極めようとするだろうが、他方で、直観した人々は着実に自然とのかかわりをもう一度考え直し、素直な幸せを求めて「生き物の文明」を再創造しようとするだろう。

山梨県小菅村では、源流の郷やエコミュージアム日本村（トランジション小菅）など、村づくりの取組みを継続的に行い、経験を蓄積してきた。さらに、山村の人々は他地域の優れた経験を学び、山村の暮らしをより楽しいものにするとともに、また、都市の人々にも山村の生業を都市の職業に加えることによって、人生をさらに幸せにしたらいと願う。このプロジェクトに関わるいくつかの環境学習プログラムで、山村の豊かな暮らしを再認識できるようになったと思う。

経世済民の失政により、経済や災害によって深刻な危難に瀕しているこのくにをどのように再生するのかを、私たち一人ひとりが、自ら深く考え、課題を見つけ、解決する示唆を得ねばならない。自らが強い意志をもって、一人でも自分の課題としてとらえ、ゆっくり地道に、人生を、家族を、身近な人々を、地域社会を楽しく幸せにするように努力することだと思う。

幸せは自由である ―このくにの人々が不幸からぬける手法：

私たちは人生に幸せを求めて良いのだと思う。このくにの人々の不幸を幸せに転ずる方法は、自然に従い、農耕など生業をもち、職業（産業）のほかに趣味を大切に、素のままに美しく暮らすことである。①自由気ままに；あるがままの思いを素直に認め、自由から逃げない。他者を不当に傷つけず、自らも傷つけない。一度しかない、短い人生を十分に楽しむ。②とらわれないで；思い込み（主義）にとらわれ過ぎない。三毒：貪欲 憎悪 無知。名利に走らず、怨恨に振り回されないように、教養を深め高めるように学ぶ。③ほどほどに；実行しようと思ったことはゆっくり続け、努力を怠らずに、意思・約束は曲げない。過剰な奪い合い、不公正な競争はしない。④自給知足；人生は職業（産業）のほかに、生業を楽しみ、自ら充たされ、この世に恨みを残さない。自分たちの食べ物などではできるだけ自給する。不足分は地域から分けてもらう。⑤トランスパーソナル個人主義；個人主義の拡張・展開、超越による思いやり、分かち合い。多くを学ぶことが教養の質だ。学び考えることから逃げない。家族・友人を大切にし、人脈を広く求める。⑥社会参加；地域社会の市民サークル（CSO）に参加して、くにや世界のことを学び、考えて、地域を良くする活動をし、社会に意見を述べる。

現在の到達点：

伝統的知識・技能は自然と向き合うにはなくてはならないもので、何もかも捨てて良いはずはない。家族小規模農耕、市民農園などでは適正規模の技術が必要だ。産業ではない生業は生きるために必要であり続ける。高齢化社会の重要課題は大切な伝統を、身をもって体験的に継承することだ。現在の到達点がすべてではなく、現在はこれまでの歴史のすべてを含み込んでいる。現代であっても、私たちは山野では野生時代・前農耕時代そのままに、狩猟・採集や漁撈をしている。家族小規模自給農耕はこのくにの特色であり、兼業農家として継承され、また市民農園などとして新たな農耕・園芸形態も広まってきている。もちろん大規模稲作は、農業技術の発達や農地改良などにより、このくにの人口に見合う程度に過剰生産できるようになっている。

現在では、生命科学技術の発展により、命さえも多分に操作され、売買され、また莫大な量の食料も安い燃料によって交通網が維持されて世界中を駆け巡っている。食料の価格は自然災害によってよりも、先物買いや国際金融の動向によって左右されている。それでも、現代がすべてITによって動かされているわけではない。現代といえども、歴史は消せず、これまでの歴史を含むように多層な複雑構造によって文明は存立しているのだ。

生業とはなにか：

人間が自然と向き合わなければ、村にも街にも野生が戻る。素のままの美しい暮らしの基層は自らの「生業」である。山村の暮らしでも生業だけでは暮らしにくく、都市での暮らしは生業を得られず、生業がなくてもとりあえず暮らせる。ここに、拝金経済至上主義の陥穽がある。山村民は生業の不足を産業に少し関わることで補い、都市民は産業の隙間に、生業を組み込むのがよい。

{注：語彙：Subsist；生存する、食っていく、暮らしていく、食料を与える。Subsistence；生存、生活、生計。Subsistence farming；自給農耕。Subsistence crop；自家用農作物。}

人間は実に遊び暮らすことに人生をかけてきた。狩猟（鉄砲ぶち、魚釣り、蜂取り、蜜蜂飼養…）、採集（盆栽・銘木、山菜、きのこ、野草、昆虫など）、収集（石、化石、貝殻…）などの minor subsistence は、どれほど先人たちの人生を楽しくしてきたことであろうか。人生を楽しく遊び暮らすには、過剰な便利や不要不急なものを無くす。過剰な消費のために、稼ぐことを止める。簡素な生活をし、自給知足するのが良い。さらに芸事、文筆、野外活動などをするのも良い。家族の暮らしの中で、生業と産業のバランスをとれば、ゆったりした暮らしができる。地域社会・くにで、第一次産業を都市民による生業で補完すれば、野生の復活を許す放棄耕作地を楽しみながら減らすこともできる。都市に人間が集住すれば、野生は山野を奪い返しに来る。福島原子力発電所の公害で、居住できなくなった街には、放射性物質の危険性を知らないイノシシなどの野生動物が跋扈している。都市にもイノシシ、サル、クマなどの野生獣のほか、ペットなどとして飼われていたハクビシンなどの外来獣が逸出して徘徊している。過疎高齢化はこのくにの山野を野生に戻す方向に機能している。自然と人間の闘いの拮抗の上に、共存や共生が進化してきたが、現在は、大都市集中によって自然と人間との折り合いにほころびが出てきたのだろう。伝統知・技能は世間が見捨ててきたもので、それを見直してほしいと考えて企画したプログラムであるから、この意味でも妥当な評価と考えて良いと思う。

おわりに：

参加者の属性によらず、記述統計の結果からは、伝統的知識・技能を体験的に学ぶことの評価は高かった。テキスト分析によっても、実施された環境学習プログラムへの満足度は高いといえる。

参加者の主要な関心は自然のなかでの体験である。この体験学習の評価を高めている要素は、人々（山村民、主催者、参加者、交流）、場（自然、農山村）、料理（食材）、および生活文化である。農山村や生活文化に関心を高めるようになるのは、農山村で人々が生の生活経験を話し合うことによってである。これによって人々の生活改善への意欲も高まり、全ての参加者が体験の場を共有した ことへの感謝の言葉に繋がっている。農山村での体験的環境学習プログラムを実施することは準備も大変で、参加者も多くなく、地味な活動ではあるが、確かな効果を着実に上げてはいる。この堅実なモデルを普及して、都市住民

がさらに参加するように、各地で類似の活動が広まるよう期待したい。自然災害や社会変動に対する復元力（レジリエンス resilience）は、短期的には伝統的な知識や技能が特に有効であり、このために長期的に見てもこれらを継承保全していくことが社会の安定や家族と地域社会の平安・幸福につながる。このような思考経路を体験的に認識できるような環境学習が望まれ、今後とも研究すべき課題であろう。

引用文献

ホルムグレン, D. 2002、タナカ, R. ほか訳 2012、パーマカルチャー（上・下）～農的暮らしを実現するための 12 の原理、コモンズ、東京。{“Permaculture: Principles and Pathways Beyond Sustainability.” Hepburn, Victoria: Holmgren Design Services.}
木俣美樹男 2015、都市と田舎～生活文化の再創造による継承、『生き物の文明への黙示録』
<http://www.milletimplic.net/>

参考資料

公式ホームページ「植物と人々の博物館」<http://www.ppmusee.org/>ではエコミュージウム日本村（トランジション小菅）、および個人ホームページ「生き物の文明への黙示録」<http://www.milletimplic.net/>では、日本村塾、雑穀データベース、森とむらの図書室、民族植物学、環境学習、民具・その他資料のアーカイヴが、e-ラーニングできる。

2014. 7. 14 木俣メモ、2016. 6. 23～7. 12 加筆

ドイツ散訪

はじめに

ルフトハンザ機上から地表を鳥瞰した。日本新潟經由ハバロフスクから始まるロシアの広大なシベリア高原の森林地帯を飛行し、サンクトペテルブルクを経てバルト海に入り、ユトランド半島を眼下に見た後、ドイツのなだらかな丘陵に広がる農耕地と点在する集落を囲む森林に、素のままの美しい暮らしを見つけて、とても安心する。

ドイツと日本はともに第2次世界大戦における同盟枢軸国として敗戦したのだが、その後のドイツの農業政策は日本と大きく異なり、食糧自給率は1961年に67%であったが、1999年には101%に達した。1990年のドイツ再統一後、一時88%に微減した年もあったが、90%以上を維持している。反対に、日本の食料自給率は1961年には78%であったが、1998年以降40～39%にまで低下し続けてきた。

ドイツにおいては、都市と農村のバランスをとる行政政策による効果があったのだろう。都市に人口集中しない政策で、大都市が少なく、農村居住者が多い。住民が100万人を超える巨大都市はベルリン、ハンブルク、ミュンヘン、最近100万人に達したのはケルン、合計4都市である。日本においては、東京都特別区、横浜市のほか、東大阪市までで総計36都市になる。

ドイツはEUの共通農業政策に従う。EUの条件不利地域対策はイギリス丘陵地での羊飼養保護、大陸での山岳農民助成に始まり、農業を続ける人々に直接支払を行うことによっ

て、農業維持、景観保全、過疎化防止、即ち、地域社会を持続可能にすることである。その後、農業の集約化による環境汚染、生産過剰、これらに対して政策のグリーン化が求められ、環境公共財保全のために環境支払を行うようになった。また、都市計画の中では、公用地にクラインガルテン（市民農園）やシューレガルテン（学校園）などが重視して位置づけられ、家族小規模自給農耕や食農教育の推進策となってきた。これらの農業環境政策は機上、車窓、船上から景観を観察からも認められた。いくら旅慣れすると、空港で免税品をお土産にする気はなくなる。街中の市場やスーパー・マーケットに行き、地元市民が買い求めている日用品を探索する。ささやかな経験であるが、これまでのドイツ旅行で印象深かったことを記憶にとどめておく。

1 訪

日本環境協会の依頼でデンマークとドイツにおける環境教育の実態調査に行った。日程は、1996年6月17日から7月2日。ルートは、フランクフルト、(コペンハーゲン)、ボン（マインツ・マンハイム）、ベルリンであった。聞き取り調査報告書は下記に示した。ここでは、この報告書には書かなかった私的な感想や印象を、フィールドノートを見て思い出しながら、書くことにする。親しい大学職員の妹さんがドイツ人 RP さんと結婚していた。彼はジャーナリストで、緑の党の議員でもあった。日本市民の環境活動に関心があったので、私が案内を頼まれた。日本環境教育学会を創立する準備を始めていたころのことである。また、在外研究でインドに出かける直前の時期でもあった。都市で自給農耕をするグループなどを紹介して回った。彼からも、日本人の自然観について、ドイツ語に訳すので、日本語で良いから小論を書くように依頼された。帰国後の彼に小論を送ったところ、その直後に、ベルリンの壁が壊されて、その翌年には東西ドイツの統一が実現した(1990)。この歴史的な大事件によって、私の記事は吹っ飛んでしまって、残念ながら、掲載されることはなかった。この人脈を頼りに、ろくにドイツ語も分からないのに、調査に出かけたのである。

デンマークには、ワールドスクールで親しくなったギムナジウムの IH 先生がいたので、コペンハーゲンでは彼女夫妻の自宅に求めているだけ、マーメイドやチボリばかりでなく、環境学校、EU 環境庁、教育省、IBM など環境活動の現場を見て回ることを援助してもらった。ギムナジウムの卒業式にも招待されたし、まことに短時間でエッセンスを見ることができた。この感想は別の機会のデンマーク旅行記に譲る。RP さんの援助で、デンマーク同様に調査が進められると甘く期待していたのだが、子どもさんが風邪、彼はローマへの出張と重なり、一人で面接調査を敢行せざるを得ないことになり、下手な英語のみで意思疎通を図るしかなくなってしまった。ドイツ語は妻から習ったが、ほんの片言しかできない。しかし、自由で冒険的なこうした緊張感はかなり好きだ。

東京からフランクフルトまでの機中で、祖父が病気になって、ポーランドに帰省する父、息子 2 名と臨席した。父は無口だが、子どもたちは日本語と英語でおしゃべりだった。所沢在住の W 君らで、姓からして奥さんは日本人なのだろうと思われた。空港で 2 時間ほど待ち、コペンハーゲン行に乗り継いだ。その後、6月22日にフランクフルトに戻った。空港から乗ったタクシーの運転手が学生かと聞いたので、教授だといったが、あまり信用されなかったようだ。年齢を聞くと彼は私より 1 歳上だった。私は相変わらず威厳が備わらないので、とても若く見えてしまうのである。良い植物園があるので、ぜひ行けと勧めら

れた。翌日は都心にある植物園（Palmengarten）に行った。ラフレシアがいまにも開花しそうだった。本や種子を買ったが、多くの市民も苗木を買っていた。

6月24日朝、ボン行の都市間特急 IC に乗り、ドイツ環境・自然保護連盟 BUND 本部に行った。ここは閑静な住宅街にあり、旧チェコスロバキア大使館の建物であった。職員の女性がとても機能的に、配送センターに連れて行ってくれ、たくさんの資料をエコバッグに詰め込んでくださった。彼女は学校英語しか知らず、英語を使ったのはアラスカに6週間行った時だけだと言っていた。さっぱりとして個人主義的で、仕事が早いので好感をもった。タクシーを呼んでもらって、環境保護局に行った。ここも各国大使3館街の端にあり、緑豊かであった。ここでは受付の女性にあまり英語は通じなかったのが、研究官の女性が呼ばれ、自然保護に関するドイツ語と英語の資料をたくさんいただいた。

ボン大学の植物園に行くと、キビ、アワ、ヒエなどの雑穀も含めて20種以上のイネ科栽培植物が生態展示されていた。特に、コムギ展示畑にはヒナゲシ、ムギナデシコ、などたくさんの雑草が混ざっている伝統的な畑作を再現しており、とても感銘を受けた。こうした栽培法がコムギの伝播に伴い、随伴雑草から中国で冬野菜が起源したという栽培化過程が納得できた。時間通りに、都市間特急 IC に乗ってフランクフルトに向かった。ところが、マインツからマンハイムに向かって曲がってしまった。恐らく行先変更のアナウンス（ドイツ語）があったのだろう。後から思えば、確かにマインツで大勢の人が降りた。車掌に確かめて、普通列車 RB に乗り換えて、フランクフルトに向かったが、到着は3時間遅れになった。でも、車窓からゆっくり村々や人々を眺めることができて楽しかった。フランクフルトの本屋は大きい。飲食物本専門店に行ったが、さすがに、世界中の本がそろっていた。雑穀 Hirse の本はないかと店員に問うたところ、発音が違うと直され、結局、1冊だが、キビの料理法の本を見つることができた。環境学習の本は聞いても、発見できなかった。英国の本を扱っている本屋は小さく、一般書しかなく、役立たなかった。

博物館めぐりをした。歴史博物館は青銅器時代以降の武器、キリスト教関係の展示が多かった。民族博物館は小さいが内容は良かった。「民族」とは何かを問い、地雷の展示など戦争と難民を扱っていた。国を追われる流浪の姿、奴隷売買、難民・移民の困難な就業など、良くまとめてあった。EU 諸国は難民を受け入れているが、日本の難民受け入れへのガードは堅い。考古学博物館は新石器時代の展示は少なく、土器展示が中心であった。家畜の伝播の展示はあったが、栽培植物に関しては見られなく、残念であった。でも、研究しているイヌガラシ属雑草では、ゲート像下のキレハイヌガラシは開花が始まったばかりか、種子はなかった。タネツケバナも路傍の植え込みに生えていたが、種子は飛散した後であった。スカシタゴボウも動物園にたくさん生えており、50cm ほどに伸びて、種子をつけていた。

6月26日、朝食に行ったら日本人観光客が大勢押し寄せていて閉口した。10時にWWF-Dを訪問した。B夫人が2時間ほど応対してくださった。夫君はボンの環境保護局勤務ということだった。午後は動物園に行った後、ゲート大学の自然誌博物館に行った。化石、動物はく製、昆虫、鉱物などの、すごいコレクションが展示してあった。すごいと感嘆するしかない。特に、人間が絶滅に迫いやった飛ばない鳥 Dodo の復元標本にはいたく感動した。

6月27日にベルリンに国内航空便で移動した。ホテル周辺を散策していたら、健康食レストランの窓に穀物の穂が飾ってあった。コムギ、エンバクに混ざって、キビの14穂を発見した。明日の夕食はパターソン食堂でとることにした。翌朝の太陽は5時に北東方向か

ら出た。カーテンの隙間から射した陽光が顔にあたって目が覚めた。ブランデンブルク門近くの環境省 UBA に出かけた。これら官庁は旧東ドイツ側にあり、急速に都市の再整備が進められていた。担当の女性職員は自転車通勤しており、トライアスロンをしているそう。夫君との間に2人の娘（14と18歳）がおり、長女は学校休みでニューヨークに行っている。魚料理が好きで、昔は祖母によく作ってもらった。彼女の好意で、資料を航空便で送っていただけることになって、昼食に連れて行っていただいた。旧ドイツ空軍の本部建物で、玄関には旧東ドイツの社会主義を描いた、マイセン製の壁画があった。IDカードを持たないと官庁には入れないので、何か似たものを呈示せよと言われて、自動車免許証を示したが、日本語は読めないの駄目だと言われ、臨時の入構証を借りることになった。新しいベルリンの建築計画も展示されていた。ブランデンブルク門のインフォメーションに行って、ウエルカムカード3日間を買って、フンボルト大学、歴史博物館、旧博物館を歩き、U Bahn でホテル近くまで戻った。健康食レストランに行って、ミンチボールとごはん満腹になったうえに、件の1穂のキビを無理言ってもらってしまった。

6月29日は、U・S Bahn を乗り継いで、広大な植物園に行った。栽培植物の野外展示の中に、草丈に変異のあるキビが出穂しているところであった。午後は動物園・水族館に行ったが、雨が降り出し、おまけに雷もなったので、ヨーロッパセンターに入った。翌日は博物館島に行き、歩き回り、発掘品や絵画を見て疲れてしまった。さらに、自然誌博物館の展示のすごさに圧倒されて、疲労困憊の極地に達した。それでも、技術博物館に行き、汽車とビオトープを見た。打ち捨てられた線路跡に植生・土壌が回復しているのをビオトープと言っているようだ。夕食はハクインに行って、インド料理、ダルとアショカボードを食べた。ジャガイモがたくさん入った甘いカレーの上に、焼きナスを載せて、さらに、甘いカシューナッツ入りのピラフを載せた料理であった。RP さんにお礼の電話をしたが、子どもさんが電話に出て、英語で呼びかけたら、「ママー」と言うや接続を切られてしまった。

参考：. 木俣美樹男、1997、デンマークとドイツにおける NGO を中心とした環境教育活動、海外先進国 NGO の環境教育活動に関する実態調査報告書 pp. 61-77、財団法人日本環境協会。

2 訪

フランクフルトを拠点にした電車往復観光をした。妻の案内であった。日程は、2013年8月30日から9月6日。ルートは、フランクフルトから、ケルン、ハイデルブルク、フルダ、ビュルツブルクを都市間特急 IC で往復した。

フランクフルト、パルメンガルテンの南米展示はゆったりと明るい色調で、栽培植物の写真や原物で展示構成をしていた。小菅のムカシモロコシやジャガイモ、トマト、などを中心に、南米より来た栽培植物の展示をしようと思った。この際には、トウモロコシの祖先種を明らかにしたイリノイ大学の Iltis 教授のコーヒー皿も公開するつもりだ。1983年に、私が日米セミナーで初めて北アメリカに行った時、彼が祖先種を発見して間もない時であったので、休憩時間にトウモロコシの起源を皿にマジックで書いて、私に教えてくださった。私にとって貴重なその皿である。シュテューデル美術館で、フェルメールの地理学者をひっそりと見ることができた。この絵が日本に来たときは、立ちほだかる人の多さで、一瞥もする気にならず、通り過ぎてしまった。ゲーテハウスは大層立派な家で感心した。

レーマー広場の聖バルトロメウス大聖堂を訪ねた。フルダでは市宮殿のシュロス庭園、青が美しいシンメトリーの大聖堂前、ミヒャエル教会を歩いた。ちょうどマラソン大会があったので、沿道で声援を送った。昼食はゲーテが定宿にしていた「ゴルデナー・カルプフェン金の鯉」のレストランで、彼が好んだという料理を食べようとした。ところが、お客が多く、そのランチは品切れで、ディナー・メニューならできるとのこと、せっかくだからそのメニューにすることにした。散々待たされ、その間に少しワインの酔いも回って、しかもかなり高額請求されたので、チップは置き忘れてしまった。

ケルンの中央駅を出るとすぐに目前にそそり立つ大聖堂の威容に圧倒された。私たちはクリスチャンではないが、近年、妻が聖堂に魅かれており、各地で教会を訪れ、ろうそくを灯している。私はステンドグラスから漏れる光が好きだ。いずれ刺繍でステンドグラスの窓を表現してみたい。2015年5月に行った天草の天主堂の床に敷かれた畳にも大いに感銘した。キリスト教会に限らず、聖なる場所はどこでも、たとえば、高千穂神社のような信仰の場の厳かな雰囲気は心を鎮めるようだ。しかし、信仰の場では決して写真を撮らないようにしているので、しっかり記憶するか絵葉書で補足するしかない。オーデコロンが「ケルンの水」の意とは、お恥ずかしながら、これまで知らなかった。老舗の4711本店に行き、講義の際に知ったかぶりを惹けらす目的で、教材用に古典のコロンを買った。

「これが本物のオーデコロンです」などと、実際に民族植物学の最終講義で使ってみた。学生の皆さんにはあまり受けなかったようだ。私の思い入れは、たいがい空振りする。昼食はフリーアームドムで、郷土料理ライニッシャー・ザウアーブラーテン（牛肉のワイン煮込み）を食べて、ケルシュビールを飲んだ。

ビュルツブルクでは、レジデント、大聖堂、ノイミュンスター教会で美しいマリア像を拝し、アルテ・マイン橋を渡ってマリエンベルク要塞を巡った。この橋のたもとにある水車小屋レストラン、アルテ・マインミューレのテラスで昼食をとった。マインの川風とビールの酔い心地がよかった。ここのスーパーで、中国産のアワも売っていたが、イタリア産のキビを買った。精白されていない粒を探して、2014年初夏に20粒ほど小金井で播き、発芽したので、小菅の畑に移植した。草丈は低かったがよく取れたので、2015年5月には道の駅小菅の駐車場わきの雑穀見本園に播種した。ハイデルベルク城へはバスで行き、ケーブルカーで登り、歩いておりてきた。その後、ハイデルベルク大学には構内行のバスで行った。こじんまりした植物園内だが、歴史に敬意を表したい。マックスプランク研究所の写真を撮ったら、その後、デジタルカメラが壊れて、液晶が真っ白になり、写らなくなってしまった。16世紀の騎士の家、ホテル・リッターで昼食をとった。

3 訪

2015年6月23日から30日、南ドイツへのバスツアー観光に出かけた。ルートは、フランクフルト、リュースハイムからザンクトゴア（ライン下り、ワインの試飲）、ハイデルベルク、ネッカービショフスハイム、ネルトリンゲン、ローデンブルク、レーゲンスブルク、ミュンヘン、であった。団体旅行は好まないが、昨今の世界状況や旅行の安易さにより、今回は大手旅行会社に身を委ねてしまった。8組の「老夫婦」に、添乗員FH夫人が付き添った。

翌24日朝、出発時間5分前にフロントに下りていくと、誰も居ない。玄関に出てバスを探そうとしたら、FH夫人が慌てふためいていた。あろうことか、私たち4名の客ばかりでなく、添乗員の彼女も置いて、バスはリュースハイムの丘に出発していたのである。

彼女の荷物はバスの中、唯一ポケットに入っていた携帯で連絡を取り、バスを呼び戻した。他の客たちもおかしいと思いながら、しばらく躊躇しながら運転手に言わなかったようで、バスは街区を出る橋まで行ってしまったようだ。

フランクフルトのマイ・ツアイルの地下のスーパーで、ウクライナ産とドイツ産 (bio500g) のキビ (Gold Hirse) を買った。リュースハイムではブドウ畑の上をゴンドラで下りながら、対面を昇ってくるゴンドラの観光客同士でにこやかに手を振り合った。麓駅のツグミ横丁を経て、ザンクトゴアまでライン下りをした。船上では日系店舗のワインの試飲をしながら、ローレライを通過した。市内に戻ってから夕方は、ゲーテハウス、大聖堂を巡った。カフェのテーブルにはアジサイとキビ属の野草が飾ってあった。クラインガルテンは市街地の周辺、鉄道線路のわきに見られた。100m²程度の広さ、小屋があり、たいがいドイツ国旗が立っていた。

ハイデルベルクに向かうアウトバーンでは、広大なムギ畑の中に風車が時折見られた。美しい農村集落が点在し、真ん中には教会、周辺には森が分布していた。ハイデルベルク城を再訪した。市街の史跡「学生牢」には京都大学のオフィスの表札があった。卒業生のY0さんがリエゾンで4月に来ていたのはここだったようだ。昼食に、マウルタッシェン (ドイツ風ラビオリ) を食した後、ネッカービショフスハイムに向かう。

ネッカービショフスハイムからネルトリンゲンにむかうアウトバーンの両側には、広大ななだらかな丘に畑が広がっていた。オオムギは黄色になり完熟、コムギとライムギはまだ緑を残して登熟中、ジャガイモは開花していた。多分、砂糖大根だろう、1haほどに区画された畑が広がっていた。エンバクは1か所、30a程度見られ、登熟中であつた。菜種は完熟しているが、まだ刈り取られていない。各所には、ほんの少しずつだが、草丈の低い菜種が黄色の花を咲かせていた。ネルトリンゲンは隕石の落下によってできたリース盆地にある中世の城塞都市であつた。城壁には少しだけ登ってみた。のどかな田舎町の風情であつた。家族経営のような小さなホテルの庭は広くてとても良かった。ベンチに2人が座っていると思ったら人形であつた。子どもたちが自転車競走を庭でしていた。

ローデンブルクも城砦都市で、古いホテルの別館に泊まった。ほとんど中世の調度があり、何百年か前の匂いがした。道路は10x20cmほどのブロックの石畳、自動車はバタバタと言ってせまい市街を走る。聖ヤコブ教会など市内を巡った。城壁には櫓が残っている。マルクト広場には地区ごとの井戸がある。リンゴ、サクランボ、クルミが見本程度に街路に植わっていた。菩提樹は各地で開花中、良い匂いがしていた。インドボダイジュとはまるで違うことを、今更ながらに知った。ゼニアオイは畑の雑草で開花中、タチアオイはまだ咲いていなかった。バラはどこでも痛みがなく、清らかに美しい。教会の塔には上らずに、そのわきにあつたスーパーで野菜と花の種子を買った。フランケンワインは購入し、宅配にしてもらったが、名物シュネーバル (雪の球状の菓子) は大きすぎて食べきれず、買わなかった。夕食は、マスのフィレなどを食した。

ミュンヘンに近づくにつれて、さすがにビールの名産地、ホップの畑が多くなった。それでも、広大な畑で食糧自給は万全だ。トウモロコシは飼料用で、各地で旺盛に生育していた。太陽光パネルも、人家、工場、畑の周辺に展開していた。自然エネルギーに転換しようとの政策が強くうかがえる。日本の農業軽視、他国に食料を依存する政策は全くの誤りだ。中央政府が食糧自給政策を強力にとらないなら、市民は家族自給農耕を用意し、安全でおいしい食物の一部でも自給するように準備すべきだ。地方行政府や地域、家族が生活を自助せねば、自然災害と人為災害に際して、地域や家族の生存を危うくする。レーゲン

スブルクでは、大聖堂、旧市庁舎を見て、工事中の石橋を渡った。河岸では音楽祭が行われ、ロックのような大音響が流れていた。昼食は醸造施設のあるレストランで、ソーセージを食べ、ビールを飲んだ。ミュンヘンからフュッセン郊外のノイシュバンシュタイン城に向かった。この途上に、キビ畑らしきところ 1 か所、他の不耕作地にキビの 1 穂らしきものを一瞬見たようだ。マリエン橋から見る城はことのほか美しかった。だが、ホーエンシュヴァンガウ城の方に親近感が持てそうであった。麓の日系店舗で、バウムクーヘンを土産に購入した。近隣にあるヴィース教会内の美しいマリア像、比較的簡素な建物の外観からは想像もつかなかった美しさであった。バスから見ていて気が付いたのだが、村の入り口にはキリスト像があり、村ごとに教会もある。2014 年に行ったフランスでも、同様であった。地域に悪いものが侵入しないお守りということのようだ。個人でも十字架のロザリオを身につけている人は多い。信仰を象徴し、支える物である。では、現代の日本人にとって何があるのか。江戸時代の宗門改め、さらに明治維新前後の廃仏毀釈から国家神道によって、日本人は宗教への信心ばかりでなく、深い信仰心をも骨抜きにされたのだろうか。夕食にはヴィーナーシュニッツェル(ウィーン風カツレツ)とマスのグリルを食べた。

帰国日の朝、胡桃割り人形を新たなコレクションに加え、パン屋でブレーツェル、ロッゲンブロート 2 個を買って、持ち帰った。ファーバーカステル社の水彩鉛筆も、12 色を孫に、36 色を私用に買った。マリエン広場の新市庁舎の仕掛け時計の人形が 11 時に動くのを見て、帰国の途に就いた。どこに行っても、城砦や教会が修復維持されており、古い建物景観を大事にしている。市は小さく、古い建物を保存、内部を現代的に改修しても、外壁面はしない。また、陸や河川の街道を大事にしている。ロマンチック街道通過証明書もらった。Bio 商品の多さ、野菜類が多いが、キビにも bio マークがついていた。

経験から学ばない日本人

ドイツに視察調査に行った日本の行政職員や研究者は多く、彼らの著作も少なからずある。しかし、読書しない日本人はドイツの経験から総合的に学んではない。いつもの悪しき保身習性だが、ご都合主義というか、いやな表現だが、「美味しいところだけ、いいところ取り」、「洋魂」を抜き去った洋才を「和風」に模倣して、口先だけで、行政策に行動を伴わなかった。「こんなに視察者が多いのに、日本人は何も学ばないのか」とはあるドイツ人の言である。学校で教育されたささやかな知識の枠組みからはみ出して、歴史や行政策経験による新たな学びをしようとししない。日本人の確信的保守ではない、実は曖昧な保身体質、自己の頭で深く考えないことから、この国の社会は良い方向に変わらない。逆説的に聞こえるだろうが、イギリスのような穏やかな保守的暮らしからは、確かに斬新な行動が生まれてもいる。経験から学び、考え、自らの意思で行動し続けたい。

とりわけ、環境保全を実行しながら、食糧生産を自国で賄えるように、あるいは地域で、家族で自給自立できるように、多面的な政策を検討するべきである。第 2 次世界大戦中および敗戦後の飢え、東日本大震災後の食料供給、自然災害による食料不足、人為災害による食料汚染、この 70 年に次々に起こり、どれだけ多くの苦難の経験があることか。どうしてこれらから学び、備えようとしなかったのだろうか。

NHK の合瀬宏毅解説員(2014 年 8 月)は、「なぜ上がらない?食料自給率」と題して解説をしているが、この中で次の点を指摘している。「食料自給率は、消費者が自分の食べるもののうち、どれだけ国産を選んでくれたかを示すものです。農産物が売れないと農家も経営できませんし、農家がいなくなると、消費者も困ってしまう。生産者が需要の変化に適

応できず、消費者が求めるものを供給できなかったことが、自給率を下げた大きな原因だとされています。そうした国々は農家1戸あたりの耕作面積が、日本の数十倍と広く。TTPなど今後、経済連携が進む中で、日本は逆に自給率が低下する恐れも。最近は大高で輸入食品の価格は軒並み上がっている。天候不順による食料の供給は不安定さを増すばかり。新たな品種や技術の普及も進まなかった。助成金をもらうことが目的化して。今後農業を担う50歳未満の人は、18万人と全体の10%にすぎない。これまで以上に若い人たちの新規参入を増やし、企業の農業参入を進め。品種開発や機械化を進めて生産力を高めることになると思います」。

すべての生き物は自分の食べ物は自分で獲得している。人間とて例外でなく、自ら狩猟、採集、農耕してきた。ところが、この解説に見られるように、現代の日本人の多くは自ら食べ物を獲得するという生き物としての根本原理を失ってしまった。すべてを他人事のように平然と語っている。何十年にもわたって、自給率が向上しないのは、そうしない政策を意図してとっているからだ。日本の水田稲作減反・補助金政策は品質の良い安全な作物を作り、環境保全をする方向ではなく、単に安直な稲の生産量調整のためで、農家の生産意欲や職業的誇り、社会的信頼を衰微させた。理念は人の行動を支えている。金銭だけで人は行動を決めてはいない。

このくには温暖な風土で草木の繁茂生育が良く、耕作放棄すれば、すぐに生態遷移が進み、山野荒地や豊葦原になり、耕して天に至る父祖の努力を無に帰すことになる。再び開墾するのは容易ではない。放棄しないで、粗放で良いから、環境保全に配慮した家族自給農耕を続けるのがよい。環境悪化と人口増加も著しく、きわめて危機的な状況にあるからには、市民は家族や地域社会を守るために、市民は小規模家族自給農耕を自ら行い、また、地域で推進するように多面的で複線的な地域政策を提案し、実現に向けて具体的に行動すべきだ。都市には多くの不耕作地があり、法律も整備されてきたのだから、地域行政はもっと積極的に農地を借り上げて、市民農園を拡大すべきだ。ドイツ他、EUの未来の暮らしを見た政策やNP0/CS0の活動から学び、日本の誠実な実践で国内外と交流しながらランジションの理念を実行に移そう。

2015. 7. 1

現代都市市民の退行進化および食料と戦争

2022. 4. 30

『風の谷のナウシカ』で語られた火の七日間が来ないように、抗い、願い、祈る。

黍稷農季人

どうか、孤立せずに、手をつないでほしい。個人を大事にしながらも、その個人を超えて考える想像 fantasy を、バスチアン・バルタザール・ブックスのように『はてしない物語』をつないでほしい。ぼくは篤農の志に共感して、この人生で不情理に抗ってきた。田舎は排他的であり、都市は無関心である。田舎が健康でなければ、自然も都市も健康を損なう。ぼくは都市市民だが、民族植物学者として自然を信仰し、篤農を尊敬しており、山村振興に50年ほど任意 voluntary に携わってきた。

それでも、その地で定着し 10 年ほどして、篤農たちの信頼を得て、任意な活動が有益な効果を持つようになると、理不尽な風圧がムラ社会の有力者から掛かり、何度も繰り返し、田舎から排除された。他方で、都市は自然や田舎には無関心を深めている。ぼくは風の谷のナウシカのように孤立無援の虚無に抗い続けてきた。ぼくは本来、人間が好きだし、田舎も都市も好きだ。

どうか、孤立せずに、手をつないでほしい。人々の分断を煽り、孤立を深めるような政治家の政策やマスメディアの言説に乗らないで、個人として自律熟慮していただきたい。

ホモ・サピエンスは本来獰猛で強欲な動物なのだろうか。この特性を穏やかにして社会生活を安寧に営めるようになるには、個人が心の構造と機能とを発達させねばならない。種内に毒をもった個体から善意の個体まで、とても著しい多様性がある。この多様な変異性は生物学的進化に関わる天性の遺伝的なもの gene に、文化的進化に関わる社会性の文化的なもの meme が加わっているので、著しく複雑である。

要点を簡略に述べれば、現代都市民は、自然、生業、生活から離れて、知能を衰微させ、教養を喪失しているのである。自然から遠ざかるにつれて五感は無常磨かれずに弱まり、博物的知能は発育せず、生業をしなくなれば、技術的知能も発育せず、生活の中身が薄くなれば、社会的知能もやはり発育しない。さらに、過剰に便利な機器に依存すれば、技術的知能も社会知能も衰えるばかりだ。その上、言語知能を外付け情報機器に過剰依存して、仮想化を強めれば、現実言語（知能）も弱くなり、一般知能も委縮して、第 6 感（直感、直観、言い換えれば想像、ファンタジー）も機能せずに、ついに教養は未熟なままで、第 7 感（良心）は発育しないままになる。すなわち、人間は平時にはか弱い自己家畜へと退化しているが、戦時は窮鼠猫を噛むように、追い詰められると反転して牙をむきだし、獰猛な動物に化ける。

動物の生活は他の生物の命を奪う捕食によって賄われる。人間とて同じことで、本来は自分の食べ物は自分で捕食する、他種の命をいただくことが基本原則で、生業は原則に従う営みだ。しかし、単なる消費者になった現代都市民には忘れ去られたが、この鉄則はなくなったわけではない。平時には物価の値上がりで大騒ぎする程度であるが、災害時や戦時には飢饉が起こり、食料生産の不足、買い占め、隠匿、などにより、飢餓が拡大して、莫大な死者が出る。これは現在も起こっていることで、いつどこで生まれるかによって程度の差はあるが、個人の人生で一度は経験しうることだ。

したがって、食料は家族のためにいくらかの常時備蓄が必要である。家庭菜園も、たとえベランダでのプランタ程度でも、少しでも自給知足で、素のままの美しい暮らしを勧めたい。自治体や国レベルでの食料の備蓄、さらには農業生産の維持促進、食料の安全保障を自治体や国の責務として憲法で保障することが必要だ。戦争は食料生産との関わりで起こる。日本が満州を侵略したのは、狭隘な農地しか有しないのに、農村人口が過剰となった事にもよる。満州に農民はいたのに、彼等の土地を奪うように、満蒙開拓団を送り込んだ。ソビエト連邦がウクライナでしたホロドモールもイスラエルがパレスティナで行っていることも、その事例だ。

ホロドモール（飢餓による殺害）は、1932～1933 年（1934）、ウクライナ、北カフカース、クバーニ、カザフスタンで起こされた。ウクライナを標的としたソビエト国家のスターリン独裁による政策が主な原因で起こされた大飢饉である。ソビエトの政策に抵抗したウ

クライナ農民に対する人為的飢饉でジェノサイドであった。1930～1937 年の犠牲者数は、農民死亡者 1100 万人、強制収容所死亡者 350 万人。(ウクライナ 1150 万人、北カフカース 100 万人、カザフ 100 万人、その他地域 100 万人であったと言う (wikipedia2022. 4. 27)。現在のウクライナ侵略はプーチン独裁によって起きているが、ホロドモールの歴史的事実がロシアへの不屈の抵抗になっているのだろう。降伏はジェノサイドになる。

中国の三年大飢饉（大躍進政策による失政）は、1959～1961 年（1958～1962）、旱魃と洪水に加えて、主には毛沢東独裁による大躍進政策、人民公社の失策が原因で起きた。農法（ルイセンコ）の転換、農地所有の禁止、農業から工業への労働力転移、地方政府の虚偽・隠蔽であった。1958～1962 年の犠牲者数；推定 1500 万人～5500 万人（おおかたが餓死だが、6～8%は拷問処刑）という (wikipedia2022. 4. 27)。この失政を隠すために、その後 1966 年に文化大革命を始めた。ロシアや中国の権力者間の闘争、粛清はおぞましい。それを農民や都市民にまで及ぼす、オーウェルの『1984 年』そのままの苦界、この世の地獄である。このような不幸を防ぐために、日本国憲法の加筆修正の議論を主権者である国民・市民、個人に求めたい。ぼくは次のように考えてみた。自由闊達な議論がより良い方策を生み出す。どうか、孤立せずに、手をつないでほしい。

第5章 新文明への希望

日本村塾教育の再発見

日本村塾教育 私は植物と人々の博物館の読書会として、日本村塾セミナーを提唱しているので、時々ネット検索をして「日本村塾」の内容確認をされていて、『日本村塾教育』(1935)という本があることに気が付いた。著者の大谷英一はクリスチャンで、太平洋戦争が始まる直前の1935年にこの本を書いている。この戦争時代に、クリスチャンである彼がよくぞ書いたものだと驚くような内容で、現在の私の考えにとっても大筋は近いように感じた。大谷の略歴は次の通りである。九州大学農学部で農業経済学を学び、1931年に文部省嘱託としてドイツとデンマークに留学、帰国後、伊豆半島の久連（現在の沼津市西浦）の国民高等学校の経営にあたり、1937年、インドで開催されたYMCA世界大会に日本代表として出席した。戦争中には、政府当局の圧力があり、それに屈して大政翼賛会に協力した。彼はこのことを悔いて、敗戦後の1946年に校長職を辞して郷里の栃木県に戻った。その後も、地元で農民教育に尽くし、矢板市の第4代市長（1974～88年）になった。大谷の著書『日本村塾教育』は国会図書館で複写してもらい、読了後に、インターネット検索で古本を見つけて、関連した古本『新興村論』(1936)、『平和の國デンマーク』(1948)とともに3冊を購入した。しかし、『日本村塾日記』(1935)はついに見つからなかった。

そもそも、日本村塾教育の実体は昭和初期に静岡県田方郡西浦村久連にあった興農学園、久連国民高等学校のことであった。デンマークのキリスト教主義に基づくフォルケホイスコーレ folkehøjskole / folk high school を模範として、久連に農場を所有していた渡瀬寅次郎の遺言で、遺族の資金提供により、彼の札幌農学校における旧友、内村鑑三や新渡戸稲造らが協力して、1929年に設置された。初代校長は平林広人で、青年を対象に共同生活の中で、農民の実生活に即した教科・実習が行われた。1933年に財団法人興農学園となり、久連国民高等学校と改称し、大谷英一が二代目校長になった。豊かな農業国デンマークの理想を求めて、全国から総計約200名の生徒が集まった。柑橘栽培の研究、講習会開催などをして、地域にも貢献していた。ところが、第2次世界大戦が激しくなるにつれて、国粋化の圧力を受けて、1942年には農道塾と改称し、1943年には実際の教育活動は停止した。敗戦後、大谷は興農学園を再興することなく、故郷の栃木に戻った。その後を受け継いだのが古里和夫で、1955年からしばらく柑橘の研究や海外の樹木、コルクガシやエリカなどの保存・公開を行っていた。

静岡県立有用植物園

大学に入学したばかりの1968年の夏、学生サークル児童文学研究会の合宿が西伊豆の松崎の寺で行われた。私は高校生の時にたくさん小説を読んで、小説に飽きていたので、大学生になってからは童話に興味を移していた。合宿前日に、2年先輩の細川さんが土肥の網元の家の出だったので、土肥の海岸で男子学生4人だけでキャンプをした。研究会の合宿終了後、私は黒田君と伊豆半島を巡る野宿旅行をした。ある神社の社殿の軒下で寝ていたら、深夜、白猫が走り去ったので、民俗的恐怖を覚えたことを記憶している。翌朝は、東海バスの始発で、県立有用植物園に古里和夫先生を訪ねた。早朝、開園前にもかかわらず、園長自ら快く、礼儀知らずの若者を案内してくださった。当時、私は大学裏の里山にアケビを見つけて、その実のおいしさと形の奇妙さに感動して、バナナのように食べられ

る種無しアケビを作ってみたくなった。そこで、まず練習として種無しスイカ を作る事を試みた。2 倍体のスイカの苗にコルヒチンをつけて 4 倍体にし、元の 2 倍体と掛け合わせて 3 倍体の種無しスイカにするのだ。大学キャンパスのはずれの山林地に焼畑を造り、スイカを育てた。もちろん、シダを研究していた理学部の近田先生の許可を得て行った。このことを古里先生 にお話したら、スイカの花粉を所望されたので、花をお送りしたことがあった。夏休みに、同級生の藤村君と久保さんは三島市にある国立遺伝学研究所でアルバイトをしていて、同じく学園闘争に飽きていた私に同研究所の阪本寧男先生を紹介してくれた。彼はエチピアの海外 学術調査から戻られたばかりであったので、2 度ほど大学で講演をお願いした。貧乏学生の私たちに は何のお礼をすることもできず、考えすら及ばなかったところ、和田先生がフォローしてくださった。これがご縁で、私は卒業研究を遺伝学研究所研修生として、阪本先生に見ていただくことになった。

また、学生当時は知りもしなかったのだが、古里先生との知遇によって、私は国立遺伝学研究所の阪本師の弟子になることができたようだ。阪本師の最近の手紙（2019）に、古里先生の推薦がなければ、私を受け入れる気はなかったと書いてあった。阪本師は木原均〔注：パンコムギの起源を 明かした世界的に高名な遺伝学者〕の最期の助手であったのだが、当人が自称するように相当の天 邪鬼だから、弟子などはもたないと考えていたのだろう。失礼ながら、世間とは相当ズレていて、旧制中学校生で経験した戦中および敗戦直後の嫌悪する体験によって世俗の名利にはそれなりの反 感を持っていたのだと邪推している。そのお陰で、人見知り強く、世間に疎くいたかった私の性癖もさらに助長されたようだ。

この戦争体験は彼の人生に大きな心の傷を与えたようで、ごく最近の手紙にも食料の買い出しで経験したいやな思い出を繰り返し追加記述してあった。京都近郊の農家は、京都人が食料を求めて 持ち込む高価な物品としか、食料を交換してくれなかったそうだった。したがって、地元民は配給が不足するときは、遠くまで食料を買い出しに行かなければならず、うまく入手できても、警察に取り締まられて没収されてしまった。このことは東京近郊でも同じようであったと、いく人かの作家が疎開での出来事を恨みに思っ回想している。農家からすれば、日頃の蔑視と農産物を安く買いたたかれたことへの怨念を、この際とばかり、果たしたのであろう。一概に、都会人が農家を責めるのは、農村の窮状への無知ゆえとはいえ、羞恥心がなかったようにも思われる。

私の祖父の実家は稲作農家で、濃尾平野の木曽川のほとり、輪中の中にあつた。一大稲作地帯だから、ここから親戚として戦争中も食料は分けてもらえていたようだ。しかし、それでも敗戦後には、もらってきたイネ米も警察に闇米として没収されたこともあったと、祖母から聞いた。この祖父は徴兵されてシベリアに出兵し陸軍上等兵で、父も戦争末期に徴兵されて、呉の海軍新兵で敗戦を迎えた。名古屋市は焼夷弾で焼き尽くされ、その恐怖は祖母や母から聞かされていた。現在の名古屋市の道路が広いのは、爆撃で街が破壊されたので、新たな都市計画の線引きが容易だったからだ。

さて、私は 7 月いっぱい自動車運転を止めることにしたので、廃車にする前に伊豆半島を巡ることにした。2019 年 6 月に吉奈温泉に 2 泊して、南伊豆を走った。事前に旅館の人に、観光地図になかった県立有用植物園について聞いたのだが、不明確で要領を得なかった。その際に、インターネット検索をしたら、研究報告の記事はあるものの、植物園の存在は不明であった。帰宅後、さらに詳細に検索したところ、1950 年に南伊豆町石廊崎に開設された有用植物園はたびたび改称されて、1977 年に農業試験場伊豆分場、翌 1978

年に伊豆振興センター南伊豆農場、1987 年に農業試験場南 伊豆分場として南伊豆町上賀茂へ移転、その後、ここは南伊豆亜熱帯公園として一般公開されている。

ここに記した人々の個人史が不思議なことに私の興味と、彼らの活動とその場所とを結びつけたので、7 月にもう一度吉奈温泉に泊まって、沼津市西浦の興農学園農場跡を訪ねた（写真：興農学園農場跡の石碑 人々をつないだ心と場）

古里先生の経歴について書かれた文献は国会図書館で探した。古里先生は興農学園農場を継いで、その後、上記の静岡県立有用植物園長、浜松市のフラワーセンター長を順次歴任されていた。私が出あったのはこの頃で、1968～1969 年のことであった。

古里先生は 1912 年に岐阜県で生まれ、千葉高等園芸学校を卒業してから岡山県で女学校教員、1940 年に京都帝国大学農学部（木原均研究室）を卒業、南洋興発株式会社で研究開発・農場経営、敗戦後フィリピンから帰国、1946 年に木原生物学研究所研究員、同年に興農学園長になり、1954 年に 国立遺伝学研究所研究員、1960 年に柑橘類の細胞遺伝学的研究で農学博士、1961 年に静岡県立有用植物園長、1971 年に浜松市フラワーパーク公社公園長、1993 年に永眠された（岩井 2000）。この間に、ハワイ、北アメリカ、ポルトガル、カナリー島、マディラ島、南アフリカ、南アジア、オーストラリア、ニュージーランド、中央・南アメリカ、中国などで、植物調査を行ってきた。私はほんの 2、3 回お目にかかっただけだけれども、こうして略歴を見ると、木原学派の流れで同じアカデミック・ファミリーであり、つくづく冒険人生の出会いの不思議さを知り、私の研究人生の起承転結を感慨深く考え、また多くの方々に支えられて自由な生き方ができたことに、改めて感謝の念を強くした。

デンマーク国の話

興農学園の創業を求めた渡瀬寅次郎は札幌農学校でクラーク博士の直接の薫陶を受けてクリスチャンになり、その後、種苗会社の経営で成功した。彼は晩年、キリスト教の教えを基礎とする農学校を創立したいと願い、遺言で内村鑑三らにこのことを託した。内村が札幌農学校での一年後輩であったからである。渡瀬がデンマークの農学校に思い至ったのは、デンマーク研究者の平林広人の ラジオ放送「丁抹の文化について」を病床で聞いて共感したからであった。一方、平林はデンマークの国民高等学校を日本に創りたいと考えていた。平林が銀座教会で内村に会った際にその想いを聞き、内村は賛成して、彼を渡瀬に紹介した。日本村塾教育の思想は内村鑑三の著書『デンマーク国の話』（1913）の影響を強く意識していた。

さらに、その大元にはグルントヴィ（N. S. F. Grundtvig）のキリスト教理解があり、農民が高い学問を身に付けなければ、民主主義は衆愚政治になると考えて、彼が学んだケンブリッジのカレッジをモデルとした「生のための学校」を求めたのだと言う。生きた言葉で語り合い、それぞれの生を深めていくことが目的であれば、資格や試験、単位などは不要だとグルントヴィは考えた。デンマークの国民高等学校は 1844 年に最初の試みが始まった。内村は、平林からデンマークのことを多く学び、平林にこの世でなすべき最後の仕事である興農学園を託して、1930 年に他界した。

さらに、内村の晩年の弟子であった鈴木弼美は山形県小国村に移住して、1934 年に基督教独立学校（現在の基督教独立学園高等学校）を創立した。鈴木は、敗戦のどん底にあったデンマークを救ったのは国民高等学校だと考えた。教養が考える人間を作り、この考える人間が農村を因襲と貧困から解放すべき使命を持つと信じた。これらの他に日本の三愛

精神の影響下にある学校は、キリスト教愛真高等学校、望星学塾（東海大学）、酪農学園大学、愛農学園農業高等学校、瀬棚フォルケホイスコーレ、小国フォルケホイスコーレなどがある（小山 2000）。イギリスのケンブリッジ大学のカレッジをモデルとした「生のための学校」を求め、生きた言葉で語り合い、それぞれの生を深めていくことを目的とし、資格や試験、単位などは不要というグルントヴィの考えは、私の日本村塾 Nihonmura College for Environmental Studies の基本理念とまったく同調・共鳴する。私は、日本ではもうさっさと受験教育をやめて、イリイチが言ったように、学校化社会を脱しなければ、幸せに生きるための学びはないと考えている。そこで、自然文化誌研究会とともに行った 40 年以上の環境学習実践にもとづいた考察して、環境学習原論を記述した。これは単なる環境教育の原理の到達点ではなく、現代の人々の生涯学習の統合原理として提案したものである。

しかしながら、日本村塾の 3 ゼミ（民族植物学、扶桑くに、自給農耕）への参加者はほとんどいない。日本では学校化社会は極まって固定してしまっているため、資格が得られる学校でなければ、教育や学習の営為は認知されない。このために、任意自律、自主独立した学びの場はほとんど成立しない。あるいは残念ながら、これは私の不徳の致すところなのかもしれない。ただし、自然文化誌研究会の冒険学校はほぼ常設化して、山梨県小菅村で継承されているので、少数の子供たちに対しては役立ってきたのだと知足することになっている。

農本主義の負の結末 内村鑑三は 1927 年に茨城県友部にある日本高等国民学校（現在、日本農業実践学園）を訪問し、加藤完治校長に歓待されている。加藤はデンマークのフォルケホイスコーレも訪問していた。彼は、学生時代は熱心なクリスチャンであったが、古神道に転向して、第二次世界大戦中は「満蒙開拓青少年義勇軍」を組織して、2 万人以上の青少年を中国大陆へと送り出した。加藤は内村の訪問時には、内村の志を高く評価していた。しかしながら、当時の農本主義者、加藤完治らはキリスト教の三愛精神の中身を変質させて、皇国日本の現人神天皇を中心とする国家、ここに帰一すべき村、家を位置づけて、個人が直接神に帰一することを忌避し、国家主義に向かい、朝鮮や中国の植民地化に若い農業青年を送り込んだ（小山 2000）。日本の農本思想や農本主義も時代によって、個人によって内実が異なるとはいえ、明治期以降は多分に復古的、国粹主義的になったことも多かったようだ（ウィキペディア、船戸 1999 など）。私も、今では世間から見れば農本主義 agricultural fundamentalism と分類されるのであろう。しかし、私は農本主義者といわれる中でも例外的な安藤昌益の思想あるいは武者小路実篤の新しき村に連なりたい。したがって、私はせいぜい愛郷主義 patriotism であっても国家主義 nationalism や国粹主義 ultranationalism ではない。現代的には農本主義というより環境主義 environmentalism といった方がよいのだろう。

西村（1992）はエコロジズム ecologism と表現して、安藤昌益や江渡狄嶺、石川三四郎らの系譜をあげている。船戸（1999）は、西村が加藤完治を批判する中で農本主義を狂気と見なした、と引用している。しかし、私は西村とは親しく共同研究してきた経験から、彼が農本主義を公正に批判しこそすれ、そのものを全否定してはいないことを知っている。私は彼からエコロジストに分類され、大いに叱咤激励されてきたが、他界する直前まで暖かく交際していただいていた。

いつまでも水戸学による皇国史観を悪用してきた山縣有朋軍閥とその系譜にあたる農政官僚柳田 国男や政治家安倍晋三らの「神の国日本」に呪縛されてはいけぬ。天皇家

を利用する二重権力は誰もが政治責任をとらない国家体制（国体）で、幕末期に構築され始めたものだ。このために、第2次世界大戦における日本の戦争責任は曖昧のままで、ほとんど誰も政治責任をとらず、戦争遂行の説明責任を語らなかった。責任ある政治家の多くはそのまますぐに公職追放から解除されて、政治権力の中心の座に戻った。ヨーロッパ諸国の憲法にみられるように、憲法は本来、国家権力が市民あるいは国民を過剰支配しないように制御するものだ。日本国憲法（連合軍総司令部定）は大日本帝国憲法（欽定）によって代わって、ほとんど市民・国民一般の議論もなく、敗戦後の急場しのぎに創られたものなので、条文の言葉少なく、明文化が疎かなためその時々々の国家権力の解釈で運用されるまま、70余年を経過してきた。国家権力の側からの憲法改正ではなく、今しばらく時間をかけて、市民・国民の側から憲法論議を広め、深めて、条項の明文化を進めて、さらに自然権や食料主権を基礎とした環境原則についても加筆修正の論議と提案が必要だ。こうして、エコロジズムが農本主義を超克して、先真文明の時代の役割を果たし、日本でもホモ・サピエンス・サピエンスが幸せに生存を続けられるようにすべきだ。

文献

船戸修一 1999、農本主義の再検討—権藤成卿・加藤完治を中心に、www.jstage.jst.go.jp/article/kantoh1988/1999/12/1999_12_119/.pdf 林浩二 2000、企画展興農学園—みかん村とデンマーク教育の案内、インターネット検索で出典は記載がない。

岩井弘則 2000、植物文化に貢献した人々①古里和夫氏について—植物にかける情熱の人、日本植物園協会誌 34：119-125。

小山哲司 2000、神を愛し、人を愛し、土を愛す—今に生きるデンマーク国の話、初出；水戸無協会 178号。 www.asahi-net.or.jp/~pv8m-smz/archieve/Gott_Mensch_Erdel.html

西村俊一 1992、日本エコロジズムの系譜—安藤昌益から江渡狄嶺まで、農山漁村文化協会、東京。

大谷英一 1935、日本村塾教育、関谷書店、東京。

大谷英一 1936、新興村論、教文館、東京。 大谷英一 1948、平和の国デンマーク、弘文堂。

内村鑑三 1946（2014版）、後世への最大遺物、デンマーク国の話、岩波書店、東京。

参考文献 寺田治史 不明、デンマークと日本の人間教育（I）—池田・ヘニングセン対談が示唆するもの、太成学院大学紀要。2011年以降に書かれた。NII-Electronic Library Service。

2019. 7. 22

素原の超個人主義

はじめに

私はトランスパーソナル個人主義という想念に至り（黍稷農季人 2016）、これを個人主義の拡張・展開、超越による思いやり、分かち合いと考えた。このために、多くを学ぶことが教養の質で、学び考えることから逃げずに、家族や友人を大切にし、人脈を広く求めることが必要であるとした。意図せずして超克という題名で随筆を書いていたが、倉田百

三（1924、33 歳）に『超克』という題名の著作があった。この大正期の倉田はいまだ若く求道精神にあふれ、おおよそ 100 年前に書かれたにもかかわらず、私と同じような課題に対して同じような方向性を示しているように見える。しかしながら、同書との混同誤解を防ぐためにも、超克の語義を広く解釈して、自らをさらに磨く意味で本論考を『素原の超個人主義』と題することにしよう。克己復礼為仁（論語）〔私欲にうち勝ち、礼儀をふみ行 うようにすること（広辞苑）〕という用語法もあるから、トランスパーソナルを拡大した自己を求めることとするのなら、新造語として超己と改めてみてはいかがだろうか。しかし、己と個人という同義語を重ねるので、超個人主義として、素（もととなるもの）と原（おこり）で形容することにした。フォックス, W. (1990) は、トランスパーソナルとは、個性性を超え、個人としての発達を超えて、個人よりもっと包括的な何かを目指す beyond ego、自我的、自伝的、ないし個的な自己を超えた自己感覚、できる限り拡張された自己感覚を現世で獲得すること、としている。それならば、超個人主義と記しても意義は通ずるだろう。倉田（1924）は『環境学習原論』（木俣 2019）にも引用したが、もう一度詳細に読み直して、次に要約引用する。なお、本論考では恣意的解釈を防ぐために原文（訳文）の引用を多くし、用語集も本文末に示した。

私は全生活の基礎を定める一つの根本仮定、「善と福の一致という観念」を置く。そうあるべきはずのもの、そうありたきものとしては、私の倫理的思想の内に深く横たわっていた。また正統派の宗教家及び常識的な市井の善人にはこれを信じている者が少なくない。しかし私はこれまで未だかつて一度もそれを事実であるとして信じ、したがってその上に精神生活を据えようとしたことはなかった。この地上の生活の相を見るとときに必ずしも善人が悪人よりも幸福でなく、吟味するとき我々は地上の生活において、善と福との厳密なる一致の事実を認めることは不可能である。しからば、われわれの精神生活をこの事実に応せしめる道は如何であるか。それは三つあるのみである。第一は善と福とは一致しないことを信じて、それにもかかわらず、善を追求する道である。第二は善が福に一致するかぎりにおいてのみ、善を追求する道である。第三はこの事実あるにもかかわらず、なお善と福との一致を可能ならしむごとく世界観を拡張することである。私は人間の本性に最も適合する、最も合理的なるものとして、第三の道を選ばざるを得ないのである。

精神生活とは現実を理想に一致せしめんとして、現実を超克していく生命の過程である。超克は否定ではなく、包摂し、止揚することである。人間、超人を超克して聖人になり、その後再び民衆に没落して、民衆の仲間になる。同情との闘い、羨望と、嫉妬と、肉欲と、愚痴と、すべて卑しく、狭く、誇りなきことを超克せんと努力しなければならない。我々の孤独は我々がこれを欲せずして、しかも避けることのできない悲哀である。

さらに、関東大震災を経験した後、おそろべき出来事がある人生をいかに調和あるものと感じて、生きる喜びを感じることができるか、これが最も大きな問題である。個人意識に終始する限り、恐るべき事件をもつ世界を肯定して生きることにはできない。個人意識以上の人類意識、宇宙意識（信仰）をさながら個人意識として把握すべきである。近代人は個人意識を重んじ、人類的宇宙的本能を発達させてこなかった。近代人は自然科学の限界や本質を粗雑に理解しているにすぎず、教養が足りない。この信仰に立って、しかる後に環境を改造し、不合理な経済組織を改革する文化史的必然がある。しかし、環境や経済を改造すれば解決が得られるのではなく、生きがいの問題は残されたままである。

このように倉田の論旨は百年前にして、すでにトランスパーソナルで、超個人主義の嚆矢にも思える。私は常々、栽培植物ほかの起原を考えているので、素や原を主題として求め続けている。そこで、論題にあえて新造語として素原を形容語に用いた。

私はこの論考（第三）を次の三部作のまとめとする。第一論考は経験してきたムラ撥撫の事実を記録し、なぜこのような醜い人為的事象が起こるのかを検証した（木俣 2021a）。第二論考は山村農人との篤い親交の書簡からそのままの美しい暮らしの在り方を証した。真逆の課題である第一論考の人間の醜と第二論考の自然の美を同一文書内で論じたくはなかったもので、第三論考では直接体験をあまり語らずに論理をまとめ、あえて先行して別の場所に掲載、公表することにした。何故ならば、第一論考と第二論考にあつては、自ら体験した事実であっても、あるいはなおさら、文章表現において情緒を完全には拭い去ることができないと、読者から公正性に疑念をもたれることを恐れたからである。 2020. 9. 20.

1. 超克へ祈りと願い

2020. 5. 6～5. 22

ステンドグラスを透過した聖堂の光彩は影と共にある。
心の光は輝き、美しく清んでる。
心の影は奥ゆかしく揺蕩うている。
地下に埋められてきた心の闇には悍ましき、もう朽ち果てて消えてしまえ。
全て生き物の文明が新しい地平線のそこまで来ているのだ。
陽光はすでに昇っている。 野の草木の花々も綺麗だ。
生きる幸せの他に余計なものは何もいらぬ。 安んじて、穏やかに歩んで行こう。
(心の聖堂、2020. 5. 6)

明日が突如として一本鎖 RNA/COVID19 に奪われる恐怖が、これほどまでに身近に迫ってくるとは、意識的にはあまりに唐突だ。恐れ多くも神仏ですら、人間として死を生きられたのだから、年老いればいずれ近い年月に自らの死もあることは、覚悟はできないまでも理解はしている。今なすべきことを、明日に延ばすことはできないようだ。しかし、すでに大方書き終えた長文の第一論考は感情を冷まして熟考するために一年間保留するつもりだ。

民族植物学ノオトを発刊した動機は、インドの友人ジャガディッシュ博士の論文がシコクビエの葉枯病に関する農薬の効果についてであったので、農薬は環境教育に反する内容だから東京学芸大学環境教育実践施設の研究報告には掲載しないと却下されたからである。私は論文の内容は著者の責任において自由であり、評価は読者がするものだと考えており、過剰な内容審査や検閲行為は学問の自由に反すると考えるから、とても嫌だ。この理由によって、自ら雑誌を創刊することにした(2005)。この民族植物学ノオト創刊号の巻頭言に、「もう一つの阿修羅として」と題して次の文を記した。すでに15年を経ているが、まさに絵にでも描いたように、私はこの通りの人生を歩み、古希を過ぎても、昨年末からの心的外傷後ストレス障害を忍んでいる。何とか此岸には恨みを残さずに、気持ちよく彼岸への旅立ちを迎えたいと強固に願う。

門男は山梨県北都留郡ほかで、小正月の時に門戸のところに玄関先に向けて2体飾る。門男の作り方は、まずヌルデを里山から伐ってきて、1メートル余の大きさの丸太にする。この丸太の端を削った半円形の白肌に墨で目鼻を描き、頭に竹の鬘をつけ、次に藤蔓で腰

紐をしつらえアーボ（粟穂）、ヘーボ（稗穂）、鋤、鎌をこれに挿す。思うに、門男は山の神の使いで、農耕の智恵と 畑作雑穀の収穫を秋に向けて予祝するために各戸を訪れる者であったのであろう。しかし、今からは阿修羅として農山村の各戸に門男が復活し、共同社会と畑作雑穀が維持されるように、ともに活動することを願う。このところ研究人生に秋霜烈日を思うようになったのか、身体的な衰えよりも未だ混沌として整理できない心の葛藤に感じやすい。自然崇拜、アニミズムなど信仰のあり方にも関心が向き、阿修羅の存在にとっても興味をもつようになった。ひろさちや（2005）は『わたしの中の阿修羅』で傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に、「阿修羅よ、汝、諦めるべし」と確かに結論を下した。これにもかかわらず、興福寺の三面の阿修羅像に再び思いを致して、複雑な阿修羅のあり方を一つの結論にまとめきれず、もう一つの闘う阿修羅によって巻末を閉じざるを得なかった。まだ学生の頃であったか、読みふけたジョージ秋山（1970）の『アシュラ』はむしろ醜い子ども姿であったが、萩尾望都（1995）が『百億の昼と千億の夜』の中に描く阿修羅は美しい少女の姿である。新美南吉（1932）の『ごん狐』も阿修羅なのだ。宮沢賢治（1923）は心象スケッチ『春と修羅』中の 1 編「春と修羅」で、「はぎしり燃えてゆききする おれはひとりの修羅なのだ」と詠っている。こうしてみると、今、山の神の使いの門男になりたい私も一人の阿修羅なのだ。農山村の複雑多様な伝統智体系を学び、統合学の提案を求めて民族植物学に挑むことが、象徴的に言えば天道でも人 道でもない、己や世間の醜を知り、美を求める阿修羅の道なのであろう。阿修羅の勝つことのない戦こそが誇り高く、忘れてはならないそれぞれの民族の、また私たちの歴史である。忘れてはならない多民族の自然文化誌に関する調査研究と生物文化多様性の現地保全を求め、民族植物学の発展 を目指し、民族植物学研究室の成果をささやかな雑誌にまとめ、毎年 1 回発行することにしたい。

心的外傷後ストレス障害 PTSD を引きずり、悔しく苦痛であるが、感情に流されて行為しないように、しばらく時間を置く。明日への不安がありながらも、感情を自律制御できるように、矢張り待つべきだろう。復讐心ではなく、犯罪者個人への反撃でもなく、ムラ社会とそれによって行われたムラ撥撫の罪を許さず、形成と発生メカニズムを白日にさらして、その事象を告発する。属性は削除、個人情報保護、偏見・先入観を防ぐつもりだ。個人の属性を記せば、心理的構造はより明瞭になるが、個人情報ではある。たんに記号 ABC で論ずるべきなのだろうか。被害者にすれば、犯罪者に対して容赦はいらないはずだ。罪を憎んで人を憎まず、被害者の苦しみを黙殺する偽善だ。つまらない日本のサスペンスの定石だ。しかし、私は、復讐の行為はしないが、この感情を全否定することはできない。

心優しい日本人は、あなたの幸せや健康などを祈りあるいは願います、と言ってくれる。私もほとんど意識せずに、この 2 語を使っていたようだ。しかし、数年前から、何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、日本人にとって、私にとっても、それが自明なことなのか、疑問に思うようになった。人生で、力及ばずに苦しいことが起これば、日本人は何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、そうなのだろうか。

真に僭越ながら、神ならぬ身が、我が身に及ぼされた罪を許すこととは論理的にもできない。悪意をもって危害を加えられたら、反撃するのは当然だ。神仏でない人間が、悪意をもって攻撃する相手を許すことなど、あまりに僭越だ。でも、やり返す過程で憎悪に溺れれば、似て非なるとはいえ罪を犯して、意識せずして当事者以外の人々をも巻き込むだろう。復讐をしないのは自律して我慢するからだ。しかし、心情的に他者の罪を恨み問うても、自らを浅ましいと思ってしまう心情は、一体どこから来るのだろうか。被害者が自らを責める心的外傷はどのような心の作用なのだろうか。加害者に反撃しても、心的外傷

は直らないという心情、復讐を押しとどめて自傷するのはなぜなのだろうか。神仏に心の傷の治癒を祈り、願いすれば、癒えるのだろうか。

宗教に敬意をはらってはいるが、私の信仰は自然にあり、アニミストだから、その祈りや 願いの先は自然のカミガミであり、言い換えれば自然治癒、自分で治れ、すなわち超克するということだろうか。我慢する、自律できる強い精神力を鍛えることだろうか。自問するばかりだ（2020.5.7～5.8）。最近の日本人の多くは神仏、カミガミを畏れていないようだ。増上慢は極まって、神童、神業、神泡、神対応、神回、なんて不遜なのだろうか。

ムラ社会の事はすでになんかなり論考してきた（木俣 2015）。しかし、さらに心が凍り憑く事象が自らに起こったのだ。このことについて自傷しながらも、超克するために、さらに具体的事実に基づき、テキスト分析を用いて客観的公正に論考した（第一論考 2021a）。一方で、降矢静夫老師の自然賛美、山村自給知足の暮らしを対照して、心を洗うように比較研究することも同時に進めている（第二論考 2021b）。

私は田中正造翁が求めた真の文明は生き物の文明と同じ概念だと思い、さらに生き物の文明への希望を探すために論考を深めたい。1) 日本の自然の景観・生態系と山村農人の心性の美しさを降矢静夫師のはがきのテキスト分析で明らかにしたいと思う。他方で、2) 日本のムラ社会の形成過程について、自らの人生で体験してきた事実および多くの人々が田舎・都会暮らしで体験した証言（書籍、論文、書評、コメント、e-メールなど）を根拠資料としてテキスト分析などによって詳細に検証した。ムラ社会による集団的排除行為、ムラ撥撫は心に巣くう醜い犯罪だ。被害者が心的外傷後ストレス障害を治癒するには自律的に超克するしかない。山村農人に学び、美しい山村に希望を見出すために、これまで十分解くことができなかったこの課題に最期に当たって、明確な結論を示すように、挑むことにした。すべては心の仕業、私、人間の歴史時空は常時戦場、阿修羅界にあるようだ。心の構造体としての阿修羅は現代のアニミストだ。菩薩の心にはほど遠いので（R. エイトキン 禅師）、やはり人間界に属するのではない。そこでジョージ秋山の『アシュラ』（1970～1971、少年マガジン）をもう一度読み直すために手元になかったので注文した。アシュラの歴史背景は室町時代の終わり、乱世の頃、飢饉の最中で庶民は飢餓線上を彷徨っていた。この作品の最後の場面は、気が触れて病に侵され余命いくばくもない鬼母と彼女が捨てた子アシュラがともに生まれてこなかったほうが良かったと共感、哀しくも心で許し合ったのかのようだ。

もう一つ彼の作品『The Moon』（1972～1973、少年サンデー）を思い出して、確かに最終場面を切り抜いて保存しておいたはずなので、書庫を探したが発見できずに、これも古書を注文した。その最終場面とは、純粋な心の少年サンスウがカビ発生装置を破壊しようとしてカビに蝕まれてもがき苦しみながら、ムーンの名を叫び、一方、ムーンは何もできずに涙を流すのであった。この先に恐らく未来はなく、人類は滅亡に向かい、まさに絶望に終わっていた。

{注：ムーンは新たな神として造られた巨大なロボットで、純粋な心を持った少年たちにしか操作ができない。}

私が大学院生で実験の合間に、水俣病患者の皆さんとともに抗議活動をしていた頃に、少年サンデーに掲載されていたのだ。それでも、私はさらに 50 年近くを生きてきた。私はこのサンスウの心を受けて、公害の象徴としてのカビ発生装置を止めようとしてきたのだろう。そのような自分の人生に不満はないが、いくつかの悔しさはある。

さらに、孫子が読んでいた『鬼滅の刃』（吾峠呼世晴 2016～2020、少年ジャンプ）のアニメーションのストーリーから からインスピレーション inspiration を受け止めた（2020. 5. 14）。

鬼は人間の心の闇の中に隠れ住んでいる。恐ろしいのは鬼よりも人間だ。何故なら、鬼の姿は見るからに恐ろしいが、人間の姿は神に似せてあり、一見では優しいか恐ろしいかはわからない。半世紀ほど前に描かれた『アシュラ』は恐ろしい描写で PTA からの意見で有害図書指定された。ところが、もっと恐ろしい描写が出てくる『鬼滅の刃』は有害図書指定などはされずに、子供から大人まで、爆発的に視聴・読者を得ている。個別作品の違いやアニメ同伴など表現や発信方法にも大きな違いはもちろんある。一方、別の視点で、大正期という時代背景も関わっているとするのなら、それはどのようなことなのだろうか。恐ろしい世界大戦の狭間の大正ロマン・デモクラシーの陰に隠され、蠢いていた鬼たちに重ねてみているのだろうか。鬼の力に勝てはしない絶望があっても、信頼できる友愛に依拠して抗うことに共感しているのだろうか。主人公の竈門炭治郎も阿修羅なのだろう。これらの鬼よりもっと怖い鬼は人間の心の闇に潜み棲みついているのだ。本日出た完結編では、鬼を滅した人間は現代に輪廻転生して楽しく暮らしており、ハッピーエンドになっているようだ。ちなみに、任意団体 NPO の鬼殺隊士は、廃刀令（1876）後の大正時代に剣の道に励み、鬼退治をする物語である。

現代は後世になれば歴史区分として東京時代と呼ばれるのだろうか。ジョージ秋山が『アシュラ』や『The Moon』を描いた時空と、吾峠呼世晴が『鬼滅の刃』を描いた時空にはおよそ 50 年の経過がある。前者は大学が国権力との紛争で敗退して知的権威を失い、同時に公害も激甚化する状況にあった。

一方で、後者の現在はどうのようにとらえたらよいのだろうか。沈黙したままの大学は抑圧され学問の不自由、原子力発電所の放射性物質公害、権力犯罪の腐敗構造にさえ異議を言わなくなった。市民社会、大方の世間も代替の権力構成を求めながら、それを見つけ出せずに不憫をかこっている。後者の吾峠は絶望の彼方に、希望を見つけたのだろうか（木俣 2020）。

その上、追い打ちをかけて COVID-19 が世界中に拡散、人的被害も激増して、先行きは見えずに、これから何処に向かうのだろうか。この現代にも心の闇の中に潜む鬼は滅しきれずに、COVID-19 の恐怖・脅えを利用して、人心を惑わし、暴れまわっている。打ち勝つには自律心を鍛えて、超克するしかないのだろうか。現代・現世は生きている限り、光と影が彩なす律動にあり、自律を高めるように祈願したい。未来・夢世の便利は虚偽だが、希望を探し求め続けたい。過去・闇世の澱みは陰湿で今でも絶望に沈んでいる。何が正義で、何が邪悪かを問うても、人々の間には強固なバカの壁があり（養老 2003）、空虚にも、越えることはほとんどできない。それでも阿修羅は永遠に抗い、挑み続ける。
2020. 5. 22 7 2.

嫉妬と保身の自律制御

2020. 5. 27～6. 16

悠悠たる上古、厥の初めの生民、傲然として自足、朴を抱き真を含む。

智巧既に萌し、資待因る靡し。

誰か其れ之れを瞻らせし、実に哲人に頼るなり。

陶淵明（403）

誰にも嫉妬、羨望や保身の感情はある。嫉妬とは、自分よりすぐれたものをねた みそねむこととあるが、本来、この 2 文字には異なった意味合いがあり、妬みは羨ましく思う気持ちで相手に直接的・間接的に気持ちをぶつけ、嫉みは相手を羨ましく思い他の対象に気持ちをぶつけることであるようだ。保身とは身の安全や地位・名誉などを保つことである（広辞苑）。

嫉妬 jealousy は第三者関係において、自身の愛する人が別の人に心を寄せることを恐れ、その人をねたみ憎む感情である。羨望 envy と同じような意味合があるが、心理学的には異なる感情である。羨望は自分以外の誰かが望ましいよいものをわがものとしていて、それを楽しんでいることに対する怒りの感情であり、二者関係に基づいている。羨望は最も原始的な悪性の攻撃欲動であり、よい対象を破壊してしまう。嫉妬は愛する対象への愛情は存在していて、よい対象を破壊することはない。羨望を乗り越えたところに発達する情緒として感謝がある。

羨望には悪性と良性があると近年は考えられており、良性の羨望は民主主義へと向かわせる原動力だと B. Russell (1930) はいつている (Wikipedia2020.5.27)。アリストテレス（前 384 - 322）は『弁論術』の記述で、羨望 phthonos とは他人の幸運によって引き起こされる痛みであるとし、さらに、キリスト教では七つの大罪の一つとされ、ヒンドゥー教では破壊的な感情とみなされ、歪んだ感情は克服すべきだとしている。イスラム教において羨望 Hasaad は心の不純物であり、善行を無に帰するものとしており、仏教では嫉 Irṣyā とは富や名声を得るためにひどく熱心で、他人がそれを得ることが我慢できない状態で、この解毒剤は相手の幸福をともに喜ぶ心（喜無量心）であるとしている（Wikipedia 2020.5.27）。

1) 心理セラピストの見解

心理セラピスト二人の著述を要約引用し、考察を補足したい。まず、スタマテアス(2008)の『心に毒を持つ人たち』には、こうした人たちの分析と対処法のととても有効な助言が示されている。

なんでもけなそうとする有毒人間の言葉や提案にけっして耳を傾けてはいけない。あなたが夢を実現することを快く思わない人間は放っておき、目標に向かって進みつけよう。有毒が用語として人間関係に関してもちいられるようになったのは 1980 年代からだ。罪悪感や人間が抱く感情のうちでもっともネガティブなものであり、他人を操る手段としてごく頻繁に利用される。ねたみによって人は常に不満を抱き、しじゅう愚痴をこぼし、他人が所有しているものを自分はけっして手に入れられないと感じ、信じ込むと、ねたみが生まれる。ねたみは他人の破滅を願う感情であり、獲得したものを奪い取ろうとする人はねたみを抱く。他人の成功が原因となって引き起こされる根深い反感、復讐願望の現れである。何を言おうと、真意はあなたを葬り去ることで、心の奥ではあなたに目的を達成させまいと考えている。ねたみはすべての人が抱きうる感情であり、そのことで自分自身の人生や目標を見失うようになる。健全な自己評価は他人からの承認や名声を求めることや、自己利益の追求に邁進することではなく、自分自身による承認と満足を第一に考えることだ。

中傷する人の特徴は絶賛したかと思うと、翌日にはおとしめ相反するメッセージを発して、あなたの感情、心、理性を操り、支配しようとたくらみ、まったく有毒人間の代表格だ。中傷する人の気質は支配欲が強く、かつ思考が緻密であるという特徴があり、やり口がととても巧妙である。この種の人のもう一つの顕著な気質は、自分は完璧だと考え、誤りは認めず、過失にも責任を取らない。

犠牲者が譲歩すればするだけ、中傷人間はつけいる。中傷を行う人はゆっくり時間をかけてあなたとの関係を深め、全幅の信頼をおくようになり、言い換えれば、隷属関係に変わってしまう。中傷を行う人は、かつては中傷の犠牲者であった。面と向かって対決すると、彼らはうまく立ち回って無傷で事態を切り抜け、すべての罪と責任はあなたに負わせる。すべての有毒人間と手を切り、自分の道を歩むことだ。

攻撃的な人は彼らの目的に役立つあいだは友好的だが、あなたがノーと言うやいなや、何もかも妨害するので、衝突を避けることだ。計略に気づいたら距離をおくことで、その場の状況で自制心を失わないようにする。倫理観が壊れている人は犯罪者だけでなく、あらゆるところにいる。うそをついて人をだます名人で、あなたを裏切り、人生を破滅させようとねらっている。平凡な、ことなかれ主義の無気力状態は周囲への感染性を持っており、これも有毒人間だ。有毒人間は退け、変革や挑戦に対して積極的で、絶えず進歩していくことを目指す人とだけつきあうことにする。噂とは公式な検証がなされないままに広がっていく情報、事実による裏付けがない説明だ。神経質な人はエゴイズム、ねたみ、噂話、他人との競争、賞賛願望のような態度や行動をとることにより、自分が他人より劣っているのを隠蔽しようとする。神経質な態度の背後にある目的は、他人の世話をすることではなく、他人に対する支配力と影響力を手に入れることで、他人の人生の決定権を握ることだ。理想とする職業や愛情を現実に入れ込むことができなかった人の多くは、神経質な行動をとることによって、自分の能力に対する自信や、失ってしまった支配力や影響力を取り戻そうと試みる。劣等感とは人間が権力を追い求めるときの主要な動機の一つで、心理学的には劣等感以上に屈辱的な感情は存在しない。

操縦する人の目的はひとえに他人を破滅に導くことにある。彼らが攻撃対象にしたがるのは愛されていて、有能で、社会的名声を持った人で、自分にはない長所が備わっていることに激しい怒りを感じ、ねたみから攻撃する。こういう人からは急いで逃げ、離れることだ。自分は人から操縦攻撃を受けたのだという事実を正面から見据え、これ以上我慢しないと決意した時から、新しい自分へと変わる。操縦の犠牲になったからといって、相手に対する憎しみや恨みの感情を抱きながら生きていく必要はない。いつまでも引きずって人生を台無しにしてはいけない。他人に親切にしようとするあまり、自分を犠牲にしないといけない。自分自身の考えに基づいて決定し、罪悪感や恥辱感を忘れ、有毒人間の毒から真に自由になることだ。信念にしたがって行動する。信念は決心であり、確信だ。信念は思考から生まれ、言葉となって表明される。感情を抑え込むことは、自分自身を殺すようなことだ。感情とは今現在感じている思いで、心理状態とはかなり前から引き続いて感じている気持だ。心理状態はしばしば最終的に恨みというかたちをとる。恨みは時間をかけて育ち、言葉に出して吐き出すという必要な処置をとらない場合、最後には本人の身体に害をもたらす。有毒人間の特徴は回復困難な傷を相手に負わせ、見返りを求めない好意的行いなどがあり得ず、後悔も謝罪もせず、弁解の言葉は存在しない。有毒人間に態度を改めさせようとはけっしてしない。有毒人間に腹を立てたり、不快感を抱いたりせず、怒りに我を忘れないことだ。

ここに具体的症例をもって活写されている毒人間はバカの壁以上に絶望をもたらす。性善説は偽善になり、絶望する被害者は吾身さえも護れずに、人間不信に陥り、憂鬱から、果ては自殺にさえ至る病である。本来、毒をもつ人間こそが病人であるに、当事者は自覚できないので、毒に侵された被害者が病人になってしまう。運よく、この状況に気づいたのなら、スタマテアスが言うとおりの、反論などせずに、沈黙して逃げることだ。反抗すれば、毒に満ちた嗜虐の土俵にのせられ、もちろん勝ち目などなく、被害者の病状は悪化する。

るばかりだ。多くの症例を見てきた彼の意見に従い、性善説の甘い罠にかからず、毒人間とは極力関係を断つことだ。

しかしながら、私は研究者の本性から、一般論として毒人間の行為の事実を白日に晒して、社会の改善を求めるべく、被害者として矛盾する行為をしている。さらに、大きく抜け落ちている視点に気づいた。ここでは主に加害者の病理と被害者の応対について考えてきたが、ムラ社会を形成し、撥撫を生起させる他の役者についての論考が少ないことだ。加害者個人から発して被害者個人を害するとしても、加害同調者（共同正犯、直接共犯）、傍観者（間接共犯）、公正者、および無関心者などの役割がある。地域社会に居住しており、何らかの地域共同利害があり、社会的地位の有る知的な人々さえも、被害者個人を撥撫（いじめ）し、さらに共同絶交宣言（犯罪の罰金判例もある）をしてまで、積極的同調あるいは消極的傍観するのである。同調や傍観をしないで、せめて公正な立場をとってほしい。

私は沈黙を選び、ここに消極的な同調者や傍観者になった友人たちが代替標的にならないようにし、また、他の友人たちには緘黙した。それでも、たとえ長年の友人であっても、私の信条や信仰と強く対立するか、あるいは公正性を保たず不当に関与するのなら、たとえ友人であることを失うとも、自らが納得できるように身に受けてきた撥撫の事例を検証し、優先して課題解決を探りたい。ほとんどの人々は日々の暮らしに手一杯で、なかなか、世の中を想い遣るほどの余裕はない。それでも、たとえ、ささやかな想い遣り、貧者の一燈、寸志、五分の魂を人間の誇りとして、共感する心を見せてほしい。

研究する自己個人の課題として、何らかの解決法を提示したい。自ら甚だしく傷つきながら、超克し、さらに超個人を希求するのには明確な理由がある。人生の仕事として雑穀栽培を継承するという一心不乱の強い目的意思である。この研究目的のために主要な人間関係を形成してきたので、雑穀に関する裏切行為は最も心が痛む。しかし、この目的はいくら努力しても自分では達成することがない目標である。この仕事に継子がいなければ、日本の雑穀栽培はいずれ消滅する。それでも人生の結願に此岸の恨みを残さないと意思した。さらに、スタウト（2005）『良心をもたない人たち』には、これらの人たちの見分け方と対処法が要約すると次のように説かれている。本書の登場人物は特定の個人ではなく、心理セラピーにおける最重要な守秘義務により、人物名は仮名、場合によっては特徴変容もし、本人とわからないようにしてある。プライバシー保護のために登場人物は合成もしている」と最初に記している。

あなたは人からは頭がいい、切れ者だなどと思われ、だが、心の奥底で自分には目立った財力や独創性がなく、ひそかに夢見ている権力の高みには手が届かないとわかっている。その結果、あなたは世の中全般に怒りを抱き、周囲の人々をねたむようになる。あなたは少数の個人ないし小さな集団を自分が管理し、支配できる仕事を楽しんでいる。あなたが操作する相手があなたよりすぐれている場合はとくに、自分より頭がよく教育程度が高く階級が上で、魅力があり人気が高く、人格的にすぐれた相手を打ち負かすことは、愉快だけでなく、存在にかかわる復讐もはたせる。良心が欠けているので、実行は驚くほどたやすい。精神医学の専門家の多くは良心がほとんど、ないしまったくない状態を、反社会性人格障害と呼んでいる。この矯正不可能な人格異常の存在は、現在アメリカでは人口の約四パーセントと考えられている。この良心欠如の状態は一般的には精神病質サイコパシーとも呼ばれている。アメリカ精神医学会の手引にある臨床診断では以下の七つの特徴のうち少なくとも三つをみたすことが条件とされている。①社会的規範に順応できない。②人をだます、操作する。③衝動的である。計画性がない。④カッとしやすい。攻撃的である。⑤自分や

他人の身の安全をまったく考えない。⑥一貫した無責任さ。⑦他の人を傷つけたり虐待したり、ものを盗んだりしたあとで、良心の呵責を感じない。

アメリカ精神医学会の定義は実際のサイコパスではなく、単なる犯罪性を説明するものだと考えて、サイコパス全体に共通する特徴に、口の達者さと表面的な魅力を付け加える研究者や臨床家もいる。サイコパスはそれでほかの人びとの目をくもらせる、一種のオーラとかカリスマ性を放つ。トラウマを抱える患者たちは慢性的な不安、無気力な鬱状態、統合失調症的な精神状態に苦しみ、この世で生きていくのは耐えられないと感じ、自殺未遂の患者も多かった。心的外傷を負った患者の大半は、悪意の個人によって支配され、精神的に蹂躪された人たちだった。

サイコパスは自分が道徳や倫理に反した行為や、怠惰、利己的と思える行為を選ぼうとしたとき、それを抑えようとする内的メカニズムに欠けている。おおよそ九六パーセントの人には良心はあまりに当たり前で、意識もしないうちに働くから、いかに想像力を働かせても、良心のない人間の姿を思い浮かべることはむずかしい。自分の行動が社会、友人、家族、子どもたちにおよぼす影響を、完全に無視できる状態とは、どんなふうだろう。良心をもたない人は自分自身と、自分の生活に満足していることが多い。そのため治療法がない。専門家の助けや支援が必要なのは患者だろうか、それともその身近で耐えている人びとだろうか。良心は何のためにあるのか。とりわけ現在、世界は地球規模の不正取引、テロ行為、遺恨戦争で自滅しかけているように見える。その質問に心理学者として答えた。

基本となる五つの感覚が肉体的なもので、第六の感覚が直感だとすると、良心は第七の感覚と言えるだろうか。人類の進化の中で遅く開花した感覚で、今だに万人共通にはなっていない。良心は他者への感情的愛着から生まれる義務感である。第七の感覚はおもに愛と思いやりにもとづいている。良心のない人が妬み、ゲームの中で破壊したいと望むのは良心をもつ人の人格だ。教育は良心を働かせるための一つの要素にはちがいないが、教育程度が人の良心を強くすると考えるのは思い上がりであり、大きな誤りだ。標的にされたとは夢にも思っていない相手に報復することが、強欲なサイコパスの人生でもっとも重要で、もっとも優先順位の高い行動になる。こうした人間は私たちの日常の中で身近に存在するが、その行動は気づかれないことが多い。私たちはまったく害のない相手に、だれが危険で邪悪な復讐をくだてるとは考えもしない。強欲なサイコパスのとる行動はあまりに突飛で、あまりに理不尽なことが多いため、それが意図的とは考えにくく、起きたことさえ信じられない。他者には個人的対立にすぎないと思われてしまう。サイコパスはどんな社会的契約も尊重しないが、自分の利益のためにそれを利用するすべは知っている。サイコパスのとった行動はあなたの落ち度、責任でもない。あなたが責任をとるべきものは、あなた自身の人生だ。ふつうの人たちにとって、しあわせは愛すること、より高い価値観にしたがって人生を生きること、そしてほどほどに自分に満足することから生まれる。

良心の大きい人たちに共通する特徴は確実性、積極性、自己と道徳的目標との一致、である。良心が大きくなると、人間の精神をプラスの方向で統合し、生活の破綻を引き起こしたりせずに、人生の喜びを高めていく。良心は母なる自然の良き贈り物だ。その価値は歴史を振り返っても、また身近な日常の中でも、貴重なものであることはまちがいない。

良心のないサイコパスが身近に実在し、気がつかないうちにその毒に侵され、いつの間にか、自分があたかも精神を病むような状態、心的外傷後ストレス障害に陥り、しかも1年以上も囚われるとは思ってもいなかった。良い家族や師友がいなければ、人間不信の憂鬱は死に至る病、いままで熱意をもって行ってきた任意活動の信頼が卑小な支配欲によって崩される絶望に堕ちこんだことだろう。しかし、このような一般的害悪を研究課題として深

く論考する機会にすることにした。残り少ない余生の道草かもしれないが、スタウトが言うように、第7感(良心)が進化の途上にある心の機能であるとするのなら、ホモ・サピエンスの進化史を問わねばならないことになる。これは第四紀の人間と植物の関係における進化学の課題でもある。

私にももちろんいくらかの嫉妬心は有ることを認めるが、嫉妬心を好敵手への競争心に変容して鍛錬すれば、自己を高めることができるとして自律してきた。他者からの嫉妬感情を軽減するために、個人的保身として謙虚で礼儀や誠実を心がけて、地味に質素に暮らして回避するようしてきた。といっても、自己の心はある程度自律できても、他者の心は如何ともしがたいので、数多く嫌な思いはしてきた。思い遣り(教養)を大切に行っていたが、このことは職業病的に逆転して受け止められて、融通は利かせず、高慢な人間だと受け止められていたのかもしれない。他方、羨望という感情に対して私はこれまで有難いことに無意識であったので、今改めて認識を得ることになった。恐らく、子供のころから個人主義的(individualistic)で、正直に言えば、自分の内面に強くこだわり、他者個人にはあまり関心がなかったのかもしれない。社会的な課題も自分事にしてきたとはいえ、わがまま selfish で、興味ある特定の事象以外には関心が薄かったのだろう。

しかし、このように自分を責めてみてきたが、どうもこれだけではまだ心の苦痛から逃れることはできない。あるいは超克に苦しんでいる自己は自らを超えようと思意思する拡大自己であり、すなわちトランスパーソナル超己な自己、いいかえればこれも第7感良心のなせる機能なのだろうか。シッタータ(ヘッセ 1922)や幸福の王子とツバメ(ワイルド 1888)の良心の苦痛と同じなのだろうか。世界の苦を我がものとする良心を縮小するか捨てれば、彼らは何も知らないで幸福の王子のままで、解脱することも、天に召されることも必要は無かった。私も幸せな個人でいられるのだ。支配欲の巨大悪と卑小毒に苦しみ抗う人々に共感しなければ、目を閉じさえできれば、超克せずとも、心の苦痛から逃れられるのかも知れなかった。他方で、フォックス, W. (1990) はトランスパーソナル心理学を次のように紹介している。この中で、エイトキン禅師が、「菩薩の理想こそ、われわれ人類が生きのびる唯一の希望である。食欲と憎しみと無知の三毒がわれわれの受け継いできた自然と文化を破壊しつつある。地球市民としてラディカルな菩薩の立場に立てないかぎり、われわれはまっとうな死さえ迎えられないだろう」と言っていることも引用されている。

{注: radical/fundamental、根本的・基本的}

トランスパーソナル心理学は、人間性心理学の中心的役割を果たしていた A. H. マズローと A. J. スティッチによって提起された。歴史的に見たときに、人間性心理学は、行動心理学およびフロイト心理学と、トランスパーソナル心理学とのちょうど中間に位置する。理論面からいうと、人間性心理学は、行動主義心理学およびフロイト心理学における機械論的・還元主義的な狭い人間本性のとらえ方に対する批判としてはじまった。これまでの心理学は人間の弱点や病、罪深さといったものを暴き出したが、潜在的可能性や美点、抱負、心理学的に達しうる最高の状態といったものにはほとんどふれていない。積極的・肯定的な心理学は、行動心理学が強調する適応にかかわって創造性を重視し、フロイト心理学が強調する神経症的惨状の改善にかかわって、心理学的な健康と自己充足を重視することになる。

マズローの理論は、人間の欲求が五段階の階層構造をなしており、これを基本的欲求とメタ欲求とに二大別した。基本的欲求は、生理的欲求、安全への欲求、愛の欲求、所属の欲

求、承認欲求で、これより上位のメタ欲求は自己実現欲求と呼んだ。彼は晩年になって、単に健康な自己実現者と自己実現超越者とを区別するようになり、第六段階として自己超越欲求を加えた。自己超越者とは、自我や自己、アイデンティティといったものをたやすく超越し、自己実現を乗り越えられるような人々である。第四のトランスパーソナル心理学は、トランスパーソナルで、トランスヒューマンで、人間の欲求や関心より大宇宙を中心に置き、人間らしさ、アイデンティティ、自己実現といったものさえ乗り越えるに違いないとした。自己感覚というのは、心や世界のさまざまな側面のうち、われわれがふつう他者ないし非自己ととらえるものを含むところまで広がることできる。

訳者の星川は、トランスパーソナル・エコロジーの道しるべとしては、洋の東西を問わず、地に足がつかない上層文化より、各地の先住民文化に伝わるもっと素朴な生命世界との同化の方がふさわしいと思えてならない、と記している。

2) 保身について苛酷な現世で人生を暮らすには、他者を傷害しない程度には保身が必要だ。しかし、過ぎたるは及ばざるがごとしというように、個人としても保身が過剰になることを回避し、誠実でいたい。大小の権力犯罪は、自己個人やムラ社会集団の過剰な保身のために、事実を歪め、隠蔽し、さらには虚偽を流布することなどにより、騙され、見逃されてしまう。

何とか自由に楽しく生きるには、心の構造を整えて、自律する心を鍛えなくてはならない。私の保身方法は、マスメディアに露出せず有名にならない、役職を謝絶して社会的地位を回避することであった。この世では名声や地位を得ないと、作品が普及し、必要かつ正当な評価を得ることはできない。でも、過大な名声や地位を得れば、自由な学びや家族との幸せな時間を失う。しかし一方で、学問は自己の嗜みだが、これを税金により賄われる職業としていたからには、その成果を、社会的責任として人世のために役立たせなくてはならない。この矛盾を慰めるために、三浦梅園の「人生恨むなかれ人知るなきを。幽谷深山華自ずから紅なり」を座右にして、社会的立身と保身の過剰を戒めてきた。また、三浦は「学問は飯と思うべし」とも言っている。

研究者の研究姿勢を概観してみると、①書斎に籠り文献調査をもっぱらとする、②実験室に籠り科学分析や他者・公的機関の収集したデータ解析をもっぱらとする、③植物園・圃場に出て野外試験をする、④自然に出て観察や測定調査をする、⑤地域社会で参与観察や聞き取り調査をする、⑥地域社会で課題解決の活動をする、⑦社会的課題を解決する方策を提案する、などに類型化できよう。

①や②では現場・現実にも身をさらすことはない。③から以降の姿勢では次第に現場での調査研究することになるので、地域社会や社会政策にも身をさらすことが多くなる。現場の現実を参与観察から、さらに参与提案活動にまで踏み込むと、地域社会の有力者らの嫉妬・羨望に晒されることになる。その結果として、ムラ社会からムラ撥撫を受ける危険が増す。さらには、思想信条の異なる人達からも社会的論難を受けるだろう。大方の研究者は研究成果を上げるための効率性を第一に、危険が十分に予測できる現場には出ないように保身を図る。つまり、多くの研究者にとっては、その上の参与提案活動はもってのほか論外で、そこまでして社会に尽くす必要があるとは思わない。これは当然の保身である。ところが、私は長期に渡って定点参与観察を行うばかりか、社会政策や法案の基礎調査、政策提言にも関わり、一般の研究者とは大きく異なる研究方法論を現場で実行してきた。社会を信頼して正当な保身までも行わずに、度重ねて危機に瀕しながら、なおも生の心身を現場に晒してきたのである。その結果として、社会寄与への努力がムラ社会の過剰な保

身と嫉妬によって無力にされたことへの虚無を耐えねばならない。人世における虚無と便利も、現代社会文明の根底にある心の在りようだ。これらも過剰になると、心の構造が一層大きく歪み、心の機能を自律できなくなる。現代の科学技術の便利をどこまで受け入れ、過剰の境界を決めて、自律するかだ。ITC技術は研究資料の分析に使用する。しかし、日常の暮らしにおいて携帯電話を持たない、SNSには加わらない。私がこれらの過剰便利に支配されれば、心は病んでさらなる虚無に蔽われてしまうだろう。

3) 教養を磨く良心が第七の感覚とするのなら、教養を磨き、思い遣りの心を深めることは良心の鍛錬だ。五感が心の構造を形成する各知能の発達基盤であるのなら、第六感（直観）は一般知能を流動させ、第七感（良心）はその核心が教養（思い遣り）ということなのだろうか。

やはり、上の引用（スタウト 2005）のように良心を持たない人が 4%いるという現実が高学歴がすべての人々に教養を保証してはいないということだ。先天的な素質というものはあるが、一方で後天的に五感も第六感も、さらに第七感こそ鍛錬が必要である。他者の内なる毒を制する方法はない。自己の毒は教養を高めることで自律制御し、自家中毒を防ぐことができる。学ぶことを望む人は他者から教養を高める方法を受け取ることができる。しかし、他者に教養を伝える意思を示し手助けはできるが、他者に受容を要求することはできない。すべては個人の自由な所業にあり、当人が望むのなら誰もが阿修羅のごとく自ら励むしかない。私が思うに、阿修羅は人間としての苦しみを自らの課題として終始戦い（学び）に明け暮れ、人間道や畜生道だけではなく、阿修羅はすべての六道に 移動できる存在ではなかろうか。

アシュラ阿修羅はインド神話における鬼神の一種で、サンスリット語 asura の写音、アーリア人のインド・イラン共通時代にはアスラとデーバ deva は共に神を意味し、彼らが分かれて定住してからはインドではアスラが悪神を、デーバが善神を意味するようになった。イランではアスラはゾロアスター教の主神アフラ・マズダとなった。神 deva と阿修羅の闘争はインド文学のよいテーマとなった。阿修羅は初期仏教の五道ではなく、阿修羅は天道や餓鬼道に含まれていたが、大乘仏教になって新たに修羅道が派生して六道になり、三善趣の下位に位置付けられた。阿修羅は原初の古い神であり、ヒンドゥーでは敵対する鬼神となり、佛教では改心して守護神に位置付けられている（Wikipedia、世界宗教大辞典 1991）。

アシュラは本来系統の異なる神であって、古くは邪悪な存在とはされておらず、たとえば、乳海攪拌の時はヴィシュヌ神らと協力しており、リグ・ベーダの暴風雨神ルドラもアシュラ的一种であり、否定的な意味はなかった。インド神話が先住民との闘争史を反映しているのならば、アシュラはアーリア人に対抗した種族と考えられる（長谷川 1987）。

3. 心の構造と機能

絶望は精神におけるすなわち自己における病である。人間とは精神である。精神とは自己である。自己とは自己自身に関係するところの関係である（キルケゴール 1848）。

逃げるができない出口なしの世界は、恐怖である。そして、自分が悪意のターゲットにされたときの絶望。人類はこのはらわたがねじれるような現象に苦しんできた（内藤朝雄 2009）。

絶望の中にあっても、いつもお互いのことを想い、私たちはもっと強く生きなければなりません。生きてさえいれば、希望があります（周庭 2020）。

今までに私は次のことを考えてきた。これらを踏まえて、さらに続きの考察を進めたい(黍稷 2017)。黍稷農季人は三つの謎を解きたいと言った。第 1 謎は、何故、現世の人々は先人の生活文化、庶民の歴史に関心がなく、先祖への敬意を失ったのか。第 2 謎は、何故に自然文化誌研究会の環境学習活動は有耶無耶のうちに地域社会の有力者から四度も追放されてきたのか。第 3 謎は、何故、地域住民は地域のために自由民権活動をした人々、また郷土を守るために戦死した人々を沈黙して助けず、敬意を表さず、忘却の穴に放り込んだのか。

また、文福洞先斗はこの謎を解こうとして、次のように応じている。第一の謎の解、過剰な都市の便利に幻惑わされて、自然離れし、生業を忌避して、人間であることを自己疎外しているのだ。第二の謎の解、行政の仕事範囲を超えた成果が出て、村の変容に踏み込み始めたと為政者に解釈されると、彼らの領分を侵犯し、面子を潰したとして、その後は弾き飛ばされるのだろう。自然を忘れた無知な都市民が恥知らずに山村を軽視し、恩知らずに犠牲を強いてきたため、山民の誇りが痛く傷つき、脆弱になったからに違いない。第三の謎の解、明治維新の功罪のなかに隠蔽された「重罪」である。自由民権{運動}の徹底した弾圧(治安維持法)が恐怖を刷り込み、地域社会は沈黙したのだろう。また、足尾銅山鉍毒事件などは常民・市民を守るべき為政者に虚偽・隠蔽によって抑え込まれてきた。

山村の人口が著しく減り、限界自治体崩壊の危機にあるのに、村の為を真摯に思い、活動する人々を迫害するなんておかしいと思う。これまでいろいろな排除経験を受けてきた。志ある都市民・山民は仲良くしているのに、為政者は何故仲良くできないのだろうか。追放・排除の理由を考えてみた。①都市からくる若者の活動への猜疑的排除、②不特定の都市民の頻繁な来訪忌避、③都市民への不要な劣等感、屈折した嫉妬心、④地域内の土地所有や権力争い、⑤思想信条の対立、政治党派や私欲利権争い、⑥個人の人柄への感情的好悪など。

これらの負の課題を解き、山村に豊かな暮らしを創るにはどうしたらよいのだろう。寛大な心で、自律した友愛を育ててほしい。このくにの人々は孤独に耐えられず、孤立を恐れて思考停止、付和雷同するが、実際には他者を信頼できずに孤立を深めているのだろう。ここから脱却しなければ、地域社会の再生はない。人々は自然や歴史から学び、暖かい情理に添うべきだ。山民は厳しい自然に挑戦し、共存・共生して、誇り高く暮らしてきた。その生活や生業は三浦梅園が言う深山幽谷に美しく咲く紅の花である。どうか、山民は自然に挑戦する心、冒険心、勇気や誇りを、都市民に学ばせてほしい。弱くなったこのくにの人々の心の形を、V. ゴッホ(1990)の言うような{日本人へと}、大らかに咲く花のように楽しく、幸せに導いてほしい。1) 心の構造と機能さて、私は雑穀と環境学習の研究として、45 年ほど、山村にかかわり続けて、多くの村人から温かい親切と助力を受けてきた。でも、その地に定着し、10 年ほどして、村人と親しくなり、信頼を得て活動が軌道に乗ると、何故か私たちは村の有力者から撥撫を度重ねて受けてきた。私は山村やそこで暮らす人々が好きで、それでもめげずに、自ら意思しては決して逃げ出さないと村人に約定して、山村に通い続けてきた。何故、撥撫という事象が起こるのかを、内省的に考え続けてきた。研究者としてこのことを解き明かさないわけにはいかない。私たちの真文明に向かおうとする内なるトランジションを阻害し続けてきた問題だからだ。人間の心の構造や機能の課題なのだと考えるようになった。心の構造において、良心すなわち教養を鍛え、自律する心の動的平衡を保持するのだ。

心の構造は生まれながらの遺伝的素質にもよるが、それでも生れてから後天的に鍛錬することによって一層発達向上する。心の構造はその機能としての五感、第6感（直感から直観）、さらに第7感（良心）によって平衡が保たれていることに考えが進んだ。この文化的進化を教養（想い遣り）の獲得、洗練化と理解したい。構造は形態的に支えられ、機能は生理的に働き、これら構造と機能は社会環境において生態的に保たれ、その統合された心は個人の特性として分類される。心の構造については既に論考したので（木俣 2019）、ここでは心の構造を統合に導くような心の機能について新たに論考を加えたい。

2) ムラ社会といじめの仕組み

歴史的な課題は、日本の人々の相当数は個人主義的に生育せず、野蛮にも利己主義的に記憶力競争の受験体制により教育されて、これら相違する信条を区別することができていないことにある。閉鎖的集団（群れ）、ムラ社会は洋の東西、田舎・都会を問わず、どこにでも形成される。人間の心の構造に巣食う病弊、負の機能である。ムラは村を意味するのではなく、閉鎖的集団を意味する。村は小さな地域だから、ムラ社会が目につきやすいだけで、たとえば、イギリス（ヴェラ、バーナビー警部、ルイス警部）やフランス（絶景ミステリー）などのテレビ・ミステリーを見ている、ムラ社会が形成され、撥撫いじめが発生し、この犯罪による不幸が起きている。山村の自然と生業文化は好きだが、ムラ社会の撥撫（いじめ）はきっぱり拒否する。

しかしながら、イタリアの小さな村の物語シリーズを見てみると、私が希求してきた素のままの美しい暮らし *sobibo* と良く合致している。イタリアの小さな村の物語の番組概要は次のように記されている。毎回見て、家族の情愛の深さに涙が出てくる。村で暮らす親たちが子供たちを都市の大学に進学させ、子供たちは都市で高給の職業を得ても、いずれ故郷に戻り、家族と共に過ごすことを大事にしている。日本と似たように山や海に近い暮らしでありながら、イタリア人は故郷を大事にしている。日本人はどうして小さな村を打ち捨て、家族を大事にしないのだろうか。自分を支えてくれている家族や師友からの温かい好意、心情を思い出すことだ。あなたや私は素のまま、美しく暮らし、幸せに生きていてよいのだ。生活信条や信仰に支えられて、信念を真っすぐに生きてよいのだ。

美しく生きるということ。気候や風土に逆らわず、共存しながら暮らす。先人たちが築き守ってきた伝統や文化を誇りに思いながら生きる。人間本来の暮らしが息づく小さな村が今、注目されています。海を望む小さな漁村、山肌にはりつくように佇む村、雪に覆われた山間の寒村。古き良き歴史と豊穡の大地を持つイタリアで、心豊かに生きる人たち。豊かに暮らす、美しく生きる、とはどういうことなのか。私たちが忘れてしまった素敵な物語が、小さな村で静かに息づいていました。番組ではありのままの時間の流れを追い、村人たちの普段着の日常を描いていきます。

新たな用語ムレ（群れ）社会の定義を思いついた。ムラ社会は村を想起させ先入観による田舎への偏見を助長させてきた。したがって、ムラ社会を定義し直して、ムレ社会と表現する方がよいのではないかとも思うが、しかし、小さな地域社会の方がムレ社会の形成が実態的に働くので、逃げ場のないムラ撥撫が生じる。つまり、田舎の小さな地域社会の濃い歴史性を負ったムラ社会形成と都市の歴史性が希薄なムレ社会は幾分かの違いがあるのかもしれない。都市では、隣の人は何する人かもほとんど問われないので、逃げ場はある。都市ではムラ社会が形成されないと言っているのではない。都市でも古くからの土地所有住民のムラ社会（地元神社の氏子など）は隠然としてある。それでも、それにはかわらないで暮らしてはいける。また、多様なムレと同時に関係を結ぶことが出来るので、

都市の希薄な人間関係が、この場合は良い意味で一次的な引き籠り、逃げる場所にもなり得る。

ところが、学校、会社、あるいはいろいろな社会集団が閉鎖的であると、これらの中にいろいろなムレ社会、いじめグループ、学閥、派閥、ムラ、シマ、隣組、などが出来る。人間社会では普遍的に群れができるのであり、当然ながらムレ社会はその構成員と非構成員にとっても正邪の両義性をもつ。閉鎖的集団としてのムレ社会で、撥撫（いじめ）の対象にされると、被害者が自分に落ち度があるのではないかと、自分を責め心身の痛みが生じる。ひどい場合は鬱屈して病み、自死に至る。こうした心身の痛みを快復するには、社会的自立、心理的自律するように、超克することである。内藤朝雄（2009）から要約引用する。

いじめは日本の学校だけで生じる問題ではないが、ここでは、主に日本の中学校における具体的な事例からいじめの生態的分析を行っている。①群生秩序；群れの勢いによる秩序。空気を読め。みんなから浮いているにも関わらず、自信を持っている者は、ものすごく悪い。普遍的秩序は反感と憎しみの対象になる。面白いからイジメる、遊びであればすべてが許される。②市民社会の普遍的秩序；普遍的な理念やルールを組み合わせる市民社会の秩序が編成されている。中心部分は人権、尊厳、自由、平等、などである。③小社会の秩序、学校；事件の当事者を孤立させる。拒否すると村八分とわが子の差別を覚悟しなければならない。人の魂を深いところから奴隷化する、陰惨な秩序を感じる。生徒たちは濃密に付和雷同して生きている。人道に反する学校らしさが問題だ。人間の死を軽く見る傾向や、個人と個人の間信頼関係が全くないにもかかわらず濃密に密着し合っている傾向、学校共同体では結局個人の責任は生じない。

いじめが成立するためには、①加害者の嗜虐意欲、②加害者による現実の攻撃行動、③被害者の苦しみという三つの要素が必要である。この三要件を概念の中心に位置づけて、いじめを三段階に分けて次のように定義する。①最広義の定義 A：実効的に遂行された嗜虐的関与。②広義の定義 B：社会状況に構造的に埋め込まれたしかたで、実効的に遂行された嗜虐的関与。③狭義の定義 C：社会状況に構造的に埋め込まれたしかたで、かつ集合性の力を当事者が体験するようなしかたで、実効的に遂行された嗜虐的関与。いじめの中核群は、群れたみんなの勢い、あるいは自分たちなりの特殊な秩序を背景にしたタイプである。すなわち、定義 C に類型化されるいじめである。

いじめの加害者は、いじめの対象者にも、喜びや悲しみがあり、その人自身の世界を生きていることを承知しているからこそ、その他者の存在を丸ごと踏みじり抹殺しようとする。いじめの加害者は、自己の手によって思いのままに壊されていく被害者の悲痛のなかから、全能の自己を生きようとする（全能筋書）。被害者がいじめられるのを拒否すると、加害者のほうがこのような態度をとられたことに、独特の被害感覚、屈辱感、激しい憤怒を感じる。全能の自己になるはずの世界を壊されたとして、被害者に対して復讐をはじめる。いじめは日本特有ではなく、世界共通あるいは人類普遍の心理—社会的なメカニズムによって蔓延し、世界共通（人類普遍）の心理—社会的なメカニズムによって減らすことができる。各人の人間存在が共同体を強いる集団や組織に全的に埋め込まれざるをえない強制傾向が、ある制度・政策的環境条件のもとで構造的に社会に繁茂し、遍在している場合に、その社会を中間集団全体主義社会という。人々を直接的に苦しめる主要な力は、国家権力や市場の貧困化力というよりも、「生活の細部にまで浸透し、靈魂そのものを奴隷化する（J.S. ミル）」ローカルな秩序の作用である。内側から自分を変えてしまう場の変形力が、自己構成的な中間集団共同体＜世間＞にはある。

{注：自己が自己である仕方まで、当人の制御が及ばないところで、いつの間にか作りあげられる}

この侵食作用は、自分に対する不信感や嫌悪感や無力感や、場のなりゆきに対峙する自己であることへのなげやりさを蓄積させる。戦時中の隣組制度により地域コミュニティの自治と共同の過酷な強制が行われた。公に献身する 共同体的様式が強制されると、今まで潜在化していた妬みや悪意が解き放たれた。適度に物象化された市場と法に隔てられて、各自が適度な距離をおきながら私的な幸福を追求していたころには、決して起こらなかったようないじめが頻発した。国家が個人を直接圧殺する全体主義ではなく、われわれの強制的な献身要求、献身を自己のアイデンティティとして共に生きる心の強制、われわれ の共生を離れたプライベートな自由や幸福追求への憎悪、これらが草の根的に沸騰する共同体的専制による全体主義である。必要なことはこのような社会に名「中間集団全体主義社会」を与え、このような社会に生きる人々の構造的な苦しみの諸相を明るみに出すこと、さらに、この全体主義の苦しみに着目したやりかたで、自由な社会の構想を描き、社会変革へとつなげることである。人間が人間にとって怪物になる現象を説明する。これは人類の歴史のあらゆる時代、あらゆる地域に当てはまる普遍的な現象である。私たちに共通の痛みの経験から、もっと恐ろしい大人の普遍的な現象を理解し、それを止める方策を練る必要がある。小権力者は社会が変わると別人のように卑屈な人間に生まれ変わった。状況次第で人が変わってしまうのは情けないが、このような豹変を希望の論理として受けとめる。適切に制度・政策的な環境条件を変更すると、小権力者が卑屈な人間に生まれ変わり、愛想のよい近所のおじさんになる。結果として、多くの人々が隣人＝狼の群れから被害を受けずにすむようになる。群れた隣人たちが狼になるメカニズムを研究し、このメカニズムを阻害するような制度・政策的制度設計をすることだ。浅野の聞き取り調査によれば、いじめにかかわった中学生は遊びだから、被害者を自殺に追い込んだという罪の意識はない。みんなのいま・ここは重く、個人の命は軽い。彼らにとってもっとも悪いことは、みんなが共振し合うノリの世界にひびを入れることである。彼らは人権やヒューマニズムを生理的に嫌悪する、とまで述べている。

たまたま、検索にヒットした小説『あたしたち、海へ』（井上荒野 2019）を読んでみた。女子中学生の集団的いじめの構造とその顛末を描いたフィクションで、中途半端な物語だが、事実を単純化してとても判りやすかった。友情を支配、分断され、自殺（ペルーに行くと言い換えている）寸前にまで追い込まれていくが、父親の住んでいる海外のペルーに転校するという母親の提案で、解決できないいじめにあっている 3 人の女子中学生はとりあえず友情を再確認し、自殺を思いとどまるところで物語は終わっている。悪なる者はそのまま悪いままにしておけということか。いじめをする者たちと関係を断つことが、良心ある善人が自らを護る現実的で最良の対処法だろう。

しかし、いじめを続けている小集団、対応を忌避した教員・学校に対しては何の解決策もないままである。学校は人間関係を形成するところではなく、人間関係を壊すところのようだ。良心を持たない毒人間と、その毒に侵されていじめに加担する者たち、次の標的になることを怖れて傍観無視する者たち、ましてや、被害者にも落ち度があると非難する者たち、絶望的に解決はない。しからば、とりあえず、学校から逃散するしかないのではないのか。人間性善説によって、制度・政策を作れば、いじめはある程度回避できるということには合意する。しかし、良心を持たずに毒を溜め込んだ人間は少数でも存在するという事実を事実として前提とせねば、根本的な解決策はあり得ず、いじめはなくなる。マスメディアの過剰反応は毒を持った人間の嗜虐に沿うので、事実上憶測の尾ひれを付けるような報道はやめるべきである。

{注：嗜虐、残虐なことを好むこと（広辞苑）}

私は子供の頃から、だれの子分にもならなかったので、いじめられっ子だった。理由は肌の色が小麦色だとか目が大きい、あるいは和菓子屋の子、きっと貧乏であるとか、である。原日本人の私が、黒人として差別されたのだ。教員は大方助けてはくれなかった。それでも、友人がいたので孤立することは無かったので、毎日、泣きながらも抵抗した。子どもの腕力は必死になればさほどの違いは無いので、番長にもダメージは与えられたから、いじめ集団は私へのいじめをやめた。したがって、私は根に持ち復讐しようなどとは、有難いことに、今まで思ったことはない。人種や民族など、あるいは身体的特徴など、私は子供の時から差別を嫌悪し、当時の教員という職業も嫌いになった。このために、アフリカに行って、シュバイツァー博士の手伝いをするとの志をもった。それでも卒業式には「仰げば尊し」を歌うように強要された。しかし、本当に良い師も少しはいてくださったから、今でも恩義は思い出すし、良い友人もいたからその友情への恩も思い、もちろん忘れてはいない。学び、励むことは望むが、しかし、立身出世主義はもう沢山で嫌いだ。因果なことに、東京学芸大学に職を得て、教育学の研究も責任をもってしてきた。しかし他方で、異質な抗いをしてながらも、環境学習原論をまとめて職業的責任を果たし、これで充分自己満足したのだが、できればラジカルな教育方法論として、さらに正直に言えば、いくらかでも学校関係者や保護者に普及したかった。ありがたいことに環境学習原論を幼年者・保護者向きに描く機会を頂いたが、その本質は生きている（木俣監修 2017）。

{注：仰げばとうとし、わが師の恩。互(たがい)にむつみし、日ごろの恩。別るる後(のち)にも、やよ忘るな。身を立て 名をあげ、やよはげめよ。}

私は知性、良識の府である東京学芸大学の中でも学閥や分野領域に形成されるムラ社会をいくつか見てきた。それには加わらないで、無所属、自由にふるまってきた。ムラ社会を（ムレ群れ）による、私への反感の理由は、次の事柄がエリート意識と受け止められたことによるものだろうか。わが師の学恩に対して師弟の礼を重んじてきた。この師は自ら選んで師事し、学校に入って選ぶこともなく、決められていた先生のことではない。こうしたアカデミック・ファミリーなどというものは、古い考えで、これも学閥という一種の群れなのだろうか。それでも、学術調査（探検）に同行した人達のこととは、たとえば悪いが、軍隊でいうところの戦友のようなものなのだろう。さらに、親炙する師は現世でも広く求めるべきであり、また、古典書によって何百年も前の師にも私淑することができる。古典 書は良心を鍛え教養を高める力を秘めている。学校制度で押し付けられる教員が師のすべてではなく、自ら人生の師を求め探すべきである。醜い為政者たちに対して異議申し立てをする、マララ・ユスフザイ、グレタ・ツンベリ ーや周庭が多く若者たちから共感されるのは、純粋な志と勇気を見るからだろう。国制度のすべてが悪いわけではない。権力者が名利を求め、過剰な出世や保身のために、自由、平等、友愛あるいは民主主義という文化的進化、すなわち良心の発達を阻害することが悪徳の栄えになるのだ。巨悪な権力犯罪の野蛮に対して抵抗することは英雄的である。恐怖を超えて精神の高揚がある。巨大な権力者に立ち向かい、恐怖にふるえながらも、信念を曲げない。香港の若者たちの自由な社会を求める勇気ある抵抗に強く共感し、高い敬意を持つ。私の青春も同じだったが、その時に敬意すら感じていた中国や北朝鮮が今では香港市民の自由を封殺しようとしている。隠蔽されていた共産主義社会の現代史的事実も知らなかったことを、今更ながらにとっても恥じ入る。さらに加えて驚いたことに、ベラルーシでは、市民から庶民の現代史について穏やかに聞き書きをしてきたアレクシエーヴィッチが現政権に反対する代表的な良心

ある人になってしまっていることだ。日本を訪れたときに、彼女は、「今、ベラルーシでは政府に対する反対派が忽然と行方不明になったりしている。自分も危ないとは言われているが、こちらが臆病風を吹かせなければ手を出されない」 20 と言っていたと聞くが、いよいよ権力犯罪の危険が迫っている。(アレクシエーヴィッチ 1985)。それに比べ、この日本では内外の状況にほとんど無関心で、いつまでも内向きで卑小な 中間集団全体主義社会(群れ)が良好な地域社会の形成を阻み続けるのだろうか。日本の 市民の知的水準が衰微し、第六感(直観)は発育せず、第7感(良心)も衰弱しているのは、偏に強要する学校教育の実際的退化によるもので、自ら意志して学習することを阻害 しているからだろう。善良な市民は多いが、邪悪に流される人々も少なくないのだ。増殖 するイジメの心毒を自律超克して治癒せねば、日本はこのまま引き籠りや自殺が多く、悲 惨な社会状況が続けることになるだろう。この卑小な権力という精神風土は半千年紀の間に形成されたのだろう。天皇公家と武家 とを併存させた二重権力の無責任政治機構、喧嘩両成敗、刀狩りで庶民の武装解除をして 抵抗を失わせ、幕藩体制で逃散を防ぎ、五人組、檀家制度という行政末端支配で、常民間の相互監視や連帯責任を日常化してしまったのだろう。さらに悪いことに、キリスト教を禁止、一向宗を弾圧までし、社寺が行政と一体化して真の信仰心まで衰微させてしまった。しかし、独裁専制権力の野蛮な巨大暴力とはまったく対照的に、いじめなどという心の 機能不全は卑小な野蛮だ。こんなことで行動を阻害され、自らの心をも苦しめるようなことは、鬱屈としてとても嫌になる。しかし、これが毒に侵されて自律できない人々の悲い野蛮とするなら、情けなくても、哀れであっても抵抗するしかない。この毒を解かなければ、楽しく幸せな個人、家族や地域社会を形成し、維持することはできない。歴史的閉 鎖性と地理的閉鎖性をせめて半閉鎖性にまで移行させたい。

支配欲を制御しない巨大／卑小の権力者は、心の機能が幼形成熟〔注：ネオテニーの類推〕して、発達阻害・転換したのだろうか。ホモ・サピエンスがホモ・ネアンデルターレンシスを三万年前までに残虐にも絶滅させた頃の心の機能のままに退行進化し今日までサピエンスの4%が、第七感(良心)の発達を忌避したのだろうか。サピエンスは残虐性を芸術や宗教などの文化的進化で昇華、置換して、良心(思い遣り)を確かに発達させてきた人々が多い。しかし、良心などもち合せれば、熾烈な社会では生き残れないので、サピエンスは良心の未発達な野蛮の人々を4%ほど残しているのだろうか。こうした良心のない 現代の野蛮人が、情報科学技術や生命操作技術を悪用する新人類ホモ・デウスとなり、サピエンスを隷属させていくのだろうか。

人生の大半で性善説を信じて暮らしてこられた。短い人生でも、少しはいやな人々はいたが、まあ、乗り越えられてきた。しかし、性善説だけでは解釈できない、明らかに悪なる毒を持つ人間はいるのだ。これを前提にして、地域社会の在りようを論考すべきだ。綺麗ごとだけでは課題解決はできないのだ。聖ヨハネの黙示録に、「天使は、不正を行う者には、なお不正を行わせ、汚れた者は、なお汚れるままにしておけ。正しい者には、なお正しいことを行わせ、聖なる者は、なお聖なる者とならせよ。」と言ったとある。また、キルケゴール(1848)は次のように書いている。絶望に至る病は、超克の努力によってしか快復には向かわない ということか。つける薬はなくとも、支えてくれる家族や師友はいる。疲れれば休めばよい。その現場から逃避してもかまわない。人間とは精神である。精神とは自己である。自己とは自己自身に関係するところの関係である。

人間は有限性と無限性との、時間的なものと永遠的なものとの、自由と必然との、総合である。人間とは総合である。総合とは二つのものの関係であり、第三者の関係など

派生的な措置された関係が人間の自己なのである。自分ひとりの全力を尽くして自分の力だけで絶望を取り去ろうとしているのなら、なお絶望のうちにあり、その苦闘はかえって深刻な絶望のなかに引摺り込む。絶望における分裂関係は単純ではないので、同時に他者との関係を措置したところの力との関係のなかで 無限に自己を反省するのである。絶望が全然根扱ぎにされた場合の自己の情態は、自己が自己自身に関係しつつ自己自身であろうと欲するに際して、自己は自己を措置した力の中に自覚的に自己自身を基礎づける、ことである。

4. 社会ダーウィニズム

さて、また世俗の不学・無学の話題に戻る。自由民主党の「憲法改正ってなあに？」の漫画第1話で、次のようにもやウィンが言っている。「ダーウィンの進化論ではこういわれておる。最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化できる者である。」多様な生物の進化を簡単な法則性に集約することはできない。ダーウィンはそのような事を言っていないし、彼以後も進化学は大きく発展しているので、単純な社会進化論の繰り返しの適用は無学をさらして、無恥であるので、慎むべきだ。あまりに見かねた日本人間行動進化学会（会長・長谷川真理子総合研究大学院 大学長）は「生物進化がどのように進むのかの事実から『人間社会も同様の進み方をするべきである』とする議論は間違いだ」と反対する声明を出した。声明は「ダーウィンの進化論は思想家や為政者に誤用されてきた苦い歴史がある」とし、権力者らによって差別や抑圧に悪用されてきたことを紹介。科学者は警鐘を鳴らしてきたが、現代でも特定の政治的主張に権威を持たせるための誤用が後を絶たないと懸念を表明した。さらに「ダーウィンの言う進化は、ランダムに発生した変異の中から、環境に適さないものが淘汰（とうた）されていく過程だ」と漫画の誤りを改めて指摘。政治的主張は科学的知識を誤用して行うのではなく「個人や団体の信念として表明するべきだ」とくぎを刺した。ダーウィン（1859）『種の起原』を再読した。{注：進化論に関する詳細な議論は別稿『第四紀植物』で論考する。}

動植物の進化について、自然選択 natural selection が種分化を進めるのだが、自然の中での研究事例がまだ多く収集されてはいないので、とりあえず飼育栽培下の研究事例を参照することは有効であるとしている。栽培植物の進化過程には自然選択も働くが、強い恣意的な人為選択 artificial selection の影響が強く加わる。人間でも自然選択から逃れられないが、しかし、他生物とは著しく異なり、人為選択を強く働かせ、さらに文化的進化 cultural evolution として私意的な社会選別により自己家畜化 self-domestication さえも志向している。たとえば、歴史的に見られる奴隷制度や、現代的には思考停止もその現象の一端である。

人類学者アイズリー, L. (1978) は『星投げびと』で、初期人類への先祖帰りについて、若い研究者だったころに出合った田舎娘の面影に郷愁を記している。

今日のことが、私はあの体験のことを思って、古いノートを必死で探してみた。しかし、見つからない。年月というものは、印刷の保護にあずからないものをかたづけてしまう。より古い出来事の記憶は残っている。私がかつて知っていた生身の人間のことだったからだ。人生の秋を迎えた現在、彼女の顔と彼女の隣人として過ごした奇妙な季節は、おぼろげな教訓のようによみがえるのだが、そのころは私も若すぎて何もわかってはいなかった。突然の洪水が起こればロッキー山脈の巨大な岩をも海に向かって運ぶ涸れ谷をかかえた、普段は旱魃に苦しむ西部の広い土地のどこかで

起こったことだ。強い風をのがれて丘の陰に隠れるように建てられた、芝土を積み上げてできた家が一軒あるだけだった。わき水でできた小さな池が牧草地のなかにあった。私がおぼえているのはそれだけだ。彼女は最後のネアンデルタール人なのだ。彼らは、自分ではしらないのだが、獲物を失った狩猟民族であり、戦士を失った女なのだ。彼らの生き方のうえには衰退が重くのしかかる。奇妙な優しさをたたえた彼女は、はるか昔に消えたネアンデルタール人の優しさを思い起こさせる。彼女のからだのなかに復活した繊細な遺伝子は、ふたたびサピエンスと呼ばれる生物の影に埋もれてしまうだろう。あの幻の娘の血族たちは、イタリアの地中海沿岸地方や、方々に触手をのばす氷河以南の地域で、都市を形成することなく生きていた。ネアンデルタール人は、長年の発掘の結果、独自の夢や優しさをもっていたことが最近わかってきた。彼らは死者に贈り物をそえて埋葬したし、野の花を敷きつめたベッドをしつらえた例さえいくつか見つかっている。彼らの心は、のちに私たち{注：サピエンス}に宿る心性にはおかされていなかった、おなじ血をひく恐ろしい生物の心性には。

アイズリーのその思いに甚く共鳴する。素のままに美しく暮らしていたネアンデルタール人の美しい心性が、サピエンスの都市国 polis の権力構築のためにの農耕文化を起こして、文明社会に向かう初期過程、前農耕段階の時代において、ネアンデルタール人はサピエンスに迫害されたようだ(朝日新聞 1991)。しかし、サピエンスに吸収された素朴な美しい心性は時としてサピエンスの心にもよみがえり、先祖返りするようだ。たとえこれがアイズリーの夢想であっても、私も今に受け止めて、その心性をサピエンスの中に探し求めたい。また、考古学者ミズン(1996)は『心の先史時代』で心の構造についてさらに詳細に論考している。現代の狩猟採集民の統合された心では、認知領域群の領域の間を概念、思考方法、知識が自由に行き来する状態へ変形をとげる。ネアンデルタールは芸術を生まなかったが、サピエンスはその後の芸術や宗教を出現させた。{心の構造における}＜一般的知能＞は、ピアジェの見解に従えば、学習及び意志決定についての汎用の規則によって構成されている。基本的特徴はどの行動領域であり、経験されたことに照らし合わせて行動を修正するために用いられる。学習と問題解決のための包括的な規則群。

＜博物的 知能＞(直観的生物学)は自然界の理解、動物、植物についての思考。居住地域についての地理学。

＜社会的知能＞(直観的心理学)は他の個々人とやりとりする心を読む。個人間の社会関係を調整する。社会的な相互作用、社会的柔軟性の能力。

＜技術的知能＞(直観的物理学)は道具を作り、操る。環境から資源を取り出し利用する。

＜言語知能＞は感情や情報を伝達する。十五万年前以降のヨーロッパと近東で見られ、ヨーロッパではわずか三万年前まで生き残るホモ・ネアンデルターレンシス(初期人類)、彼らの脳容量は 1200 ないし 1750cm³ へと飛躍的に変化し、社会的言語の発達が{脳の}発達を反映している。しかし、認知流動性は抜けていた。ネアンデルタール人の心では、社会的知能は道具の製作(技術的知能)や自然界との相互作用(博物的知能)に関連する知能から切りはなされていた。もの作りの伝統が単調で、骨製や牙製の道具が存在せず、芸術もないのだ。ネアンデルタール人は芸術を生まなかった。一〇万年前に、ホモ・サピエンス(初期現代人類)が登場する。文化が六万年から三万年前に爆発的に開花する。人間の心の発達においても進化においても、ひとつづきの比較的独立した認知領域群によって構築されている状態から、そうした領域の間を概念、思考方法、知識が自由に行き来する状態へと変形を遂げる。四万年前から三万年前にかけての時期に、個人的な装飾品が製

作され、一万七千年前頃にはラスコー洞窟の壁画が描かれた。宗教的信仰という観念が認知流動性とりわけ博物的知能と社会的知能の統合から生まれる。この両知能が統合されていたことで、先住の初期人類との競争が有利になり、初期人類を絶滅に追いやった。サピエンスの発達した知能による血塗られた初期文明が心性を浄化するためにシンボルとしての芸術や宗教を萌芽させたのだろうか。ミズンの論考に加えて、現代都市民における心の構造を考察してきた（木俣 2019）。さらに、超克を進めるために、心の構造における一般知能の認知流動性が心の機能を高め、心の統合をもたらす可能性について考察の端緒を得ようと試みた。そこで、心の構造はその機能と一体的に作能することを考えてみたい。

心の構造の諸知能はミズンの見解によれば狩猟採集民において統合されていたが、次第に、集住する都市国が成立し、その権力支配が強まるにしたがって、諸知能の領域は再び分断されるように向かった。具体的には、小集団における自治的な社会的知能は国社会の制度に依存するようになった。その後、諸産業が発達し、18 世紀半ばには産業革命が起こり、以来とりわけ現代では高度な科学技術による生産商品がブラックボックス化し、日常生活における技術的知能さえもほとんど無力無用になり、自然と乖離した都市的生活は五感の鍛錬を阻害し博物知能を縮減し、言語知能は情報処理機器に代替し、これまた直接的な意思疎通を衰微へと導いている。広く普及した公共学校教育制度での画一教科分断は全体的な認知流動する一般知能を發育させない。さらに、現代人の心の構造の主要部は代替言語知能としての情報機器で、これは効率的なアルゴリズムはあるが、非効率的な良心はそこには組み込まれ得ない。現代の科学技術による便利さのすべてを全否定的にとらえているのではなく、便利の過剰を選択する必要性について述べているのである。個人の自律した選択が生活や人生の質量を知足するように願いたい。心の機能を支える五感（視・聴覚、味・嗅覚、触覚）は美を感じ、第六感（直感・直観）は真を観ぬき、第七感（良心・教養）は善を行う。すべては天性（生物の遺伝子ジーン、gene）のみならず、師友を求め選び、自律した学習（文化の自己複製子ミーム meme）によって、粗野・野蛮から洗練・文明の品性を鍛え磨くのだ。

素のままの美しい暮らしは自然と文化の粹であって、自然が粗野、文明が洗練と固定的偏見してはおらず、むしろ現代文明が粗野で野蛮な状態にあるのではないのかを問いたいただきたい。分子生物学の草創期に渡辺格の集中講義を聞いた。自然の階層という概念に甚く感銘を受けたので、生意気にも最前列から何らかの質問をした記憶がある。彼からは、世の中を良くしたいのなら、辻説法をせよ、と言われた。彼の影響に加えて、国立遺伝学研究所の阪本蔵書にあった J.B.S. ホールデンの本を読み、草創期の分子生物学と全体論の議論に強い印象を受けて、その興味を今日にまで持ち続けてきた。当時、私は研修生であったが、研究所の抄読会において、全盛であったショウジョウバエの研究成果をゾウに当てはめるような論理はおかしい等という反論を応用遺伝学の側から聞いていた。渡辺格(1969) 編 『生物学のすすめ』で、彼は自然の階層に関して次のように記している。そこで、学部生の頃の私は公害への批判から科学論や哲学にも関心をもち、還元論や人間機械論に対抗する全体論や自然の階層構造に誘引された（山口 1970）。全体論 holism とは、系全体はその部分や算術的総和以上のものであると考え、全体を部分や要素に還元する（還元論 reductionism）ことはできないとする立場である（Wikipedia2020.9）。ここに、ゴールドシュタイン (Goldstein, K. 1934) 『生体の機能』から全体論による機能の統合について、要約引用する。心の構造の統合はその機能が動的平衡を維持することと理解したい。

自然現象の分類の根底とした三つの部門への分類、即ち生命過程を増殖（栄養、成長、生殖）興奮性（刺激に対する反応）および感覚（意識的感覚）に分ける方法が再び新たな意味をもった。生体全体の統一性に関与する程度の大きさによって、個々の器官系を分類せんとする方法も想起するべきだ。統合の強さは存在の高さの標準となる。もっとも統合は自由、全人格的行動、生産性、充実せる行動などの言葉で特徴づけられるが、それらはいずれも同一事実の異なった表現にすぎない。

生物の階層的秩序づけの試みの困難さは、個々の生体の本質の把握が困難であり、さらに、生物の全生物界における位置決定には、この全生物界そのものを知っていなければならないからである。全生物界の認識は個々の生物を総合するだけでは不可能で、できるだけ多くの資料を蓄積して、かの全体的直観が現れ出るのを待つよりほかはない。生体は比較的恒常な質的特徴的な存在として定義される。環境刺激によるあらゆる変化は必ず適当な時期に適当な平衡に達するという事実によって、生体はその主要特徴なる比較的恒常性を維持することができる（生物学的基本原則）。あらゆる作能は質と空間的關係の外に、時間的契機からも規定されている。存続の危機的な動揺は生体が世界と生産的な交渉にある時に生じる。それは征服されるべき不平衡状態の表現である。平衡の回復は生体が大いなる世界の内に自らの環境を発見することによって可能となる。人間においてのみ、不完全性即ち苦悩に耐え忍ぶことによって本質と世界との狭小化に対抗するという努力が見られる。この努力は人間存在、自由性における最高の生物学的存在に特徴的な現象である。

ダーウィンもゴールドシュミットも、自然界の中で営まれる研究事例資料をもっと蓄積しながら、論考していこうとの学問的姿勢であったと受け止められる。また、人間の特異性を認識・区別していることを確認しておきたい。ベルランフィー（1967）『人間とロボット—現代世界での心理学』も理学部生になった頃、身近な大学闘争や公害闘争の最中で、科学とは何かと大いに考えざるを得なかったもので、読んだ。こうしてみると、50 年ほど前に読んだ書籍が今改めて論考を進めるにあたって新鮮に背中を押してくれているように思える。深く考え、緻密に書かれた著作は古典になり、これらの古典を読むことはとても大事なことだ。欧米の大学でギリシャ時代からの古典を大事にし、また、副専攻を求めていることに教養への敬意の差異を思う。日本の大学は図書館や博物館を大事にせず、幅広い教養を捨て、今ここの実利に溺れてしまったのだろう。このことはいずれ別稿で三省してみたい。次に関心の深い記述を要約引用する。

現代世界での心理学的技術の発展が大衆社会の中で生み出した影響力の深さは、ますます複雑精妙になる一方の機械装置技術の発明から生ずる影響にささかも劣らないものがある。物質的技術である自然の支配は、心理学的技術である人間自身の支配で補われたのである。科学と技術は諸刃の剣で、熱核戦争の脅威や人口の爆発やサイバネティック社会での社会問題はもはや常識である。

生物学者である私は基本的なものの見方を問題にするのであり、ある時代の社会＝文化状況と科学と世界観との相互関係や相互作用の研究である。全体を組織だてられた系 system としてまとめて眺めることは容易でない。生命現象は機械論的アプローチで対比されるものとしての有機体論（全体論）的アプローチによってとらえられる。物理＝化学的レベルから細胞、生物個体、社会的レベルまで、すべての階層的レベルで生命現象を研究する必要がある。突然変異と選択という機会的なできごとによって生きものの秩序と編成を説明するには限界があるようにみえる。生物体は、その成分や構成素材をたえず交換している開放系としてとらえられ、このような系をあつかえるように物理化学を拡張すべきである。全体性の概念とそこから生ずるいろいろの結論とを認識論的に明らかにして、科学の認識論全体に役立てる。システムには物理学的、生物学的、技術的、社会的等々のいろいろな形で現れているものがあるけれども、実際にどんな形をとっているにかかわ

らず共通の性質を示す抽象的なものとしてのシステムを対象とする多くの分野にまたがる学際科学として、一般システム理論というものが想定される。

人間は言語、思想、社会的存在、金銭、科学、宗教、芸術などのシンボルの世界に住んでいる。彼をとりまく対象物の世界は、こまごました周囲のものをはじめ書物、車、都市、爆弾にいたるまで、シンボルの活動の物質化したものなのだ。緊張の作りだしや遊戯や探検行動では、たんに恒常性維持的（ホメオスタシス）なものではなくて、生物体の自律活動の表現である。全体として（例外はある）生物学的に不利な行動は選択によってすみやかに消滅していく。これと対照的にシンボルの行動はその根元において創造的（高次の自律性）であるばかりでなく、生物学的な有利性をはるかにこえたものでもある。文化のシンボルの世界は基本的に非自然であり、生物学的な自然、衝動、有用さ、適応をはるかにこえたものであり、しばしばそれを否定する。

創発 emergence は、世界のどのレベルもそれぞれ特有の性質と法則性をもっていて、それらはおのおの下位のレベルの特性と法則から単純にみちびきだしたり、それらに還元したりできないとの考えかたである。機械論的な生物学は生物体の機能を人工の機械をもちいて説明しようとし、バイオニクス（生物工学）は自然の発明をまねようと試みている。あの広大にして魅惑的な神秘は、生物学的には劣っていてふがない生物が、シンボルの活動という独自の方法で自然と進化を越え、それにうちかっているということだ。シンボリズムはホモ・サピエンスの種差である。認識的シンボルが進化してくるためには、洞察、それまで無関係であったものごとをいっしょに見るということだ。決定的な段階は人間がどのようにしてか、ものごとの代表とするのに適当なイメージ心象を作りあげたことだった。価値の自然主義的な理論は科学にもとづいている。究極の価値は個人の維持、社会あるいは種の存続、最大多数の最大幸福であるようにみえるが、このことが生物学的な一般原則であるからこそ、これは真、善、美という伝統的な三位一体で表現され人類の文化、科学、芸術、宗教につながる人間に特有の諸価値にかんしては、無縁のものなのだ。人間は、文化および文明という名の自分自身の環境を創りだす動物であるが、この環境は個人と社会のどちらの点から見ても、生物学的有用性をはるかに超越したものである。文化と文明は、ただ生物学的あるいは生存のためというだけの価値とはうまく一致するものではない。

{注：非常に率直な見解が記されているが、世情では誤解されるだろうから略そうと考えたが、そのまま引用する。}

黄金律やそれと同様の訓えは適度に社会的な種の本能に根ざしているもので、さまざまな国民や文化のあいだで共通の道徳の基盤になっている。しかし同じ理由から、いっそう進んだ人類社会ではこの自然主義的命題は問題をはらんでいる。これは極めて崇高な道徳的教えで、人口がまばらでよく開けた国土では適切であったであろうが、近代的衛生学や医学、寿命の延長等々が人類の悲惨さの倍増に繋がっている今、知恵おくれの人、精薄児、犯罪者にまで手あつくすることが、どれだけ有用で、道徳的とさえいえるのだろうか。その結果、人類という種の遺伝子プールが劣化して、バカと悪人の世代を養いはぐくむことになることは、科学的事実である。自然主義的価値はホモ・サピエンス特有の人間的価値ではなく、社会的動物の本能をことばになおしたにすぎない。ある生物がその行動の格律が普遍的法則となりうるように行動することこそ本能の定義であり、自然選択は通常、本能が種を保存するようにしてくれている。

シンボリズムこそが人間を最高の動物よりもさらに高めた。知的な何かのために犠牲を払うことは本能のレベルの上に築かれたシンボルの上部構造である。私たちは価値の体系をも一つのシンボルの世界として理解し、基本的基準はどの場合にも共通であり、価値もまた自由に創造されるものである。人間の条件は自由な決定にゆだねられており、自分自身で築いたシンボルの構造のうちどれを選ぶかは自由であり、これこそ人間の尊厳なのである。ニーチェが私たちの時代のうちに見い

だしたニヒリズムは、伝統的な価値が崩壊してしまったためというより、複雑な文明に必要な価値体系がまだ進化してきていないことからくるのだろう。非人格的で、非人間的でもある社会的な諸力が個人のもっとも私的な生活までもまきこみ、統制し、支配した時代はこれまでなかった。個々人の道徳心の高さ、人間的な誠実さではどうにもならない。問題は道徳律を押し広げて個人以上の社会的実体までも含ませるようにすることであり、個人が社会的巨怪にむさぼり食われないような防壁をもうけることである。いま現れはじめているもう一つの文明が厳然とした実在であることを、念頭におかねばならない。それは大衆文明、技術的で国際的で全地球全人類をおおう文明、そこでは古い文化的価値と創造性が、新しい機構によりとってかわられていく文明である。イデオロギーの差や人種の差は長い目で見て、産業化された大衆社会の物質文化の同一性を前に、無意味になるだろう。その時の個人の課題は、大衆社会が許すかぎり古い文化の遺物を保存することにある。まず、最初に斬新なものはナンセンスとしてしりぞけられる。第二段階では自明のこと、つまらぬことだと宣言される。やがて第三期には、以前の反対者が自分こそ発見者であると名のるのだ。商業主義社会が供給するあらゆる小道具でもって、人間のなかにある人間的なものを抑圧した。このような自家撞着は必然的に絶望、知的不幸、非行に行きつくほかはなかった。彼らは科学研究から予期できる利益を触れまわるよりは、むしろそこから美的満足をはきだし、実在の一元性の会得に比すべき洞察をはきだしたのだ。私はいろいろの時期に実験にもたずさわり、数理生物学や科学哲学もやった、詩なども書いたが、これらの活動のあいだに矛盾や対立を感じはしなかった。一般システム理論のような統一概念は、科学と、人文活動という見出しのもとに伝統的に包括されている。諸分野とのあいだに橋をかけると思う。ベルタランフィーの見解によれば、生物学的に不利な行動は自然選択によりすみやかに消滅する。しかし、人間の文化的進化としてのシンボリック行動はまさに非自然であり、生物学的な有利性をさえ否定することができる。すなわち、人間は生物学的には劣った存在であるが、シンボリック活動によって自然的進化の枠から外れることができる。生物学的一般原則は人間の諸価値とは無縁なものになってしまっているのである。自然選択は本能が種を保存するように働くが、人間の場合は社会的動物の自然主義的価値を越えて、社会的弱者はもとより、犯罪者をも手厚く処遇するように人権概念が指向している。

日本では弁護士がえてして悪意・毒をもった殺人者さえも精神錯乱者として免罪をするように仕向けているようにさえ見える。犯罪の被害者がさらに二次的に社会的被害を受けるような構図は納得できない。私とて国権力による死刑制度に賛同はしないが、明確な悪意をもってなされた犯罪を法律の名のもとに恣意的に許すのなら、法治社会とはならず、日本のサスペンスの定石のように、私的復讐を助長することになる。被害者を犯罪者にさせてしまい、悲しい正義の犯罪を誘発することになる。

今日、私生活の場面にも、防犯カメラ、車載カメラ、GPS やビッグ・データ利用などあまりに監視が行き届き、個人の誠意や人間の信頼は虚無化されてしまう。過剰な商業主義はすべての物心を商品として金額評価に替えてしまい、金銭では測れない、目では見えないような真善美の価値を失わせてきた。全人的な心の構造と機能の発達を求めて、生き物としての人間が暮らしのために必要な生業、家事、遊び趣味、任意な奉仕や環境保全活動などにも人生の時間の一部を用いたらよいのだ。野生動植物に働く自然選択だけではなく、自己家畜化した人間の場合は強力な人為選択、極論すれば人為選別が行われてきた。人種や民族差別のみではなく、階級、階層、さらには微に入り細に入るような個人能力への選別が社会ダーウィニズム、優生学などによって行われた。ハックスリー（1932）『すばらしい新世界』がまるで予言したようだ。ドーキンス（1989）『利己的な遺伝子』に記述された

ジーンとミーム、およびハラリ（2011）『サピエンス全史』と（2015）『ホモ・デウス』については別に論じたので、次のサイトを参照されたい（木俣 2019、『環境学習原論』www.ppmusee.org/_userdata/pel2019.pdf）。

5. 死に至る病・絶望の快復と希望

天使の教え（ヨハネの黙示録）に添って、撥撫（いじめ）という悍ましい毒に対する方策が3つある。まず、悍ましい毒に報復の毒を以って制する方法であるが、これでは自らをも別の毒に汚染させてしまうだろう。次に、悍ましい毒から逃散する方法であるが、とりあえず毒から身を守ることはできるが、悍ましい毒がなくなるわけではない。第3に、悍ましい毒に事実によって向きあい、超克する方法である。これは重大な苦しみを伴うが、個人の毒を解くことになるだろう。これらはおおかた倉田の記した処方箋に近い。

毒人間は良心を持たないので、良心を持って抵抗してもまったくの無駄である。『あたしたち、海へ』の結末のように、ペルー（自殺する事と解釈される）ではなく、もう一つのペルー（別の場所で生きるという意味）に行ってしまうことである。毒人間の毒が及ばない場所に逃散することである。良心ある人が負けて悔しいなどというのはそれこそ毒素に侵されているのであって、抵抗や復讐など無意味なことから自らを解放してもつばら幸せを求めるのだ。それでも勇気をもって、根本的に毒素から自ら恢復するには、苦しい事実に向きあい、心的外傷後ストレス障害を超克するしかない。被害者は良心を持って自らを責めるのではなく、良心を持たない人がいる事を認知して、それを回避しながら目的を達成する方策を見つけることだろう。とはいえ、個人としては良心を弱めたらどんなに生きる事が容易になるだろうか。でも、社会は壮絶な騙し合い、奪い合いの争いの場になってしまっているのだろうか。人は大方のだれもが幸せになってよいのだ。科学的に唯物論の立場に居れば、祖霊や心霊などはいない。しかし心の機能は、父母、祖父母から祖霊にまで想いは及び、たとえばお星さまとして象徴してでも、現世の私たちの心を励まし、護っているのだと感じさせるのだろう。陶淵明の「帰去来の辞」はそれなりの長文である。結びの文節で、彼は次のように言っている（松枝茂夫・和田武司訳注 1991）。

晴れた日が来れば、ひとりで歩き回り、杖を傍らに突き立てて農作業の真似ごとをする。また、東の丘に登ってのんびりと口笛を吹き、清流を前にして詩をつくる。自然の変化にわが身をあわせ、生命の終わるのを待ちうける。天命を素直に受け入れて楽しむ境地に入れば、もはや何の迷いもなくなってしまうものだ。

この境地は私の老師降矢静夫のライフスタイルとほとんど合致するものだ。私もこのような境地を願っているが、残学の故に今しばらくはそこに至らないだろう。有機無農薬でささやかに家族の野菜を育てているだけだが、害虫を防ぐためには日々殺生をせねばならない。可哀そうとは思いますが、食べ尽くされてしまう。去年はイノシシに、山畑で栽培していた作物のすべてを舐めるように食べられてしまった。まねごと山村農だから、飢えもせずに都市で暮らしているが、山村で農業者として生計を立てている高齢の人びとにとっては、まさに死活の事態である。

私は陶淵明と同じく「八政始食」、農業を国の経世済民の基盤に置くべきだと考えて、政策提案をしてきたし、都市民も含めて消費者などと自らを位置付けずに、自らも庭や市民農園などで任意に楽しく農耕をして、家族の野菜くらいは生産したいものだ。他国に依存した大量生産物の輸入だけでは、量的かつ質的な食料の安全保障はできない。国の経世済

民政策が世間に及ばなければ、家族や地域共同体を護るために、地域自治共同体は家庭菜園、市民農園や家族農業を政策として促進、振興するべきだ。

第3の超克という方法をとるにあたって、現代人の心の構造と機能について考察を深める必要があることに気づき、本論考を書き進めてきた。まとめとして要点を繰り返すが、現代人の多くが自然から乖離する都市的環境に居住することで生物的には退化進化に向かった。このために心の構造を構成する諸知能が衰微し、この劣化を発達した科学技術による外部機械装置で代替するように文化的進化を進めた。これにより五感は十分に発育せず、第6感（直観）はマスメディアの無限流布する不確実情報に強く影響され依存し、人間の心の構造も機能も統合的に働かず不調に陥った。第7感（良心）も鍛錬されず、文化的進化の自己複製子ミームの活力を鈍らせて、個々人の美や真を求める心の機能も衰弱し、万物を思い遣る善なる機能も失われようとしている。

この過程はサピエンスがネアンデルタール人を、日本でいうなら弥生人が縄文人を絶滅ないし衰亡に追い込んだと同じようで、さらに穿てみれば、サピエンスがデウスに自ら進んで心売り渡して、隷属する過程にあるようにさえ思える。このような絶望的工程表を進めさせずに、別途の自律する文化的進化の方途を人間の希望として自然に寄り添う暮らしを探検して、学び直してほしい。この際に、自然に添う温故知新、深い知恵を記した古典や伝統的知識体系を参照することが必要である。

私は科学者として、科学的知識体系にほんの微力でも寄与したと自負するが、それでも人間が生き物であるからには、全体自然から離れて、科学技術に依存した人工環境だけに集住することはできない。近未来の科学技術が万能で、人間は神々と同等になれるなどと増上慢してはいけない。広大な自然は人間がすべてを支配する場所ではなく、さらにその小さな一部にすぎない地球で、それでもすべての生きとし生けるものにとって崇高な地球において他の生き物とも共存して素のままに美しく、幸せに暮らすほかはない。地上において、素原の超個人主義がトランスパーソナル・エコロジーの基礎として、第四紀人新世 Anthropocene が健全な真文明へと展開し、サピエンスが生存し続けられる保障、希望を見つけない。これはカミガミや諸神への願いを超えて、アニマの祈りだ。

2020. 9. 23

つなぎに

< 続く >

随筆集 ー 生き物の文明への黙示録 増補改訂版 (選集第 VI 卷)

202 x 年 12 月 31 日 発行

著者 木俣美樹男

発行者 木俣美樹男

発行所 特定非営利法人 自然文化誌研究会 植物と人々の博物館

連絡先 kibi20kijin@yahoo.co.jp

©202 x Mikio Kimata 著者名・引用先を明記しての複製は歓迎する。